

vSphere のネットワーク

Update 2

VMware vSphere 6.0

VMware ESXi 6.0

vCenter Server 6.0

最新の技術ドキュメントは、VMware の Web サイト (<https://docs.vmware.com/jp/>)

VMware, Inc.
3401 Hillview Ave.
Palo Alto, CA 94304
www.vmware.com

ヴィエムウェア株式会社
〒108-0023 東京都港区芝浦 3-1-1
田町ステーションタワー N 18 階
www.vmware.com/jp

Copyright © 2009-2018 VMware, Inc. All rights reserved. 著作権および商標情報。

目次

vSphere ネットワークについて 10

更新情報 11

1 ネットワークの概要 12

ネットワークの概念の概要 12

ESXi でのネットワーク サービス 14

vSphere ESXi Dump Collector のサポート 14

2 vSphere 標準スイッチを使用したネットワークの設定 15

vSphere 標準スイッチ 15

vSphere 標準スイッチの作成 17

仮想マシンのポート グループの構成 18

仮想マシンのポート グループの追加 19

標準スイッチ ポート グループの編集 20

vSphere 標準スイッチからのポート グループの削除 21

vSphere 標準スイッチのプロパティ 21

vSphere 標準スイッチでの MTU サイズの変更 22

物理アダプタの速度の変更 22

vSphere 標準スイッチの物理アダプタの追加とチーミング 22

vSphere 標準スイッチのトポロジ ダイアグラムの表示 23

3 vSphere Distributed Switch を使用したネットワークの設定 25

vSphere Distributed Switch のアーキテクチャ 25

vSphere Distributed Switch の作成 29

vSphere Distributed Switch の新しいバージョンへのアップグレード 31

vSphere Distributed Switch の全般設定と詳細設定の編集 32

vSphere Distributed Switch の複数ホストでのネットワークの管理 33

vSphere Distributed Switch のホスト ネットワークの管理のタスク 34

vSphere Distributed Switch へのホストの追加 35

vSphere Distributed Switch での物理ネットワーク アダプタの構成 37

vSphere Distributed Switch への VMkernel アダプタの移行 38

vSphere Distributed Switch での VMkernel アダプタの作成 39

vSphere Distributed Switch 仮想マシン ネットワークの移行 41

ホストの分散ポートの最大数の更新 42

テンプレート ホストを使用した vSphere Distributed Switch 上での同一のネットワーク構成の作成 42

vSphere Distributed Switch からのホストの削除 44

ホスト プロキシ スイッチのネットワークの管理 44

ホストのネットワーク アダプタの vSphere Distributed Switch への移行	45
ホストの VMkernel アダプタの vSphere 標準スイッチへの移行	46
vSphere Distributed Switch へのホストの物理 NIC の割り当て	47
vSphere Distributed Switch からの物理 NIC の削除	47
ホスト プロキシ スイッチのポート数の設定	47
アクティブな仮想マシンからの NIC の削除	48
分散ポート グループ	48
分散ポート グループの追加	48
分散ポート グループの一般的な設定の編集	52
分散ポート グループの削除	53
分散ポートの操作	54
分散ポートの状態の監視	54
分散ポート設定の構成	54
vSphere Distributed Switch での仮想マシン ネットワークの構成	55
vSphere Distributed Switch との間の仮想マシンの移行	55
分散ポート グループへの個々の仮想マシンの接続	55
vSphere Web Client での vSphere Distributed Switch のトポロジ ダイアグラム	56
vSphere Distributed Switch のトポロジの表示	57
ホスト プロキシ スイッチのトポロジの表示	58

4 VMkernel ネットワークの設定 59

VMkernel ネットワーク レイヤー	60
ホスト上の VMkernel アダプタに関する情報の表示	62
vSphere 標準スイッチでの VMkernel アダプタの作成	62
vSphere Distributed Switch に関連付けられたホスト上の VMkernel アダプタの作成	65
VMkernel アダプタ構成の編集	67
ホスト上の TCP/IP スタック構成の表示	68
ホスト上の TCP/IP スタック構成の変更	69
カスタム TCP/IP スタックの作成	70
VMkernel アダプタの削除	70

5 vSphere Distributed Switch における LACP のサポート 72

vSphere Distributed Switch での強化された LACP サポートへの変換	74
分散ポート グループの LACP チーミングおよびフェイルオーバー構成	76
分散ポート グループのトラフィックを処理するリンク集約グループの構成	76
リンク集約グループの作成	77
分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序でリンク集約グループをアクティブに設定	78
リンク集約グループのポートへの物理 NIC の割り当て	79
分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序でリンク集約グループをアクティブに設定	80
リンク集約グループの編集	81

アップリンク ポート グループでの LACP 5.1 サポートの有効化	82
vSphere Distributed Switch の LACP サポートの制限	83

6 ネットワーク構成のバックアップとリストア 84

vSphere Distributed Switch 構成のバックアップとリストア	84
vSphere Distributed Switch 構成のエクスポート	84
vSphere Distributed Switch 構成のインポート	85
vSphere Distributed Switch 構成のリストア	86
vSphere 分散ポート グループの構成のエクスポート、インポート、リストア	87
vSphere 分散ポート グループ構成のエクスポート	87
vSphere 分散ポート グループ構成のインポート	87
vSphere 分散ポート グループ構成のリストア	88

7 管理ネットワークのロールバックとリカバリ 89

vSphere ネットワーク ロールバック	89
ネットワーク ロールバックの無効化	90
vCenter Server 構成ファイルを使用したネットワーク ロールバックの無効化	91
vSphere Distributed Switch の管理ネットワーク構成のエラーの解決	91

8 ネットワーク ポリシー 93

vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch でのネットワーク ポリシーの適用	94
ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成	95
チーミングおよびフェイルオーバー ポリシー	96
仮想スイッチで利用できるロード バランシング アルゴリズム	98
vSphere 標準スイッチまたは標準ポート グループでの NIC チーミング、フェイルオーバー、およびロード バランシングの構成	102
分散ポート グループまたは分散ポートでの NIC チーミング、フェイルオーバー、およびロード バランシングの構成	104
VLAN ポリシー	106
分散ポート グループまたは分散ポートでの VLAN タギングの構成	106
アップリンク ポート グループまたはアップリンク ポート上での VLAN タギングの構成	107
セキュリティ ポリシー	108
vSphere 標準スイッチまたは標準ポート グループのセキュリティ ポリシーの構成	108
分散ポート グループまたは分散ポートのセキュリティ ポリシーの構成	109
トラフィック シェーピング ポリシー	110
vSphere 標準スイッチまたは標準ポート グループのトラフィック シェーピングの構成	111
分散ポート グループまたは分散ポートでのトラフィック シェーピング ポリシーの編集	112
リソース割り当てポリシー	113
分散ポート グループでのリソース割り当てポリシーの編集	114
分散ポートでのリソース割り当てポリシーの編集	114
監視ポリシー	115
分散ポート グループまたは分散ポートでの NetFlow 監視の有効化または無効化	115

- トラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシー 116
 - 分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキング 116
 - 分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキング 124
 - フィルタリングとマーキングのためのトラフィックの修飾 132
- vSphere Distributed Switch 上にある複数のポート グループのポリシーの管理 135
- ポート ブロック ポリシー 141
 - 分散ポート グループのポート ブロック ポリシーの編集 141
 - 分散ポートまたはアップリンク ポートのポート ブロック ポリシーの編集 141

9 VLAN を使用したネットワーク トラフィックの分離 143

- VLAN 構成 143
- プライベート VLAN 144
 - プライベート VLAN の作成 144
 - プライマリ プライベート VLAN の削除 145
 - セカンダリ プライベート VLAN の削除 145

10 ネットワーク リソースの管理 147

- DirectPath I/O 147
 - ホストでのネットワーク デバイスのパススルーの有効化 148
 - 仮想マシンでの PCI デバイスの構成 149
 - 仮想マシンでの vMotion を使用した DirectPath I/O の有効化 149
- Single Root I/O Virtualization (SR-IOV) 150
 - SR-IOV サポート 151
 - SR-IOV コンポーネントのアーキテクチャと相互作用 153
 - vSphere と仮想機能の相互作用 155
 - DirectPath I/O 対 SR-IOV 156
 - SR-IOV を使用するための仮想マシンの構成 156
 - SR-IOV 対応仮想マシンに関連するトラフィックのためのネットワーク オプション 159
 - 仮想マシン トラフィックを処理する SR-IOV 物理アダプタの使用 159
 - ホスト プロファイルまたは ESXCLI コマンドの使用による SR-IOV の有効化 160
 - ホストの割り込みベクトル不足により、SR-IOV 仮想機能を使用している仮想マシンがパワーオンに失敗する 162
- ジャンボ フレーム 163
 - vSphere Distributed Switch でジャンボ フレームを有効にする 163
 - vSphere 標準スイッチでのジャンボ フレームの有効化 163
 - VMkernel アダプタのジャンボ フレームの有効化 164
 - 仮想マシンでのジャンボ フレーム サポートの有効化 164
- TCP セグメンテーション オフロード 165
 - VMkernel でのソフトウェア TSO の有効化または無効化 165
 - ESXi ホストの物理ネットワーク アダプタで TSO がサポートされているかどうかの確認 166
 - ESXi ホストでの TSO の有効化または無効化 166

ESXi ホストで TSO が有効になっているかどうかの確認	167
Linux 仮想マシンでの TSO の有効化または無効化	167
Windows 仮想マシンでの TSO の有効化または無効化	168
Large Receive Offload	169
ESXi ホストでのすべての VMXNET3 アダプタのハードウェア LRO の有効化	169
ESXi ホストでのすべての VMXNET3 アダプタのソフトウェア LRO の有効化または無効化	169
ESXi ホストの VMXNET3 アダプタで LRO が有効になっているかどうかの確認	170
VMXNET 3 アダプタの LRO バッファのサイズの変更	170
ESXi ホスト上のすべての VMkernel アダプタの LRO の有効化または無効化	171
VMkernel アダプタの LRO バッファのサイズの変更	171
Linux 仮想マシンでの VMXNET3 アダプタの LRO の有効化または無効化	171
Windows 仮想マシンでの VMXNET3 アダプタの LRO の有効化または無効化	172
Windows 仮想マシンでの LRO のグローバルな有効化	173
NetQueue とネットワーク パフォーマンス	173
ホストでの NetQueue の有効化	174
ホストでの NetQueue の無効化	174

11 vSphere Network I/O Control 175

vSphere Network I/O Control バージョン 3 について	176
vSphere Distributed Switch での Network I/O Control バージョン 3 へのアップグレード	177
vSphere Distributed Switch での Network I/O Control の有効化	179
システム トラフィックのバンド幅割り当て	180
システム トラフィックのバンド幅割り当てパラメータ	181
システム トラフィックのバンド幅予約の例	181
システム トラフィックのバンド幅割り当ての構成	182
仮想マシン トラフィックのバンド幅割り当て	183
仮想マシンに対するバンド幅の割り当てについて	183
仮想マシン トラフィックのバンド幅割り当てパラメータ	185
仮想マシン バンド幅のアドミSSION コントロール	186
ネットワーク リソース プールの作成	187
ネットワーク リソース プールへの分散ポート グループの追加	188
仮想マシンのバンド幅割り当ての構成	188
複数の仮想マシン上のバンド幅割り当ての構成	190
ネットワーク リソース プールの割り当ての変更	191
ネットワーク リソース プールからの分散ポート グループの削除	191
ネットワーク リソース プールの削除	192
Network I/O Control の範囲外への物理アダプタの移動	192
Network I/O Control バージョン 2 の操作	193
Network I/O Control バージョン 2 のネットワーク リソース プールの作成	194
Network I/O Control バージョン 2 のネットワーク リソース プールの設定の編集	195

12 MAC アドレスの管理 197

- vCenter Server からの MAC アドレスの割り当て 197
 - VMware OUI 割り当て 198
 - ブリフィックス ベースの MAC アドレス割り当て 198
 - 範囲ベースの MAC アドレス割り当て 199
 - MAC アドレスの割り当て 199
- ESXi ホストでの MAC アドレスの生成 202
- 仮想マシンに対する固定 MAC アドレスの設定 202
 - 固定 MAC アドレスでの VMware OUI 203
 - vSphere Web Client を使用した固定 MAC アドレスの割り当て 203
 - 仮想マシンの構成ファイルでの固定 MAC アドレスの割り当て 204

13 IPv6 を使用するための vSphere の構成 205

- vSphere の IPv6 接続 205
- IPv6 での vSphere のデプロイ 207
 - vSphere のインストールでの IPv6 の有効化 207
 - アップグレードされた vSphere 環境での IPv6 の有効化 208
- ホストでの IPv6 サポートの有効化または無効化 210
- ESXi ホストでの IPv6 の設定 210
- vCenter Server での IPv6 の設定 211
 - vCenter Server Appliance での IPv6 の設定 211
 - IPv6 を使用した Windows 上の vCenter Server の設定 212

14 ネットワーク接続とトラフィックの監視 213

- pktcap-uw ユーティリティを使用したネットワーク パケットのキャプチャとトレース 213
 - パケットのキャプチャ用 pktcap-uw コマンドの構文 213
 - パケットのトレース用 pktcap-uw コマンドの構文 216
 - 出力制御用 pktcap-uw オプション 216
 - パケット フィルタ用 pktcap-uw オプション 217
 - pktcap-uw ユーティリティを使用したパケットのキャプチャ 218
 - pktcap-uw ユーティリティを使用したパケットのトレース 228
- vSphere Distributed Switch のネットフロー設定の構成 229
- ポート ミラーリングの操作 230
 - ポート ミラーリングのバージョンの互換性 231
 - ポート ミラーリングの相互運用性 231
 - ポート ミラーリング セッションの作成 233
 - ポート ミラーリング セッション詳細の表示 236
 - ポート ミラーリング セッションの詳細、ソース、およびターゲットの編集 237
- vSphere Distributed Switch 健全性チェック 238
 - vSphere Distributed Switch 健全性チェックの有効化または無効化 239
 - vSphere Distributed Switch の健全性ステータスの表示 240

スイッチ検出プロトコル 240

vSphere Distributed Switch でのシスコ検出プロトコルの有効化 240

vSphere Distributed Switch でのリンク層検出プロトコルの有効化 241

スイッチ情報の表示 242

15 仮想マシン ネットワークのプロトコル プロファイルの構成 243

ネットワーク プロトコル プロファイルの追加 244

ネットワーク プロトコル プロファイル名とネットワークの選択 244

ネットワーク プロトコル プロファイルの IPv4 構成の指定 244

ネットワーク プロトコル プロファイルの IPv6 構成の指定 245

ネットワーク プロトコル プロファイルの DNS およびその他の構成の指定 246

ネットワーク プロトコル プロファイルの作成の完了 246

ポート グループとネットワーク プロトコル プロファイルの関連付け 246

ネットワーク プロトコル プロファイルを使用するための仮想マシンまたは vApp の構成 247

16 マルチキャスト フィルタリング 248

マルチキャスト フィルタリング モード 248

vSphere Distributed Switch でのマルチキャスト スヌーピングの有効化 249

マルチキャスト スヌーピングでのクエリの時間間隔の編集 250

IGMP と MLD のソース IP アドレスの数の編集 250

17 ステートレス ネットワークの導入 252

18 ネットワークのベスト プラクティス 254

vSphere ネットワークについて

『vSphere ネットワーク』では、VMware vSphere[®] のネットワーク構成に関する情報が提供されます。これには vSphere Distributed Switches および vSphere 標準スイッチの作成方法が含まれます。

『vSphere ネットワーク』にはネットワークの監視、ネットワーク リソースの管理、およびネットワークのベストプラクティスに関する情報も記載されています。

対象読者

記載されている情報は、Windows または Linux のシステム管理者としての経験があり、ネットワーク構成および仮想マシン テクノロジーに詳しい方を対象としています。

更新情報

『vSphere のネットワーク』は、製品のリリースごとに、または必要に応じて更新されます。

『vSphere のネットワーク』の更新履歴については、次の表をご確認ください。

リビジョン	説明
2021 年 3 月 31 日	その他の更新。
2020 年 4 月 13 日	vSphere Distributed Switch 健全性チェックの説明を強化し、使用に関するアドバイスを含めました。健全性チェックは、使用してネットワークの問題をトラブルシューティングし、問題を特定して解決した後は、無効にする必要があります。 『vSphere Distributed Switch 健全性チェック』 と 『vSphere Distributed Switch 健全性チェックの有効化または無効化』 を参照してください。
2020 年 4 月 13 日	MAC アドレスを使用したネットワーク トラフィックのフィルタリングまたはマーキングのパターンが更新され、ワイルドカードの正規表現の使用が削除されました。MAC アドレスのマスクの AND 操作の結果が同じになる場合、MAC アドレスは一致しているとみなされます。 MAC トラフィック修飾子 を参照してください。
2018 年 2 月 12 日	アップグレードされた vSphere 環境での IPv6 の有効化 の情報を更新しました。
JA-002007-02	<ul style="list-style-type: none">■ VMkernel でのソフトウェア TSO の有効化または無効化 のコンソール コマンドを更新。■ プロビジョニング トラフィックに関する情報を更新して、スナップショットの移行に使用されるように指定。VMkernel ネットワーク レイヤー、VMkernel アダプタ構成の編集、および vSphere 標準スイッチでの VMkernel アダプタの作成を参照してください。■ vSphere 機能の IPv6 接続の Auto Deploy に関する情報を更新。
JP-002007-01	<ul style="list-style-type: none">■ vSphere Distributed Switch 健全性チェック : vSphere Distributed Switch 健全性チェックによるネットワーク トラフィック増大の可能性に関する注意事項を追加。■ テンプレート ホストを使用した vSphere Distributed Switch 上での同一のネットワーク構成の作成の情報を更新。
JP-002007-00	初期リリース。

ネットワークの概要

1

ESXi のネットワークの基本概念と、vSphere 環境でネットワークを設定および構成する方法について説明します。

この章には、次のトピックが含まれています。

- ネットワークの概念の概要
- ESXi でのネットワーク サービス
- vSphere ESXi Dump Collector のサポート

ネットワークの概念の概要

仮想ネットワークを完全に理解するには、いくつかの概念を知ることが大切です。ESXi に慣れていない場合は、これらの概念について学習するとよいでしょう。

物理ネットワーク

互いにデータをやり取りできるように接続された、物理マシンからなるネットワークです。VMware ESXi は、物理マシン上で稼動します。

仮想ネットワーク

互いにデータをやり取りできるように論理的に接続された、物理マシンで稼動する複数の仮想マシンからなるネットワークです。仮想マシンは、ネットワークを追加するときに作成する、仮想ネットワークに接続できます。

物理イーサネット スイッチ

物理ネットワーク上のマシン間のネットワーク トラフィックを管理します。1 つのスイッチには複数のポートがあり、その各ポートは、ネットワークにある 1 台のマシンまたは別のスイッチに接続できます。各ポートは、接続しているマシンのニーズによって、特定の動作を取るよう構成できます。スイッチは、どのホストがどのポートに接続されているかを学習し、その情報を使用して適切な物理マシンにトラフィックを転送します。スイッチは、物理ネットワークの中心です。複数のスイッチをつなげて、ネットワークの規模を拡大することもできます。

vSphere 標準スイッチ

物理イーサネット スイッチとよく似た動作をします。仮想スイッチは、どの仮想マシンが各仮想ポートに論理的に接続されているかを検出し、その情報を使用して適切な仮想マシンにトラフィックを転送します。物理イーサネット アダプタ（アップリンク アダプタとも呼ばれる）を使用して vSphere 標準スイッチを物理スイッチに接続し、仮想ネットワークを物理ネットワークに結び付けることができます。このタイプの接続は、複数の物理

スイッチをつなげてネットワークを拡大するやり方に似ています。vSphere 標準スイッチは物理スイッチと同様の働きをしますが、物理スイッチの高度な機能をすべて備えているわけではありません。

標準ポート グループ

各メンバー ポートに対して、バンド幅制限や VLAN タグ付けポリシーなどのポート構成オプションを指定します。ネットワーク サービスは、ポート グループを通じて標準スイッチに接続します。ポート グループは、どのようにスイッチを経由してネットワークに接続するかを定義します。一般には、1つの標準スイッチに1つ以上のポート グループを関連付けます。

vSphere Distributed Switch

データセンター上で関連するすべてのホストにおいて単一のスイッチとして機能し、仮想ネットワークのプロビジョニング、管理、監視を一元的に行います。vCenter Server システム上に vSphere Distributed Switch を構成すると、その構成は、スイッチに関連するすべてのホストに伝達されます。これにより仮想マシンは、複数のホスト間で移行するときに一貫したネットワーク構成を維持できます。

ホスト プロキシ スイッチ

vSphere Distributed Switch に関連付けられたすべてのホストに配置された非表示の標準スイッチです。ホスト プロキシ スイッチは、vSphere Distributed Switch で設定されたネットワーク構成を特定のホストにレプリケートします。

分散ポート

ホストの VMkernel または仮想マシンのネットワーク アダプタに接続された vSphere Distributed Switch 上のポートです。

分散ポート グループ

vSphere Distributed Switch に関連付けられたポート グループで、各メンバー ポートのポート構成オプションを指定します。分散ポート グループは、どのように vSphere distributed switch を経由してネットワークに接続するかを定義します。

NIC チーミング

NIC チーミングは、複数のアップリンク アダプタを1つのスイッチに関連付けて、チームを形成します。1つのチームは、一部のメンバーまたは全メンバーにおよぶ物理ネットワークおよび仮想ネットワーク間のトラフィック ロードを分担できます。あるいはハードウェア障害またはネットワークの機能停止が生じた場合に、パッシブ フェイルオーバーを実現できます。

VLAN

VLAN は、単一の物理 LAN セグメントをさらにセグメント化して、ポート グループが物理的に別々のセグメントにあるかのように、互いに分離できます。標準は 802.1Q です。

VMkernel TCP/IP ネットワーク レイヤー

VMkernel ネットワークのレイヤーは、ホストへの接続を提供し、vSphere vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance、および Virtual SAN の標準インフラストラクチャ トラフィックを処理します。

IP ストレージ

TCP/IP ネットワーク通信を基盤として使用する、あらゆる形態のストレージのことです。iSCSI は仮想マシンデータストアとして使用でき、NFS は仮想マシン データストアとして、また .ISO ファイルの直接マウント用としても使用できます。.ISO ファイルは、仮想マシンには CD-ROM として表示されます。

TCP セグメンテーション オフロード

TCP セグメンテーション オフロード (TSO) によって、TCP/IP スタックは、インターフェイスの最大転送ユニット (MTU) が比較的小さい場合でも、大きいフレーム (最大 64KB) を発信できます。ネットワークアダプタは、大きいフレームを MTU サイズのフレームに分割し、元の TCP/IP ヘッダの分割したコピーを先頭に追加します。

ESXi でのネットワーク サービス

仮想ネットワークには、ホストおよび仮想マシンに対していくつかのサービスが用意されています。

ESXi では、2 つのタイプのネットワーク サービスを有効にできます。

- 仮想マシンを物理ネットワークへ接続する。
- また、仮想マシン同士で接続する。VMkernel のサービス (NFS、iSCSI、vMotion など) を物理ネットワークへ接続する。

VSphere ESXi Dump Collector のサポート

システムに重大な障害が発生すると、ESXi Dump Collector は、VMkernel メモリの状態を示すコア ダンプをネットワーク サーバに送信します。

ESXi 5.1 以降の ESXi Dump Collector は、vSphere 標準スイッチと Distributed Switch の両方に対応しています。ESXi Dump Collector では、Collector の VMkernel アダプタを処理するポート グループ チームのアクティブなアップリンク アダプタも使用できます。

構成済みの VMkernel アダプタの IP アドレスが変更されると、ESXi Dump Collector インターフェイスの IP アドレスの変更が自動的に更新されます。VMkernel アダプタのゲートウェイ構成が変更されると、ESXi Dump Collector でデフォルト ゲートウェイも調整されます。

ESXi Dump Collector が使用している VMkernel ネットワーク アダプタを削除しようとすると、操作に失敗し、警告メッセージが表示されます。VMkernel ネットワーク アダプタを削除するには、ダンプ収集を無効にしてから、アダプタを削除します。

クラッシュしたホストから ESXi Dump Collector へのファイル転送セッションでは、認証または暗号化は行われません。ESXi コア ダンプを通常のネットワーク トラフィックから分離できる場合は、個々の VLAN に ESXi Dump Collector を構成する必要があります。

ESXi Dump Collector のインストールと構成については、『vSphere のインストールとセットアップ』ドキュメントを参照してください。

vSphere 標準スイッチを使用したネットワークの設定

2

vSphere 標準スイッチは、vSphere デプロイのホスト レベルでネットワーク トラフィックを処理します。

この章には、次のトピックが含まれています。

- vSphere 標準スイッチ
- vSphere 標準スイッチの作成
- 仮想マシンのポート グループの構成
- vSphere 標準スイッチのプロパティ

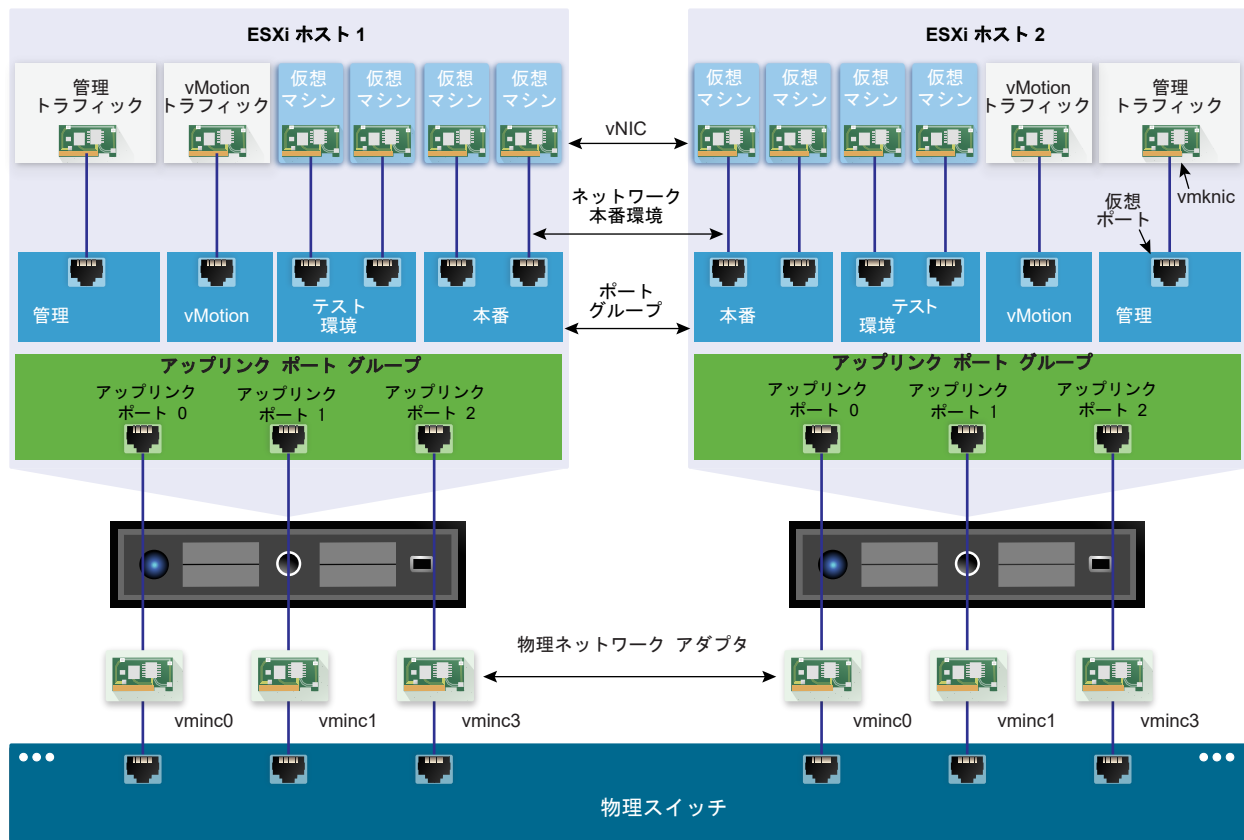
vSphere 標準スイッチ

vSphere 標準スイッチと呼ばれる抽象化されたネットワーク デバイスを作成できます。標準スイッチを使用してホストや仮想マシンにネットワーク接続を提供できます。標準スイッチは、同じ VLAN の仮想マシン間のトラフィックを内部的に渡したり、外部ネットワークにリンクしたりすることができます。

標準スイッチの概要

ホストや仮想マシンにネットワーク接続を提供するには、ホストの物理 NIC を標準スイッチ上のアップリンク ポートに接続します。仮想マシンには、標準スイッチ上のポート グループに接続するネットワーク アダプタ (vNIC) があります。すべてのポート グループで1つ以上の物理 NIC を使用してネットワーク トラフィックを処理できます。ポート グループに物理 NIC が接続されていない場合、同じポート グループの仮想マシン同士では通信できますが、外部ネットワークとは通信できません。

図 2-1. vSphere 標準スイッチ アーキテクチャ



vSphere 標準スイッチは、物理イーサネットスイッチと同様の動きをします。ホストの仮想マシン ネットワークアダプタと物理 NIC は、スイッチ上の論理ポートをアダプタごとに1つずつ使用します。標準スイッチの各論理ポートは、1つのポートグループのメンバーになります。許可されるポート数およびポートグループ数の最大値については、『Configuration Maximums』ドキュメントを参照してください。

標準ポートグループ

標準スイッチ上の各ポートグループは、現在のホストに固有のネットワークラベルによって識別されます。ネットワークラベルを使用して、仮想マシンのネットワーク構成をホスト間で移動できます。データセンターのポートグループが、物理ネットワークの1つのブロードキャストドメインに接続された物理NICを使用する場合は、そのポートグループに同じラベルを付ける必要があります。逆に、2つのポートグループが異なるブロードキャストドメインの物理NICに接続している場合、ポートグループには別々のラベルを与える必要があります。

たとえば、物理ネットワーク上で同じブロードキャストドメインを共有するホストの仮想マシンネットワークとして *Production* および *Test environment* ポートグループを作成できます。

VLAN ID はオプションであり、この ID によって、ポートグループトラフィックが物理ネットワークの論理イーサネットセグメント内に制限されます。同じホストが参照しているトラフィックを2つ以上のVLANから受信するポートグループの場合、VLAN ID は VGT (VLAN 4095) に設定する必要があります。

標準ポートの数

ESXi 5.5 以降を実行しているホストのホスト リソースを効率良く使用するため、標準スイッチのポートの数は動的に増減されます。このようなホストの標準スイッチは、ホストでサポートされているポートの最大数まで拡張可能です。

vSphere 標準スイッチの作成

ホスト、仮想マシンがネットワークに接続できるようにしたり、VMkernel トラフィックを処理したりするために、vSphere 標準スイッチを作成します。作成する接続タイプに応じて、VMkernel アダプタを備えた新しい vSphere 標準スイッチを作成したり、新しいスイッチに物理ネットワーク アダプタのみを接続したり、仮想マシンのポート グループがあるスイッチを作成したりすることができます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] で [ネットワーク] を選択し、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 [ホスト ネットワークの追加] をクリックします。
- 4 新しい標準スイッチを使用する際の接続タイプを選択して、[次へ] をクリックします。

オプション	説明
VMkernel ネットワーク アダプタ	ホスト管理トラフィック、vMotion、ネットワーク ストレージ、フォールト トレランス、Virtual SAN トラフィックを処理する新しい VMkernel アダプタを作成します。
物理ネットワーク アダプタ	既存または新しい標準スイッチに、物理ネットワーク アダプタを追加します。
標準スイッチの仮想マシンのポート グループ	仮想マシン ネットワーク用に新しいポート グループを作成します。

- 5 [新しい標準スイッチ] を選択して [次へ] をクリックします。
- 6 新しい標準スイッチに物理ネットワーク アダプタを追加します。
 - a [割り当てられたアダプタ] で、[アダプタを追加] をクリックします。
 - b リストから 1 つ以上の物理ネットワーク アダプタを選択します。
 - c [フェイルオーバーの順序グループ] ドロップダウン メニューで、フェイルオーバー リストから [アクティブ] または [スタンバイ] を選択します。

スループットの向上と冗長性の実現のために、アクティブ リストの 2 つ以上の物理ネットワーク アダプタを構成します。
 - d [OK] をクリックします。

- 7 VMkernel アダプタまたは仮想マシンのポート グループがある新しい標準スイッチを作成する場合は、アダプタまたはポート グループの接続設定を入力します。

オプション	説明
VMkernel アダプタ	<ul style="list-style-type: none"> a VMkernel アダプタのトラフィック タイプを示すラベル（たとえば vMotion）を入力します。 b VMkernel アダプタのネットワーク トラフィックで使用する VLAN を表す VLAN ID を設定します。 c IPv4、IPv6、またはその両方を選択します。 d TCP/IP スタックを選択します。VMkernel アダプタに TCP/IP スタックを設定した後で、その設定を変更することはできません。vMotion またはプロビジョニング TCP/IP スタックを選択する場合、このスタックのみを使用して、ホストの vMotion またはプロビジョニング トラフィックを処理できるようになります。 e デフォルトの TCP/IP スタックを使用する場合は、使用可能なサービスから選択します。 f IPv4 および IPv6 設定を構成します。
仮想マシンのポート グループ	<ul style="list-style-type: none"> a ネットワーク ラベルまたはポート グループを入力するか、生成されたラベルをそのまま使用します。 b ポート グループでの VLAN 処理を構成するための VLAN ID を設定します。

- 8 [終了準備の完了] ページで [OK] をクリックします。

次のステップ

- 新しい標準スイッチのチーミングおよびフェイルオーバー ポリシーの変更が必要になる場合があります。たとえば、ホストが物理スイッチの Etherchannel に接続されている場合は、ロード バランシング アルゴリズムとして IP ハッシュに基づいたルートを使用して、vSphere 標準スイッチを構成する必要があります。詳細については [チーミングおよびフェイルオーバー ポリシー](#) を参照してください。
- 仮想マシン ネットワーク用にポートグループのある新しい標準スイッチを作成する場合は、仮想マシンをポートグループに接続します。

仮想マシンのポート グループの構成

仮想マシン ポート グループを追加または変更すると、複数の仮想マシン上のトラフィック管理を設定できます。

vSphere Web Client の [ネットワークの追加] ウィザードを使用して、仮想マシンが接続できる仮想ネットワークを作成する処理を進めることができます。たとえば vSphere 標準スイッチの作成、ネットワーク ラベルの設定の構成などがあります。

仮想マシン ネットワークを設定する場合には、ネットワーク内の仮想マシンをホスト間で移行するかどうか検討します。移行する場合は、両方のホストを同一のブロードキャスト ドメイン（同一のレイヤー 2 サブネット）に配置します。

ESXi では、異なるブロードキャスト ドメインにあるホスト間で仮想マシンを移行することはサポートされていません。これは、移行された仮想マシンに必要なシステムまたはリソースが、もはや新しいネットワーク内でアクセスできなくなる可能性があるためです。ネットワーク構成が高可用性環境として設定されていたり、異なるネットワークにわたって仮想マシンのニーズを解決できるインテリジェント スイッチを装備していたりする場合でも、ARP (Address Resolution Protocol) テーブルのアップデートや仮想マシンのネットワーク トラフィックの再開の際に時間差が生じる可能性があります。

仮想マシンは、アップリンク アダプタを介して物理ネットワークに接続します。vSphere 標準スイッチは、1 つ以上のネットワーク アダプタが接続されている場合のみ、外部ネットワークにデータを転送できます。1 台の標準スイッチに複数のアダプタが接続されている場合、ユーザーが意識することなくそれらのアダプタはチームにまとめられます。

仮想マシンのポート グループの追加

vSphere 標準スイッチでポート グループを作成して、仮想マシンの接続および共通のネットワーク構成を提供します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 ホストを右クリックし、[ネットワークの追加] を選択します。
- 3 [接続タイプの選択] で、[標準スイッチの仮想マシンのポート グループ] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 [ターゲット デバイスの選択] で、既存の標準スイッチを選択するか、新しい標準スイッチを作成します。
- 5 新しいポート グループが既存の標準スイッチ向けの場合は、そのスイッチまで移動します。
 - a [参照] をクリックします。
 - b リストから標準スイッチを選択し、[OK] をクリックします。
 - c [次へ] をクリックし、[手順 8](#)に進みます。

- 6 (オプション) [標準スイッチの作成] ページで、物理ネットワーク アダプタを標準スイッチに割り当てます。

アダプタの指定の有無に関わらず、標準スイッチを作成できます。

物理ネットワーク アダプタなしで標準スイッチを作成すると、そのスイッチ上のすべてのトラフィックはそのスイッチに限定されます。物理ネットワーク上のほかのホストや、ほかの標準スイッチ上の仮想マシンが、この標準スイッチを介してトラフィックを送受信することはできません。グループ内の仮想マシンが互いに通信できるようにして、ほかのホストやグループ外の仮想マシンとは通信できないようにするには、物理ネットワーク アダプタなしで標準スイッチを作成します。

- a [アダプタの追加] をクリックします。
- b [ネットワーク アダプタ] リストからアダプタを選択します。
- c [フェイルオーバーの順序グループ] ドロップダウン メニューを使ってアダプタをアクティブ アダプタ、スタンバイ アダプタ、または未使用アダプタに割り当て、[OK] をクリックします。
- d (オプション) 必要に応じて、[割り当てられたアダプタ] リストで上矢印と下矢印を使用してアダプタの位置を変更します。
- e [次へ] をクリックします。

7 [接続設定] ページでは、グループのポートによってトラフィックを識別します。

- a ポート グループの [ネットワーク ラベル] を入力するか、生成されたラベルを受け入れます。
- b ポート グループでの VLAN 処理を構成するために、[VLAN ID] を設定します。

VLAN ID は、ポート グループでの VLAN タギング モードも反映します。

VLAN タギング モード	VLAN ID	説明
外部スイッチ タギング (EST)	0	仮想スイッチは、VLAN に関連付けられたトラフィックは渡しません。
仮想スイッチ タギング (VST)	1 から 4094 へ	仮想スイッチでは、入力したタグがトラフィックにタグ付けされます。
仮想ゲスト タギング (VGT)	4095	仮想マシンは VLAN を処理します。仮想スイッチは、すべての VLAN からのトラフィックを渡します。

- c [次へ] をクリックします。

8 [終了準備の完了] ページでポート グループ設定を確認し、[終了] をクリックします。

設定を変更するには、[戻る] をクリックします。

標準スイッチ ポート グループの編集

vSphere Web Client を使用することにより、標準スイッチ ポート グループの名前と VLAN ID を編集し、ポート グループ レベルでネットワーク ポリシーをオーバーライドすることができます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 リストから標準スイッチを選択します。
スイッチのトポロジ ダイアグラムが表示されます。
- 4 スイッチのトポロジ ダイアグラムで、ポート グループの名前をクリックします。
- 5 トポロジ ダイアグラムのタイトルの下で、[編集] をクリックします。
- 6 [プロパティ] セクションの [ネットワーク ラベル] テキスト フィールドで、ポート グループの名前を変更します。
- 7 [VLAN ID] ドロップダウン メニューで、VLAN タグ付けを構成します。

VLAN タギング モード	VLAN ID	説明
外部スイッチ タギング (EST)	0	仮想スイッチは、VLAN に関連付けられたトラフィックは渡しません。
仮想スイッチ タギング (VST)	1 から 4094 へ	仮想スイッチでは、入力したタグがトラフィックにタグ付けされます。
仮想ゲスト タギング (VGT)	4095	仮想マシンは VLAN を処理します。仮想スイッチは、すべての VLAN からのトラフィックを渡します。

- 8 [セキュリティ] セクションでは、MAC アドレスのなりすましに対する保護および無差別モードでの仮想マシンの実行に関するスイッチ設定をオーバーライドします。

- 9 [トラフィックシェーピング] セクションでは、平均およびピークの帯域幅サイズとバーストサイズをポートグループレベルでオーバーライドします。
- 10 [チーミングおよびフェイルオーバー] セクションでは、標準スイッチから継承されたチーミングとフェイルオーバーの設定をオーバーライドします。

ポートグループに関連付けられている物理アダプタ間でのトラフィックの配分および経路の再設定を構成できます。また、障害時にホストの物理アダプタが使用される順番を変更できます。

- 11 [OK] をクリックします。

vSphere 標準スイッチからのポートグループの削除

ラベル付きの関連するネットワークが不要になった場合、vSphere 標準スイッチからポートグループを削除できます。

前提条件

削除するポートグループに接続されている仮想マシンの中で、パワーオンの状態のものがないことを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 標準スイッチを選択します。
- 4 スイッチのトポロジダイアグラムから、削除するポートグループをそのラベルをクリックして選択します。
- 5 スイッチトポロジのツールバーから、[選択したポートグループの削除] アクションアイコンをクリックします。

vSphere 標準スイッチのプロパティ

vSphere 標準スイッチの設定により、ポートに対するスイッチ全体のデフォルトが制御されます。この設定は、各標準スイッチのポートグループの設定でオーバーライドできます。アップリンク構成や使用可能なポート数などの標準スイッチプロパティを編集できます。

ESXi ホストのポート数

ESXi 5.5 以降を実行しているホストのホストリソースを効率良く使用するため、仮想スイッチのポートは動的に増減されます。このようなホストのスイッチはホストでサポートされているポートの最大数まで拡張可能です。ポートの限界はホストが処理できる仮想マシンの最大数に基づいて決まります。

ESXi 5.1 以前を実行しているホスト上の各仮想スイッチのポート数には制限があります。仮想マシンおよびネットワークサービスは、このポートを使用して 1 つ以上のネットワークにアクセスできます。デプロイの要件に応じて、ポートの数を手動で増減させる必要があります。

注： スイッチのポート数を増やすと、ホストのリソースをより多く予約および消費することになります。一部のポートが使用されていない場合、他の操作に必要とされる可能性のあるホストのリソースがロックされ、未使用のままになります。

vSphere 標準スイッチでの MTU サイズの変更

vSphere 標準スイッチの最大転送ユニット (MTU) のサイズを変更して、1つのパケットで送信されるペイロードデータの量を増やす（つまり、ジャンボ フレームを有効にする）ことにより、ネットワークの効率を高めます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 テーブルから標準スイッチを選択し、[設定の編集] をクリックします。
- 4 標準スイッチの [MTU (バイト)] の値を変更します。

[MTU (バイト)] を 1,500 よりも大きく設定することによってジャンボ フレームを有効にできます。MTU のサイズを 9,000 バイトよりも大きく設定することはできません。

- 5 [OK] をクリックします。

物理アダプタの速度の変更

物理アダプタは、速度がアプリケーションの要件に合致していないとネットワーク トラフィックのボトルネックになる可能性があります。物理アダプタの接続速度およびデュプレックスを変更すると、データをトラフィック速度に合わせて転送できます。

物理アダプタが SR-IOV をサポートしている場合は、それを有効にして仮想マシン ネットワークで使用する仮想機能の数を構成することができます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブをクリックし、[ネットワーク] から [物理アダプタ] を選択します。

ホストの物理ネットワーク アダプタが、各物理ネットワーク アダプタの詳細が含まれるテーブルに表示されます。

- 3 リストから物理ネットワーク アダプタを選択し、[編集] をクリックします。
- 4 ドロップダウン メニューから、物理ネットワーク アダプタの速度とデュプレックス モードを選択します。
- 5 [OK] をクリックします。

vSphere 標準スイッチの物理アダプタの追加とチームング

物理アダプタを標準スイッチに割り当て、ホスト上の仮想マシンおよび VMkernel アダプタへの接続を提供します。NIC のチームを構築して、トラフィックの負荷を分散させたりフェイルオーバーを構成することができます。

NIC チームングでは、複数のネットワーク接続を結合して、スループットを増やし、リンクの障害に備えて冗長性を実現します。チームを作成するには、複数の物理アダプタを 1つの vSphere 標準スイッチに関連付けます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。

- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 物理アダプタの追加先となる標準スイッチを選択します。
- 4 [物理ネットワーク アダプタの管理] をクリックします。
- 5 使用可能な物理ネットワーク アダプタを 1 つ以上スイッチに追加します。

- a [アダプタの追加] をクリックします。
- b アダプタを割り当てるフェイルオーバーの順序グループを選択します。

このフェイルオーバーのグループにより、外部ネットワークとデータを交換する場合のアダプタのロール(つまり、アクティブ、スタンバイ、または未使用)が決まります。デフォルトでは、アダプタはアクティブとして標準スイッチに追加されます。

- c [[OK]] をクリックします。

選択したアダプタが [割り当てられたアダプタ] リストの下に選択したフェイルオーバー グループ リストに表示されます。

- 6 (オプション) フェイルオーバー グループ内でのアダプタの位置を変更するには、上矢印と下矢印を使用します。
- 7 [OK] をクリックして物理アダプタの構成を適用します。

vSphere 標準スイッチのトポロジ ダイアグラムの表示

トポロジ ダイアグラムを使用して、vSphere 標準スイッチの構造とコンポーネントを確認できます。

標準スイッチのトポロジ ダイアグラムには、スイッチに関連付けられたアダプタとポート グループが視覚的に示されています。

ダイアグラムから、選択したポート グループと選択したアダプタの設定を編集できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 リストから標準スイッチを選択します。

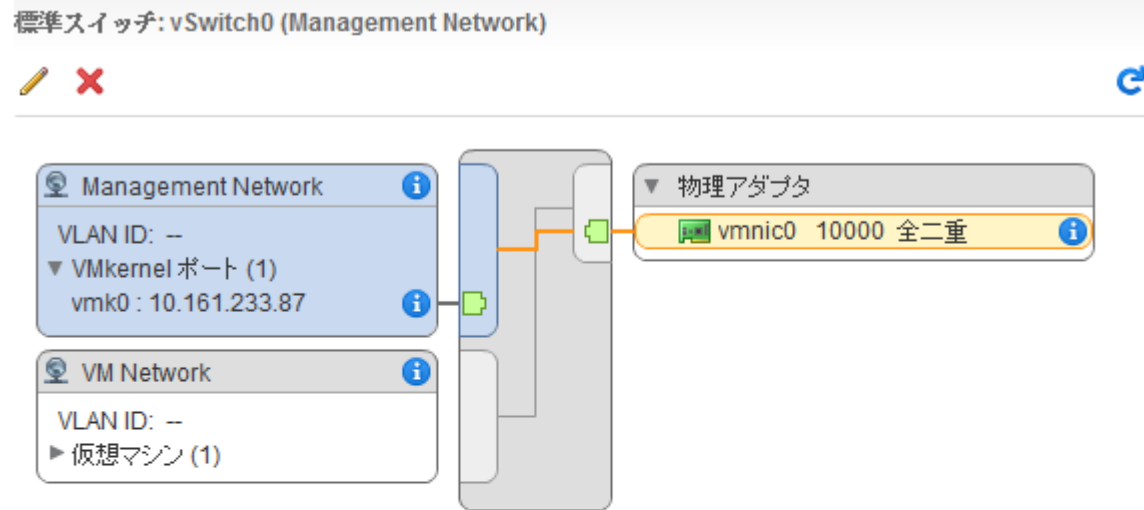
結果

このダイアグラムは、ホスト上の仮想スイッチ リストの下に表示されます。

例：VMkernel および仮想マシンをネットワークに接続する標準スイッチのダイアグラム

仮想環境で、vSphere 標準スイッチが、vSphere vMotion および管理ネットワークの VMkernel アダプタと仮想マシンのグループ化を処理します。統合トポロジ ダイアグラムを使用して、仮想マシンまたは VMkernel アダプタが外部ネットワークに接続しているかどうかを調べたり、データを運ぶ物理アダプタを識別したりできます。

図 2-2. VMkernel および仮想マシンをネットワークに接続する標準スイッチのトポロジ ダイアグラム



vSphere Distributed Switch を使用したネットワークの設定

3

vSphere distributed switch を使用すると、vSphere 環境でネットワークを設定および構成できます。

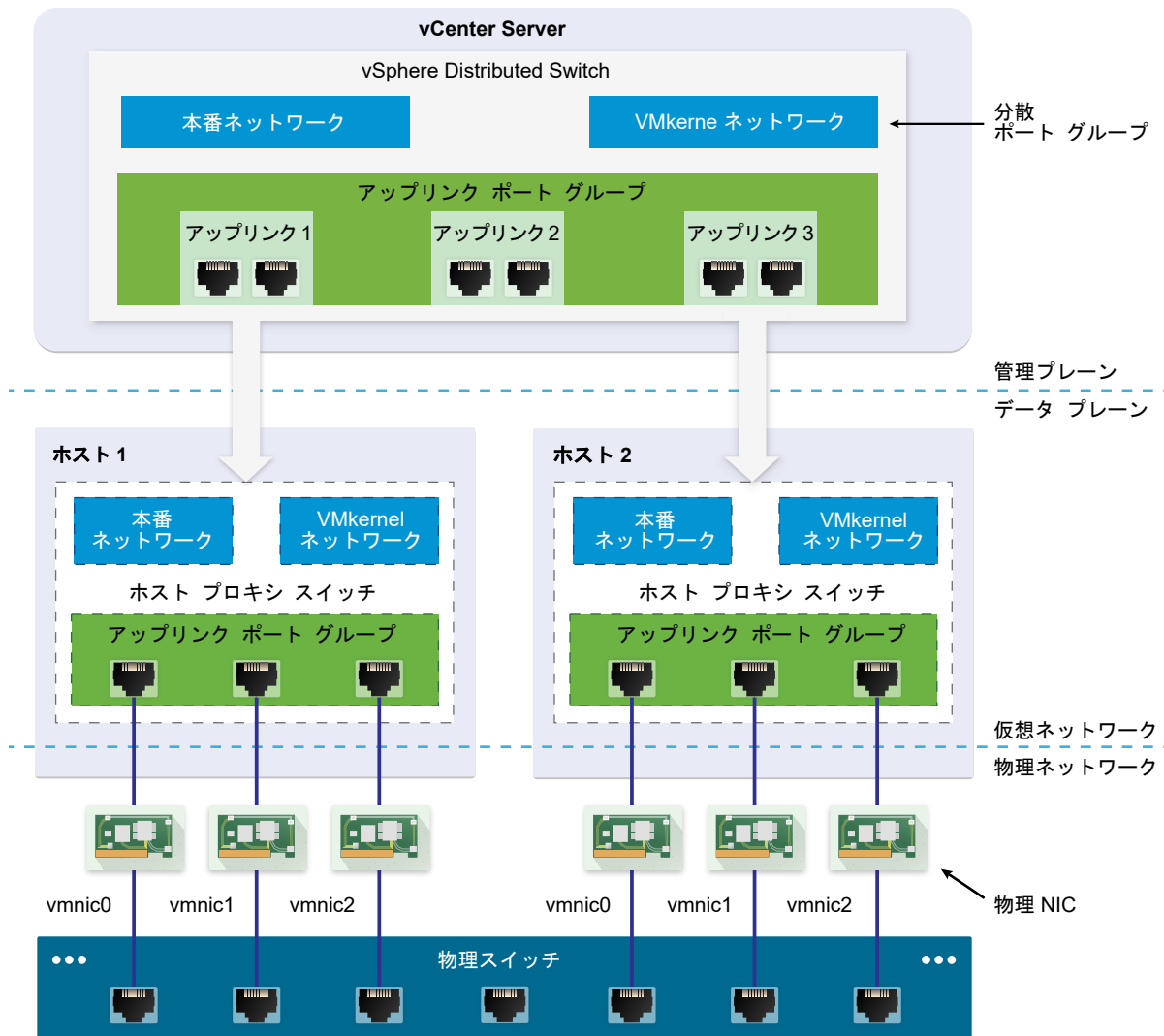
この章には、次のトピックが含まれています。

- vSphere Distributed Switch のアーキテクチャ
- vSphere Distributed Switch の作成
- vSphere Distributed Switch の新しいバージョンへのアップグレード
- vSphere Distributed Switch の全般設定と詳細設定の編集
- vSphere Distributed Switch の複数ホストでのネットワークの管理
- ホスト ブロキシ スイッチのネットワークの管理
- 分散ポート グループ
- 分散ポートの操作
- vSphere Distributed Switch での仮想マシン ネットワークの構成
- vSphere Web Client での vSphere Distributed Switch のトポロジ ダイアグラム

vSphere Distributed Switch のアーキテクチャ

vSphere Distributed Switch を使用すると、スイッチに関連付けられているすべてのホストのネットワーク構成を統合管理して監視できます。vCenter Server システム上に Distributed Switch を設定すると、その設定は、スイッチに関連付けられているすべてのホストに伝達されます。

図 3-1. vSphere Distributed Switch のアーキテクチャ



vSphere のネットワーク スイッチは、データ プレーンと管理プレーンの 2 つの論理セクションで構成されています。データ プレーンは、パッケージの切り替え、フィルタリング、タギングなどを実装します。管理プレーンは、データ プレーン機能の構成に使用する制御構造です。vSphere 標準スイッチには、データ プレーンと管理プレーンの両方が含まれており、各標準スイッチを個別に構成および管理します。

vSphere Distributed Switch では、データ プレーンと管理プレーンが分離されています。Distributed Switch の管理機能は、vCenter Server システムにあり、データセンター レベルで環境のネットワーク構成を管理できます。データ プレーンは、Distributed Switch に関連付けられている各ホストにローカルに保持されます。Distributed Switch のデータ プレーン セクションは、ホスト プロキシ スイッチと呼ばれます。vCenter Server (管理プレーン) で作成するネットワーク構成は、すべてのホスト プロキシ スイッチ (データ プレーン) に自動的にプッシュ ダウンされます。

vSphere Distributed Switch では、物理 NIC、仮想マシン、および VMkernel サービスの整合性のあるネットワーク構成を作成するために使用する 2 つの抽象化が導入されています。

アップリンク ポート グループ

アップリンク ポート グループまたは dvuplink ポート グループは、Distributed Switch の作成時に定義され、1 つ以上のアップリンクを設定できます。アップリンクは、ホストの物理接続や、フェイルオーバーおよびロード バランシング ポリシーを構成するために使用するテンプレートです。ホストの物理 NIC を Distributed Switch のアップリンクにマッピングします。各物理 NIC は、ホスト レベルで特定の ID を使用してアップリンク ポートに接続されます。アップリンクを介してフェイルオーバーおよびロード バランシング ポリシーを設定すると、ポリシーは自動的にホスト プロキシ スイッチ（データ プレーン）に伝達されます。このように、Distributed Switch に関連付けられているすべてのホストの物理 NIC に整合性のあるフェイルオーバーおよびロード バランシング構成を適用できます。

分散ポート グループ

分散ポート グループは、ネットワーク接続を仮想マシンに提供し、VMkernel トラフィックに対応します。現在のデータセンターに固有のネットワーク ラベルを使用して、各分散ポート グループを識別します。NIC チーミング、フェイルオーバー、ロード バランシング、VLAN、セキュリティ、トラフィック シェーピング、およびその他のポリシーを分散ポート グループに構成します。分散ポート グループに接続されている仮想ポートは、分散ポート グループに構成された同じプロパティを共有します。アップリンク ポート グループと同様に、vCenter Server（管理プレーン）の分散ポート グループに設定する構成は、ホスト プロキシ スイッチ（データ プレーン）を通じて Distributed Switch のすべてのホストに自動的に伝達されます。このように、仮想マシンを同じ分散ポート グループに関連付けることで、同じネットワーク構成を共有する仮想マシンのグループを構成できます。

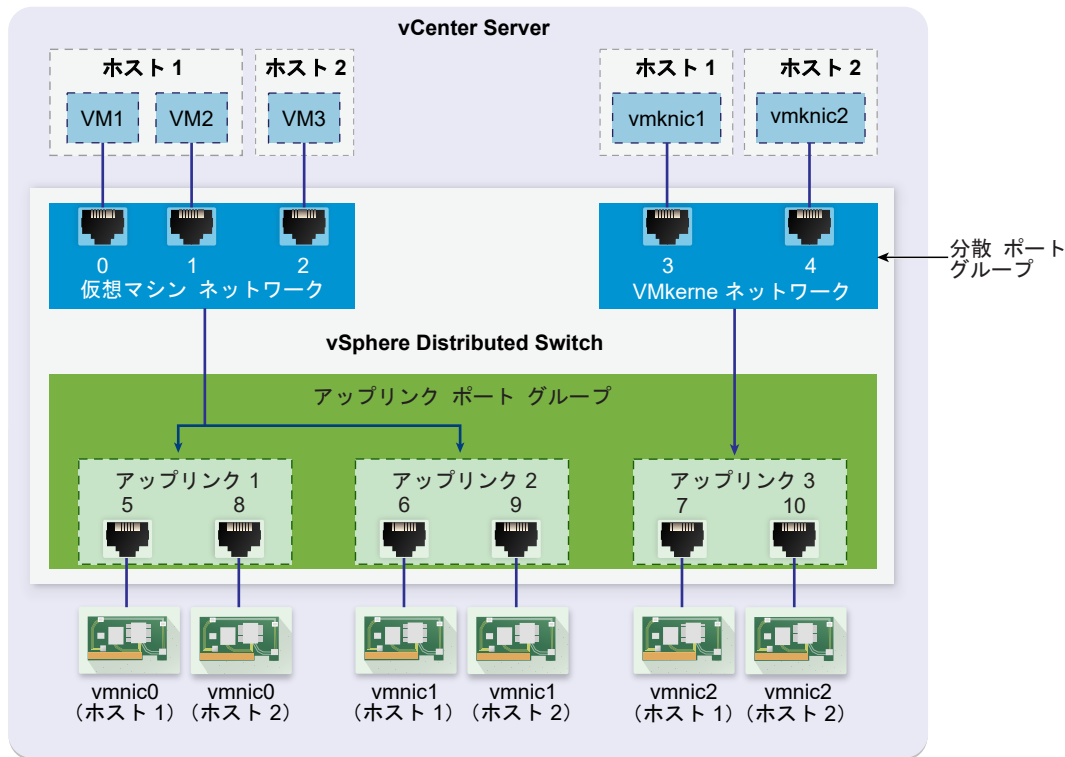
たとえば、データセンターに vSphere Distributed Switch を作成し、2 つのホストを関連付けるとします。3 つのアップリンクをアップリンク ポート グループに構成し、各ホストからアップリンクに物理 NIC を接続します。このように、各アップリンクには各ホストの 2 つの物理 NIC がマッピングされます。たとえば、アップリンク 1 は、ホスト 1 とホスト 2 の vmnic0 で構成されます。次に、仮想マシン ネットワークおよび VMkernel サービスのための本番ネットワークと VMkernel ネットワークの分散ポート グループを作成します。本番ネットワークと VMkernel ネットワークのポート グループの表現は、ホスト 1 とホスト 2 にもそれぞれ作成されます。本番ネットワークと VMkernel ネットワークのポート グループに設定するすべてのポリシーは、ホスト 1 とホスト 2 の各表現に伝達されます。

ホスト リソースを効率的に使用するため、ESXi 5.5 以降を実行しているホストでは、プロキシ スイッチの分散ポート数が動的に増減されます。このようなホストのプロキシ スイッチはホストでサポートされているポートの最大数まで拡張可能です。ポートの限界はホストが処理できる仮想マシンの最大数に基づいて決まります。

vSphere Distributed Switch のデータ フロー

仮想マシンや VMkernel アダプタから物理ネットワークへのデータ フローは、分散ポート グループに設定されている NIC チーミングおよびロード バランシング ポリシーによって異なります。データ フローは、Distributed Switch のポートの割り当てにも左右されます。

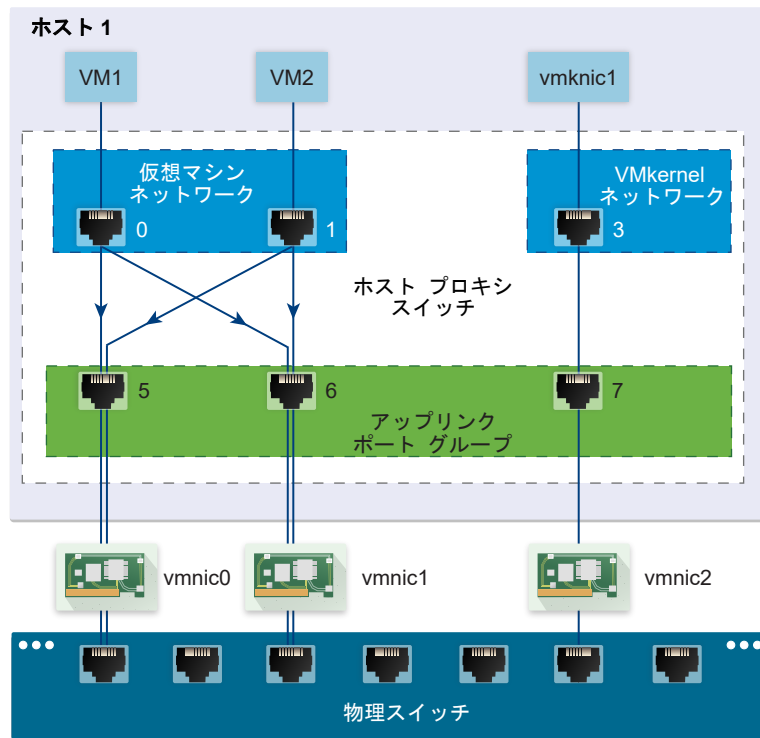
図 3-2. vSphere Distributed Switch の NIC チーミングおよびポートの割り当て



たとえば、3 個の分散ポートがある仮想マシン ネットワークの分散ポート グループと 2 個の分散ポートがある VMkernel ネットワークの分散ポート グループを作成するとします。Distributed Switch は、0 ～ 4（分散ポート グループの作成順）の ID を使用して、ポートを割り当てます。次に、ホスト 1 とホスト 2 を Distributed Switch に関連付けます。Distributed Switch は、ホストの各物理 NIC にポートを割り当てます。ポート番号は上記の続きとなる 5 から始まり、ホストの作成順に割り当てられます。各ホストのネットワーク接続を提供するには、vmnic0 をアップリンク 1、vmnic1 をアップリンク 2、vmnic2 をアップリンク 3 にマッピングします。

仮想マシンに接続し、VMkernel トラフィックに対応するには、仮想マシン ネットワークと VMkernel ネットワークのポート グループにチーミングおよびフェイルオーバーを構成します。アップリンク 1 とアップリンク 2 は仮想マシン ネットワークのポート グループのトラフィックを処理し、アップリンク 3 は VMkernel ネットワークのポート グループのトラフィックを処理します。

図 3-3. ホスト プロキシ スイッチのパケット フロー



ホスト側では、仮想マシンおよび VMkernel サービスからのパケット フローは、特定のポートを通過して物理ネットワークに到達します。たとえば、ホスト 1 の仮想マシン 1 から送信されるパケットは、まず仮想マシン ネットワークの分散ポート グループのポート 0 に到達します。アップリンク 1 とアップリンク 2 は、仮想ネットワークのポート グループのトラフィックを処理するため、パケットはアップリンク ポート 5 またはアップリンク ポート 6 から続行できます。パケットがアップリンク ポート 5 を通過する場合は vmnic0 に進み、パケットがアップリンク ポート 6 を通過する場合は vmnic1 に進みます。

vSphere Distributed Switch の作成

データセンターで vSphere Distributed Switch を作成し、同時に複数のホストのネットワーク構成を一元的に処理できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、データセンターに移動します。
- 2 ナビゲータでデータセンターを右クリックし、[Distributed Switch] - [新しい Distributed Switch] を選択します。
- 3 [名前と場所] で、新しい Distributed Switch の名前を入力するか、生成された名前を受け入れて、[次へ] をクリックします。

- 4 [バージョンの選択] で、Distributed Switch のバージョンを選択し、[次へ] をクリックします。

オプション	説明
Distributed Switch: 6.0.0	ESXi 6.0 以降と互換性があります。
Distributed Switch: 5.5.0	ESXi 5.5 以降と互換性があります。それ以降の vSphere distributed switch のバージョンでリリースされた機能はサポートされていません。
Distributed Switch: 5.1.0	VMware ESXi 5.1 以降と互換性があります。それ以降の vSphere distributed switch のバージョンでリリースされた機能はサポートされていません。
Distributed Switch: 5.0.0	VMware ESXi 5.0 以降と互換性があります。 それ以降の vSphere distributed switch のバージョンでリリースされた機能はサポートされていません。

- 5 [設定の編集] で、Distributed Switch の設定を構成します。

- a 矢印ボタンを使用して [アップリンク数] を選択します。

アップリンク ポートは、関連するホスト上の物理 NIC に Distributed Switch を接続します。アップリンク ポート数は、ホストごとに Distributed Switch への物理的な接続として許可されている最大の数です。

- b ドロップダウン メニューを使用して、[Network I/O Control] を有効または無効にします。

Network I/O Control を使用して、デプロイの要件に従い、特定のタイプのインフラストラクチャおよびワークロード トラフィックのネットワーク リソースへのアクセスに優先順位を付けることができます。

Network I/O Control は、ネットワーク全体の I/O 負荷を継続的に監視し、使用可能なリソースを動的に割り当てます。

- c [デフォルトのポート グループの作成] チェック ボックスを選択して、このスイッチのデフォルト設定で新しい分散ポート グループを作成します。

- d (オプション) デフォルトの分散ポート グループを作成するには、[ポート グループ名] にポート グループ名を入力するか、自動的に生成される名前をそのまま使用します。

システムにカスタム ポート グループの要件がある場合、Distributed Switch を追加した後に、それらの要件を満たす分散ポート グループを作成します。

- e [次へ] をクリックします。

- 6 [終了準備の完了] で、選択した設定を確認し、[終了] をクリックします。

設定を変更するには、[戻る] ボタンを使用します。

結果

データセンターで Distributed Switch が作成されます。新しい Distributed Switch に移動して、[サマリ] タブをクリックすると、Distributed Switch でサポートされる機能とその他の詳細を表示できます。

次のステップ

Distributed Switch にホストを追加し、そのスイッチにネットワーク アダプタを構成します。

vSphere Distributed Switch の新しいバージョンへのアップグレード

バージョン 5.x の vSphere Distributed Switch を以降のバージョンにアップグレードできます。アップグレードを行うと、新しいバージョンでしか備えていない機能を Distributed Switch で活用できるようになります。

Distributed Switch のアップグレードは無停止で行えます。すなわち、スイッチに接続されたホストや仮想マシンでダウンタイムは発生しません。

注： アップグレードが失敗したときに仮想マシンおよび VMkernel アダプタの接続を復元できるようにするには、Distributed Switch の構成をバックアップします。

正常にアップグレードされなかった場合に、そのポート グループと接続されたホストを持つスイッチを再作成するには、スイッチ構成ファイルをインポートします。[vSphere Distributed Switch 構成のエクスポート](#) および [vSphere Distributed Switch 構成のインポート](#) を参照してください。

前提条件

- vCenter Server をバージョン 6.0 にアップグレードします。
- Distributed Switch に接続されたすべてのホストを ESXi 6.0 にアップグレードします。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 Distributed Switch を右クリックして、[アップグレード] - [Distributed Switch のアップグレード] を選択します。
- 3 スイッチをアップグレードする vSphere Distributed Switch のバージョンを選択し、[次へ] をクリックします。

オプション	説明
バージョン 6.0.0	ESXi 6.0 以降と互換性があります。
バージョン 5.5.0	ESXi 5.5 以降と互換性があります。それ以降の vSphere distributed switch のバージョンでリリースされた機能はサポートされていません。
バージョン 5.1.0	ESXi 5.1 以降と互換性があります。それ以降の vSphere Distributed Switch のバージョンでリリースされた機能はサポートされていません。

- 4 ホストの互換性を確認し、[次へ] をクリックします。

Distributed Switch に接続されている ESXi インスタンスの一部は、選択したターゲット バージョンとの互換性がない可能性があります。互換性のないホストをアップグレードまたは削除するか、Distributed Switch の別のアップグレード バージョンを選択します。

5 アップグレードの構成を行い、[終了] をクリックします。

注意: vSphere Distributed Switch は、いったんアップグレードを行うと前のバージョンに戻せません。また、スイッチの新しいバージョンよりも前のバージョンを実行する ESXi ホストは追加できません。

- a アップグレード設定を確認します。
- b vSphere Distributed Switch 5.1 からアップグレードする場合は、強化された LACP サポートへの変換をスケジュールします。
- c vSphere Distributed Switch 5.1 以降からアップグレードする場合は、Network I/O Control バージョン 3 への変換をスケジュールします。

結果

強化された LACP サポートへの変換については、[vSphere Distributed Switch](#) での強化された LACP サポートへの変換を参照してください。

Network I/O Control バージョン 3 への変換については、[vSphere Distributed Switch](#) での Network I/O Control バージョン 3 へのアップグレードを参照してください。

vSphere Distributed Switch の全般設定と詳細設定の編集

vSphere Distributed Switch の全般設定には、スイッチ名とアップリンク数が含まれています。Distributed Switch の詳細設定には、Cisco Discovery Protocol と Distributed Switch の最大 MTU が含まれています。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブをクリックし、[設定] をクリックしてから、[プロパティ] を選択します。
- 3 [編集] をクリックします。
- 4 [全般] をクリックして、vSphere Distributed Switch の設定を編集します。

オプション	説明
名前	Distributed Switch の名前を入力します。
アップリンクの数	Distributed Switch のアップリンクのポート数を選択します。 [アップリンク名の編集] をクリックしてアップリンクの名前を変更します。
ポート数	この Distributed Switch のポート数。これは編集できません。
Network I/O Control	ドロップダウン メニューを使用して Network I/O Control を有効または無効にします。
説明	Distributed Switch 設定の説明を追加または変更します。

- 5 [詳細] をクリックして vSphere Distributed Switch の設定を編集します。

オプション	説明
MTU (バイト)	vSphere Distributed Switch 用 MTU の最大サイズです。ジャンボ フレームを有効にするには、1500 バイトよりも大きい値を設定します。
マルチキャスト フィルタリング モード	<ul style="list-style-type: none"> ■ [基本]。Distributed Switch は、グループの IPv4 アドレスの最後の 23 ビットから生成される MAC アドレスに基づいて、マルチキャスト グループに関連するトラフィックを転送します。 ■ [IGMP/MLD スヌーピング]。Distributed Switch は、Internet Group Management Protocol (IGMP) と Multicast Listener Discovery プロトコルによって定義されるメンバーシップ メッセージを使用することにより、購読済みのマルチキャスト グループの IPv4 および IPv6 アドレスに従って、マルチキャスト トラフィックを仮想マシンに転送します。
検出プロトコル	<p>a [タイプ] ドロップダウン メニューから [シスコ検出プロトコル (CDP)]、[リンク層検出プロトコル]、または [無効] を選択します。</p> <p>b [操作] を [待機]、[アドバタイズ]、または [両方] に設定します。</p> <p>検出プロトコルの詳細については、スイッチ検出プロトコルを参照してください。</p>
管理者連絡先	Distributed Switch の管理者の名前とその他の詳細を入力します。

- 6 [OK] をクリックします。

vSphere Distributed Switch の複数ホストでのネットワークの管理

vSphere Distributed Switch に仮想ネットワークを作成して管理するには、ホストをスイッチに追加して、そのネットワーク アダプタをスイッチに接続します。Distributed Switch の複数のホストにわたる統一されたネットワーク構成を作成する場合は、任意のホストをテンプレートとして使用して、その構成を他のホストに適用できます。

■ vSphere Distributed Switch のホスト ネットワークの管理のタスク

vSphere Distributed Switch への新規ホストの追加、スイッチへのネットワーク アダプタの接続、スイッチからのホストの削除を行うことができます。本番環境における Distributed Switch のホスト ネットワークの管理中には、仮想マシンおよび VMkernel サービスへのネットワーク接続を確立したままにしなければならない場合があります。

■ vSphere Distributed Switch へのホストの追加

vSphere Distributed Switch を使用して vSphere 環境のネットワークを管理するには、ホストをスイッチに関連付ける必要があります。ホストの物理 NIC、VMkernel アダプタ、仮想マシン ネットワーク アダプタを Distributed Switch に接続します。

■ vSphere Distributed Switch での物理ネットワーク アダプタの構成

Distributed Switch に関連付けられているホストの場合、物理 NIC をスイッチのアップリンクに割り当てることができます。Distributed Switch の物理 NIC は一度に複数のホストに対して構成できます。

■ vSphere Distributed Switch への VMkernel アダプタの移行

Distributed Switch のみを使用して VMkernel サービスのトラフィックを処理する場合、VMkernel アダプタを Distributed Switch に移行します。他の標準スイッチまたは Distributed Switch のアダプタは必要なくなります。

■ vSphere Distributed Switch での VMkernel アダプタの作成

Distributed Switch に関連付けられたホストの VMkernel アダプタを作成してホストにネットワーク接続を提供し、vSphere vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance のログ、および Virtual SAN のトラフィックを処理できるようにします。[ホストの追加と管理] ウィザードを使用して同時に複数のホストに VMkernel アダプタを作成できます。

■ vSphere Distributed Switch 仮想マシン ネットワークの移行

Distributed Switch を使用して仮想マシン ネットワークを管理するには、スイッチのラベル付きネットワークに仮想マシン ネットワーク アダプタを移行します。

■ ホストの分散ポートの最大数の更新

ホストで ESXi 5.1 以前を実行している場合、ホストのプロキシ スイッチ上の分散ポートの最大数を変更できます。

■ テンプレート ホストを使用した vSphere Distributed Switch 上での同一のネットワーク構成の作成

複数のホストを同一のネットワーク構成にする場合、1 台のホストをテンプレートとして選択し、そのホストの物理 NIC および VMkernel アダプタ設定を、Distributed Switch 上の他のホストに適用できます。

■ vSphere Distributed Switch からのホストの削除

ホストに別のスイッチを構成した場合、vSphere Distributed Switch からそれらのホストを削除します。

vSphere Distributed Switch のホスト ネットワークの管理のタスク

vSphere Distributed Switch への新規ホストの追加、スイッチへのネットワーク アダプタの接続、スイッチからのホストの削除を行うことができます。本番環境における Distributed Switch のホスト ネットワークの管理中には、仮想マシンおよび VMkernel サービスへのネットワーク接続を確立したままにしなければならない場合があります。

vSphere Distributed Switch へのホストの追加

Distributed Switch に新しいホストを追加する前に、環境の準備を検討します。

- 仮想マシン ネットワークに分散ポート グループを作成する。
- VMkernel サービスに分散ポート グループを作成する。たとえば、管理ネットワーク、vMotion、および Fault Tolerance に分散ポート グループを作成します。
- スイッチに接続するすべての物理 NIC に対して、Distributed Switch で十分なアップリンクを構成する。たとえば、Distributed Switch に接続するホストにそれぞれ 8 個の物理 NIC がある場合は、Distributed Switch で 8 個のアップリンクを構成します。
- 特定のネットワーク要件があるサービスに対して、Distributed Switch の構成が準備されていることを確認する。たとえば iSCSI には、iSCSI VMkernel アダプタを接続する分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバー構成に特定の要件があります。

vSphere Web Client の [ホストの追加と管理] ウィザードを使用すると、複数のホストを一度に追加できます。

vSphere Distributed Switch のネットワーク アダプタの管理

Distributed Switch にホストを追加したら、物理 NIC をスイッチのアップリンクに接続し、仮想マシンのネットワーク アダプタを構成し、VMkernel ネットワークを管理できます。

Distributed Switch の一部のホストがデータセンターの他のスイッチに関連付けられている場合は、Distributed Switch との間でネットワーク アダプタを移行できます。

仮想マシン ネットワーク アダプタまたは VMkernel アダプタを移行する場合は、移行先の分散ポート グループにアクティブなアップリンクが少なくとも 1 つ存在し、アップリンクがホストの物理 NIC に接続されていることを確認します。また、物理 NIC、仮想ネットワーク アダプタ、VMkernel アダプタを同時に移行することもできます。

物理 NIC を移行する場合は、ポート グループのトラフィックを処理するアクティブな NIC を少なくとも 1 つ残します。たとえば、*VM Network* ポート グループのトラフィックを *vmnic0* と *vmnic1* で処理する場合は、*vmnic0* を移行し、*vmnic1* はグループに接続したままにします。

vSphere Distributed Switch からのホストの削除

Distributed Switch からホストを削除する前に、使用中のネットワーク アダプタを別のスイッチに移行する必要があります。

- 別の Distributed Switch にホストを追加するには、[ホストの追加と管理] ウィザードを使用して、ホストのネットワーク アダプタを新しいスイッチにまとめて移行できます。その後、現在の Distributed Switch からホストを安全に削除できます。
- ホスト ネットワークを標準スイッチに移行するには、ネットワーク アダプタを段階的に移行する必要があります。たとえば、各ホストの物理 NIC のうちスイッチに接続されているものを 1 つだけネットワーク接続が確立したままにして、他の物理 NIC を Distributed Switch から削除します。次に、物理 NIC を標準スイッチに接続し、VMkernel アダプタと仮想マシン ネットワーク アダプタをスイッチに移行します。最後に、Distributed Switch に接続したままにした物理 NIC を標準スイッチに移行します。

vSphere Distributed Switch へのホストの追加

vSphere Distributed Switch を使用して vSphere 環境のネットワークを管理するには、ホストをスイッチに関連付ける必要があります。ホストの物理 NIC、VMkernel アダプタ、仮想マシン ネットワーク アダプタを Distributed Switch に接続します。

前提条件

- スwitchに接続する物理 NIC に割り当てるための十分なアップリンクが Distributed Switch で使用可能であることを確認します。
- Distributed Switch に、少なくとも 1 つの分散ポート グループがあることを確認します。
- 分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバー ポリシーで、アクティブなアップリンクが構成されていることを確認します。

iSCSI 用の VMkernel アダプタを移行または作成する場合は、ターゲット分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバー ポリシーで iSCSI の要件を満たしていることを確認します。

- 1つのアップリンクのみがアクティブで、スタンバイ リストは空であり、残りのアップリンクが未使用であることを確認します。
- ホストごとに1つの物理 NIC のみがアクティブ アップリンクに割り当てられていることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[ホストの追加と管理] を選択します。
- 3 [ホストの追加] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 [新規ホスト] をクリックし、データセンターのホストから選択して、[OK] をクリックします。
- 5 Distributed Switch にネットワーク アダプタを構成するタスクを選択し、[次へ] をクリックします。
- 6 Distributed Switch で、物理 NIC を構成します。
 - a [他のスイッチ上/未要求] リストから、物理 NIC を選択します。
他のスイッチにすでに接続されている物理 NIC を選択した場合、その物理 NIC は現在の Distributed Switch に移行されます。
 - b [アップリンクの割り当て] をクリックします。
 - c アップリンクを選択し、[OK] をクリックします。
ネットワーク構成の整合性を保つため、すべてのホストで1つの同じ物理 NIC を Distributed Switch の同じアップリンクに接続できます。
たとえば、2つのホストを追加している場合、各ホストの *vmnic1* を Distributed Switch の *Uplink1* に接続します。
- 7 [次へ] をクリックします。
- 8 VMkernel アダプタを構成します。
 - a VMkernel アダプタを選択し、[ポート グループの割り当て] をクリックします。
 - b 分散ポート グループを選択し、[OK] をクリックします。
- 9 影響を受けたサービスならびに影響のレベルを確認します。

オプション	説明
影響ありません	iSCSI は、新しいネットワーク構成の適用後も通常の機能を維持します。
重要な影響	新しいネットワーク構成が適用されると、iSCSI の通常の機能が停止する場合があります。
影響度：最重要	新しいネットワーク構成が適用されると、iSCSI の通常の機能が中断されます。

- a iSCSI への影響が重要または非常に重大である場合は、[iSCSI] エントリをクリックし、[分析の詳細] ページに表示される原因を確認してください。
- b iSCSI での影響のトラブルシューティングを行ったら、ネットワーク構成を続行します。

10 [次へ] をクリックします。

11 仮想マシンのネットワークを構成します。

- a 仮想マシンのすべてのネットワーク アダプタを分散ポート グループに接続するには、仮想マシンを選択するか、個々のネットワーク アダプタを選択して、そのアダプタのみに接続します。
- b [ポート グループの割り当て] をクリックします。
- c リストから分散ポート グループを選択し、[OK] をクリックします。

12 [次へ] をクリックし、[終了] をクリックします。

次のステップ

Distributed Switch にホストが関連付けられたので、物理 NIC、VMkernel アダプタ、仮想マシン ネットワーク アダプタを管理できます。

vSphere Distributed Switch での物理ネットワーク アダプタの構成

Distributed Switch に関連付けられているホストの場合、物理 NIC をスイッチのアップリンクに割り当てることができます。Distributed Switch の物理 NIC は一度に複数のホストに対して構成できます。

すべてのホスト間でネットワーク構成の整合性を保つために、各ホストの同じ物理 NIC を Distributed Switch の同じアップリンクに割り当てることができます。たとえば、ホスト *ESXi A* とホスト *ESXi B* からの *vmnic1* を *Uplink 1* に割り当てられます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[ホストの追加と管理] を選択します。
- 3 [ホスト ネットワークの管理] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 [接続されたホスト] をクリックし、Distributed Switch に関連付けられているホストの中から選択します。
- 5 [次へ] をクリックします。
- 6 [物理アダプタの管理] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 7 [他のスイッチ上/未要求] リストから、物理 NIC を選択します。

すでに他のスイッチに割り当てられている物理 NIC を選択した場合は、その物理 NIC は現在の Distributed Switch に移行されます。

- 8 [アップリンクの割り当て] をクリックします。
- 9 アップリンクを選択するか、[自動割り当て] を選択します。
- 10 [次へ] をクリックします。

- 11 影響を受けたサービスならびに影響のレベルを確認します。

オプション	説明
影響ありません	iSCSI は、新しいネットワーク構成の適用後も通常の機能を維持します。
重要な影響	新しいネットワーク構成が適用されると、iSCSI の通常の機能が停止する場合があります。
影響度：最重要	新しいネットワーク構成が適用されると、iSCSI の通常の機能が中断されます。

- a iSCSI への影響が重要または非常に重大である場合は、[iSCSI] エントリをクリックし、[分析の詳細] ページに表示される原因を確認してください。
- b iSCSI での影響のトラブルシューティングを行ったら、ネットワーク構成を続行します。

- 12 [次へ] をクリックし、[終了] をクリックします。

vSphere Distributed Switch への VMkernel アダプタの移行

Distributed Switch のみを使用して VMkernel サービスのトラフィックを処理する場合、VMkernel アダプタを Distributed Switch に移行します。他の標準スイッチまたは Distributed Switch のアダプタは必要なくなります。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[ホストの追加と管理] を選択します。
- 3 [ホスト ネットワークの管理] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 [接続されたホスト] をクリックし、Distributed Switch に関連付けられているホストの中から選択します。
- 5 [次へ] をクリックします。
- 6 [VMkernel アダプタの管理] を選択して [次へ] をクリックします。
- 7 アダプタを選択し、[ポート グループの割り当て] をクリックします。
- 8 分散ポート グループを選択し、[OK] をクリックします。
- 9 [次へ] をクリックします。
- 10 影響を受けたサービスならびに影響のレベルを確認します。

オプション	説明
影響ありません	iSCSI は、新しいネットワーク構成の適用後も通常の機能を維持します。
重要な影響	新しいネットワーク構成が適用されると、iSCSI の通常の機能が停止する場合があります。
影響度：最重要	新しいネットワーク構成が適用されると、iSCSI の通常の機能が中断されます。

- a iSCSI への影響が重要または非常に重大である場合は、[iSCSI] エントリをクリックし、[分析の詳細] ページに表示される原因を確認してください。
- b iSCSI での影響のトラブルシューティングを行ったら、ネットワーク構成を続行します。

- 11 [次へ] をクリックし、[終了] をクリックします。

vSphere Distributed Switch での VMkernel アダプタの作成

Distributed Switch に関連付けられたホストの VMkernel アダプタを作成してホストにネットワーク接続を提供し、vSphere vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance のログ、および Virtual SAN のトラフィックを処理できるようにします。[ホストの追加と管理] ウィザードを使用して同時に複数のホストに VMkernel アダプタを作成できます。

各 VMkernel アダプタには専用の分散ポート グループが 1 つずつが必要です。1 つの VMkernel アダプタは、1 つのトラフィック タイプのみを処理するようにする必要があります。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[ホストの追加と管理] を選択します。
- 3 [ホスト ネットワークの管理] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 [接続されたホスト] をクリックし、Distributed Switch に関連付けられているホストの中から選択します。
- 5 [次へ] をクリックします。
- 6 [VMkernel アダプタの管理] を選択して [次へ] をクリックします。
- 7 [新規アダプタ] をクリックします。
[ネットワークの追加] ウィザードが開きます。
- 8 [ネットワークの追加] ウィザードの [ターゲット デバイスの選択] ページで、分散ポート グループを選択します。
- 9 [ポートのプロパティ] ページで、VMkernel アダプタの設定をします。

オプション	説明
ネットワーク ラベル	ネットワーク ラベルは、分散ポート グループのラベルから継承されます。
IP アドレス設定	IPv4、IPv6、またはその両方を選択します。
注： IPv6 オプションは IPv6 が有効になっていないホスト上には表示されません。	

オプション	説明
TCP/IP スタック	リストから TCP/IP スタックを選択します。一度設定した VMkernel アダプタの TCP/IP スタックは、後で変更できません。vMotion またはプロビジョニング TCP/IP スタックを選択する場合は、これらのスタックのみを使用して、ホストの vMotion またはプロビジョニング トラフィックを処理できるようになります。デフォルト TCP/IP スタックの、vMotion 用のすべての VMkernel アダプタは、将来の vMotion セッションで無効になります。プロビジョニング TCP/IP スタックを設定する場合、デフォルトの TCP/IP スタックの VMkernel アダプタは、仮想マシンのコールド移行、クローン作成、およびスナップショット移行など、プロビジョニング トラフィックに関連する操作に対して無効になります。
サービスを有効にする	<p>ホストのデフォルトの TCP/IP スタックのサービスを有効にできます。次の使用可能なサービスから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [vMotion トラフィック]。VMkernel アダプタが、vMotion トラフィックを送信するネットワーク接続として、別のホストに通知できるようにします。選択したホストへの vMotion による移行は、vMotion サービスが、デフォルト TCP/IP スタックでどの VMkernel アダプタについても有効になっていない場合、または vMotion の TCP/IP スタックを使用するアダプタが存在しない場合には実行できません。 ■ [プロビジョニング トラフィック]。仮想マシンのコールド移行、クローン作成、スナップショット移行で転送されるデータを処理します。 ■ [Fault Tolerance トラフィック]。ホストの Fault Tolerance のログを有効にします。FT トラフィックでは、1 台のホストに VMkernel アダプタを 1 つだけ使用できます。 ■ [管理トラフィック]。ホストと vCenter Server の管理トラフィックを有効にします。通常、ESXi ソフトウェアがインストールされるときに、ホストによってこのタイプの VMkernel アダプタが作成されます。冗長性を確保するため、ホストの管理トラフィック用 VMkernel アダプタをさらに 1 つ作成できます。 ■ [vSphere Replication トラフィック]。ソースの ESXi ホストから vSphere Replication サーバに送信される送信レプリケーション データを処理します。 ■ [vSphere Replication NFC トラフィック]。ターゲット レプリケーション サイトの受信レプリケーション データを処理します。 ■ [Virtual SAN]。ホストの Virtual SAN トラフィックを有効にします。Virtual SAN クラスタの一部である各ホストには、このトラフィック用の VMkernel アダプタが必要です。

- 10 vMotion TCP/IP スタックまたはプロビジョニング スタックを選択した場合は、表示される警告ダイアログで [OK] をクリックします。

ライブ移行がすでに開始されている場合は、デフォルト TCP/IP スタックに関連する VMkernel アダプタが vMotion で無効になっていても、正常に完了します。同じことは、プロビジョニング トラフィック用に設定されているデフォルト TCP/IP スタックでの、VMkernel アダプタを含む操作についても当てはまります。

- 11 (オプション) [IPv4 設定] ページで、IP アドレスを取得する方法を選択します。

オプション	説明
IP アドレス設定を自動的に取得	DHCP を使用して IP アドレス設定を取得します。ネットワークには、DHCP サーバが存在する必要があります。
固定 IP アドレス設定を使用	VMkernel アダプタの IPv4 IP アドレスおよびサブネット マスクを入力します。 IPv4 での VMkernel デフォルト ゲートウェイおよび DNS サーバのアドレスは、選択した TCP/IP スタックから取得されます。

12 (オプション) [IPv6 設定] ページで、IPv6 アドレスを取得する方法を選択します。

オプション	説明
DHCP を使用して IPv6 アドレスを自動的に取得	DHCP を使用して IPv6 アドレスを取得します。ネットワークには、DHCPv6 サーバが存在する必要があります。
ルーターの通知を使用して IPv6 アドレスを自動的に取得	ルーターの通知を使用して IPv6 アドレスを取得します。
固定 IPv6 アドレス	a [追加] をクリックして新しい IPv6 アドレスを追加します。 b IPv6 アドレスとサブネット プリフィックス長を入力し、[OK] をクリックします。 c VMkernel のデフォルト ゲートウェイを変更するには、[編集] をクリックします。 IPv6 の VMkernel デフォルト ゲートウェイ アドレスは、選択した TCP/IP スタックから取得されます。

13 [設定の確認] ページで設定の選択を確認し、[終了] をクリックします。

14 プロンプトの指示に従って、ウィザードを完了します。

vSphere Distributed Switch 仮想マシン ネットワークの移行

Distributed Switch を使用して仮想マシン ネットワークを管理するには、スイッチのラベル付きネットワークに仮想マシン ネットワーク アダプタを移行します。

前提条件

仮想マシン ネットワーク向けの分散ポート グループが Distributed Switch に 1 つ以上存在することを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[ホストの追加と管理] を選択します。
- 3 [ホスト ネットワークの管理] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 [接続されたホスト] をクリックし、Distributed Switch に関連付けられているホストの中から選択します。
- 5 [次へ] をクリックします。
- 6 [仮想マシン ネットワークの移行] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 7 Distributed Switch に仮想マシン ネットワーク アダプタを構成します。
 - a 仮想マシンのすべてのネットワーク アダプタを分散ポート グループに接続するには、仮想マシンを選択するか、個々のネットワーク アダプタを選択して、そのアダプタのみに接続します。
 - b [ポート グループの割り当て] をクリックします。
 - c リストから分散ポート グループを選択し、[OK] をクリックします。
- 8 [次へ] をクリックし、[終了] をクリックします。

ホストの分散ポートの最大数の更新

ホストで ESXi 5.1 以前を実行している場合、ホストのプロキシ スイッチ上の分散ポートの最大数を変更できます。

ESXi 5.1 以前のホスト上の各プロキシ スイッチのポート数には制限があります。仮想マシンおよびネットワーク サービスは、このポートを使用して 1 つ以上のネットワークにアクセスできます。デプロイの要件に応じて、ポートの数を手動で増減させる必要があります。

注： ホストのプロキシ スイッチの分散ポート数を増やすと、ホストでより多くリソースを予約および消費することになります。一部のポートが使用されていない場合、他の操作に必要とされる可能性のあるホストのリソースがロックされ、未使用のままになります。

ホスト リソースを効率良く使用するため、ESXi 5.5 および 6.0 のホストではプロキシ スイッチの分散ポートの数は動的に増減されます。このようなホストのプロキシ スイッチはホストでサポートされているポートの最大数まで拡張可能です。ポートの限界はホストが処理できる仮想マシンの最大数に基づいて決まります。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[ホストの追加と管理] を選択します。
- 3 [ホスト ネットワークの管理] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 [接続されたホスト] をクリックし、Distributed Switch に関連付けられているホストの中から選択します。
- 5 [次へ] をクリックします。
- 6 ホストを選択し、[設定の編集] をクリックします。
- 7 ホストの分散ポートの最大数を変更し、[OK] をクリックします。
- 8 [次へ] をクリックし、[終了] をクリックします。

テンプレート ホストを使用した vSphere Distributed Switch 上での同一のネットワーク構成の作成

複数のホストを同一のネットワーク構成にする場合、1 台のホストをテンプレートとして選択し、そのホストの物理 NIC および VMkernel アダプタ設定を、Distributed Switch 上の他のホストに適用できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[ホストの追加と管理] を選択します。
- 3 ホストのネットワークを管理するタスクを選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 Distributed Switch で追加または管理するホストを選択します。
- 5 ダイアログ ボックスの下部で [複数のホストに同一のネットワーク設定を構成] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 6 テンプレートとして使用するホストを選択し、[次へ] をクリックします。
- 7 ネットワーク アダプタ タスクを選択し、[次へ] をクリックします。

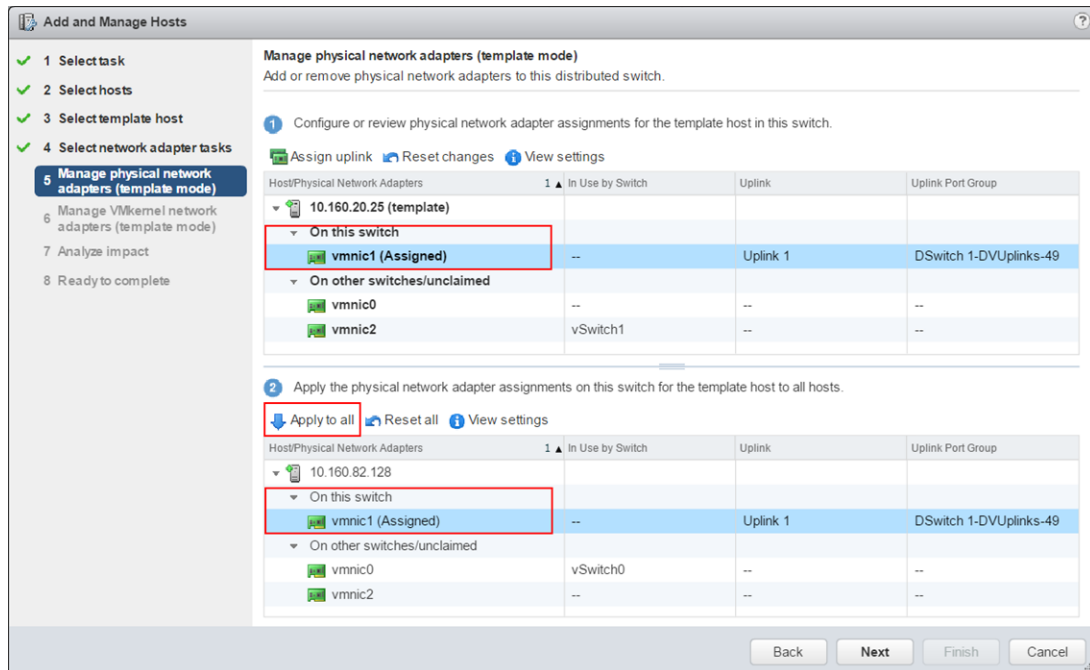
- 8 [物理ネットワーク アダプタの管理] ページと [VMkernel ネットワーク アダプタの管理] ページで、テンプレート用のホストに必要な設定の変更を加え、他のすべてのホストに対しては [すべてに適用] をクリックします。
- 9 [設定の確認] ページで [終了] をクリックします。

例： テンプレート ホストを使用した物理アダプタと VMkernel アダプタの構成

[ホストの追加と管理] ウィザードでテンプレート ホスト モードを使用して、Distributed Switch 上のすべてのホスト全体で、同一のネットワーク構成を作成します。

ウィザードの [物理ネットワーク アダプタの管理] ページで、2 枚の物理 NIC をテンプレート ホストのアップリンクに割り当て、[すべてに適用] をクリックして同じ構成を他のホストで作成します。

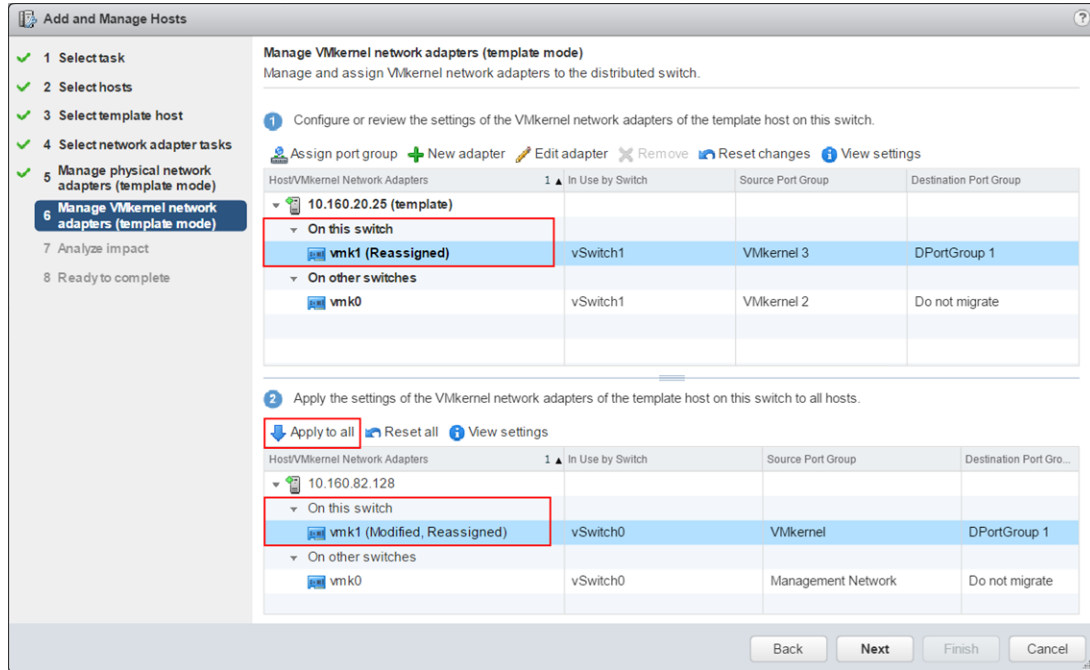
図 3-4. テンプレート ホストを使用した、vSphere Distributed Switch での物理 NIC 構成の適用



[VMkernel ネットワーク アダプタの管理] ページで、VMkernel アダプタをポート グループに割り当て、[すべてに適用] をクリックして同じ構成を他のホストに適用します。

[すべてに適用] ボタンをクリックすると、[変更済み] 修飾子と [再割り当て済み] 修飾子の両方がターゲット VMkernel アダプタに設定されます。[変更済み] 修飾子が表示されるのは、[すべてに適用] ボタンをクリックしたときに、vCenter Server によってテンプレートの VMkernel アダプタの構成がターゲットの VMkernel アダプタにコピーされたからです。この処理は、テンプレート アダプタとターゲット アダプタの構成が同じである場合も変わりません。そのため、ターゲット アダプタは必ず変更されます。

図 3-5. テンプレート ホストを使用した、vSphere Distributed Switch での VMkernel アダプタ構成の適用



vSphere Distributed Switch からのホストの削除

ホストに別のスイッチを構成した場合、vSphere Distributed Switch からそれらのホストを削除します。

前提条件

- ターゲット ホスト上の物理 NIC が別のスイッチに移行されていることを確認します。
- ホスト上の VMkernel アダプタが別のスイッチに移行されていることを確認します。
- 仮想マシン ネットワーク アダプタが別のスイッチに移行されていることを確認します。

別のスイッチへのネットワーク アダプタの移行の詳細については、[vSphere Distributed Switch のホスト ネットワークの管理のタスク](#)を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[ホストの追加と管理] を選択します。
- 3 [ホストの削除] を選択して、[次へ] をクリックします。
- 4 削除するホストを選択して、[次へ] をクリックします。
- 5 [終了] をクリックします。

ホスト プロキシ スイッチのネットワークの管理

vSphere Distributed Switch に関連付けられているすべてのホストで、プロキシ スイッチの構成を変更することができます。物理 NIC、VMkernel アダプタ、仮想マシン ネットワーク アダプタを管理できます。

ホスト プロキシ スイッチの VMkernel ネットワークの設定の詳細については、[vSphere Distributed Switch での VMkernel アダプタの作成](#) を参照してください。

ホストのネットワーク アダプタの vSphere Distributed Switch への移行

Distributed Switch に関連付けられたホストの場合は、ネットワーク アダプタを標準スイッチから Distributed Switch に移行することができます。物理 NIC、VMkernel アダプタ、仮想マシン ネットワーク アダプタを同時に移行できます。

仮想マシン ネットワーク アダプタまたは VMkernel アダプタを移行する場合は、移行先の分散ポート グループに 1 つ以上のアクティブなアップリンクがあり、そのアップリンクがこのホストの物理 NIC に接続されていることを確認します。あるいは、物理 NIC、仮想ネットワーク アダプタ、および VMkernel アダプタを同時に移行します。

物理 NIC を移行する場合、標準スイッチ上のソース ポート グループにトラフィックを処理する物理 NIC が 1 つ以上あることを確認します。たとえば、仮想マシン ネットワークのポート グループに割り当てられた物理 NIC を移行する場合は、ポート グループが 1 つ以上の物理 NIC に接続されていることを確認します。そうしない場合、標準スイッチ上の同じ VLAN の仮想マシンは相互に接続されますが、外部ネットワークには接続されません。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 移行先の Distributed Switch を選択して、[物理または仮想ネットワーク アダプタの移行] をクリックします。
- 4 ネットワーク アダプタの移行のタスクを選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 物理 NIC を構成します。
 - a [他のスイッチ上/未要求] リストから、物理 NIC を選択して [アップリンクの割り当て] をクリックします。
 - b アップリンクを選択し、[OK] をクリックします。
 - c [次へ] をクリックします。
- 6 VMkernel アダプタを構成します。
 - a アダプタを選択し、[ポート グループの割り当て] をクリックします。
 - b 分散ポート グループを選択し、[OK] をクリックします。

一度に 1 つの VMkernel アダプタを 1 つの分散ポート グループに接続する必要があります。
 - c [次へ] をクリックします。

7 新しいネットワーク構成で影響を受けるサービスを確認します。

- a サービスに重要または重大な影響が報告されている場合は、サービスをクリックして分析の詳細を確認します。

たとえば、iSCSI VMkernel アダプタを移行する分散ポート グループ上に不正なチーミングおよびフェイルオーバーの構成があると、iSCSI への重要な影響が報告される可能性があります。分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序にアクティブなアップリンクを 1 つ残し、スタンバイ リストを空のままにして他のアップリンクを未使用に移す必要があります。

- b サービスへの影響のトラブルシューティングが終わったら、[次へ] をクリックします。

8 仮想マシン ネットワーク アダプタを構成します。

- a 仮想マシンまたは仮想マシン ネットワーク アダプタを選択し、[ポート グループの割り当て] をクリックします。

仮想マシンを選択した場合、その仮想マシンのすべてのネットワーク アダプタが移行されます。ネットワーク アダプタを選択した場合、そのネットワーク アダプタだけが移行されます。

- b リストから分散ポート グループを選択し、[OK] をクリックします。
- c [次へ] をクリックします。

9 [終了準備の完了] ページで新しいネットワーク構成を確認し、[終了] をクリックします。

ホストの VMkernel アダプタの vSphere 標準スイッチへの移行

ホストが Distributed Switch に関連付けられている場合は、VMkernel アダプタを Distributed Switch から標準スイッチに移行させることができます。

vSphere Distributed Switch での VMkernel アダプタの作成の詳細については、[vSphere Distributed Switch での VMkernel アダプタの作成](#) を参照してください。

前提条件

ターゲットの標準スイッチに 1 つ以上の物理 NIC があることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
 - 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
 - 3 リストからターゲットの標準スイッチを選択します。
 - 4 [VMkernel アダプタの移行] をクリックします。
 - 5 [VMkernel ネットワーク アダプタの選択] ページで、標準スイッチに移行する仮想ネットワーク アダプタをリストから選択します。
 - 6 [設定の構成] ページでネットワーク アダプタの [ネットワーク ラベル] と [VLAN ID] を編集します。
 - 7 [終了準備の完了] ページで移行の詳細を確認し、[終了] をクリックします。
- 設定を編集するには、[戻る] をクリックします。

vSphere Distributed Switch へのホストの物理 NIC の割り当て

Distributed Switch に関連付けられているホストの物理 NIC をホスト プロキシ スイッチのアップリンク ポートに割り当てることができます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 リストから Distributed Switch を選択します。
- 4 [物理ネットワーク アダプタの管理] をクリックします。
- 5 リストから空きアップリンクを選択し、[アダプタを追加] をクリックします。
- 6 物理 NIC を選択し、[OK] をクリックします。

vSphere Distributed Switch からの物理 NIC の削除

vSphere Distributed Switch のアップリンクからホストの物理 NIC を削除できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 Distributed Switch を選択します。
- 4 [物理ネットワーク アダプタの管理] をクリックします。
- 5 アップリンクを選択し、[選択されているアダプタを削除します] をクリックします。
- 6 [OK] をクリックします。

次のステップ

アクティブな仮想マシンから物理 NIC を削除しても、削除した NIC が vSphere Web Client に表示される場合があります。 [アクティブな仮想マシンからの NIC の削除](#) を参照してください。

ホスト プロキシ スイッチのポート数の設定

vSphere Distributed Switch に接続されている ESXi 5.1 以前のホストのプロキシ スイッチで使用できる最大分散ポート数を増加または減少することができます。

ESXi 5.1 以前が稼働しているホストの各プロキシ スイッチは、ポート数に制限があります。仮想マシンおよびネットワーク サービスは、このポートを使用して 1 つ以上のネットワークにアクセスすることができます。デプロイの要件に応じて、ポートの数を手動で増減させる必要があります。

注： ホストのプロキシ スイッチの分散ポート数を増やすと、ホストでより多くリソースを予約および消費することになります。一部のポートが使用されていない場合、他の操作に必要とされる可能性のあるホストのリソースがロックされ、未使用のままになります。

ホスト リソースを効率的に使用するため、ESXi 5.5 および 6.0 ホストではプロキシ スイッチの分散ポート数が動的に増減されます。このようなホストのプロキシ スイッチはホストでサポートされているポートの最大数まで拡張可能です。ポートの限界はホストが処理できる仮想マシンの最大数に基づいて決まります。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 リストから Distributed Switch を選択します。
- 4 [このホストの分散ポートの最大数を更新します] をクリックします。
- 5 上矢印キーと下矢印キーを使ってホストのポートの最大数を設定し、[OK] をクリックします。

次のステップ

ホストを Distributed Switch に追加した後で、最大ポート数を変更する場合は、ホストを再起動して新しい最大数を反映させる必要があります。

アクティブな仮想マシンからの NIC の削除

アクティブな仮想マシンから NIC を削除しても、削除した NIC が vSphere Web Client に表示されたままの場合があります。

ゲスト OS をインストールしていないアクティブな仮想マシンからの NIC の削除

アクティブな仮想マシンに OS がインストールされていない場合は、仮想マシンから NIC を削除できません。

vSphere Web Client は、NIC が削除されたことを伝えますが、引き続き NIC が仮想マシンに接続されていることを表示します。

ゲスト OS をインストールしているアクティブな仮想マシンからの NIC の削除

アクティブな仮想マシンからは NIC を削除できますが、しばらくの間 vSphere Web Client にレポートされない可能性があります。仮想マシンで [設定の編集] をクリックすると、タスクが完了した後も削除した NIC がリストに表示されていることがあります。仮想マシンの [設定の編集] ダイアログ ボックスでは、NIC が削除されたことをすぐには表示しません。

また、仮想マシンのゲスト OS が NIC のホット リムーブをサポートしていない場合は、NIC が依然として仮想マシンに接続されていることが表示される可能性があります。

分散ポート グループ

個々の分散ポート グループは、vSphere distributed switch 上の各メンバー ポートのポート構成オプションを指定します。分散ポート グループ全体は、ネットワークへの接続方法を定義します。

分散ポート グループの追加

分散ポート グループを vSphere Distributed Switch に追加して、仮想マシン用の Distributed Switch ネットワークを作成し、VMkernel アダプタを関連付けます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 Distributed Switch を右クリックして、[分散ポート グループ] - [新規分散ポート グループ] を選択します。
- 3 [名前と場所の選択] セクションで、新規分散ポート グループの名前を入力するか、生成された名前を受け入れて、[次へ] をクリックします。
- 4 [設定の構成] セクションで、新規分散ポート グループの全般プロパティを設定し、[次へ] をクリックします。

設定	説明
ポート バインド	<p>この分散ポート グループに接続された仮想マシンにポートを割り当てるときに選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [静的バインド]: 仮想マシンが分散ポート グループに接続されるときに仮想マシンにポートを割り当てます。 ■ [動的バインド]: 仮想マシンが分散ポート グループに接続されたあと、初めてパワーオンされるときに仮想マシンにポートを割り当てます。動的バインドは、ESXi 5.0 から廃止されています。 ■ [短期]: ポートのバインドを行いません。ホストに接続されている場合でも、短期のポート バインドで仮想マシンを分散ポート グループに割り当てることができます。
ポートの割り当て	<ul style="list-style-type: none"> ■ [弾性]: デフォルトのポート数は 8 個です。すべてのポートが割り当てられたら、新しい 8 組のポートが作成されます。これはデフォルトです。 ■ [固定]: デフォルトのポート数は 8 個に設定されています。すべてのポートが割り当てられたら、追加のポートは作成されません。
ポート数	分散ポート グループのポート数を入力します。
ネットワーク リソース プール	ドロップダウン メニューを使用して、ユーザー設定のネットワーク リソース プールに新規分散ポート グループを割り当てます。ネットワーク リソース プールを作成していない場合、このメニューは空です。
VLAN	<p>[タイプ] ドロップダウン メニューを使用して VLAN オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [なし]: VLAN を使用しません。 ■ [VLAN]: [VLAN ID] フィールドに、1 ~ 4094 の数字を入力します。 ■ [VLAN トランク]: VLAN トランク範囲を入力します。 ■ [プライベート VLAN]: プライベート VLAN のエントリを選択します。プライベート VLAN を作成していない場合、このメニューは空です。
詳細	新規分散ポート グループのポリシー構成をカスタマイズするには、このチェック ボックスを選択します。

5 (オプション) [セキュリティ] セクションで、セキュリティ例外を編集し、[次へ] をクリックします。

設定	説明
プロミスキャス モード	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。ゲスト OS からアダプタを無差別モードで配置しても、他の仮想マシン用のフレームは受信されません。 ■ [承諾]。ゲスト OS からアダプタを無差別モードで配置すると、スイッチは、アダプタが接続されているポートでアクティブな VLAN ポリシーに従って、スイッチを通過する全フレームをゲスト アダプタが受信することを許可します。 <p>ファイアウォール、ポート スキャナ、侵入検知システムなどは、無差別モードで動作する必要があります。</p>
MAC アドレス変更	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。このオプションを [拒否] に設定し、ゲスト OS がアダプタの MAC アドレスを <code>.vmx</code> 構成ファイル内のアドレスとは異なる値に変更すると、スイッチは仮想マシンアダプタへのすべての受信フレームをドロップします。 <p>ゲスト OS が MAC アドレスを元に戻すと、仮想マシンはフレームを再び受信ようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [承諾]。ゲスト OS がネットワーク アダプタの MAC アドレスを変更すると、アダプタは新しいアドレスへのフレームを受信します。
偽装転送	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。スイッチは、<code>.vmx</code> 構成ファイル内のソース MAC アドレスとは異なるアドレスを持つ送信フレームをすべてドロップします。 ■ [承諾]。スイッチはフィルタリングを実行せず、すべての送信フレームを許可します。

6 (オプション) [トラフィック シェーピング] セクションで、入力側トラフィック シェーピングまたは出力側トラフィック シェーピングを有効または無効にし、[次へ] をクリックします。

設定	説明
ステータス	[入力側トラフィック シェーピング] または [出力側トラフィック シェーピング] を有効にした場合、この特定のポート グループに関連付けられた各仮想アダプタに割り当てるネットワーク バンド幅の量の制限を設定します。ポリシーを無効にすると、デフォルトで、物理ネットワークへの制限および障害のない接続が可能になります。
平均バンド幅	長期間にわたって平均化された、ポート全体で許容される毎秒ビット数を設定します。これは、許容される平均的な負荷です。
ピーク バンド幅	負荷の高いトラフィックの送受信時にポート全体で許容される最大の毎秒ビット数です。この値が、バースト時用の余剰分を使用しているときは常に、ポートが使用するバンド幅の上限になります。
バースト サイズ	バースト時に許容する最大バイト数です。このパラメータが設定されていると、ポートは割り当てられているすべてのバンド幅を使用しない場合に、バースト ボーナスを取得できます。ポートで、[平均バンド幅] で指定されているよりも多くのバンド幅が必要になると、バースト ボーナスが使用できる場合には、一時的にデータがより高速で転送されることがあります。このパラメータにより、バースト ボーナ스에累積されているバイト数が上乗せされるため、より高速で転送されます。

7 (オプション) [チーミングおよびフェイルオーバー] セクションで、設定を編集し、[次へ] をクリックします。

設定	説明
ロード バランシング	<p>アップリンクの選択方法を指定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [発信元の仮想ポートに基づいたルート]。トラフィックが Distributed Switch に入る仮想ポートに基づいてアップリンクを選択します。 ■ [IP ハッシュに基づいたルート]。各パケットの発信元と宛先の IP アドレスのハッシュに基づいてアップリンクを選択します。IP 以外のパケットの場合は、すべてそれらのオフセットを使用してハッシュを計算します。 ■ [発信元 MAC ハッシュに基づいたルート]。送信元のイーサネットのハッシュに基づいて、アップリンクを選択します。 ■ [物理 NIC 負荷に基づいたルート]。物理 NIC の現在の負荷に基づいてアップリンクを選択します。 ■ [明示的なフェイルオーバー順序を使用]。アクティブ アダプタのリストから、フェイルオーバーの検知基準を満たした最上位のアップリンクを常に使用します。 <p>注： IP ベースのチーミングでは、イーサチャネルで物理スイッチを構成する必要があります。その他のすべてのオプションでは、イーサチャネルを無効にします。</p>
ネットワークのフェイルオーバー検出	<p>フェイルオーバーの検出に使用する方法を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [リンク状態のみ]。ネットワーク アダプタが提供するリンク ステータスのみに依存します。このオプションでは、ケーブルの抜けや物理スイッチの電源障害などの障害は検出されますが、スパンニング ツリーによる物理スイッチ ポートのブロック、物理スイッチ ポートの誤った VLAN への構成、物理スイッチの反対側のケーブルの抜けなどの構成エラーは検出されません。 ■ [ビーコンの検知]。チーム内のすべての NIC に対してビーコンの検知の送信および待機を行い、この情報とリンク ステータスを使用してリンク故障を確認します。これにより、リンク状態のみでは検出できない、前述の障害の多くを検出できます。 <p>注： IP ハッシュに基づくロード バランシングを使用する場合は、ビーコンの検知を使用しないでください。</p>
スイッチへの通知	<p>[はい] または [いいえ] を選択して、フェイルオーバー時にスイッチへの通知を行います。[はい] を選択すると、フェイルオーバー イベントによって、仮想 NIC が Distributed Switch に接続される場合、または、その仮想 NIC のトラフィックがチーム内の別の物理 NIC を経由する場合には、ネットワークを介して通知が送信され、物理スイッチの検索テーブルを更新します。ほぼすべての場合、この処理は、フェイルオーバーの発生および vMotion での移行の待ち時間を最小限に抑えるのに適しています。</p> <p>注： ポート グループを使用する仮想マシンが、Microsoft NLB (Network Load Balancing) をユニキャスト モードで使用している場合は、このオプションを使用しないでください。NLB がマルチキャスト モードで稼働している場合は、そのような問題はありません。</p>

設定	説明
フェイルバック	<p>[はい] または [いいえ] を選択して、フェイルバックを有効または無効にします。</p> <p>このオプションは、障害から復旧したあとで、物理アダプタをどのようにアクティブ モードに戻すかを決定します。フェイルオーバーを [はい] (デフォルト) に設定すると、アダプタは復旧したあとすぐにアクティブ モードに戻り、スタンバイ アダプタがある場合は、スロットを引き継いだスタンバイ アダプタに代わります。フェイルバックを [いいえ] に設定すると、故障したアダプタは、その時点でアクティブな別のアダプタが故障して交換が必要になるまで、復旧後もアクティブでない状態のままになります。</p>
フェイルオーバーの順序	<p>アップリンクのワークロードの分散方法を指定します。いくつかのアップリンクを使用しつつ、使用中のアップリンクに障害が発生した際の緊急用にはほかのアップリンクを確保するには、これらのアップリンクを異なるグループに移して、この条件を設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [有効なアップリンク]. ネットワーク アダプタ接続が稼動中で有効な場合に、アップリンクを継続的に使用します。 ■ [スタンバイの dvUplink]. 有効なアダプタのいずれかの接続が利用できない場合に、このアップリンクを使用します。 ■ [未使用の dvUplink]. このアップリンクは使用しません。 <p>注： IP ハッシュに基づくロード バランシングを使用する場合は、スタンバイ アップリンクを構成しないでください。</p>

- 8 (オプション) [監視] セクションで、NetFlow を有効または無効にし、[次へ] をクリックします。

設定	説明
無効	NetFlow は分散ポート グループで無効になります。
有効化	NetFlow は分散ポート グループで有効になります。NetFlow 設定を vSphere 分散スイッチ レベルで構成できます。

- 9 (オプション) [その他] セクションで、[はい] または [いいえ] を選択し、[次へ] をクリックします。

[はい] を選択すると、ポート グループのすべてのポートがシャットダウンされます。このアクションによって、そのポートを使用しているホストまたは仮想マシンの通常のネットワーク操作が中断される可能性があります。

- 10 (オプション) [追加設定の編集] セクションで、ポート グループの説明を追加し、ポートごとにポリシーのオーバーライドを設定して、[次へ] をクリックします。

- 11 [終了準備の完了] セクションで設定を確認し、[終了] をクリックします。

設定を変更するには、[戻る] ボタンをクリックします。

分散ポート グループの一般的な設定の編集

分散ポート グループ名、ポート設定、ネットワーク リソース プールなど、一般的な分散ポート グループ設定を編集できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で分散ポート グループを探します。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックします。

- 分散ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。
- [全般] を選択して分散ポート グループの次の設定を編集します。

オプション	説明
名前	分散ポート グループの名前。テキスト フィールドで名前を編集できます。
ポート バインド	<p>この分散ポート グループに接続された仮想マシンにポートを割り当てるときに選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [静的バインド]: 仮想マシンが分散ポート グループに接続されるときに仮想マシンにポートを割り当てます。 ■ [動的バインド]: 仮想マシンが分散ポート グループに接続されたあと、初めてパワーオンされるときに仮想マシンにポートを割り当てます。動的バインドは、ESXi 5.0 から廃止されています。 ■ [短期]: ポートのバインドを行いません。ホストに接続されている場合でも、短期のポート バインドで仮想マシンを分散ポート グループに割り当てることができます。
ポートの割り当て	<ul style="list-style-type: none"> ■ [弾性]: デフォルトのポート数は 8 個に設定されています。すべてのポートが割り当てられたら、新しい 8 組のポートが作成されます。これはデフォルトです。 ■ [固定]: デフォルトのポート数は 8 個に設定されています。すべてのポートが割り当てられたら、追加のポートは作成されません。
ポート数	分散ポート グループのポート数を入力します。
ネットワーク リソース プール	ドロップダウン メニューを使用して、ユーザー設定のネットワーク リソース プールに分散ポート グループを割り当てます。ネットワーク リソース プールを作成していない場合、このメニューは空です。
説明	説明フィールドに分散ポート グループに関する情報を入力します。

- [OK] をクリックします。

分散ポート グループの削除

分散ポート グループは、仮想マシンまたは VMkernel ネットワークへの接続を提供して接続設定を構成するための、対応するラベルの付いたネットワークが不要になった場合に削除します。

前提条件

- 対応するラベルの付いたネットワークに接続されていたすべての仮想マシンが他のラベルの付いたネットワークに移行していることを確認します。
- 分散ポート グループに接続されていたすべての VMkernel アダプタが他のポート グループに移行しているか削除されていることを確認します。

手順

- vSphere Web Client で分散ポート グループを探します。
 - Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - [分散ポート グループ] をクリックします。
- 分散ポート グループを選択します。
- [アクション] メニューから [削除] を選択します。

分散ポートの操作

分散ポートは、VMkernel または仮想マシンのネットワーク アダプタに接続された vSphere distributed switch 上のポートです。

デフォルトの分散ポート構成は、分散ポート グループ設定によって決定されますが、個々の分散ポートの一部の設定はオーバーライドされることがあります。

分散ポートの状態の監視

vSphere は分散ポートを監視して、各ポートの現在の状態とランタイム統計に関する情報を提供します。

手順

- 1 vSphere Web Client で分散ポート グループを探します。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックします。
- 2 分散ポート グループを選択します。
- 3 [管理] タブをクリックして、[ポート] をクリックします。
- 4 [ポート状態の監視を開始] をクリックします。

分散ポート グループのポート表には、各分散ポートのランタイム統計が表示されます。

[状態] 列には、各分散ポートの現在の状態が表示されます。

オプション	説明
リンク アップ	この分散ポートのリンクはアクティブです。
リンク ダウン	この分散ポートのリンクはダウンしています。
ブロック	この分散ポートはブロックされています。
--	この分散ポートの状態は現在使用できません。

分散ポート設定の構成

ポートの名前や説明など、一般的な分散ポート設定を変更できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で分散ポート グループを探します。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックします。
- 2 分散ポート グループを選択します。
- 3 [管理] タブをクリックして、[ポート] をクリックします。

- 4 テーブルから分散ポートを選択します。

分散ポートに関する情報が画面の下部に表示されます。

- 5 [分散ポート設定を編集します] をクリックします。
- 6 [プロパティ] ページとポリシー ページで、分散ポートに関する情報を編集し、[OK] をクリックします。

オーバーライドが許可されていない場合、ポリシー オプションは無効化されます。

ポート レベルでのオーバーライドを許可するには、分散ポート グループの [詳細] 設定を変更します。「[ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#)」を参照してください。

vSphere Distributed Switch での仮想マシン ネットワークの構成

仮想マシンは、個々の仮想マシンの NIC を構成するか、仮想マシンのグループを vSphere distributed switch から移行することによって、vSphere distributed switch に接続します。

仮想マシンは、自身の関連する仮想ネットワーク アダプタを分散ポート グループに接続することによって、vSphere distributed switch に接続します。これは、仮想マシンのネットワーク アダプタ構成を変更することによって個々の仮想マシンに対して行うことも、既存の仮想ネットワークから vSphere distributed switch へ仮想マシンを移行することによって仮想マシンのグループに対して行うこともできます。

vSphere Distributed Switch との間の仮想マシンの移行

仮想マシンは、各仮想マシン レベルで分散スイッチに接続するほか、グループ レベルで vSphere 分散スイッチ ネットワークと vSphere 標準スイッチ ネットワークの間を移行することもできます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、データセンターに移動します。
- 2 ナビゲータでデータセンターを右クリックして、[仮想マシンを別のネットワークへ移行] を選択します。
- 3 ソース ネットワークを選択します。
 - [特定のネットワーク]を選択し、[参照] ボタンを使って特定のソース ネットワークを選択します。
 - ほかのどのネットワークにも接続されていない仮想マシンのネットワーク アダプタをすべて移行するには、[ネットワークなし]を選択します。
- 4 [参照] を使用して移行先ネットワークを選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 移行元ネットワークから移行先ネットワークに移行する仮想マシンをリストから選択し、[次へ] をクリックします。
- 6 選択内容を確認し、[終了] をクリックします。

選択を編集するには、[戻る] をクリックします。

分散ポート グループへの個々の仮想マシンの接続

仮想マシンの NIC 構成を変更して、個々の仮想マシンを vSphere Distributed Switch に接続します。

手順

- 1 vSphere Web Client で仮想マシンを探します。
 - a データセンター、フォルダ、クラスタ、リソース プール、またはホストを選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [仮想マシン] をクリックしてリストから仮想マシンを選択します。
- 2 仮想マシンの [管理] タブで、[設定] - [仮想マシンのハードウェア] を選択します。
- 3 [編集] をクリックします。
- 4 [ネットワーク アダプタ] セクションを展開し、ドロップダウン メニューから分散ポート グループを選択します。
- 5 [OK] をクリックします。

vSphere Web Client での vSphere Distributed Switch のトポロジ ダイアグラム

vSphere Web Client での vSphere Distributed Switch のトポロジ ダイアグラムには、スイッチの仮想マシンアダプタ、VMkernel アダプタ、物理アダプタの構造が表示されます。

コンポーネントを確認できます。これらは、ポート グループ別に整理され、スイッチおよびスイッチ間の接続によってトラフィックが処理されます。ダイアグラムには、仮想アダプタを外部ネットワークに接続する物理アダプタに関する情報が表示されます。

Distributed Switch 全体、およびそれに参加している各ホストで稼動しているコンポーネントを表示できます。

vSphere Distributed Switch のトポロジ ダイアグラムから実行できる操作に関するビデオをご覧ください。



VDS のトポロジ ダイアグラムを使用した仮想ネットワークの操作

(https://vmwaretv.vmware.com/media/t/1_9umngsr4)

統合トポロジ ダイアグラム

スイッチの統合トポロジ ダイアグラムを使用して、複数のホストに関連付けられている分散ポート グループおよびアップリンク グループの設定を検索し、編集できます。ポート グループから同じまたは異なるスイッチ上のターゲットに、仮想マシン アダプタの移行を開始できます。また、[ホストの追加と管理] ウィザードを使用して、スイッチ上のホストとそのネットワークを再編成することもできます。

ホスト プロキシ スwitchのトポロジ ダイアグラム

ホスト プロキシ スwitchのトポロジ ダイアグラムには、ホストのスイッチ ポートに接続されたアダプタが表示されます。VMkernel アダプタおよび物理アダプタの設定を編集できます。

ダイアグラム フィルタ

ダイアグラム フィルタを使用すると、トポロジ ダイアグラムに表示される情報を制限できます。デフォルト フィルタでは、トポロジ ダイアグラムの表示が 32 個のポート グループ、32 個のホスト、1024 個の仮想マシンに制限されます。

フィルタを使用しないか、カスタム フィルタを適用して、ダイアグラムの範囲を変更できます。カスタム フィルタを使用すると、一部の仮想マシン、特定のポートの一部のポート グループ、または 1 つのポートに関する情報のみを表示できます。フィルタは、Distributed Switch の統合トポロジ ダイアグラムから作成できます。

vSphere Distributed Switch のトポロジの表示

vCenter Server のホスト間の Distributed Switch に接続されているコンポーネントの組織を調べます。

手順

- 1 vSphere Web Client で vSphere Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックして、[トポロジ] を選択します。

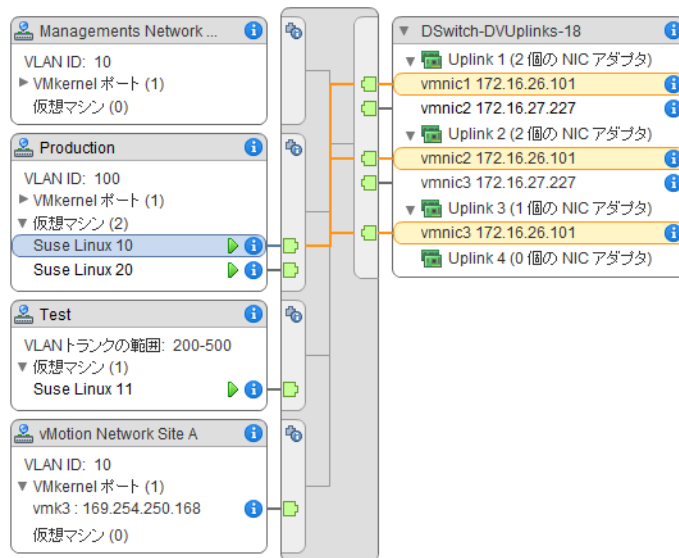
結果

デフォルトでは、ダイアグラムに分散ポート グループが 32 個、ホストが 32 台、仮想マシンが 1024 個表示されます。

例: VMkernel および仮想マシンをネットワークに接続する Distributed Switch のダイアグラム

仮想環境で、vSphere Distributed Switch が、vSphere vMotion および管理ネットワークの VMkernel アダプタと仮想マシンのグループ化を処理します。統合トポロジ ダイアグラムを使用して、仮想マシンまたは VMkernel アダプタが外部ネットワークに接続しているかどうかを調べたり、データを運ぶ物理アダプタを識別したりできます。

図 3-6. VMkernel および仮想マシン ネットワークを処理する Distributed Switch のトポロジ ダイアグラム



次のステップ

Distributed Switch のトポロジで次の一般的なタスクを実行できます。

- フィルターを使用して、特定のホストの選択したグループのみ、選択した仮想マシンのみ、あるいはポートのみのネットワーク コンポーネントを表示します。

- [仮想マシン ネットワークの移行] ウィザードを使用してホストおよびポート グループ間の仮想マシン ネットワーク コンポーネントを検索、構成、および移行します。
- [仮想マシン ネットワークの移行] ウィザードを使用してネットワーク割り当てのない仮想マシン アダプタを検出して選択したポート グループに移動します。
- [ホストの追加と管理] ウィザードを使用して複数のホストでネットワーク コンポーネントを処理します。
- 選択した仮想マシン アダプタまたは VMkernel アダプタに関連したトラフィックを転送する物理 NIC または NIC チームを表示します。

この方法で選択した VMkernel アダプタが配置されているホストを表示することもできます。アダプタを選択し、関連付けられた物理 NIC へのルートを追跡し、NIC の横に IP アドレスまたはドメイン名を表示します。

- ポート グループの VLAN モードおよび ID を特定します。VLAN モードの詳細については、[VLAN 構成](#) を参照してください。

ホスト プロキシ スイッチのトポロジの表示

vSphere Distributed Switch がホストで処理する VMkernel と仮想マシンのネットワークを調べ、再編成します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 リストから Distributed Switch を選択します。

結果

ホスト プロキシ スイッチのトポロジがリストの下に表示されます。

VMkernel ネットワークの設定

4

VMkernel アダプタを設定して、ホストにネットワーク接続を提供し、vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance のログ、Virtual SAN などのシステム トラフィックを処理できるようにします。

■ VMkernel ネットワーク レイヤー

VMkernel ネットワーク レイヤーは、ホストへの接続を提供し、vSphere vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance、Virtual SAN などの標準システム トラフィックを処理します。ソースとターゲットの vSphere Replication ホストに VMkernel アダプタを作成して、レプリケーション データ トラフィックを隔離することもできます。

■ ホスト上の VMkernel アダプタに関する情報の表示

各 VMkernel アダプタの割り当てられているサービス、関連付けられているスイッチ、ポート設定、IP 設定、TCP/IP スタック、VLAN ID、ポリシーを表示できます。

■ vSphere 標準スイッチでの VMkernel アダプタの作成

vSphere 標準スイッチに VMkernel ネットワーク アダプタを作成してホストにネットワーク接続を提供し、vSphere vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance のログ、および Virtual SAN などのシステム トラフィックを処理できるようにします。ソースとターゲットの vSphere Replication ホストに VMkernel アダプタを作成して、レプリケーション データ トラフィックを隔離することもできます。VMkernel アダプタを 1 つのトラフィック タイプ専用にします。

■ vSphere Distributed Switch に関連付けられたホスト上の VMkernel アダプタの作成

Distributed Switch に関連付けられたホスト上に VMkernel アダプタを作成して、ホストへのネットワーク接続を提供し、vSphere vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance のログ、Virtual SAN などのトラフィックを処理します。vSphere 標準スイッチと vSphere Distributed Switch に、標準システム トラフィック用の VMkernel アダプタを設定できます。

■ VMkernel アダプタ構成の編集

VMkernel アダプタでサポートされているトラフィック タイプや、IPv4 または IPv6 アドレスの取得方法の変更が必要になる場合があります。

■ ホスト上の TCP/IP スタック構成の表示

ホスト上の TCP/IP スタックの DNS およびルーティング構成を表示できます。IPv4 および IPv6 ルーティング テーブル、輻輳制御アルゴリズム、および許可される接続の最大数を表示することもできます。

■ ホスト上の TCP/IP スタック構成の変更

ホスト上の TCP/IP スタックの DNS およびデフォルト ゲートウェイ構成を変更できます。輻輳制御アルゴリズム、接続の最大数、およびカスタム TCP/IP スタックの名前を変更することもできます。

■ カスタム TCP/IP スタックの作成

ホストにカスタム TCP/IP スタックを作成し、カスタム アプリケーションを介してネットワーク トラフィックを転送することができます。

■ VMkernel アダプタの削除

vSphere Distributed Switch または標準スイッチの VMkernel アダプタが不要になった場合は、アダプタを削除します。ネットワーク接続を確立した状態に保つため、ホスト上の管理トラフィック用の VMkernel アダプタが少なくとも 1 つ残るようにしてください。

VMkernel ネットワーク レイヤー

VMkernel ネットワーク レイヤーは、ホストへの接続を提供し、vSphere vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance、Virtual SAN などの標準システム トラフィックを処理します。ソースとターゲットの vSphere Replication ホストに VMkernel アダプタを作成して、レプリケーション データ トラフィックを隔離することもできます。

VMkernel レベルでの TCP/IP スタック

デフォルトの TCP/IP スタック

vCenter Server と ESXi ホスト間の管理トラフィックのネットワーク サポート、および vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance などのシステム トラフィックのネットワーク サポートを提供します。

vMotion TCP/IP スタック

仮想マシンのライブ移行のトラフィックをサポートします。vMotion TCP/IP スタックを使用して、vMotion トラフィックを適切に分離します。vMotion TCP/IP スタック上に VMkernel アダプタを作成すると、このホスト上の vMotion で、このスタックのみを使用できます。デフォルトの TCP/IP スタック上の VMkernel アダプタは、vMotion サービスで無効になります。vMotion TCP/IP スタックを使用して VMkernel アダプタを構成している場合に、ライブ移行でデフォルトの TCP/IP スタックが使用されると、移行は正常に終了します。ただし、デフォルトの TCP/IP スタック上の関連する VMkernel アダプタは、今後の vMotion セッションで無効になります。

プロビジョニング TCP/IP スタック

仮想マシンのコールド移行、クローン作成、スナップショット移行時のトラフィックをサポートします。プロビジョニング TCP/IP スタックを使用して、長距離 vMotion 時に NFC（ネットワーク ファイル コピー）トラフィックを処理できます。NFC によって vSphere でファイルタイプに対応した FTP サービスを使用できます。ESXi は、データストア間のデータのコピーや移動に NFC を使用します。プロビジョニング TCP/IP スタックを使用して構成された VMkernel アダプタは、Long Distance vMotion（長距離 vMotion）時に、移行される仮想マシンの仮想ディスクをクローニングする際のトラフィックを処理します。プロビジョニング TCP/IP スタックを使用すると、独立したゲートウェイでクローニング操作のトラフィックを分離できます。プロビジョニング TCP/IP スタックを使用して VMkernel アダプタを構成すると、デフォルトの TCP/IP スタック上のすべてのアダプタがプロビジョニング トラフィックで無効になります。

カスタム TCP/IP スタック

VMkernel レベルでカスタム TCP/IP スタックを追加して、カスタム アプリケーションのネットワーク トラフィックを処理できます。

システム トラフィックのセキュリティ強化

適切なセキュリティ対策を使用して、vSphere 環境内の管理トラフィックおよびシステム トラフィックへの不正アクセスを回避します。たとえば、vMotion トラフィックは、移行に参加する ESXi ホストのみを含む専用ネットワークに隔離します。管理トラフィックは、ネットワーク管理者およびセキュリティ管理者のみがアクセスできるネットワークに隔離します。詳細は、vSphere セキュリティおよび vSphere のインストールとセットアップを参照してください。

システム トラフィック タイプ

各トラフィック タイプには、別々の VMkernel アダプタを専用にする必要があります。Distributed Switch の場合、別々の分散ポート グループを各 VMkernel アダプタ専用にしします。

管理トラフィック

ESXi ホスト、vCenter Server、およびホスト間の High Availability トラフィックの構成および管理の通信を行います。デフォルトでは、ESXi ソフトウェアをインストールすると、vSphere 標準スイッチと、管理トラフィックの VMkernel アダプタがホスト上に作成されます。冗長性を実現するために、管理トラフィック用の VMkernel アダプタに複数の物理 NIC を接続できます。

vMotion トラフィック

vMotion に対応します。ソース ホストとターゲット ホストの両方に、vMotion 用の VMkernel アダプタが必要です。vMotion の VMkernel アダプタは、vMotion トラフィックのみを処理する必要があります。高パフォーマンスを実現するために、複数の NIC vMotion を構成できます。複数の NIC vMotion を構成するために、複数のポート グループを vMotion トラフィック専用にすることができます。各ポート グループには、vMotion VMkernel アダプタが関連付けられている必要があります。次に、1 つ以上の物理 NIC を各ポート グループに接続できます。この方法により、複数の物理 NIC が vMotion に使用され、バンド幅が大きくなります。

注： vMotion のネットワーク トラフィックは暗号化されていません。vMotion 専用で使うためのセキュアなプライベート ネットワークをプロビジョニングする必要があります。

プロビジョニング トラフィック

仮想マシンのコールド移行、クローン作成、スナップショット移行で転送されるデータを処理します。

IP ストレージ トラフィックと検出

標準 TCP/IP ネットワークを使用し、VMkernel ネットワークに依存するストレージ タイプに対する接続を処理します。このようなストレージ タイプとしては、ソフトウェア iSCSI、依存型 ハードウェア iSCSI、および NFS があります。iSCSI の物理 NIC が 2 つ以上ある場合、iSCSI マルチパスを構成できます。ESXi ホストは、TCP/IP を介した NFS バージョン 3 のみをサポートしています。ソフトウェア FCoE (Fibre Channel over Ethernet) アダプタを構成するには、専用の VMkernel アダプタが必要です。ソフトウェア FCoE は、Cisco Discovery Protocol (CDP) VMkernel モジュールを使用して、Data Center Bridging Exchange (DCBX) プロトコル経由で構成情報を渡します。

Fault Tolerance トラフィック

フォールト トレラントなプライマリ仮想マシンがフォールト トレラントなセカンダリ仮想マシンに VMkernel ネットワークのレイヤーを介して送信するデータを処理します。vSphere HA クラスタの一部である各ホストには、Fault Tolerance のログに専用の VMkernel アダプタが必要です。

vSphere Replication トラフィック

ソース ESXi ホストが vSphere Replication サーバに転送する送信レプリケーション データを処理します。ソース サイト上の VMkernel アダプタを、送信レプリケーション トラフィックの隔離専用にします。

vSphere Replication NFC トラフィック

ターゲット レプリケーション サイトの受信レプリケーション データを処理します。

Virtual SAN トラフィック

Virtual SAN クラスタに参加している各ホストには、Virtual SAN トラフィックを処理する VMkernel アダプタが必要です。

ホスト上の VMkernel アダプタに関する情報の表示

各 VMkernel アダプタの割り当てられているサービス、関連付けられているスイッチ、ポート設定、IP 設定、TCP/IP スタック、VLAN ID、ポリシーを表示できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] をクリックし、[ネットワーク] をクリックします。
- 3 ホストのすべての VMkernel アダプタに関する情報を表示するには、[VMkernel アダプタ] を選択します。
- 4 VMkernel アダプタのリストから、設定を表示するアダプタを選択します。

タブ	説明
すべて	VMkernel アダプタのすべての構成情報が表示されます。この情報には、ポートおよび NIC 設定、IPv4 設定および IPv6 設定、トラフィックシェーピング、チーミングおよびフェイルオーバー、セキュリティ ポリシーが含まれます。
プロパティ	VMkernel アダプタのポート プロパティと NIC 設定が表示されます。ポート プロパティには、アダプタが関連付けられているポート グループ (ネットワーク ラベル)、VLAN ID、有効なサービスが含まれます。NIC 設定には、MAC アドレス、構成済みの MTU サイズが含まれます。
IP 設定	VMkernel アダプタのすべての IPv4 設定と IPv6 設定が表示されます。ホストで IPv6 が有効化されていない場合、IPv6 情報は表示されません。
ポリシー	VMkernel アダプタの接続先ポート グループに適用される構成済みのトラフィックシェーピング、チーミングおよびフェイルオーバー、セキュリティ ポリシーが表示されます。

vSphere 標準スイッチでの VMkernel アダプタの作成

vSphere 標準スイッチに VMkernel ネットワーク アダプタを作成してホストにネットワーク接続を提供し、vSphere vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance のログ、および Virtual SAN などのシステム トラフィックを処理できるようにします。ソースとターゲットの vSphere Replication ホストに VMkernel アダプタを作成

して、レプリケーションデータ トラフィックを隔離することもできます。VMkernel アダプタを 1 つのトラフィック タイプ専用にします。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] で [ネットワーク] を選択し、[VMkernel アダプタ] を選択します。
- 3 [ホスト ネットワークの追加] をクリックします。
- 4 [接続タイプの選択] ページで、[VMkernel ネットワーク アダプタ] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 [ターゲット デバイスの選択] ページで、既存の標準スイッチまたは [新しい vSphere 標準スイッチ] を選択します。
- 6 (オプション) [標準スイッチの作成] ページで、スイッチに物理 NIC を割り当てます。

物理 NIC なしで標準スイッチを作成しておいて、後で物理 NIC を構成することもできます。物理 NIC がホストに接続されていない場合、ホストは、物理ネットワーク上の他のホストにネットワーク接続できません。ホスト上の仮想マシンは相互に通信することができます。

- a [追加] をクリックし、必要な数の物理 NIC を選択します。
- b 上下の矢印を使用して、アクティブ NIC とスタンバイ NIC を構成します。

- 7 [ポートのプロパティ] ページで、VMkernel アダプタの設定をします。

オプション	説明
ネットワーク ラベル	このラベルには、VMkernel アダプタのトラフィック タイプを表す値を入力します (例: 管理トラフィック 、 vMotion)。
VLAN ID	VMkernel アダプタのネットワーク トラフィックで使用する VLAN を表す VLAN ID を設定します。
IP アドレス設定	IPv4、IPv6、またはその両方を選択します。
注: IPv6 オプションは IPv6 が有効になっていないホスト上には表示されません。	

オプション	説明
TCP/IP スタック	<p>リストから TCP/IP スタックを選択します。VMkernel アダプタに TCP/IP スタックを設定した後で、その設定を変更することはできません。vMotion またはプロビジョニング TCP/IP スタックを選択する場合、このスタックのみを使用して、ホストの vMotion またはプロビジョニング トラフィックを処理できるようになります。デフォルト TCP/IP スタックの、vMotion 用のすべての VMkernel アダプタは、将来の vMotion セッションで無効になります。プロビジョニング TCP/IP スタックを使用する場合、デフォルトの TCP/IP スタックの VMkernel アダプタは、仮想マシンのコールド移行、クローン作成、およびスナップショット移行など、プロビジョニング トラフィックが関連する操作に対して無効になります。</p>
サービスを有効にする	<p>ホストのデフォルトの TCP/IP スタックのサービスを有効にできます。次の使用可能なサービスから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [vMotion トラフィック]。VMkernel アダプタが、vMotion トラフィックを送信するネットワーク接続として、別のホストに通知できるようにします。選択したホストへの vMotion による移行は、vMotion サービスがデフォルトの TCP/IP スタックの VMkernel アダプタに対して有効になっていない場合、または vMotion TCP/IP スタックを使用しているアダプタがない場合には実行できません。 ■ [プロビジョニング トラフィック]。仮想マシンのコールド移行、クローン作成、スナップショット移行で転送されるデータを処理します。 ■ [Fault Tolerance トラフィック]。ホストの Fault Tolerance のログを有効にします。FT トラフィックでは、1 台のホストに VMkernel アダプタを 1 つだけ使用できます。 ■ [管理トラフィック]。ホストと vCenter Server の管理トラフィックを有効にします。通常、ESXi ソフトウェアがインストールされたときに、ホストによってこのタイプの VMkernel アダプタが作成されます。冗長性を確保するため、ホストの管理トラフィック用 VMkernel アダプタをさらに 1 つ作成できます。 ■ [vSphere Replication トラフィック]。ソースの ESXi ホストから vSphere Replication サーバに送信される送信レプリケーション データを処理します。 ■ [vSphere Replication NFC トラフィック]。ターゲット レプリケーション サイトの受信レプリケーション データを処理します。 ■ [Virtual SAN]。ホストの Virtual SAN トラフィックを有効にします。Virtual SAN クラスタの一部である各ホストには、このトラフィック用の VMkernel アダプタが必要です。

- 8 vMotion TCP/IP スタックまたはプロビジョニング スタックを選択した場合は、表示される警告ダイアログで [OK] をクリックします。

ライブ移行がすでに開始されている場合は、デフォルト TCP/IP スタックに関連する VMkernel アダプタが vMotion で無効になっていても、正常に完了します。同じことは、プロビジョニング トラフィック用に設定されているデフォルト TCP/IP スタックでの、VMkernel アダプタを含む操作についても当てはまります。

- 9 (オプション) [IPv4 設定] ページで、IP アドレスを取得する方法を選択します。

オプション	説明
IP アドレス設定を自動的に取得	DHCP を使用して IP アドレス設定を取得します。ネットワークには、DHCP サーバが存在する必要があります。
固定 IP アドレス設定を使用	<p>VMkernel アダプタの IPv4 IP アドレスおよびサブネット マスクを入力します。</p> <p>IPv4 での VMkernel デフォルト ゲートウェイおよび DNS サーバのアドレスは、選択した TCP/IP スタックから取得されます。</p>

10 (オプション) [IPv6 設定] ページで、IPv6 アドレスを取得する方法を選択します。

オプション	説明
DHCP を使用して IPv6 アドレスを自動的に取得	DHCP を使用して IPv6 アドレスを取得します。ネットワークには、DHCPv6 サーバが存在する必要があります。
ルーターの通知を使用して IPv6 アドレスを自動的に取得	ルーターの通知を使用して IPv6 アドレスを取得します。
固定 IPv6 アドレス	<p>a [追加] をクリックして新しい IPv6 アドレスを追加します。</p> <p>b IPv6 アドレスとサブネット プリフィックス長を入力し、[OK] をクリックします。</p> <p>c VMkernel のデフォルト ゲートウェイを変更するには、[編集] をクリックします。</p> <p>IPv6 の VMkernel デフォルト ゲートウェイ アドレスは、選択した TCP/IP スタックから取得されます。</p>

11 [設定の確認] ページで設定の選択を確認し、[終了] をクリックします。

vSphere Distributed Switch に関連付けられたホスト上の VMkernel アダプタの作成

Distributed Switch に関連付けられたホスト上に VMkernel アダプタを作成して、ホストへのネットワーク接続を提供し、vSphere vMotion、IP ストレージ、Fault Tolerance のログ、Virtual SAN などのトラフィックを処理します。vSphere 標準スイッチと vSphere Distributed Switch に、標準システム トラフィック用の VMkernel アダプタを設定できます。

VMkernel アダプタごとに 1 つの分散ポート グループを専用に指定する必要があります。適切に区別するために、1 つのトラフィック タイプを持つ 1 つの VMkernel アダプタを構成する必要があります。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] で [ネットワーク] を選択し、[VMkernel アダプタ] を選択します。
- 3 [ホスト ネットワークの追加] をクリックします。
- 4 [接続タイプの選択] ページで、[VMkernel ネットワーク アダプタ] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 [既存のネットワークの選択] オプションで、分散ポート グループを選択して、[次へ] をクリックします。
- 6 [ポートのプロパティ] ページで、VMkernel アダプタの設定をします。

オプション	説明
ネットワーク ラベル	ネットワーク ラベルは、分散ポート グループのラベルから継承されます。
IP アドレス設定	IPv4、IPv6、またはその両方を選択します。
注： IPv6 オプションは IPv6 が有効になっていないホスト上には表示されません。	

オプション	説明
TCP/IP スタック	リストから TCP/IP スタックを選択します。一度設定した VMkernel アダプタの TCP/IP スタックは、後で変更できません。vMotion またはプロビジョニング TCP/IP スタックを選択する場合は、これらのスタックのみを使用して、ホストの vMotion またはプロビジョニング トラフィックを処理できるようになります。デフォルト TCP/IP スタックの、vMotion 用のすべての VMkernel アダプタは、将来の vMotion セッションで無効になります。プロビジョニング TCP/IP スタックを設定する場合、デフォルトの TCP/IP スタックの VMkernel アダプタは、仮想マシンのコールド移行、クローン作成、およびスナップショット移行など、プロビジョニング トラフィックに関連する操作に対して無効になります。
サービスを有効にする	<p>ホストのデフォルトの TCP/IP スタックのサービスを有効にできます。次の使用可能なサービスから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [vMotion トラフィック]。VMkernel アダプタが、vMotion トラフィックを送信するネットワーク接続として、別のホストに通知できるようにします。選択したホストへの vMotion による移行は、vMotion サービスが、デフォルト TCP/IP スタックでどの VMkernel アダプタについても有効になっていない場合、または vMotion の TCP/IP スタックを使用するアダプタが存在しない場合には実行できません。 ■ [プロビジョニング トラフィック]。仮想マシンのコールド移行、クローン作成、スナップショット移行で転送されるデータを処理します。 ■ [Fault Tolerance トラフィック]。ホストの Fault Tolerance のログを有効にします。FT トラフィックでは、1 台のホストに VMkernel アダプタを 1 つだけ使用できます。 ■ [管理トラフィック]。ホストと vCenter Server の管理トラフィックを有効にします。通常、ESXi ソフトウェアがインストールされるときに、ホストによってこのタイプの VMkernel アダプタが作成されます。冗長性を確保するため、ホストの管理トラフィック用 VMkernel アダプタをさらに 1 つ作成できます。 ■ [vSphere Replication トラフィック]。ソースの ESXi ホストから vSphere Replication サーバに送信される送信レプリケーション データを処理します。 ■ [vSphere Replication NFC トラフィック]。ターゲット レプリケーション サイトの受信レプリケーション データを処理します。 ■ [Virtual SAN]。ホストの Virtual SAN トラフィックを有効にします。Virtual SAN クラスタの一部である各ホストには、このトラフィック用の VMkernel アダプタが必要です。

- 7 vMotion TCP/IP スタックまたはプロビジョニング スタックを選択した場合は、表示される警告ダイアログで [OK] をクリックします。

ライブ移行がすでに開始されている場合は、デフォルト TCP/IP スタックに関連する VMkernel アダプタが vMotion で無効になっていても、正常に完了します。同じことは、プロビジョニング トラフィック用に設定されているデフォルト TCP/IP スタックでの、VMkernel アダプタを含む操作についても当てはまります。

- 8 (オプション) [IPv4 設定] ページで、IP アドレスを取得する方法を選択します。

オプション	説明
IP アドレス設定を自動的に取得	DHCP を使用して IP アドレス設定を取得します。ネットワークには、DHCP サーバが存在する必要があります。
固定 IP アドレス設定を使用	VMkernel アダプタの IPv4 IP アドレスおよびサブネット マスクを入力します。IPv4 での VMkernel デフォルト ゲートウェイおよび DNS サーバのアドレスは、選択した TCP/IP スタックから取得されます。

- 9 (オプション) [IPv6 設定] ページで、IPv6 アドレスを取得する方法を選択します。

オプション	説明
DHCP を使用して IPv6 アドレスを自動的に取得	DHCP を使用して IPv6 アドレスを取得します。ネットワークには、DHCPv6 サーバが存在する必要があります。
ルーターの通知を使用して IPv6 アドレスを自動的に取得	ルーターの通知を使用して IPv6 アドレスを取得します。
固定 IPv6 アドレス	<p>a [追加] をクリックして新しい IPv6 アドレスを追加します。</p> <p>b IPv6 アドレスとサブネット プリフィックス長を入力し、[OK] をクリックします。</p> <p>c VMkernel のデフォルト ゲートウェイを変更するには、[編集] をクリックします。</p> <p>IPv6 の VMkernel デフォルト ゲートウェイ アドレスは、選択した TCP/IP スタックから取得されます。</p>

- 10 [設定の確認] ページで設定の選択を確認し、[終了] をクリックします。

VMkernel アダプタ構成の編集

VMkernel アダプタでサポートされているトラフィック タイプや、IPv4 または IPv6 アドレスの取得方法の変更が必要になる場合があります。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] で [ネットワーク] を選択し、[VMkernel アダプタ] を選択します。
- 3 対象の Distributed Switch または標準スイッチ上に配置されている VMkernel アダプタを選択し、[編集] をクリックします。
- 4 [ポートのプロパティ] ページで、有効にするサービスを選択します。

チェック ボックス	説明
vMotion トラフィック	VMkernel アダプタが、vMotion トラフィックを送信するネットワーク接続として、別のホストに通知できるようにします。このプロパティがどの VMkernel アダプタでも有効でない場合は、選択したホストへの vMotion での移行はできません。
プロビジョニングトラフィック	仮想マシンのコールド移行、クローン作成、スナップショット移行で転送されるデータを処理します。
Fault Tolerance トラフィック	ホストの Fault Tolerance のログを有効にします。FT トラフィックでは、1 台のホストに VMkernel アダプタを 1 つだけ使用できます。
管理トラフィック	ホストと vCenter Server の管理トラフィックを有効にします。通常、ESXi ソフトウェアがインストールされたときに、ホストによってこのタイプの VMkernel アダプタが作成されます。冗長性を確保するため、ホストの管理トラフィック用 VMkernel アダプタを追加することができます。
vSphere Replication トラフィック	ソースの ESXi ホストから vSphere Replication サーバに送信される送信レプリケーション データを処理します。

チェック ボックス	説明
vSphere Replication NFC トラフィック	ターゲット レプリケーション サイトの受信レプリケーション データを処理します。
Virtual SAN	ホストの Virtual SAN トラフィックを有効にします。Virtual SAN クラスタの一部である各ホストには、このトラフィック用の VMkernel アダプタが必要です。

- [NIC 設定] ページで、ネットワーク アダプタの MTU を設定します。
- IPv4 を有効にしている場合は、[IPv4 設定] セクションで IP アドレスの取得方法を選択します。

オプション	説明
IP アドレス設定を自動的に取得	DHCP を使用して IP アドレス設定を取得します。ネットワークには、DHCP サーバが存在する必要があります。
固定 IP アドレス設定を使用	VMkernel アダプタの IPv4 IP アドレスおよびサブネット マスクを入力します。 IPv4 での VMkernel デフォルト ゲートウェイおよび DNS サーバのアドレスは、選択した TCP/IP スタックから取得されます。

- IPv6 を有効にしている場合は、[IPv6 設定] で IPv6 アドレスを取得するためのオプションを選択します。

注： IPv6 オプションは IPv6 が有効になっていないホスト上には表示されません。

オプション	説明
DHCP を使用して IPv6 アドレスを自動的に取得	DHCP を使用して IPv6 アドレスを取得します。ネットワークには、DHCPv6 サーバが存在する必要があります。
ルーターの通知を使用して IPv6 アドレスを自動的に取得	ルーターの通知を使用して IPv6 アドレスを取得します。
固定 IPv6 アドレス	<ul style="list-style-type: none"> a [追加] をクリックして新しい IPv6 アドレスを追加します。 b IPv6 アドレスとサブネット プリフィックス長を入力し、[OK] をクリックします。 c VMkernel のデフォルト ゲートウェイを変更するには、[編集] をクリックします。 IPv6 の VMkernel デフォルト ゲートウェイ アドレスは、選択した TCP/IP スタックから取得されます。

[IP 設定] の [詳細設定] セクションでは、IPv6 アドレスを削除できます。ルーターの通知が有効な場合、元の場所から削除したアドレスが表示されることがあります。VMKernel アダプタでの DHCP アドレスの削除はサポートされていません。これらのアドレスは、DHCP オプションがオフの場合にのみ削除されます。

- [変更の確認] ページで、VMKernel アダプタに行った変更によりほかの操作が中断されないことを確認します。
- [OK] をクリックします。

ホスト上の TCP/IP スタック構成の表示

ホスト上の TCP/IP スタックの DNS およびルーティング構成を表示できます。IPv4 および IPv6 ルーティング テーブル、輻輳制御アルゴリズム、および許可される接続の最大数を表示することもできます。

手順

- vSphere Web Client で、ホストに移動します。

2 [管理] をクリックし、[ネットワーク] をクリックして、[TCP/IP 構成] を選択します。

3 TCP/IP スタックの表からスタックを選択します。

ホストにカスタム TCP/IP スタックが構成されていない場合は、ホストのデフォルトの vMotion およびプロビジョニング TCP/IP スタックが表示されます。

結果

選択した TCP/IP スタックの DNS およびルーティングの詳細は TCP/IP スタックの表の下に表示されます。IPv4 および IPv6 ルーティング テーブル、スタックの DNS およびルーティング構成を表示できます。

注： IPv6 ルーティング テーブルは、ホストで IPv6 が有効になっている場合にのみ表示されます。

構成されている輻輳制御アルゴリズムに関する情報、および許可されたスタックへの接続の最大数に関する情報は、[詳細] タブに表示されます。

ホスト上の TCP/IP スタック構成の変更

ホスト上の TCP/IP スタックの DNS およびデフォルト ゲートウェイ構成を変更できます。輻輳制御アルゴリズム、接続の最大数、およびカスタム TCP/IP スタックの名前を変更することもできます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [設定] タブで、[ネットワーク] を展開し、[TCP/IP 設定] を選択します。
- 3 テーブルからスタックを選択し、[編集] をクリックして、適切な変更を行います。

ページ	オプション
名前	カスタム TCP/IP スタックの名前を変更します。
DNS 構成	<p>DNS サーバを取得する方法を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [VMkernel ネットワーク アダプタから設定を自動的に取得] を選択し、[VMkernel ネットワーク アダプタ] ドロップダウン メニューからネットワーク アダプタを選択します。 ■ [設定を手動で入力してください] を選択し、DNS 構成設定を編集します。 <ul style="list-style-type: none"> a ホスト名を編集します。 b ドメイン名を編集します。 c 優先 DNS サーバの IP アドレスを入力します。 d 代替 DNS サーバの IP アドレスを入力します。 e (オプション) 完全修飾でないドメイン名の解決時に、[ドメインの検索] テキスト ボックスを使用して、DNS 検索で使用する DNS サフィックスを指定します。
ルーティング	VMkernel ゲートウェイ情報を編集します。
	注： デフォルト ゲートウェイを削除すると、クライアントとホストとの接続が失われる可能性があります。
詳細	接続の最大数とスタックの輻輳制御アルゴリズムを編集します。

4 [OK] をクリックして、変更内容を適用します。

次のステップ

CLI コマンドを使用して、固定ルートを追加のゲートウェイに追加できます。詳細については、<http://kb.vmware.com/kb/2001426> を参照してください。

カスタム TCP/IP スタックの作成

ホストにカスタム TCP/IP スタックを作成し、カスタム アプリケーションを介してネットワーク トラフィックを転送することができます。

手順

- 1 ホストへの SSH 接続を開きます。
- 2 root ユーザーとしてログインします。
- 3 vSphere CLI コマンドを実行します。

```
esxcli network ip netstack add -N="stack_name"
```

結果

これで、ホストにカスタム TCP/IP スタックが作成されます。このスタックに VMkernel アダプタを割り当てることができます。

VMkernel アダプタの削除

vSphere Distributed Switch または標準スイッチの VMkernel アダプタが不要になった場合は、アダプタを削除します。ネットワーク接続を確立した状態に保つため、ホスト上の管理トラフィック用の VMkernel アダプタが少なくとも 1 つ残るようにしてください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] で [ネットワーク] を選択し、[VMkernel アダプタ] を選択します。
- 3 リストから VMkernel アダプタを選択し、[削除] をクリックします。
- 4 確認のダイアログ ボックスで、[影響の分析] をクリックします。

- 5 ポート バインドを備えたソフトウェア iSCSI アダプタを使用している場合は、ネットワーク構成に対する影響を確認します。

オプション	説明
影響ありません	iSCSI は、新しいネットワーク構成の適用後も通常の機能を維持します。
重要な影響	新しいネットワーク構成が適用されると、iSCSI の通常の機能が停止する場合があります。
影響度：最重要	新しいネットワーク構成が適用されると、iSCSI の通常の機能が中断されます。

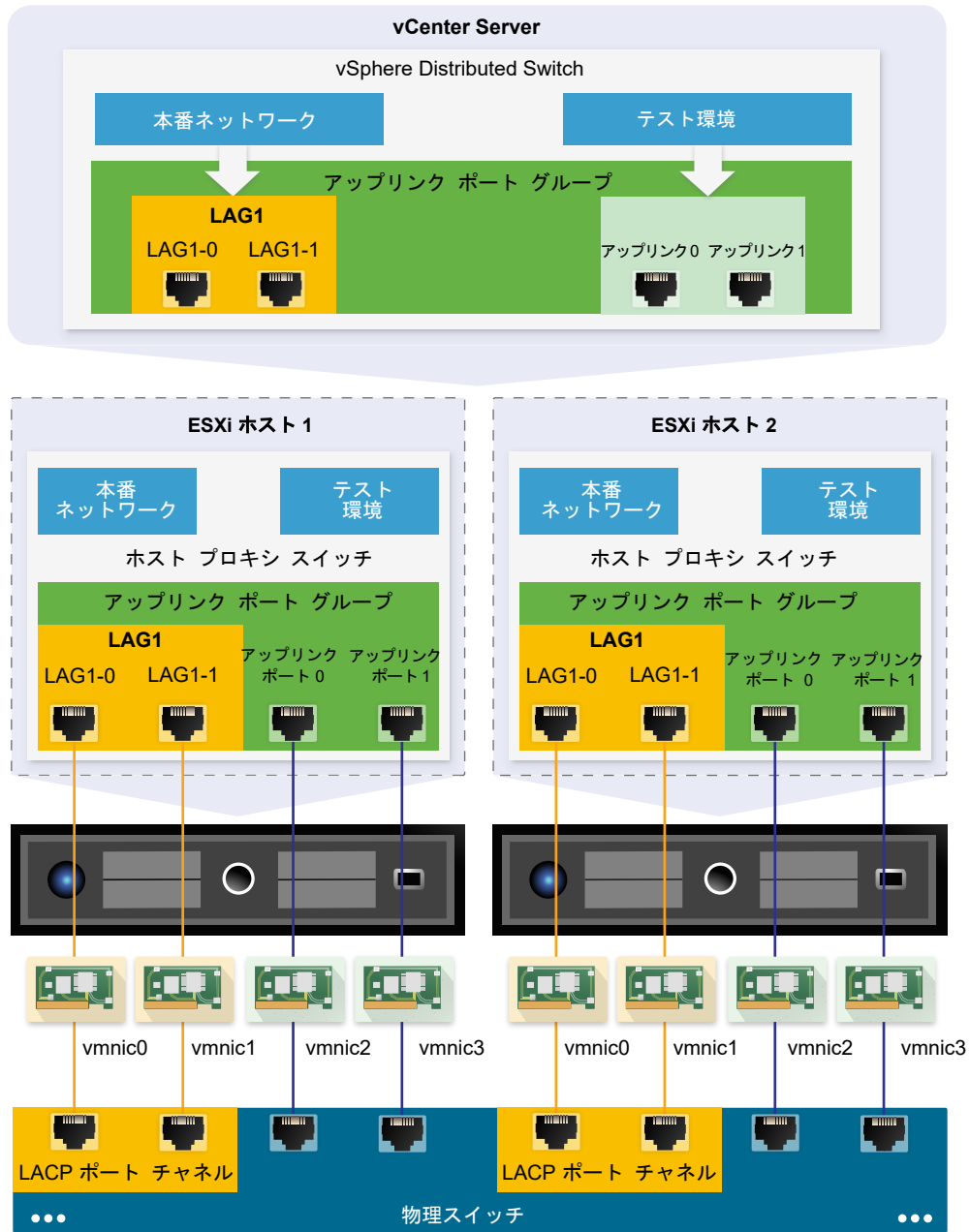
- a iSCSI への影響が重要または非常に重大である場合は、[iSCSI] エントリをクリックし、[分析の詳細] ペインに表示される原因を確認してください。
 - b サービスに対する最重要または重要な影響の原因を解消するまで、VMkernel アダプタの削除をキャンセルします。または、影響を受けたサービスがない場合は、[影響の分析] ダイアログを閉じます。
- 6 [OK] をクリックします。

vSphere Distributed Switch における LACP のサポート

5

vSphere Distributed Switch の LACP サポートでは、動的リンク集約を使用して ESXi ホストを物理スイッチに接続できます。また、Distributed Switch 上に複数のリンク集約グループ（LAG）を作成すると、LACP ポートチャンネルに接続されている ESXi ホスト上の物理 NIC のバンド幅を集約できます。

図 5-1. vSphere Distributed Switch の強化された LACP サポート



Distributed Switch の LACP 構成

ポートが 2 つ以上存在する LAG を構成し、そのポートに物理 NIC を接続します。LAG ポートは LAG 内でチーミングされ、ネットワークトラフィックのロードバランシングは、LACP ハッシュ アルゴリズムを使用して、LAG ポート間で行われます。1 つの LAG を使用して分散ポートグループのトラフィックを処理すると、ポートグループのネットワークバンド幅、冗長性、ロードバランシングが強化されます。

Distributed Switch 上に LAG を作成すると、Distributed Switch に接続されている各ホストのプロキシスイッチ上にも LAG が作成されます。たとえば、2 つのポートを持つ LAG1 を作成した場合、同じ数のポートを持つ LAG1 が、Distributed Switch に接続されている各ホスト上に作成されます。

ホストのプロキシ スイッチでは、1つの物理 NIC は1つの LAG ポートにのみ接続できます。Distributed Switch 上では、1つの LAG ポートが、接続されている異なるホストに由来する複数の物理 NIC を持つことができます。LAG ポートに接続させたホスト上の物理 NIC は、物理スイッチ上の LACP ポート チャンネルに参加しているリンクに接続する必要があります。

1つの Distributed Switch 上に、最大で 64 の LAG を作成できます。ホストがサポートできる LAG は 32 個までです。ただし、実際に使用できる LAG の数は、基礎となる物理環境の機能性と、仮想ネットワークのトポロジによって異なります。たとえば、1つの LACP ポート チャンネルで物理スイッチがサポートするポートが 4 つまでの場合、1つの LAG に接続可能な物理 NIC は、ホストあたり 4 つまでになります。

物理スイッチ上のポート チャンネル構成

LACP を使用する各ホストについて、物理スイッチ上に個別の LACP ポート チャンネルを作成する必要があります。物理スイッチ上で LACP を構成するときには、以下の要件を考慮する必要があります。

- LACP ポート チャンネルのポート数は、ホスト上でグループ化しようとする物理 NIC の数と同じである必要があります。たとえば、ホスト上の 2 つの物理 NIC のバンド幅を集約したい場合、2 つのポートを持つ LACP ポートチャンネルを物理スイッチ上に作成する必要があります。Distributed Switch 上の LAG は、2 つ以上のポートによって構成される必要があります。
- 物理スイッチ上の LACP ポート チャンネルのハッシュ アルゴリズムは、Distributed Switch 上の LAG に構成されるハッシュ アルゴリズムと同じである必要があります。
- LACP ポート チャンネルに接続しようとするすべての物理 NIC は、同じ速度およびデュプレックスで構成されている必要があります。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [vSphere Distributed Switch での強化された LACP サポートへの変換](#)
- [分散ポート グループの LACP チーミングおよびフェイルオーバー構成](#)
- [分散ポート グループのトラフィックを処理するリンク集約グループの構成](#)
- [リンク集約グループの編集](#)
- [アップリンク ポート グループでの LACP 5.1 サポートの有効化](#)
- [vSphere Distributed Switch の LACP サポートの制限](#)

vSphere Distributed Switch での強化された LACP サポートへの変換

vSphere Distributed Switch をバージョン 5.1 からバージョン 5.5 または 6.0 にアップグレードした後、Distributed Switch で拡張 LACP サポートに変換して複数の LAG を作成することができます。

Distributed Switch に LACP 構成が存在する場合は、LACP サポートの拡張によって新しい LAG が作成され、すべての物理 NIC がスタンドアロン アップリンクから LAG ポートに移行します。別の LACP 構成を作成するには、変換を開始する前に、アップリンク ポート グループの LACP サポートを無効にしておく必要があります。

拡張 LACP サポートへの変換が失敗した場合は、『vSphere トラブルシューティング』を参照して変換を手動で完了させる方法を確認してください。

前提条件

- vSphere Distributed Switch のバージョンが 5.5 または 6.0 であることを確認します。
- すべての分散ポート グループで、個々のポートでのアップリンク チーミング ポリシーのオーバーライドが許可されていないことを確認します。
- 既存の LACP 構成から変換する場合は、Distributed Switch に 1 つのアップリンク ポート グループしか存在していないことを確認します。
- Distributed Switch に参加するホストが接続され、応答していることを確認します。
- スイッチの分散ポート グループに対する dvPort グループ .変更権限があることを確認します。
- Distributed Switch 上のホストに対するホスト .構成.変更権限があることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [サマリ] を選択します。
- 3 [機能] セクションで、[リンク集約制御プロトコル] の横にある [拡張] をクリックします。
- 4 (オプション) Distributed Switch の構成をバックアップする場合は、[構成のエクスポート] を選択し、[次へ] をクリックします。

バックアップでは、vCenter Server 側の Distributed Switch 構成のみが保存されます。拡張 LACP サポートへの変換が失敗した場合は、バックアップを使用して同じ構成の新しい Distributed Switch を作成できます。また、変換を手動で完了させることもできます。

- 5 検証の前提条件を確認します。

前提条件	説明
ポート グループのアクセシビリティ	スイッチのアップリンク ポート グループおよび分散ポート グループにアクセスし、変更を行うのに十分な権限があります。
LACP 構成	Distributed Switch 1 つのアップリンク ポート グループしかありません。
アップリンク チーミング ポリシーのオーバーライド	分散ポート グループでは、個々のポートでのアップリンク チーミング ポリシーのオーバーライドが許可されていません。
ホストのアクセシビリティ	Distributed Switch に接続されているホストのネットワーク構成を変更するのに十分な権限があります。
ホスト接続	Distributed Switch に参加するホストが接続され、応答しています。

- 6 [次へ] をクリックします。
- 7 既存の LACP 構成から変換する場合は、[名前] テキスト フィールドに新しい LAG の名前を入力します。
- 8 [次へ] をクリックして変換に関する詳細情報を確認し、[終了] をクリックします。

結果

これで、vSphere Distributed Switch で拡張 LACP サポートに変換できます。

次のステップ

Distributed Switch で LAG を作成して、接続されているホスト上にある複数の物理 NIC のバンド幅を集約します。

分散ポート グループの LACP チーミングおよびフェイルオーバー構成

LAG を使用して分散ポート グループのネットワーク トラフィックを処理するには、LAG ポートに物理 NIC を割り当て、分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序で LAG をアクティブとして設定します。

表 5-1. 分散ポート グループの LACP チーミングおよびフェイルオーバー構成

フェイルオーバーの順序	アップリンク	説明
アクティブ	単一の LAG	分散ポート グループのトラフィックの処理には、1 つのアクティブな LAG、または複数のスタンドアロン アップリンクのみを使用できます。アクティブな LAG を複数構成したり、アクティブな LAG とスタンドアロン アップリンクを組み合わせて構成したりすることはできません。
スタンバイ	空	アクティブな LAG とスタンバイ アップリンク、およびその逆はサポートされません。LAG と、別のスタンバイ LAG を設定することもサポートされません。
未使用	すべてのスタンドアロン アップリンクと他の LAG（存在する場合）	LAG は 1 つのみをアクティブにする必要があります、スタンバイ リストは空にする必要があるため、すべてのスタンドアロン アップリンクと他の LAG は未使用に設定する必要があります。

分散ポート グループのトラフィックを処理するリンク集約グループの構成

ホスト上の複数の物理 NIC のバンド幅を集約するには、Distributed Switch でリンク集約グループ (LAG) を作成し、その LAG を使用して分散ポート グループのトラフィックを処理します。

新しく作成された LAG のポートには、物理 NIC は割り当てられていません。また、この LAG は、分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序では使用されません。LAG を使用して分散ポート グループのネットワーク トラフィックを処理するには、トラフィックをスタンドアロン アップリンクから LAG に移行させる必要があります。

前提条件

- LACP を使用するすべてのホストで、物理スイッチに個別の LACP ポート チャンネルがあることを確認します。
[5 章 vSphere Distributed Switch における LACP のサポート](#) を参照してください。
- LAG を構成する vSphere Distributed Switch がバージョン 5.5 または 6.0 であることを確認します。

- Distributed Switch で拡張 LACP がサポートされていることを確認します。

手順

1 リンク集約グループの作成

分散ポート グループのネットワーク トラフィックをリンク集約グループ (LAG) に移行するには、Distributed Switch で新しい LAG を作成します。

2 分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序でリンク集約グループをアクティブに設定

新しいリンク集約グループ (LAG) は、デフォルトで、分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバー順序では使用されません。分散ポート グループに対してアクティブにできるのは 1 つの LAG か、スタンダアロン アップリンクのみであるため、中間チーミングおよびフェイルオーバー構成を作成し、この構成で LAG をスタンバイにする必要があります。この構成により、ネットワーク接続が確立した状態に保たれるため、物理 NIC を LAG ポートに移行できます。

3 リンク集約グループのポートへの物理 NIC の割り当て

分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序で、新しいリンク集約グループ (LAG) をスタンバイとして設定しました。LAG がスタンバイとして設定されていると、ネットワーク接続を失わずに、物理 NIC をスタンダアロン アップリンクから LAG ポートに安全に移行できます。

4 分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序でリンク集約グループをアクティブに設定

物理 NIC をリンク集約グループ (LAG) のポートに移行しました。分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序で、LAG をアクティブに設定し、すべてのスタンダアロン アップリンクを未使用として移動します。

リンク集約グループの作成

分散ポート グループのネットワーク トラフィックをリンク集約グループ (LAG) に移行するには、Distributed Switch で新しい LAG を作成します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。

- 2 [管理] を選択し、[設定] を選択します。

- 3 [LACP] で、[新規リンク集約グループ] をクリックします。

- 4 新しい LAG に名前を付けます。

- 5 LAG にポート数を設定します。

物理スイッチの LACP ポート チャンネルのポート数と同じ数を LAG に設定します。LAG ポートには、Distributed Switch のアップリンクと同じ機能があります。LAG では、すべての LAG ポートで 1 つの NIC チームが形成されます。

6 LAG の LACP ネゴシエーション モードを選択します。

オプション	説明
アクティブ	LAG ポートはすべてアクティブ ネゴシエーション モードとなります。LAG ポートは、LACP パケットを送信して、物理スイッチ上の LACP ポート チャンネルとのネゴシエーションを開始します。
パッシブ	LAG ポートはパッシブ ネゴシエーション モードとなります。アップリンク ポートは、受信する LACP パケットには応答しますが、LACP ネゴシエーションを開始することはありません。

物理スイッチ上の LACP が有効なポートがアクティブ ネゴシエーション モードのときは、LAG ポートをパッシブ モードに設定できます。また、その逆も可能です。

7 LACP で定義されているハッシュ アルゴリズムの中からロード バランシング モードを選択します。

注： ハッシュ アルゴリズムは、物理スイッチ上の LACP ポート チャンネルに設定したハッシュ アルゴリズムと同じにする必要があります。

8 LAG の VLAN ポリシーと NetFlow ポリシーを設定します。

このオプションは、アップリンク ポート グループ上でアップリンク ポートごとの VLAN ポリシーと NetFlow ポリシーのオーバーライドが有効になっている場合にアクティブになります。LAG に VLAN ポリシーと NetFlow ポリシーを設定すると、アップリンク ポート グループ レベルでこのポリシー セットがオーバーライドされます。

9 [OK] をクリックします。

結果

新しい LAG は、分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序では使用されません。また、LAG ポートには、物理 NIC は割り当てられていません。

スタンドアロン アップリンクと同様に、Distributed Switch に関連付けられているすべてのホストに LAG が提示されます。たとえば、Distributed Switch のポートを 2 つ使用する LAG1 を作成すると、Distributed Switch に関連付けられたすべてのホストにこの LAG1 が作成されます。

次のステップ

分散ポート グループのチーミング構成およびフェイルオーバー構成で LAG をスタンバイとして設定します。この方法で、ネットワーク接続を切断せずに LAG にネットワーク トラフィックを移行できる中間構成を作成します。

分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序でリンク集約グループをアクティブに設定

新しいリンク集約グループ (LAG) は、デフォルトで、分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバー順序では使用されません。分散ポート グループに対してアクティブにできるのは 1 つの LAG か、スタンドアロン アップリンクのみであるため、中間チーミングおよびフェイルオーバー構成を作成し、この構成で LAG をスタンバイにする必要があります。この構成により、ネットワーク接続が確立した状態に保たれるため、物理 NIC を LAG ポートに移行できます。

手順

- 1 Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[分散ポート グループの管理] を選択します。
- 3 [チーミングおよびフェイルオーバー] を選択して、[次へ] をクリックします。
- 4 LAG を使用するポート グループを選択します。
- 5 [フェイルオーバーの順序] で、LAG を選択し、上矢印を使用して LAG を [スタンバイ アップリンク] リストに移動します。
- 6 [次へ] をクリックして、中間チーミングおよびフェイルオーバー構成の使用に関するメッセージを確認し、[OK] をクリックします。
- 7 [終了準備の完了] ページで [終了] をクリックします。

次のステップ

物理 NIC をスタンドアロン アップリンクから LAG ポートに移行します。

リンク集約グループのポートへの物理 NIC の割り当て

分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序で、新しいリンク集約グループ (LAG) をスタンバイとして設定しました。LAG がスタンバイとして設定されていると、ネットワーク接続を失わずに、物理 NIC をスタンドアロン アップリンクから LAG ポートに安全に移行できます。

前提条件

- すべての LAG ポートか、それに対応する物理スイッチ上の LACP が有効なポートのどちらかが、アクティブな LACP ネゴシエーション モードであることを確認します。
- LAG ポートに割り当てる物理 NIC は、その速度が同じであり、全二重で構成されていることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、LAG が配置されている Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[ホストの追加と管理] を選択します。
- 3 [ホスト ネットワークの管理] を選択します。
- 4 LAG ポートに割り当てる物理 NIC を持つホストを選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 [ネットワーク アダプタ タスクの選択] ページで、[物理アダプタの管理] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 6 [物理ネットワーク アダプタの管理] ページで、NIC を選択し、[アップリンクの割り当て] をクリックします。
- 7 LAG ポートを選択し、[OK] をクリックします。
- 8 LAG ポートに割り当てるすべての物理 NIC に、[手順 6](#) および [手順 7](#) を繰り返します。
- 9 ウィザードを終了します。

例：[ホストの追加と管理] ウィザードで 2 つの物理 NIC を LAG に構成

たとえば、2 つのポートを持つ LAG がある場合、[ホストの追加と管理] ウィザードで各 LAG ポートに物理 NIC を構成します。

次のステップ

分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序で LAG をアクティブに設定し、すべてのスタンドアロン アップリンクを未使用に設定します。

分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序でリンク集約グループをアクティブに設定

物理 NIC をリンク集約グループ (LAG) のポートに移行しました。分散ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバーの順序で、LAG をアクティブに設定し、すべてのスタンドアロン アップリンクを未使用として移動します。

手順

- 1 Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[分散ポート グループの管理] を選択します。
- 3 [チーミングおよびフェイルオーバー] を選択して、[次へ] をクリックします。
- 4 LAG をスタンバイとして設定するポート グループを選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 [フェイルオーバーの順序] で、上下の矢印を使用して LAG を [有効] リストに移動し、すべてのスタンドアロン アップリンクを [未使用] リストに移動します。[スタンバイ] リストは空のままにします。
- 6 [次へ] をクリックし、[終了] をクリックします。

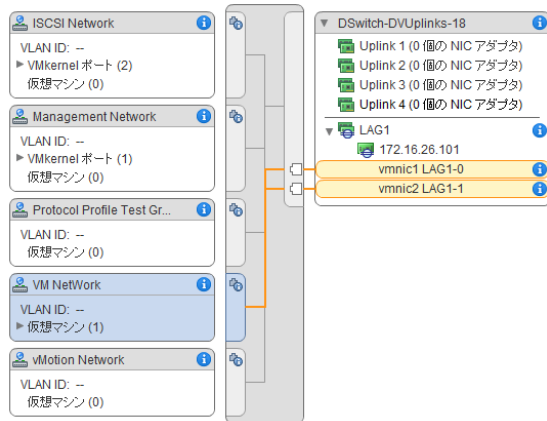
結果

これで、ネットワーク トラフィックがスタンドアロン アップリンクから分散ポート グループの LAG に安全に移行され、グループの有効な LACP チーミングおよびフェイルオーバー構成が作成されます。

例：LAG を使用する Distributed Switch のトポロジ

分散ポート グループのトラフィックを処理するポートが 2 つある LAG を構成する場合、Distributed Switch のトポロジを調べて、新しい構成によってトポロジがどのように変わったか確認できます。

図 5-2. LAG を使用する Distributed Switch ポロジ



リンク集約グループの編集

グループへのポートの追加、あるいは LACP ネゴシエーション モード、ロード バランシング アルゴリズム、または VLAN と NetFlow のポリシーの変更が必要な場合は、リンク集約グループ (LAG) の設定を編集します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、vSphere Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] を選択し、[設定] を選択します。
- 3 [LACP] を選択します。
- 4 [名前] テキスト ボックスに、LAG の新しい名前を入力します。
- 5 LAG に物理 NIC を追加する場合は、LAG のポート数を変更します。

新しい NIC は、物理スイッチ上の LACP ポート チャンネルの一部であるポートに接続する必要があります。

- 6 LAG の LACP ネゴシエーション モードを変更します。

物理 LACP ポート チャンネル上の全ポートがアクティブ LACP モードの場合は、LAG の LACP モードをパッシブに変更でき、この逆も可能です。

- 7 LAG のロード バランシング モードを変更します。

LACP で定義されているロード バランシング アルゴリズムの中から選択できます。

- 8 VLAN と NetFlow のポリシーを変更します。

このオプションは、アップリンク ポート グループ上で個々のポートの VLAN ポリシーと NetFlow ポリシーをオーバーライドするオプションが有効になっている場合にアクティブになります。LAG の VLAN と NetFlow のポリシーを変更すると、アップリンク ポート グループのレベルで設定されているポリシーがオーバーライドされます。

- 9 [OK] をクリックします。

アップリンク ポート グループでの LACP 5.1 サポートの有効化

vSphere Distributed Switch 5.1、および拡張 LACP をサポートしない 5.5 または 6.0 にアップグレードされたスイッチのアップリンク ポート グループの LACP サポートを有効化できます。

前提条件

- LACP を使用する各ホストで、物理スイッチに個別の LACP ポート チャンネルがあることを確認します。
- 分散ポート グループのロード バランシング ポリシーが IP ハッシュに設定されていることを確認します。
- 物理スイッチで LACP ポート チャンネルが IP ハッシュ ロード バランシングを使用して設定されていることを確認します。
- 分散ポート グループのネットワークの障害検出ポリシーがリンク ステータスのみに設定されていることを確認します。
- 分散ポート グループのすべてのアップリンクがチーミングおよびフェイルオーバーの順序でアクティブに設定されていることを確認します。
- アップリンクに接続されているすべての物理 NIC が同じ速度を持ち、全二重で構成されていることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、アップリンク ポート グループに移動します。
 - a Distributed Switch を選択して、[関連オブジェクト] をクリックします。
 - b [アップリンク ポート グループ] をクリックして、アップリンク ポート グループを選択します。
- 2 [管理] タブをクリックして、[設定] をクリックします。
- 3 [編集] をクリックします。
- 4 [LACP] セクションで、ドロップダウン リストを使用して LACP を有効にします。
- 5 アップリンク ポート グループの LACP ネゴシエーション モードを設定します。

オプション	説明
アクティブ	グループ内のアップリンク ポートはすべてアクティブ ネゴシエーション モードとなります。アップリンク ポートは、LACP パケットを送信して、物理スイッチ上の LACP が有効なポートとのネゴシエーションを開始します。
パッシブ	アップリンク ポートはすべてパッシブ ネゴシエーション モードとなります。アップリンク ポートは、受信する LACP パケットには応答しますが、LACP ネゴシエーションを開始することはありません。

物理スイッチ上の LACP が有効なポートがアクティブ ネゴシエーション モードのときは、アップリンク ポートをパッシブ モードに設定できます。また、その逆も可能です。

- 6 [OK] をクリックします。

vSphere Distributed Switch の LACP サポートの制限

vSphere Distributed Switch 上で LACP サポートを使用すれば、ネットワーク デバイスはピアに対して LACP パケットを送信し、リンクを自動的に束ねるネゴシエーションを実行できます。ただし、vSphere Distributed Switch の LACP サポートには、制限があります。

- LACP サポートは iSCSI ソフトウェアのマルチパスと互換性がありません。
- LACP サポート設定はホスト プロファイルでは使用できません。
- ネストされた ESXi ホスト間では、LACP サポートを使用できません。
- LACP サポートは ESXi Dump Collector では動作しません。
- ポート ミラーリングが有効な場合、LACP 制御パケット (LACPDU) はミラーリングされません。
- チーミングおよびフェイルオーバー健全性チェックは、LAG ポートに対しては機能しません。LACP が LAG ポートの接続を確認します。
- 各分散ポートまたはポート グループのトラフィックを 1 つの LAG だけで処理している場合、拡張 LACP サポートは正常に動作します。
- LACP 5.1 サポートは IP ハッシュ ロード バランシングとリンク ステータスのネットワーク フェイルオーバー 検出だけで動作します。
- LACP 5.1 サポートでは、Distributed Switch ごと、およびホストごとに LAG が 1 つ提供されるのみです。

ネットワーク構成のバックアップとリストア

6

vSphere 5.1 以降では、無効な変更があった場合や別のデプロイに転送する場合に vSphere Distributed Switch、分散ポート グループ、アップリンク ポート グループの構成をバックアップおよびリストアできます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [vSphere Distributed Switch 構成のバックアップとリストア](#)
- [vSphere 分散ポート グループの構成のエクスポート、インポート、リストア](#)

vSphere Distributed Switch 構成のバックアップとリストア

vCenter Server を使用すると、vSphere Distributed Switch の構成のバックアップとリストアを行うことができます。データベースやアップグレードでエラーが発生した場合に、仮想ネットワーク構成をリストアできます。また、保存されたスイッチ構成をテンプレートとして使用して、vSphere の同じ環境または新しい環境でスイッチのコピーを作成できます。

Distributed Switch（ポート グループを含む）の構成をインポートまたはエクスポートできます。ポート グループの構成のエクスポート、インポート、リストアについての詳細は、[vSphere 分散ポート グループの構成のエクスポート、インポート、リストア](#) を参照してください。

注： 保存した構成ファイルを使用して、ポリシーとホストの関連付けを Distributed Switch にリストアできます。アップリンク ポートまたはリンク集約グループのポートへの物理 NIC の接続はリストアできません。

vSphere Distributed Switch 構成のエクスポート

vSphere Distributed Switch 構成および分散ポート グループ構成をファイルにエクスポートできます。ファイルに保存された有効なネットワーク構成は、他の環境に転送することができます。

この機能は、vCenter Server 5.1 以降でのみ利用できます。

vCenter Server 5.1 からアップグレードする場合、スイッチ構成をエクスポートしてから vCenter Server をアップグレードできます。5.1 よりも前のバージョンから vCenter Server をアップグレードする場合、vCenter Server をバージョン 6.0 にアップグレードしてからスイッチ構成をバックアップします。

前提条件

vCenter Server がバージョン 5.1 以降であることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 Distributed Switch を右クリックして、[設定] - [構成のエクスポート] を選択します。
- 3 Distributed Switch 構成をエクスポートするか、分散スイッチ構成とすべてのポート グループをエクスポートするかを選択します。
- 4 (オプション) この構成に関する説明を [説明] フィールドに入力します。
- 5 [OK] をクリックします。
- 6 [はい] をクリックして構成ファイルをローカル システムに保存します。

次のステップ

エクスポートした構成ファイルを次のタスクに使用できます。

- エクスポートされた Distributed Switch のコピーを vSphere 環境に作成します。 [vSphere Distributed Switch 構成のインポート](#) を参照してください。
- 既存の Distributed Switch の設定を上書きします。 [vSphere Distributed Switch 構成のリストア](#) を参照してください。

ポート グループ構成のみをエクスポート、インポート、およびリストアすることもできます。 [vSphere 分散ポートグループの構成のエクスポート、インポート、リストア](#) を参照してください。

vSphere Distributed Switch 構成のインポート

格納された構成ファイルをインポートして新しい vSphere Distributed Switch を作成、またはすでに削除されているスイッチを復元します。

vSphere 5.1 以降では、vSphere Web Client を使用して Distributed Switch をインポートできます。

構成ファイルには、スイッチのネットワーク設定も含まれます。これを使用して他の仮想環境にスイッチをレプリケートできます。

注： 保存した構成ファイルを使用してスイッチ インスタンスや、そのホストとの関連付け、ポリシーをレプリケートできます。物理 NIC の接続をアップリンク ポートまたはリンク集約グループ上のポートにレプリケートすることはできません。

前提条件

vCenter Server がバージョン 5.1.0 以降であることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、データセンターに移動します。
- 2 データセンターを右クリックして、[Distributed Switch] - [Distributed Switch のインポート] を選択します。
- 3 構成ファイルの場所を参照します。

- 4 キーを構成ファイルからスイッチとそのポート グループに割り当てるには、[元の Distributed Switch とポート グループ識別子を保存します] チェック ボックスを選択し、[次へ] をクリックします。

次の場合、[元の Distributed Switch とポート グループ識別子を保存します] オプションを使用できます。

- 削除したスイッチを再作成する。
- アップグレードに失敗したスイッチをリストアする。

すべてのポート グループが再作成され、スイッチに接続されていたホストは再度追加されます。

- 5 スwitchの設定を確認して、[終了] をクリックします。

結果

構成ファイルの設定を基に、新しい Distributed Switch が作成されます。分散ポート グループの情報を構成ファイルに含めた場合は、ポート グループも作成されます。

vSphere Distributed Switch 構成のリストア

リストア オプションを使うと、既存の Distributed Switch の構成を構成ファイル内の設定にリセットできます。Distributed Switch をリストアすると、選択したスイッチの設定を構成ファイル内に保存された設定にリセットします。

注： 保存した構成ファイルを使用して、ポリシーとホストの関連付けを Distributed Switch にリストアできません。アップリンク ポートまたはリンク集約グループのポートへの物理 NIC の接続はリストアできません。

前提条件

vCenter Server がバージョン 5.1 以降であることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 ナビゲータで Distributed Switch を右クリックして、[設定] - [構成のリストア] を選択します。
- 3 使用する構成バックアップ ファイルを参照します。
- 4 [Distributed Switch とすべてのポート グループをリストアします] または [Distributed Switch のみをリストアします] を選択して [次へ] をクリックします。
- 5 リストアの概要情報を確認します。

Distributed Switch をリストアすると、Distributed Switch とそのポート グループの現在の設定は上書きされます。構成ファイルの一部ではない既存のポート グループは削除されません。

- 6 [終了] をクリックします。

これで、Distributed Switch の構成が構成ファイル内の設定にリストアされます。

vSphere 分散ポート グループの構成のエクスポート、インポート、リストア

vSphere 分散ポート グループの構成をファイルにエクスポートできます。構成ファイルを使用して、有効なポート グループの構成を保存し、その構成をほかの導入環境に分散させることができます。

ポート グループ情報のエクスポートは、Distributed Switch の構成のエクスポートと同時に行うことができます。[vSphere Distributed Switch 構成のバックアップとリストア](#) を参照してください。

vSphere 分散ポート グループ構成のエクスポート

分散ポート グループの構成をファイルにエクスポートできます。構成には有効なネットワーク構成が保存され、その構成をほかの導入環境に分散させることができます。

この機能は vSphere Web Client 5.1 以降でのみ使用できます。ただし、vSphere Web Client 5.1 以降を使用すれば、どのバージョンの分散ポートからも設定をエクスポートできます。

手順

- 1 vSphere Web Client で分散ポート グループを探します。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックします。
- 2 分散ポート グループを右クリックし、[構成のエクスポート] を選択します。
- 3 (オプション) この構成に関する説明を [説明] フィールドに入力します。
- 4 [OK] をクリックします。

[はい] をクリックして構成ファイルをローカル システムに保存します。

結果

これで、選択した分散ポート グループのすべての設定を含む構成ファイルを作成できました。このファイルを使用して同じ構成のコピーを既存の導入環境に複数作成したり、既存の分散ポート グループの設定を上書きしたりして、選択した設定に合わせることができます。

次のステップ

エクスポートした構成ファイルを次のタスクに使用できます。

- エクスポートした分散ポート グループのコピーを作成（[vSphere 分散ポート グループ構成のインポート](#) を参照）
- 既存の分散ポート グループの設定を上書き（[vSphere 分散ポート グループ構成のリストア](#) を参照）

vSphere 分散ポート グループ構成のインポート

構成ファイルから分散ポート グループを作成するには、インポートを使用します。

既存のポート グループの名前とインポートされたポート グループ名前が同じである場合は、新しいポート グループ名にかっこ付きで番号が付けられます。インポートされた構成の設定が新しいポート グループに適用され、元のポート グループの設定は変更されません。

この機能は vSphere Web Client 5.1 以降でのみ使用できます。ただし、vSphere Web Client 5.1 以降を使用すれば、どのバージョンの分散ポートからも設定をエクスポートできます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 Distributed Switch を右クリックして、[分散ポート グループ] - [分散ポート グループのインポート]を選択します。
- 3 保存した構成ファイルの場所を参照して、[次へ] をクリックします。
- 4 インポート設定を確認し、インポートを完了します。
- 5 [Finish] をクリックします。

vSphere 分散ポート グループ構成のリストア

リストア オプションを使うと、既存の分散ポート グループの構成を構成ファイル内の設定にリセットできます。

この機能は vSphere Web Client 5.1 以降でのみ使用できます。ただし、vSphere Web Client 5.1 以降を使用すれば、どのバージョンの Distributed Switch から設定をリストアできます。

手順

- 1 vSphere Web Client で分散ポート グループを探します。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックします。
- 2 分散ポート グループを右クリックし、[構成のリストア] を選択します。
- 3 次のいずれかを選択し、[次へ] をクリックします。
 - ◆ [以前の構成にリストア] を選択して、ポート グループ構成を 1 段階ロールバックします。1 段階よりも多く実行した場合、ポート グループ構成は完全にリストアできません。
 - ◆ [構成を次のファイルからリストア] を選択すると、エクスポートされたバックアップ ファイルからポート グループ構成をリストアできます。Distributed Switch バックアップ ファイルにポート グループの構成情報が含まれていれば、ここで使用することもできます。
- 4 リストアの概要情報を確認します。

リストア操作では、分散ポート グループの現在の設定がバックアップの設定で上書きされます。スイッチのバックアップ ファイルからポート グループ構成をリストアする場合、リストア操作でファイルの一部ではない既存のポート グループは削除されません。
- 5 [終了] をクリックします。

管理ネットワークのロールバックとリカバリ

7

vSphere 5.1 以降では、vSphere Distributed Switch と vSphere Standard Switch のロールバックおよびリカバリ サポートを使用することによって、管理ネットワークの構成の誤りの防止やリカバリを行うことができます。

ロールバックは、標準スイッチと Distributed Switch の両方で利用できます。管理ネットワークの無効な構成を修正するには、ホストに直接接続して、DCUI から問題を修正できます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [vSphere ネットワーク ロールバック](#)
- [vSphere Distributed Switch の管理ネットワーク構成のエラーの解決](#)

vSphere ネットワーク ロールバック

構成の変更をロールバックすることで、vSphere は管理ネットワークの構成ミスによってホストの vCenter Server への接続が失われないようにします。

vSphere 5.1 以降では、デフォルトでネットワークのロールバックが有効になっています。ただし、ロールバックは vCenter Server レベルで有効または無効に設定できます。

ホスト ネットワークのロールバック

ホスト ネットワークのロールバックは、vCenter Server との接続に関するネットワーク構成が不正に変更されると起動します。ネットワークの変更がホストとの接続を切断した場合もロールバックが起動されます。ロールバックを引き起こす可能性のあるホスト ネットワーク構成への変更の例を次に示します。

- 物理 NIC の速度またはデュプレックスの更新
- DNS と経路設定の更新
- 管理 VMkernel ネットワーク アダプタを含む標準ポート グループに関するチーミングとフェイルオーバー ポリシーまたはトラフィック シェーピング ポリシーの更新
- 管理 VMkernel ネットワーク アダプタを含む標準ポート グループの VLAN 更新
- 管理 VMkernel ネットワーク アダプタとそのスイッチの MTU を物理インフラストラクチャが対応していない値に増加した場合
- 管理 VMkernel ネットワーク アダプタの IP 設定の変更
- 管理 VMkernel ネットワーク アダプタを標準スイッチまたは Distributed Switch から削除した場合

- 管理 VMkernel ネットワーク アダプタを含む標準スイッチまたは Distributed Switch から物理 NIC を削除した場合
- 管理 VMkernel アダプタを vSphere 標準スイッチから vSphere Distributed Switch に移行した場合

以上の理由によりネットワークが切断すると、タスクは失敗して、ホストは直近の有効な構成に復旧されます。

vSphere Distributed Switch のロールバック

Distributed Switch のロールバックは、Distributed Switch、分散ポート グループ、または分散ポートに不適切な更新が行われると起動します。Distributed Switch 構成が次のように変更されると、ロールバックが起動します。

- Distributed Switch の MTU 変更
- 管理 VMkernel ネットワーク アダプタの分散ポート グループに関して、次の設定が変更された場合：
 - チーミングおよびフェイルオーバー
 - VLAN
 - トラフィック シェーピング
- 管理 VMkernel ネットワーク アダプタを含む分散ポート グループの全ポートをブロックした場合
- 管理 VMkernel ネットワーク アダプタの分散ポートのレベルでポリシーが無効にされた場合

何らかの変更によって構成が無効になると、1 つ以上のホストが Distributed Switch と同期しなくなる可能性があります。

構成設定の競合が発生した場所が分かる場合は、設定を手動で修正できます。たとえば、管理 VMkernel ネットワーク アダプタを新しい VLAN に移行すると、実際には物理スイッチで VLAN がトランキングされない場合があります。物理スイッチの構成を修正すると、Distributed Switch とホストが次に同期するときに、構成上の問題は解消されます。

問題の所在が不明な場合は、Distributed Switch または分散ポート グループの状態を以前の構成にリストアできます。[vSphere 分散ポート グループ構成のリストア](#) を参照してください。

ネットワーク ロールバックの無効化

vSphere 5.1 以降では、ロールバックはデフォルトで有効になっています。vSphere Web Client を使用することにより、vCenter Server でロールバックを無効にすることができます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、vCenter Server インスタンスに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [詳細設定] を選択し、[編集] をクリックします。
- 4 `config.vpxd.network.rollback` キーを選択し、値を `false` に変更します。
キーが存在しない場合、追加して値を `false` に設定できます。
- 5 [OK] をクリックします。
- 6 vCenter Server を再起動して変更内容を適用します。

vCenter Server 構成ファイルを使用したネットワーク ロールバックの無効化

vSphere 5.1 以降では、ロールバックはデフォルトで有効になっています。vCenter Server の `vpxd.cfg` 構成ファイルを直接編集することで、ロールバックを無効にできます。

手順

- 1 vCenter Server のホスト マシンで、構成ファイルを格納するディレクトリに移動します。
 - Windows Server オペレーティング システムの場合、ディレクトリの場所は `C:\ProgramData\VMware\CIS\cfg\vmware-vpx` です。
 - vCenter Server Appliance では、ディレクトリの場所は `/etc/vmware-vpx` です。
- 2 `vpxd.cfg` ファイルを開いて編集します。
- 3 `<network>` 要素で、`<rollback>` 要素を **false** に設定します。

```
<config>
<vpxd>
<network>
<rollback>false</rollback>
</network>
</vpxd>
</config>
```

- 4 ファイルを保存して閉じます。
- 5 vCenter Server システムを再起動します。

vSphere Distributed Switch の管理ネットワーク構成のエラーの解決

vSphere 5.1 以降では、ダイレクト コンソール ユーザー インターフェイス (DCUI) を使用して、vCenter Server と、Distributed Switch を介して管理ネットワークにアクセスするホストとの間の接続を復元できます。

ネットワークのロールバックが無効にされている場合、Distributed Switch の管理ネットワークのポート グループが誤って構成されると、vCenter Server とスイッチに追加されたホストの間の接続が失われます。DCUI を使用して各ホストを個別に接続する必要があります。

管理ネットワークのリストアに使用するアップリンクが、他のタイプのトラフィック (vMotion、フォールト トレランスなど) を処理する VMkernel アダプタでも使用されている場合、リストア後、アダプタでネットワーク接続が失われます。

DCUI へのアクセスと使用方法に関する詳細は、『vSphere セキュリティ』ドキュメントを参照してください。

注： Distributed Switch の管理接続の復旧は、ステートレスの ESXi インスタンスではサポートされません。

前提条件

管理ネットワークが Distributed Switch のポート グループで構成されていることを確認します。

手順

- 1 ホストの DCUI に接続します。
- 2 [ネットワーク リストア オプション]メニューの[vDS のリストア]をクリックします。
- 3 管理ネットワークのアップリンクと VLAN（VLAN は任意）を構成します。
- 4 構成を適用します。

結果

DCUI でローカルの短期ポートが作成され、VLAN とアップリンクに設定した値が適用されます。DCUI は管理ネットワークの VMkernel アダプタを新しいローカル ポートに移動して vCenter Server への接続を復元します。

次のステップ

vCenter Server へのホストの接続が復元された後、分散ポート グループの構成を修正し、VMkernel アダプタをグループに再追加します。

ネットワーク ポリシー

8

標準スイッチまたは分散ポート グループ レベルで設定されたポリシーは、標準スイッチのすべてのポート グループ、または分散ポート グループのポートに適用されます。例外は構成オプションで、構成オプションは標準ポート グループまたは分散ポート レベルで上書きされます。

vSphere 標準スイッチと vSphere Distributed Switch でのネットワーク ポリシーの適用に関するビデオをご覧ください。



ネットワーク ポリシーの操作

(https://vmwaretv.vmware.com/media/t/1_Objjobp2b)

- **vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch でのネットワーク ポリシーの適用**

vSphere 標準スイッチと vSphere Distributed Switch では、ネットワーク ポリシーの適用が異なります。vSphere Distributed Switch で使用できるポリシーの一部は、vSphere 標準スイッチでは使用できません。

- **ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成**

分散ポートにさまざまなポリシーを適用するには、ポート グループ レベルで設定されているポリシーのポートごとのオーバーライドを構成します。分散ポートが仮想マシンから切断されるときに、ポートごとのレベルで設定されている構成のリセットを有効化することもできます。

- **チームングおよびフェイルオーバー ポリシー**

NIC チームングでは、1つのチームに複数の物理 NIC を含めることで、仮想スイッチのネットワーク容量を増やすことができます。アダプタ故障時のトラフィック経路の再設定方法を決定するには、物理 NIC をフェイルオーバーの順序に含めます。仮想スイッチがネットワーク トラフィックをチーム内の物理 NIC 間で分散する方法を決定するには、使用環境のニーズや機能に応じてロード バランシング アルゴリズムを選択します。

- **VLAN ポリシー**

VLAN ポリシーは、ネットワーク環境全体での VLAN の動作を決定します。

- **セキュリティ ポリシー**

ネットワーク セキュリティ ポリシーにより、MAC アドレスのなりすましや望ましくないポート スキャンからトラフィックを保護することができます。

- **トラフィック シェーピング ポリシー**

トラフィック シェーピング ポリシーは、平均バンド幅、ピーク バンド幅、およびバースト サイズで定義されます。各ポート グループ、および各分散ポートまたは分散ポート グループのトラフィック シェーピング ポリシーを確立できます。

■ リソース割り当てポリシー

リソース割り当てポリシーを使用すると、分散ポートまたはポート グループをユーザーが作成したネットワーク リソース プールに関連付けることができます。このポリシーによって、ポートまたはポート グループに割り当てられたバンド幅をより柔軟に制御することが可能になります。

■ 監視ポリシー

監視ポリシーを使用すると、分散ポートまたはポート グループでの NetFlow 監視を有効または無効にすることができます。

■ トラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシー

vSphere Distributed Switch 5.5 以降では、トラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを使用することによって、不要なトラフィックやセキュリティ攻撃から仮想ネットワークを保護したり、特定のトラフィック タイプに QoS タグを適用したりすることができます。

■ vSphere Distributed Switch 上にある複数のポート グループのポリシーの管理

vSphere Distributed Switch 上にある複数のポート グループのネットワーク ポリシーを変更できます。

■ ポート ブロック ポリシー

ポート ブロック ポリシーを使用することで、ポートのデータ送受信を選択的にブロックできます。

vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch でのネットワーク ポリシーの適用

vSphere 標準スイッチと vSphere Distributed Switch では、ネットワーク ポリシーの適用が異なります。vSphere Distributed Switch で使用できるポリシーの一部は、vSphere 標準スイッチでは使用できません。

表 8-1. ポリシーが適用される仮想スイッチ オブジェクト

仮想スイッチ	仮想スイッチ オブジェクト	説明
vSphere 標準スイッチ	スイッチ全体	標準スイッチ全体にポリシーを適用すると、スイッチのすべての標準ポート グループにポリシーが伝達されます。
	標準ポート グループ	スイッチから継承されるポリシーをオーバーライドして、個々のポート グループに異なるポリシーを適用できます。
vSphere Distributed Switch	分散ポート グループ	分散ポート グループにポリシーを適用すると、グループ内のすべてのポートにポリシーが伝達されます。
	分散ポート	分散ポート グループから継承されるポリシーをオーバーライドして、個々の分散ポートに異なるポリシーを適用できます。
	アップリンク ポート グループ	アップリンク ポート グループ レベルでポリシーを適用できます。これにより、グループ内のすべてのポートにポリシーが伝達されます。
	アップリンク ポート	アップリンク ポート グループから継承されるポリシーをオーバーライドして、個々のアップリンク ポートに異なるポリシーを適用できます。

表 8-2. vSphere 標準スイッチと vSphere Distributed Switch で使用できるポリシー

ポリシー	標準スイッチ	Distributed Switch	説明
チーミングおよびフェイルオーバー	はい	はい	標準スイッチ、標準ポート グループ、分散ポート グループ、または分散ポートのネットワーク トラフィックを処理する物理 NIC を構成できます。フェイルオーバーの順序に物理 NIC を配置し、異なるロード バランシング ポリシーを適用します。
セキュリティ	はい	はい	MAC アドレスのなりすましや望ましくないポート スキャンからトラフィックを保護することができます。ネットワーク セキュリティ ポリシーは、ネットワーク プロトコル スタックのレイヤー 2 で実装されます。
トラフィック シェーピング	はい	はい	ポートで使用するネットワーク バンド幅を制限できますが、トラフィックのバーストがより高速に通過できるようにすることもできます。ESXi は、標準スイッチ上で送信ネットワーク トラフィックを形成し、分散スイッチ上で送受信トラフィックの両方を形成します。
VLAN	はい	はい	標準スイッチまたは Distributed Switch の VLAN タギングを構成できます。外部スイッチ タギング (EST)、仮想スイッチ タギング (VST)、および仮想ゲスト タギング (VGT) を構成できます。
監視	いいえ	はい	分散ポートまたはポート グループでの NetFlow 監視を有効または無効にすることができます。
トラフィックのフィルタリングとマーキング	いいえ	はい	不要なトラフィックやセキュリティ攻撃から仮想ネットワークを保護したり、QoS タグを特定のトラフィック タイプに適用したりできます。
リソース割り当て	いいえ	はい	分散ポートまたはポート グループをユーザー定義ネットワーク リソース プールに関連付けることができます。このようにして、ポートまたはポート グループで使用するバンド幅を適切に制御できます。vSphere Network I/O Control バージョン 2 および 3 でリソース割り当てポリシーを使用できます。
ポート ブロック	いいえ	はい	ポートのデータ送受信を選択的にブロックできます。

ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成

分散ポートにさまざまなポリシーを適用するには、ポート グループ レベルで設定されているポリシーのポートごとのオーバーライドを構成します。分散ポートが仮想マシンから切断されるときに、ポートごとのレベルで設定されている構成のリセットを有効化することもできます。

手順

- 1 vSphere Web Client で分散ポート グループを探します。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックします。
- 2 分散ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。

3 [詳細] ページを選択します。

オプション	説明
切断時にリセットを設定	ドロップダウン メニューで、切断時のリセットを有効または無効にします。 仮想マシンから分散ポートが切断されたときに、分散ポートの構成が分散ポート グループ設定にリセットされます。ポートごとにオーバーライドした内容は破棄されます。
ポート ポリシーのオーバーライド	ポート単位レベルでオーバーライドする分散ポート グループのポリシーを選択します。

4 (オプション) 各ポート ポリシーのオーバーライドを設定するには、ポリシー ページを使用します。

5 [OK] をクリックします。

チーミングおよびフェイルオーバー ポリシー

NIC チーミングでは、1つのチームに複数の物理 NIC を含めることで、仮想スイッチのネットワーク容量を増やすことができます。アダプタ故障時のトラフィック経路の再設定方法を決定するには、物理 NIC をフェイルオーバーの順序に含めます。仮想スイッチがネットワーク トラフィックをチーム内の物理 NIC 間で分散する方法を決定するには、使用環境のニーズや機能に応じてロード バランシング アルゴリズムを選択します。

NIC チーミング ポリシー

NIC チーミングを使用して仮想スイッチをホストの複数の物理 NIC に接続し、スイッチのネットワーク バンド幅を増やして冗長性を確保できます。NIC チームにより、メンバー間でのトラフィックの分散や、アダプタ故障時またはネットワーク障害時のパッシブ フェイルオーバーを行うことができます。vSphere 標準スイッチの仮想スイッチ レベルやポート グループ レベル、または vSphere Distributed Switch のポート グループ レベルやポート レベルで NIC チーミング ポリシーを設定します。

注： 同じチーム内の物理スイッチのすべてのポートは、同じレイヤー 2 ブロードキャスト ドメインに存在している必要があります。

ロード バランシング ポリシー

ロード バランシング ポリシーは、NIC チーム内のネットワーク アダプタ間でネットワーク トラフィックを分散する方法を決定します。vSphere 仮想スイッチは、送信トラフィックのロード バランシングのみを行います。受信トラフィックは、物理スイッチのロード バランシング ポリシーによって制御されます。

各ロード バランシング アルゴリズムの詳細については、[仮想スイッチで使用できるロード バランシング アルゴリズム](#)を参照してください。

ネットワークの障害検出ポリシー

フェイルオーバーの検出で仮想スイッチが使用する次のいずれかの方法を指定できます。

リンク状態のみ

ネットワーク アダプタが提供するリンク ステータスのみに依存します。取り外されたケーブルや物理スイッチの電源障害などの障害を検出します。ただし、リンク状態では次のような構成エラーは検出されません。

- スパニング ツリーによってブロックされているか、誤った VLAN へ間違えて構成されている物理スイッチ ポート。
- 物理スイッチをアップストリーム スイッチなどの別のネットワーク デバイスに接続するケーブルの抜け。

ビーコンの検知

チーム内のすべての物理 NIC のリンク障害を検出するために物理 NIC から送信されるイーサネット ブロードキャスト フレーム（ビーコンの検知）の送信および待機を行います。ESXi ホストは 1 秒ごとにビーコン パケットを送信します。ビーコンの検知は、ESXi ホストに最も近い物理スイッチの障害（ホストのリンク停止イベントが発生しない障害）を検出する場合に最も効果的です。

ESXi は単一のアダプタの障害を検出できるため、1 つのチームに NIC が 3 つ以上含まれる場合にビーコンの検知を使用します。割り当てられている NIC が 2 つだけあり、そのうち片方が接続を失っている場合、両方の NIC ともビーコンを受信しないため、スイッチはどちらの NIC を使用停止すべきかを判断できません。その結果、すべてのパケットは両方のアップリンクに送信されます。こういったチームで 3 つ以上の NIC を使用すると、曖昧な状況になる前に $n - 2$ 件の障害（ n はチーム内の NIC の数）に対応できます。

フェイルバック ポリシー

デフォルトでは、NIC チームでフェイルバック ポリシーが有効になっています。障害のあった物理 NIC がオンラインに戻ると、仮想スイッチは、そのスロットを引き継いだスタンバイ NIC を置き換えて、オンラインに戻った NIC を再度アクティブに設定します。

フェイルオーバーの順序の最初の物理 NIC に断続的な障害が発生すると、フェイルバック ポリシーにより、使用される NIC が頻繁に変わる可能性があります。物理スイッチの MAC アドレスが頻繁に変わり、アダプタがオンラインになったときにすぐに物理スイッチ ポートでトラフィックを受け入れられないことがあります。このような遅延を最小限に抑えるために、物理スイッチの次の設定を変更することを検討してください。

- ESXi ホストに接続されている物理 NIC のスパニング ツリー プロトコル (STP) を無効にする。
- Cisco ベースのネットワークの場合、アクセス インターフェイスの PortFast モードまたはトランク インターフェイスの PortFast トランク モードを有効にする。これにより、物理スイッチ ポートの初期化の時間を約 30 秒短縮できます。
- トランク ネゴシエーションを無効にする。

スイッチへの通知ポリシー

スイッチへの通知ポリシーを使用することで、ESXi ホストがフェイルオーバー イベントと通信する方法を決定できます。物理 NIC が仮想スイッチに接続されている場合、またはチーム内の別の物理 NIC に送信されるようにトラフィック経路が再設定されている場合、仮想スイッチはネットワークを介して通知を送信し、物理スイッチの検索テーブルを更新します。物理スイッチへの通知は、フェイルオーバーまたは vSphere vMotion での移行の発生時の待ち時間を最小限に抑えます。

仮想スイッチで利用できるロード バランシング アルゴリズム

仮想スイッチでさまざまなロード バランシング アルゴリズムを構成し、チーム内の各物理 NIC へのネットワークトラフィックの分散方法を決定することができます。

- 発信元の仮想ポートに基づいたルート

仮想スイッチでは、vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch での仮想マシンのポート ID に基づいてアップリンクを選択します。

- 発信元 MAC ハッシュに基づいたルート

仮想スイッチは、仮想マシンの MAC アドレスに基づいて、仮想マシンのアップリンクを選択します。仮想スイッチは、仮想マシンのアップリンクを計算するために、仮想マシンの MAC アドレスと NIC チーム内のアップリンク数を使用します。

- IP ハッシュに基づいたルート

仮想スイッチは、各パケットのソース IP アドレスおよびターゲット IP アドレスに基づいて、仮想マシンのアップリンクを選択します。

- 物理 NIC 負荷に基づいたルート

物理 NIC 負荷に基づいたルートは、発信元の仮想ポートに基づいたルートをベースにしています。このルートでは、仮想スイッチが、アップリンクの実際の負荷をチェックし、負荷がかかりすぎているアップリンクで負荷を軽減するための処理を行います。このルートは、vSphere Distributed Switch でのみ使用できます。

- 明示的なフェイルオーバー順序を使用

このポリシーで使用可能な実際のロード バランシングはありません。仮想スイッチは、フェイルオーバー順序からのアクティブなアダプタのリストの最初にリストされ、かつフェイルオーバー検知基準を満たすアップリンクを常に使用します。アクティブなリストに使用可能なアップリンクが含まれていない場合、仮想スイッチではスタンバイ リストにあるアップリンクを使用します。

発信元の仮想ポートに基づいたルート

仮想スイッチでは、vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch での仮想マシンのポート ID に基づいてアップリンクを選択します。

ESXi ホストで実行されている各仮想マシンには、仮想スイッチでの仮想ポート ID が関連付けられています。仮想マシンのアップリンクを計算するため、仮想スイッチでは、仮想マシンのポート ID と NIC チームでのアップリンクの数を使用します。仮想スイッチは、仮想マシンのアップリンクを選択すると、仮想マシンが同じポートで実行される限り、必ずこの仮想マシンの場合と同じアップリンクを介してトラフィックを転送します。仮想スイッチは、NIC チームでアップリンクが追加または削除されない限り、仮想マシンのアップリンクを 1 回のみ計算します。

仮想マシンのポート ID は、その仮想マシンが同じホストで実行されている間は固定されます。仮想マシンを移行、パワーオフ、または削除すると、仮想スイッチでのそのポート ID は空き状態になります。仮想スイッチはこのポートへのトラフィックの送信を停止し、関連付けられているアップリンクの全体的なトラフィックが減少します。仮想マシンは、パワーオンまたは移行されると、別のポートで実行され、その新規ポートに関連付けられているアップリンクを使用します。

表 8-3. 元の仮想ポートに基づくルートを使用する場合の考慮事項

考慮事項	説明
メリット	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想 NIC の数がチームの物理 NIC の数より多い場合に、トラフィックを均等に配分できます。 ■ ほとんどの場合、仮想スイッチは仮想マシンのアップリンクを 1 回のみ計算するため、リソースの消費量が少なくなります。 ■ 物理スイッチに変更を加える必要がありません。
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想スイッチではアップリンク上のトラフィック負荷を認識せず、使用頻度の低いアップリンクへのトラフィックのロード バランシングが行われません。 ■ 仮想マシンで使用可能なバンド幅は、仮想マシンで複数の仮想 NIC を使用しない限り、関連 ポート ID に関連付けられているアップリンクの速度までに制限されます。

発信元 MAC ハッシュに基づいたルート

仮想スイッチは、仮想マシンの MAC アドレスに基づいて、仮想マシンのアップリンクを選択します。仮想スイッチは、仮想マシンのアップリンクを計算するために、仮想マシンの MAC アドレスと NIC チーム内のアップリンク数を使用します。

表 8-4. 発信元 MAC ハッシュに基づいたルートを使用する場合の考慮事項

考慮事項	説明
メリット	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想スイッチはパケットごとにアップリンクを計算するため、発信元の仮想ポートに基づいたルートよりも平等にトラフィックを分散できます。 ■ MAC アドレスは固定されているため、仮想マシンでは同じアップリンクが使用されます。仮想マシンをパワーオンまたはパワーオフしても、仮想マシンで 사용되는アップリンクは変わりません。 ■ 物理スイッチに変更を加える必要がありません。
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンで複数の発信元 MAC アドレスを使用している場合を除き、仮想マシンで使用できるバンド幅は、関連するポート ID に関連付けられているアップリンクの速度に制限されます。 ■ 仮想スイッチはパケットごとにアップリンクを計算するため、発信元の仮想ポートに基づいたルートよりもリソース消費量が多くなります。 ■ アップリンクの負荷が仮想スイッチで認識されないため、アップリンクが過負荷になる可能性があります。

IP ハッシュに基づいたルート

仮想スイッチは、各パケットのソース IP アドレスおよびターゲット IP アドレスに基づいて、仮想マシンのアップリンクを選択します。

仮想スイッチは、仮想マシンのアップリンクを計算するために、パケットのソース IP アドレスとターゲット IP アドレスの両方の最後のオクテットを取得して XOR 操作を行い、その結果に対して NIC チームのアップリンク数に基づく別の計算を実行します。この結果は、0 ～ チーム内のアップリンク数 - 1 の数値になります。たとえば、NIC チームに 4 つのアップリンクがある場合、チーム内の NIC に各数値が関連付けられるため、結果は 0 ～ 3 になります。IP 以外のパケットの場合、仮想スイッチは IP アドレスが配置されるフレームまたはパケットから 2 つの 32 ビット バイナリ値を取得します。

仮想マシンは、ソース IP アドレスまたはターゲット IP アドレスに応じて NIC チーム内の任意のアップリンクを使用できます。このように、各仮想マシンはチーム内の任意のアップリンクのバンド幅を使用できます。多数の独立した仮想マシンがある環境で仮想マシンが実行される場合、IP ハッシュ アルゴリズムを使用すると、チーム内の NIC 間でトラフィックを平等に分散できます。仮想マシンが複数のターゲット IP アドレスと通信する場合、仮想スイッチはターゲット IP ごとに異なるハッシュを生成できます。このように、各パケットで仮想スイッチの異なるアップリンクを使用できるため、スループットが高くなる可能性があります。

ただし、使用環境の IP アドレス数が少ない場合、仮想スイッチはチーム内の 1 つのアップリンクで連続してトラフィックを通過させる可能性があります。たとえば、1 つのアプリケーション サーバが 1 つのデータベース サーバにアクセスしている場合、1 つのソース-ターゲット ペアしか存在しないため、仮想スイッチは常に同じアップリンクを計算します。

物理スイッチ構成

IP ハッシュ ロード バランシングを正常に機能させるには、物理スイッチに Etherchannel を構成する必要があります。Etherchannel は、複数のネットワーク アダプタを 1 つの論理リンクにバインドします。ポートが Etherchannel にバインドされていると、物理スイッチの異なるポートで同じ仮想マシンの MAC アドレスからのパケットを受信するたびに、CAM (content addressable memory) テーブルを適切に更新します。

たとえば、物理スイッチがポート 01 とポート 02 で MAC アドレス A からのパケットを受信すると、スイッチは CAM テーブルに 01-A と 02-A のエントリを作成します。そのため、物理スイッチは受信トラフィックを正しいポートに分散できます。Etherchannel がない場合、物理スイッチは、まず MAC アドレス A からのパケットをポート 01 で受信したという内容のレコードを作成し、次に MAC アドレス A からのパケットをポート 02 で受信したという内容でこのレコードを更新します。そのため、物理スイッチはポート 02 の受信トラフィックのみを転送し、パケットがターゲットに到達せずに、対応するアップリンクの過負荷が生じる可能性があります。

制限事項および構成要件

- ESXi ホストは、単一の物理スイッチまたはスタック スwitch の IP ハッシュ チーミングをサポートしていません。
- ESXi ホストは、固定モードの 802.3ad リンク集約のみをサポートしています。vSphere 標準スイッチでは、固定 Etherchannel のみを使用できます。LACP はサポートされていません。LACP を使用するには、vSphere Distributed Switch 5.1 以降または Cisco Nexus 1000V が必要です。802.3ad リンク集約を使用せずに IP ハッシュ ロード バランシングを有効にする場合（およびその逆）、ネットワークが中断される可能性があります。
- IP ハッシュ ロード バランシングでは、ネットワークの障害検出として [リンク状態のみ] を使用する必要があります。
- アクティブなフェイルオーバー リストにチームのすべてのアップリンクを設定する必要があります。スタンバイ リストと未使用リストは空にする必要があります。

- Etherchannel のポート数は、チーム内のアップリンク数と同じである必要があります。

IP ハッシュに基づいたルートを使用する場合の考慮事項

考慮事項	説明
メリット	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想スイッチはパケットごとにアップリンクを計算するため、発信元の仮想ポートに基づいたルートや発信元 MAC ハッシュに基づいたルートよりも平等に負荷を分散できます。 ■ 複数の IP アドレスと通信する仮想マシンのスループットが高くなる可能性があります。
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ■ 他のロード バランシング アルゴリズムと比べてリソース消費量が最も高くなります。 ■ 実際のアップリンクの負荷が仮想スイッチで認識されません。 ■ 物理ネットワークの変更が必要です。 ■ トラブルシューティングが複雑になります。

物理 NIC 負荷に基づいたルート

物理 NIC 負荷に基づいたルートは、発信元の仮想ポートに基づいたルートをベースにしています。このルートでは、仮想スイッチが、アップリンクの実際の負荷をチェックし、負荷がかかりすぎているアップリンクで負荷を軽減するための処理を行います。このルートは、vSphere Distributed Switch でのみ使用できます。

Distributed Switch は、ポート ID と NIC チーム内のアップリンク数を取得して、仮想マシンのアップリンクの負荷を計算します。Distributed Switch は 30 秒ごとにアップリンクをテストして、その負荷が使用量の 75 パーセントを超えると、I/O の使用率が最も高い仮想マシンのポート ID を別のアップリンクに移動します。

表 8-5. 物理 NIC 負荷に基づいたルート使用時の考慮事項

考慮事項	説明
メリット	<ul style="list-style-type: none"> ■ Distributed Switch が仮想マシンのアップリンクの負荷を計算するのは 1 度のみで、アップリンクの確認の影響は最小限であるため、リソース使用量が低く抑えられます。 ■ Distributed Switch がアップリンクの負荷を認識し、必要に応じて負荷を軽減するための処理を行います。 ■ 物理スイッチに変更を加える必要がありません。
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ■ 仮想マシンで利用できるバンド幅が、Distributed Switch に接続されたアップリンクによる制限を受けます。

明示的なフェイルオーバー順序を使用

このポリシーで使用可能な実際のロード バランシングはありません。仮想スイッチは、フェイルオーバー順序からのアクティブなアダプタのリストの最初にリストされ、かつフェイルオーバー検知基準を満たすアップリンクを常に使用します。アクティブなリストに使用可能なアップリンクが含まれていない場合、仮想スイッチではスタンバイ リストにあるアップリンクを使用します。

vSphere 標準スイッチまたは標準ポート グループでの NIC チーミング、フェイルオーバー、およびロード バランシングの構成

vSphere 標準スイッチまたは標準ポート グループのネットワーク容量を増やすには、チームに複数の物理 NIC を含めます。アダプタ故障時にネットワーク トラフィック経路を再設定する方法を決定する、フェイルオーバー順序を構成します。標準スイッチがチーム内の物理 NIC 間のトラフィックを分散する方法を決定する、ロード バランシング アルゴリズムを選択します。

物理スイッチのネットワーク構成と標準スイッチのトポロジに基づいて、NIC チーミング、フェイルオーバー、およびロード バランシングを構成します。詳細については、[チーミングおよびフェイルオーバー ポリシー](#)および[仮想スイッチで使用するロード バランシング アルゴリズム](#)を参照してください。

標準スイッチのチーミングとフェイルオーバーのポリシーを構成すると、そのポリシーはスイッチ内のすべてのポート グループに伝達されます。標準ポート グループのポリシーを構成すると、その構成によって、スイッチから継承されたポリシーがオーバーライドされます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 標準スイッチまたは標準ポート グループのチーミングおよびフェイルオーバー ポリシーに移動します。

オプション	操作
標準スイッチ	<ol style="list-style-type: none"> リストからスイッチを選択します。 [設定の編集] をクリックして、[チーミングおよびフェイルオーバー] を選択します。
標準ポート グループ	<ol style="list-style-type: none"> ポート グループが配置されているスイッチを選択します。 スイッチ トポロジ ダイアグラムで標準ポート グループを選択し、[設定の編集] をクリックします。 [チーミングおよびフェイルオーバー] を選択します。 オーバーライドするポリシーの横の [オーバーライド] を選択します。

- 4 [ロード バランシング] ドロップダウン メニューから、仮想スイッチによってチーム内の物理 NIC 間で送信トラフィックの負荷を分散する方法を指定します。

オプション	説明
発信元の仮想ポートに基づいたルート	スイッチの仮想ポート ID に基づいてアップリンクを選択します。仮想スイッチは、仮想マシンまたは VMkernel アダプタのアップリンクを選択すると、必ずこの仮想マシンまたは VMkernel アダプタと同じアップリンクを介してトラフィックを転送します。
IP ハッシュに基づいたルート	<p>各パケットの送信元と宛先の IP アドレスのハッシュに基づいて、アップリンクを選択します。IP 以外のパケットの場合、スイッチはそれらのフィールドのデータを使用してハッシュを計算します。</p> <p>IP ベースのチーミングでは、EtherChannel で物理スイッチを構成する必要があります。</p>
発信元 MAC ハッシュに基づいたルート	送信元のイーサネットのハッシュに基づいて、アップリンクを選択します。

オプション	説明
物理 NIC 負荷に基づいたルート	分散ポート グループまたは分散ポートで使用できます。ポート グループまたはポートに接続されている物理ネットワーク アダプタの現在の負荷に基づき、アップリンクを選択します。アップリンクが 30 秒間にわたって 75% 以上ビジー状態の場合、ホストのプロキシ スイッチにより、仮想マシン トラフィックの一部は、空き容量がある物理アダプタに移されます。
明示的なフェイルオーバー順序を使用	アクティブ アダプタのリストから、フェイルオーバーの検出基準を満たした最上位のアップリンクを常に使用します。このオプションで実行される実際のロード バランシングはありません。

- 5 [ネットワークのフェイルオーバー検出] ドロップダウン メニューから、フェイルオーバー検出のために仮想スイッチが使用する方法を選択します。

オプション	説明
リンク状態のみ	ネットワーク アダプタが提供するリンク ステータスのみに依存します。このオプションでは、取り外されたケーブルや物理スイッチの電源障害などの障害が検出されます。
ビーコンの検知	チーム内のすべての NIC に対してビーコンの検知の送信および待機を行い、この情報とリンク ステータスを使用してリンク故障を確認します。ESXi は、ビーコン パケットを毎秒送信します。 NIC は未使用の状態ではビーコンの検知に参加しないため、アクティブ / アクティブ構成またはアクティブ / スタンバイ構成にする必要があります。

- 6 [スイッチへの通知] ドロップダウン メニューから、フェイルオーバーの発生時に標準スイッチまたは Distributed Switch から物理スイッチに通知するかどうかを選択します。

注： 接続された仮想マシンが Microsoft Network Load Balancing をユニキャスト モードで使用している場合、このオプションを [いいえ] に設定します。Network Load Balancing がマルチキャスト モードで稼働している場合、問題は発生しません。

- 7 [フェイルバック] ドロップダウン メニューから、障害から復旧した後に物理アダプタをアクティブ状態に戻すかどうかを選択します。

フェイルバックを [はい] (デフォルト) に設定すると、アダプタは復旧後すぐにアクティブ モードに戻り、スタンバイ アダプタがある場合は、スロットを引き継いだスタンバイ アダプタに代わります。

標準ポートに対するフェイルバックを [いいえ] に設定すると、故障したアダプタは、その時点でアクティブな別のアダプタが故障して交換が必要になるまで、復旧後もアクティブでない状態のままになります。

- 8 [フェイルオーバーの順序] リストを構成することで、フェイルオーバーが発生したときにチーム内のアップリンクが使用される方法を指定します。

一部のアップリンクを使用しつつ、使用中のアップリンクに障害が発生した際に他のアップリンクを確保するには、上矢印または下矢印キーを使用して、アップリンクを別のグループに移動します。

オプション	説明
有効なアダプタ	ネットワーク アダプタ接続が稼動中で有効な場合に、アップリンクを継続的に使用します。
スタンバイ アダプタ	アクティブな物理アダプタのいずれかが利用できなくなった場合、このアップリンクを使用します。
未使用アダプタ	このアップリンクは使用しません。

9 [OK] をクリックします。

分散ポート グループまたは分散ポートでの NIC チーミング、フェイルオーバー、およびロード バランシングの構成

分散ポート グループまたはポートのネットワーク容量を増やすには、チームに複数の物理 NIC を含めます。アダプタ故障時にネットワーク トラフィック経路を再設定する方法を決定する、フェイルオーバー順序を構成します。Distributed Switch がチーム内の物理 NIC 間のトラフィック負荷を分散する方法を決定する、ロード バランシング アルゴリズムを選択します。

物理スイッチのネットワーク構成と Distributed Switch のトポロジに基づいて、NIC チーミング、フェイルオーバー、およびロード バランシングを構成します。詳細については、[チーミングおよびフェイルオーバー ポリシー](#)および[仮想スイッチで使用するロード バランシング アルゴリズム](#)を参照してください。

分散ポート グループのチーミングとフェイルオーバーのポリシーを構成すると、そのポリシーはグループ内のすべてのポートに伝達されます。分散ポートのポリシーを構成すると、その構成によって、グループから継承されたポリシーがオーバーライドされます。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 分散ポート グループまたはポートのチーミングおよびフェイルオーバー ポリシーに移動します。

オプション	操作
分散ポート グループ	<ol style="list-style-type: none"> [アクション] メニューから、[分散ポート グループ] - [分散ポート グループの管理] を選択します。 [チーミングおよびフェイルオーバー] を選択します。 ポート グループを選択して、[次へ] をクリックします。
分散ポート	<ol style="list-style-type: none"> [関連オブジェクト] を選択して、[分散ポート グループ] を選択します。 分散ポート グループを選択します。 [管理] で、[ポート] を選択します。 ポートを選択して、[分散ポート設定を編集します] をクリックします。 [チーミングおよびフェイルオーバー] を選択します。 オーバーライドするプロパティの横の [オーバーライド] を選択します。

- 3 [ロード バランシング] ドロップダウン メニューから、仮想スイッチによってチーム内の物理 NIC 間で送信トラフィックの負荷を分散する方法を指定します。

オプション	説明
発信元の仮想ポートに基づいたルート	スイッチの仮想ポート ID に基づいてアップリンクを選択します。仮想スイッチは、仮想マシンまたは VMkernel アダプタのアップリンクを選択すると、必ずこの仮想マシンまたは VMkernel アダプタと同じアップリンクを介してトラフィックを転送します。
IP ハッシュに基づいたルート	各バケットの送信元と宛先の IP アドレスのハッシュに基づいて、アップリンクを選択します。IP 以外のバケットの場合、スイッチはそれらのフィールドのデータを使用してハッシュを計算します。 IP ベースのチームングでは、EtherChannel で物理スイッチを構成する必要があります。
発信元 MAC ハッシュに基づいたルート	送信元のイーサネットのハッシュに基づいて、アップリンクを選択します。
物理 NIC 負荷に基づいたルート	分散ポート グループまたは分散ポートで使用できます。ポート グループまたはポートに接続されている物理ネットワーク アダプタの現在の負荷に基づき、アップリンクを選択します。アップリンクが 30 秒間にわたって 75% 以上ビジー状態の場合、ホストのプロキシ スイッチにより、仮想マシン トラフィックの一部は、空き容量がある物理アダプタに移されます。
明示的なフェイルオーバー順序を使用	アクティブ アダプタのリストから、フェイルオーバーの検出基準を満たした最上位のアップリンクを常に使用します。このオプションで実行される実際のロード バランシングはありません。

- 4 [ネットワークのフェイルオーバー検出] ドロップダウン メニューから、フェイルオーバー検出のために仮想スイッチが使用する方法を選択します。

オプション	説明
リンク状態のみ	ネットワーク アダプタが提供するリンク ステータスのみに依存します。このオプションでは、取り外されたケーブルや物理スイッチの電源障害などの障害が検出されます。
ビーコンの検知	チーム内のすべての NIC に対してビーコンの検知の送信および待機を行い、この情報とリンク ステータスを使用してリンク故障を確認します。ESXi は、ビーコン パケットを毎秒送信します。 NIC は未使用の状態ではビーコンの検知に参加しないため、アクティブ / アクティブ構成またはアクティブ / スタンバイ構成にする必要があります。

- 5 [スイッチへの通知] ドロップダウン メニューから、フェイルオーバーの発生時に標準スイッチまたは Distributed Switch から物理スイッチに通知するかどうかを選択します。

注： 接続された仮想マシンが Microsoft Network Load Balancing をユニキャスト モードで使用している場合、このオプションを [いいえ] に設定します。Network Load Balancing がマルチキャスト モードで稼働している場合、問題は発生しません。

- 6 [フェイルバック] ドロップダウン メニューから、障害から復旧した後に物理アダプタをアクティブ状態に戻すかどうかを選択します。

フェイルバックを [はい] (デフォルト) に設定すると、アダプタは復旧後すぐにアクティブ モードに戻り、スタンバイ アダプタがある場合は、スロットを引き継いだスタンバイ アダプタに代わります。

分散ポートに対するフェイルバックを [いいえ] に設定すると、故障したアダプタは、関連付けられた仮想マシンが実行されている場合にのみ、復旧後もアクティブでない状態のままになります。すべてのアクティブな物理アダプタに障害が発生した後、それらの 1 つが復旧したときに、[フェイルバック] オプションが [いいえ] に設定されており、仮想マシンがパワーオフになっている場合、その仮想マシンがパワーオンになると、仮想 NIC はスタンバイ状態のアダプタではなく、その復旧したアダプタに接続されます。仮想マシンをパワーオフにした後、パワーオンにすると、分散ポートに仮想 NIC が再接続されます。Distributed Switch はそのポートを新たに追加されたものと見なし、デフォルトのアップリンク ポート、つまりアクティブなアップリンク アダプタにそれを割り当てます。

- 7 [フェイルオーバーの順序] リストを構成することで、フェイルオーバーが発生したときにチーム内のアップリンクが使用される方法を指定します。

一部のアップリンクを使用しつつ、使用中のアップリンクに障害が発生した際に他のアップリンクを確保するには、上矢印または下矢印キーを使用して、アップリンクを別のグループに移動します。

オプション	説明
有効なアダプタ	ネットワーク アダプタ接続が稼動中で有効な場合に、アップリンクを継続的に使用します。
スタンバイ アダプタ	アクティブな物理アダプタのいずれかが利用できなくなった場合、このアップリンクを使用します。
未使用アダプタ	このアップリンクは使用しません。

- 8 設定を確認して、構成を適用します。

VLAN ポリシー

VLAN ポリシーは、ネットワーク環境全体での VLAN の動作を決定します。

仮想ローカル エリア ネットワーク (VLAN) とは、共通の要件セットを持つホスト グループを指します。このグループは、物理的な位置に関係なく、同じブロードキャスト ドメインに接続されているように通信します。VLAN は物理的ローカル エリア ネットワーク (LAN) と同じ属性を持ちますが、異なるネットワーク スイッチにある場合でもエンド ステーションをグループ化できます。

VLAN ポリシーの範囲は、分散ポート グループ、分散ポート、およびアップリンク ポート グループ、アップリンク ポートに指定できます。

分散ポート グループまたは分散ポートでの VLAN タギングの構成

すべての分散ポートに VLAN タギングを適用するには、分散ポート グループの VLAN ポリシーを設定する必要があります。親分散ポート グループとは異なる方法でポート上の仮想トラフィックを物理 VLAN と統合するには、分散ポートの VLAN ポリシーを使用する必要があります。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。

2 分散ポート グループまたは分散ポートの VLAN ポリシーに移動します。

オプション	操作
分散ポート グループ	a [アクション] メニューから、[分散ポート グループ] - [分散ポート グループの管理] を選択します。 b [VLAN] を選択します。 c ポート グループを選択して、[次へ] をクリックします。
分散ポート	a [関連オブジェクト] を選択して、[分散ポート グループ] を選択します。 b 分散ポート グループを選択します。 c [管理] で、[ポート] を選択します。 d ポートを選択して、[分散ポート設定を編集します] をクリックします。 e [VLAN] を選択します。 f オーバーライドするプロパティの横にある [オーバーライド] を選択します。

3 [タイプ] ドロップダウン メニューから、VLAN トラフィックのフィルタリングおよびマーキングのタイプを選択し、[次へ] をクリックします。

オプション	説明
なし	VLAN を使用しません。 外部スイッチ タギングの場合はこのオプションを使用します。
VLAN	[VLAN ID] フィールドの ID を使用してトラフィックにタグを付けます。 仮想スイッチ タギング用に 1 ~ 4094 の数字を入力します。
VLAN トランク	ID が [VLAN トランクの範囲] 内にある VLAN トラフィックをゲスト OS に渡します。コンマ区切りリストを使用して複数の範囲や個々の VLAN を設定できます。 仮想ゲスト タギングの場合はこのオプションを使用します。
プライベート VLAN	トラフィックと、Distributed Switch で作成されたプライベート VLAN を関連付けます。

4 設定を確認して、構成を適用します。

アップリンク ポート グループまたはアップリンク ポート上での VLAN タギングの構成

すべてのメンバー アップリンクに通常の VLAN トラフィック処理を構成するには、アップリンク ポートの VLAN ポリシーを設定する必要があります。親アップリンク ポート グループとは異なる方法でポートを通過する VLAN トラフィックを処理するには、アップリンクの VLAN ポリシーを設定する必要があります。

アップリンク ポート レベルで VLAN ポリシーを使用して VLAN ID のトランク範囲を物理ネットワーク アダプタに伝達し、トラフィックをフィルタリングします。物理ネットワーク アダプタは、アダプタが VLAN によるフィルタリングをサポートする場合にはほかの VLAN からパケットをドロップします。トランク範囲を設定すると、グループのアップリンク ポートではなく物理ネットワーク アダプタでトラフィックがフィルタリングされるため、ネットワーク パフォーマンスが向上します。

VLAN フィルタリングをサポートしない物理ネットワーク アダプタがある場合は、VLAN は依然として遮断されない可能性があります。この場合は、分散ポート グループまたは分散ポートに VLAN フィルタリングを構成します。

VLAN フィルタリングのサポートについては、アダプタ ベンダーの技術ドキュメントを参照してください。

前提条件

ポート レベルで VLAN ポリシーをオーバーライドするには、ポートレベルのオーバーライドを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アップリンク ポート グループ] タブをクリックします。
- 3 アップリンク ポート グループまたはポート上の VLAN ポリシーに移動します。

オプション	操作
アップリンク ポート グループ	<ol style="list-style-type: none"> a リストのアップリンク ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。 b [VLAN] をクリックします。
アップリンク ポート	<ol style="list-style-type: none"> a アップリンク ポート グループをクリックします。 b [管理] を選択し、[ポート] を選択します。 c ポートを選択して、[設定の編集] をクリックします。 d [VLAN] をクリックし、[オーバーライド] を選択します。

- 4 物理ネットワーク アダプタに伝達する [VLAN トランクの範囲] の値を入力します。
複数の範囲と個々の VLAN をトランキングする場合は、エントリをコンマで区切って入力します。
- 5 [OK] をクリックします。

セキュリティ ポリシー

ネットワーク セキュリティ ポリシーにより、MAC アドレスのなりすましや望ましくないポート スキャンからトラフィックを保護することができます。

標準スイッチおよび Distributed Switch のセキュリティ ポリシーは、ネットワーク プロトコル スタックのレイヤー 2（データ リンク レイヤー）に実装されます。セキュリティ ポリシーの 3 つの要素は、無差別モード、MAC アドレス変更、および偽装転送です。ネットワーク上の潜在的脅威の詳細については、『vSphere セキュリティ』ドキュメントを参照してください。

vSphere 標準スイッチまたは標準ポート グループのセキュリティ ポリシーの構成

vSphere 標準スイッチでは、仮想マシンのゲスト OS での MAC アドレスの変更や無差別モードの変更を拒否するようにセキュリティ ポリシーを構成することができます。個々のポート グループで標準スイッチから継承されているセキュリティ ポリシーをオーバーライドできます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。

3 標準スイッチまたはポート グループのセキュリティ ポリシーに移動します。

オプション	操作
vSphere 標準スイッチ	<ul style="list-style-type: none"> a リストから標準スイッチを選択します。 b [設定の編集] をクリックします。 c [セキュリティ] を選択します。
標準ポート グループ	<ul style="list-style-type: none"> a ポート グループが配置されている標準スイッチを選択します。 b トポロジ ダイアグラムで、標準ポート グループを選択します。 c [設定の編集] をクリックします。 d [セキュリティ] を選択し、オーバーライドするオプションの横にある [オーバーライド] を選択します。

4 標準スイッチまたはポート グループに接続されている仮想マシンのゲスト OS での無差別モードの有効化および MAC アドレスの変更を拒否または承諾します。

オプション	説明
無差別モード	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。VM ネットワーク アダプタは、仮想マシン宛のフレームのみを受信します。 ■ [承諾]。仮想スイッチは、VM ネットワーク アダプタが接続されているポートのアクティブな VLAN ポリシーに従ってすべてのフレームを仮想マシンに転送します。 <p>注： 無差別モードは、安全な操作ではありません。ファイアウォール、ポート スキャナ、侵入検知システムは、無差別モードで動作する必要があります。</p>
MAC アドレス変更	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。ゲスト OS が仮想マシンの有効な MAC アドレスを VM ネットワーク アダプタの MAC アドレス（.vmx 構成ファイル内で設定）とは異なる値に変更すると、スイッチはアダプタへのすべての受信フレームをドロップします。 <p>ゲスト OS が仮想マシンの有効な MAC アドレスを VM ネットワーク アダプタの MAC アドレスに戻すと、仮想マシンは再びフレームを受信します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [承諾]。ゲスト OS が仮想マシンの有効な MAC アドレスを VM ネットワーク アダプタの MAC アドレスとは異なる値に変更すると、スイッチは新しいアドレスへのフレームの通過を許可します。
偽装転送	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。スイッチは、仮想マシン アダプタからの送信フレームのうち、.vmx 構成ファイル内の送信元 MAC アドレスと異なるアドレスを持つフレームをすべてドロップします。 ■ [承諾]。スイッチはフィルタリングを実行せず、すべての送信フレームを許可します。

5 [OK] をクリックします。

分散ポート グループまたは分散ポートのセキュリティ ポリシーの構成

分散ポート グループにセキュリティ ポリシーを設定すると、そのポート グループに関連付けられている仮想マシンのゲスト OS からの無差別モードおよび MAC アドレスの変更を許可または拒否することができます。個々のポートで分散ポート グループから継承されたセキュリティ ポリシーをオーバーライドできます。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 分散ポート グループまたはポートのセキュリティ ポリシーに移動します。

オプション	操作
分散ポート グループ	<ol style="list-style-type: none"> [アクション] メニューから、[分散ポート グループ] - [分散ポート グループの管理] を選択します。 [セキュリティ] を選択します。 ポート グループを選択して、[次へ] をクリックします。
分散ポート	<ol style="list-style-type: none"> [関連オブジェクト] を選択して、[分散ポート グループ] を選択します。 分散ポート グループを選択します。 [管理] で、[ポート] を選択します。 ポートを選択して、[分散ポート設定を編集します] をクリックします。 [セキュリティ] を選択します。 オーバーライドするプロパティの横にある [オーバーライド] を選択します。

- 3 分散ポート グループまたはポートに接続されている仮想マシンのゲスト OS での無差別モードの有効化および MAC アドレスの変更を拒否または承諾します。

オプション	説明
無差別モード	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。VM ネットワーク アダプタは、仮想マシン宛のフレームのみを受信します。 ■ [承諾]。仮想スイッチは、VM ネットワーク アダプタが接続されているポートのアクティブな VLAN ポリシーに従ってすべてのフレームを仮想マシンに転送します。 <p>注： 無差別モードは、安全な操作ではありません。ファイアウォール、ポート スキャン、侵入検知システムは、無差別モードで動作する必要があります。</p>
MAC アドレス変更	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。ゲスト OS が仮想マシンの有効な MAC アドレスを VM ネットワーク アダプタの MAC アドレス（.vmx 構成ファイル内で設定）とは異なる値に変更すると、スイッチはアダプタへのすべての受信フレームをドロップします。 <p>ゲスト OS が仮想マシンの有効な MAC アドレスを VM ネットワーク アダプタの MAC アドレスに戻すと、仮想マシンは再びフレームを受信します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [承諾]。ゲスト OS が仮想マシンの有効な MAC アドレスを VM ネットワーク アダプタの MAC アドレスとは異なる値に変更すると、スイッチは新しいアドレスへのフレームの通過を許可します。
偽装転送	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。スイッチは、仮想マシン アダプタからの送信フレームのうち、.vmx 構成ファイル内の送信元 MAC アドレスと異なるアドレスを持つフレームをすべてドロップします。 ■ [承諾]。スイッチはフィルタリングを実行せず、すべての送信フレームを許可します。

- 4 設定を確認して、構成を適用します。

トラフィック シェーピング ポリシー

トラフィック シェーピング ポリシーは、平均バンド幅、ピーク バンド幅、およびバースト サイズで定義されます。各ポート グループ、および各分散ポートまたは分散ポート グループのトラフィック シェーピング ポリシーを確立できます。

ESXi は、標準スイッチ上で送信ネットワークトラフィックを形成し、分散スイッチ上で送受信トラフィックの両方を形成します。トラフィックシェーピングは、ポートで利用できるネットワークバンド幅を制限しますが、トラフィックのバーストがより高速に通過できるように構成することもできます。

平均バンド幅

長期間にわたって平均化された、ポート全体で許容される毎秒ビット数を設定します。これは、許容される平均的な負荷の値です。

ピーク バンド幅

負荷の高いトラフィックの送受信時にポート全体で許容される最大の毎秒ビット数です。この値は、バーストボーナスを使用している場合にポートで使用されるバンド幅を制限します。

バースト サイズ

バースト時に許容する最大バイト数です。このパラメータが設定されていると、ポートは割り当てられているすべてのバンド幅を使用しない場合に、バーストボーナスを取得できます。ポートで、平均バンド幅で指定されているよりも多くのバンド幅が必要になると、バーストボーナスが使用できる場合は一時的にデータをより高速に転送できます。このパラメータは、バーストボーナスに累積されているバイト数を制限し、より高速でトラフィックを転送します。

vSphere 標準スイッチまたは標準ポート グループのトラフィックシェーピングの構成

ESXi では、標準スイッチまたはポートグループで送信トラフィックをシェーピングできます。トラフィックシェーパーはポートで利用可能なネットワークのバンド幅を制限しますが、一時的なバーストトラフィックを許可する構成を行えば、高速なポート通信が可能となります。

スイッチまたはポートグループレベルで設定したトラフィックシェーピングポリシーは、スイッチまたはそのポートグループに参加している各ポートに適用されます。たとえば、標準ポートグループの平均バンド幅を 100000 Kbps に設定した場合、標準ポートグループに関連付けられている各ポートを 100000 Kbps（長期間にわたる平均）でデータが通過できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。

3 標準スイッチまたはポート グループのトラフィック シェーピング ポリシーに移動します。

オプション	操作
vSphere 標準スイッチ	<ul style="list-style-type: none"> a リストから標準スイッチを選択します。 b [設定の編集] をクリックします。 c [トラフィック シェーピング] を選択します。
標準ポート グループ	<ul style="list-style-type: none"> a ポート グループが配置されている標準スイッチを選択します。 b トポロジ ダイアグラムで、標準ポート グループを選択します。 c [設定の編集] をクリックします。 d [トラフィック シェーピング] を選択し、オーバーライドするオプションの横にある [オーバーライド] を選択します。

4 トラフィック シェーピング ポリシーを構成します。

オプション	説明
ステータス	標準スイッチまたはポート グループに関連付けられている各ポートに割り当てるネットワーク バンド幅の量に対する制限の設定を有効にします。
平均バンド幅	ポートで利用可能な毎秒あたりのビット数を一定期間の平均で設定します（許容平均負荷）。
ピーク バンド幅	負荷の高いトラフィックの送信時にポート全体で許容される最大の毎秒ビット数です。この設定は、バースト ボーナスを使用している場合にポートで使用されるバンド幅の上限になります。このパラメータを平均バンド幅より小さくすることはできません。
バースト サイズ	バースト時に許容する最大バイト数です。このパラメータが設定されていると、ポートは割り当てられているすべてのバンド幅を使用しない場合に、バースト ボーナスを取得できます。ポートで、平均バンド幅で指定されているよりも多くのバンド幅が必要になると、バースト ボーナスが使用できる場合には、一時的にデータをより高速に転送できます。高速転送を行うバースト ボーナ스로追加可能な累積バイト数の上限をこのパラメータで設定します。

5 各トラフィック シェーピング ポリシー（[平均バンド幅]、[ピーク バンド幅]、および [バースト サイズ]）でバンド幅の値を入力します。

6 [OK] をクリックします。

分散ポート グループまたは分散ポートでのトラフィック シェーピング ポリシーの編集

vSphere の分散ポート グループまたは分散ポートのトラフィックを送受信の両方でシェーピングできます。トラフィック シェーパは、グループ内のポートのネットワーク バンド幅を制限しますが、トラフィックの「バースト」を一時的に許可し、ポートを介して高速で送信できるように構成することもできます。

分散ポート グループ レベルで設定したトラフィック シェーピング ポリシーは、そのポート グループに参加している各ポートに適用されます。たとえば、分散ポート グループの平均バンド幅を 100000 Kbps に設定した場合、分散ポート グループに関連付けられている各ポートを 100000 Kbps（長期間にわたる平均）でデータが通過できません。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 分散ポート グループまたはポートのトラフィック シェーピング ポリシーに移動します。

オプション	操作
分散ポート グループ	<ol style="list-style-type: none"> [アクション] メニューから、[分散ポート グループ] - [分散ポート グループの管理] を選択します。 [トラフィック シェーピング] を選択します。 ポート グループを選択して、[次へ] をクリックします。
分散ポート	<ol style="list-style-type: none"> [関連オブジェクト] を選択して、[分散ポート グループ] を選択します。 分散ポート グループを選択します。 [管理] で、[ポート] を選択します。 ポートを選択して、[分散ポート設定を編集します] をクリックします。 [トラフィック シェーピング] を選択します。 オーバーライドするプロパティの横にある [オーバーライド] を選択します。

- 3 トラフィック シェーピング ポリシーを構成します。

注： トラフィックは、ホストではなくスイッチのトラフィック方向によって、入力または出力に分類されます。

オプション	説明
ステータス	[ステータス] ドロップダウン メニューを使用して、[入力側トラフィック シェーピング] または [出力側トラフィック シェーピング] を有効にします。
平均バンド幅	長期間にわたって平均化された、ポート全体で許容される毎秒ビット数、つまり、許容される平均的な負荷を設定します。
ピーク バンド幅	負荷の高いトラフィックの送受信時にポート全体で許容される最大の毎秒ビット数です。このパラメータが、バースト ボーナスを使用しているときは常に、ポートが使用するバンド幅の上限になります。
バースト サイズ	バースト時に許容する最大バイト数です。このパラメータが設定されていると、ポートは割り当てられているすべてのバンド幅を使用しない場合に、バースト ボーナスを取得できます。ポートで、平均バンド幅で指定されているよりも多くのバンド幅が必要になると、バースト ボーナスが使用できる場合には、一時的にデータをより高速に転送できます。バースト ボーナ스에累積し、高速で転送できるバイト数の上限をこのパラメータで設定します。

- 4 設定を確認して、構成を適用します。

リソース割り当てポリシー

リソース割り当てポリシーを使用すると、分散ポートまたはポート グループをユーザーが作成したネットワーク リソース プールに関連付けることができます。このポリシーによって、ポートまたはポート グループに割り当てられたバンド幅をより柔軟に制御することが可能になります。

ネットワーク リソース プールの作成および構成の詳細については、[11 章 vSphere Network I/O Control](#) を参照してください。

分散ポート グループでのリソース割り当てポリシーの編集

分散ポート グループをネットワーク リソース プールと関連付けると、分散ポート グループに割り当てるバンド幅をより柔軟に制御できます。

前提条件

- Distributed Switch での Network I/O Control の有効化 [vSphere Distributed Switch での Network I/O Control の有効化](#) を参照してください。
- ネットワーク リソース プールを作成および構成します。 [ネットワーク リソース プールの作成](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 オブジェクト ナビゲータで Distributed Switch を右クリックし、[分散ポート グループ] - [分散ポート グループの管理] を選択します。
- 3 [リソース割り当て] チェック ボックスを選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 構成する分散ポート グループを選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 ネットワーク リソース プールの分散ポート グループを追加または削除し、[次へ] をクリックします。
 - 分散ポート グループを追加するには、[ネットワーク リソース プール] ドロップダウン メニューからユーザー定義のリソース プールを選択します。
 - 分散ポート グループを削除するには、[ネットワーク リソース プール] ドロップダウン メニューから [デフォルト] を選択します。
- 6 [終了準備の完了] セクションで設定を確認し、[終了] をクリックします。

設定を変更するには、[戻る] ボタンを使用します。

分散ポートでのリソース割り当てポリシーの編集

vSphere Distributed Switch で Network I/O Control バージョン 2 を使用している場合は、分散ポートをユーザー定義のリソース プールに明確に関連付けると、Network I/O Control を使用して、ポートに接続された仮想マシンに提供されるバンド幅を制御できます。

前提条件

- Network I/O Control がバージョン 2 であることを確認します。
- Distributed Switch での Network I/O Control の有効化 [vSphere Distributed Switch での Network I/O Control の有効化](#) を参照してください。
- Network I/O Control バージョン 2 でネットワーク リソース プールを作成および構成します。 [Network I/O Control バージョン 2 のネットワーク リソース プールの作成](#) を参照してください。
- リソース割り当てポリシーのポートレベルのオーバーライドを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[ポート] をクリックします。
- 3 リストからポートを選択して、[分散ポート設定を編集します] をクリックします。
- 4 [プロパティ] を選択します。
- 5 [ネットワーク リソース プール] で [オーバーライド] チェック ボックスをクリックして、ドロップダウン メニューからネットワーク リソース プールをポートに割り当てます。

リソース割り当てポリシーのポートレベルのオーバーライドを有効にしていない場合は、オプションは無効になっています。

- 分散ポートをリソース プールに関連付けるには、ユーザー定義のリソース プールを選択します。
- 分散ポートとリソース プールの関連付けを削除するには、[デフォルト] を選択します。

- 6 [OK] をクリックします。

監視ポリシー

監視ポリシーを使用すると、分散ポートまたはポート グループでの NetFlow 監視を有効または無効にすることができます。

NetFlow 設定は、vSphere Distributed Switch レベルで構成できます。[vSphere Distributed Switch のネットフロー設定の構成](#) を参照してください。

分散ポート グループまたは分散ポートでの NetFlow 監視の有効化または無効化

NetFlow を有効にして、分散ポート グループのポートまたは個々の分散ポートを通過する IP パケットを監視できます。

NetFlow の設定は、vSphere Distributed Switch で構成します。を参照してください。[vSphere Distributed Switch のネットフロー設定の構成](#)

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。[ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。

2 分散ポート グループまたは分散ポートの監視ポリシーに移動します。

オプション	操作
分散ポート グループ	a [アクション] メニューから、[分散ポート グループ] - [分散ポート グループの管理] を選択します。 b [監視] を選択します。 c ポート グループを選択して、[次へ] をクリックします。
分散ポート	a [関連オブジェクト] を選択して、[分散ポート グループ] を選択します。 b 分散ポート グループを選択します。 c [管理] で、[ポート] を選択します。 d ポートを選択して、[分散ポート設定を編集します] をクリックします。 e [監視] を選択します。 f ドロップダウン メニューの横にある [オーバーライド] を選択します。

3 [NetFlow] のドロップダウン メニューから、NetFlow を有効または無効にし、[次へ] をクリックします。

4 設定を確認して、構成を適用します。

トラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシー

vSphere Distributed Switch 5.5 以降では、トラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを使用することによって、不要なトラフィックやセキュリティ攻撃から仮想ネットワークを保護したり、特定のトラフィック タイプに QoS タグを適用したりすることができます。

トラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーは、Distributed Switch のポートを経由するデータ フローのセキュリティと QoS タグ付けのための順序付けされたネットワーク トラフィック ルール セットです。通常、ルールは、トラフィックの修飾子、および一致するトラフィックを制限または優先順位付けするアクションで構成されます。

vSphere Distributed Switch は、データ ストリームのさまざまな場所のトラフィックにルールを適用します。Distributed Switch は、仮想マシンのネットワーク アダプタと分散ポートの間のデータ パスにトラフィック フィルタ ルールを適用します。また、アップリンクにルールを適用する場合は、アップリンク ポートと物理ネットワーク アダプタの間のデータ パスにトラフィック フィルタ ルールを適用します。

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキング

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループのレベルでトラフィック ルールを設定し、仮想マシン、VMkernel アダプタ、または物理アダプタを介したトラフィック アクセスにフィルタリングと優先順位のタグ付けを行います。

■ 分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングの有効化

ポート グループに参加しているすべての仮想マシンのネットワーク アダプタまたはアップリンク アダプタにトラフィックのセキュリティとマーキングを構成するには、そのグループでトラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを有効にします。

■ 分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのマーキング

VoIP やストリーミング ビデオといった、バンド幅や低待ち時間などのネットワーク要件が高いトラフィックに優先順位タグを割り当てます。ネットワーク プロトコル スタックのレイヤー 2 の CoS タグ、またはレイヤー 3 の DSCP タグでトラフィックにマーキングできます。

■ 分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのフィルタリング

トラフィックが分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループのポートを通過することを許可するか、禁止してデータを保護します。

■ 分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のネットワーク トラフィック ルールの操作

仮想マシンまたは物理アダプタに関連するトラフィックの処理ポリシーを導入するには、分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループにトラフィック ルールを定義します。特定トラフィックのフィルタリングおよび QoS 要求の記述が可能です。

■ 分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングの無効化

トラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを無効にすることで、セキュリティまたは QoS に関連する制御を追加せずに、仮想マシンまたは物理アダプタにトラフィックが流れるようにします。

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングの有効化

ポート グループに参加しているすべての仮想マシンのネットワーク アダプタまたはアップリンク アダプタにトラフィックのセキュリティとマーキングを構成するには、そのグループでトラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを有効にします。

注： 特定のポート上でトラフィックのフィルタリングとマーキングのポリシーを無効にすると、そのポートを通過するトラフィックの処理を回避できます。[分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングの無効化](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client 内で分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループを見つけます。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックして分散ポート グループのリストを表示するか、[アップリンク ポート グループ] をクリックしてアップリンク ポート グループのリストを表示します。
- 2 ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。
- 3 [トラフィックのフィルタリングとマーキング] を選択します。
- 4 [ステータス] ドロップダウン メニューから、[有効] を選択します。
- 5 [OK] をクリックします。

次のステップ

分散ポート グループのポートまたはアップリンク ポート グループを通過するデータにトラフィックのマーキングまたはフィルタリングを設定します。分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのマーキング および分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのフィルタリング を参照してください。

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのマーキング

VoIP やストリーミング ビデオといった、バンド幅や低待ち時間などのネットワーク要件が高いトラフィックに優先順位タグを割り当てます。ネットワーク プロトコル スタックのレイヤー 2 の CoS タグ、またはレイヤー 3 の DSCP タグでトラフィックにマーキングできます。

優先順位のタグ付けは、QoS の要求が高いトラフィックにマーキングするメカニズムです。この方法では、ネットワークがトラフィックのさまざまなクラスを認識できます。ネットワーク デバイスはトラフィックの優先順位と要件に従い、各クラスのトラフィックを処理します。

フローの重要度を上げたり下げたりするために、トラフィックに再度タグ付けすることもできます。低 QoS タグを使用すると、ゲストのオペレーティング システムのタグ付けされたデータを制限することができます。

手順

- 1 vSphere Web Client 内で分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループを見つけます。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックして分散ポート グループのリストを表示するか、[アップリンク ポート グループ] をクリックしてアップリンク ポート グループのリストを表示します。
- 2 ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。
- 3 [トラフィックのフィルタリングとマーキング]を選択します。
- 4 トラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[ステータス] ドロップダウン メニューから有効にしてください。
- 5 [新規] をクリックして新規ルールを作成するか、ルールを選択して [編集] をクリックして、ルールを編集します。
- 6 [ネットワーク トラフィック ルール] ダイアログ ボックスで、[アクション] ドロップダウン メニューから [タグ] オプションを選択します。
- 7 ルールの範囲内で優先順位タグをトラフィックに設定します。

オプション	説明
CoS 値	ルールに一致するトラフィックに、ネットワーク レイヤー 2 の CoS 優先順位タグでマーキングします。[CoS タグの更新]を選択し、0 から 7 の値を入力します。
DSCP 値	ルールに関連するトラフィックに、ネットワーク レイヤー 3 の DSCP タグでマーキングします。[DSCP 値の更新]を選択し、0 から 63 の値を入力します。

8 ルールを適用するトラフィックの種類を指定します。

データ フローがマーキングまたはフィルタリングされるルールの範囲内にあるかどうかを判断するため、vSphere Distributed Switch はトラフィックの方向や、ソースとターゲット、VLAN、次のレベルのプロトコル、インフラストラクチャのトラフィック タイプなどのプロパティを確認します。

- a [トラフィック方向] ドロップダウン メニューで、トラフィックに入力または出力、あるいはその両方を選択すると、ルールはそれに一致するトラフィックを認識します。

トラフィック方向はトラフィックの入力と出力をどのように認識するかについても影響します。

- b システム データ タイプ、レイヤー 2 のパケット属性、レイヤー 3 のパケット属性の修飾子を使用して、パケットをルールに一致させるために必要なプロパティを設定します。

修飾子はネットワーク レイヤーに関連する、一致する基準のセットを表します。システム データ タイプ、レイヤー 2 のトラフィック プロパティ、レイヤー 3 のトラフィック プロパティにトラフィックを一致させることができます。特定のネットワーク レイヤーに修飾子を使用するか、あるいは修飾子を組み合わせてより正確にパケットを一致させることができます。

- システム トラフィック修飾子を使用して、そのグループのポートを通過する仮想インフラストラクチャデータのタイプにパケットを一致させます。例えば、ネットワーク ストレージへのデータ転送に NFS を選択することができます。

- MAC トラフィック修飾子を使用して、MAC アドレス、VLAN ID、次のレベルのプロトコルでパケットを一致させます。

分散ポート グループの VLAN ID でのトラフィックの検索は、仮想ゲスト タギング (VGT) と連携して動作します。仮想スイッチ タギング (VST) がアクティブの時にトラフィックを VLAN ID と一致させるには、アップリンク ポート グループまたはアップリンク ポートのルールを使用します。

- IP トラフィック修飾子を使用して、IP バージョン、IP アドレス、次のレベルのプロトコルとポートでパケットを一致させます。

9 [ルール] ダイアログ ボックスで、[OK]をクリックしてルールを保存します。

例：ボイス オーバー IP トラフィックのマーキング

ボイス オーバー IP (VoIP) のフローには、低損失および低遅延の点で特別な QoS 要件があります。一般に、VoIP のセッション開始プロトコル (SIP) に関連するトラフィックには、26 に相当する DSCP タグが付いています。これは、相対的優先転送クラス 3、低ドロップ確率 (AF31) を表します。

たとえば、サブネット 192.168.2.0/24 への送信 SIP UDP パケットにマーキングする場合、次のルールを使用できます。

ルール パラメータ	パラメータ値
操作	タグ
DSCP 値	26
トラフィック方向	出力側
トラフィック修飾子	IP 修飾子
プロトコル	UDP

ルール パラメータ	パラメータ値
送信先ポート	5060
送信元アドレス	接頭辞長 24 の 192.168.2.0 に一致する IP アドレス

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのフィルタリング

トラフィックが分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループのポートを通過することを許可するか、禁止してデータを保護します。

手順

- 1 vSphere Web Client 内で分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループを見つけます。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックして分散ポート グループのリストを表示するか、[アップリンク ポート グループ] をクリックしてアップリンク ポート グループのリストを表示します。
- 2 ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。
- 3 [トラフィックのフィルタリングとマーキング] を選択します。
- 4 トラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[ステータス] ドロップダウン メニューから有効にしてください。
- 5 [新規] をクリックして新規ルールを作成するか、ルールを選択して [編集] をクリックして、ルールを編集します。
- 6 [ネットワーク トラフィック ルール] ダイアログ ボックスの [アクション] オプションを使用して、分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループのポートの通過をトラフィックに許可または禁止します。

7 ルールを適用するトラフィックの種類を指定します。

データ フローがマーキングまたはフィルタリングされるルールの範囲内にあるかどうかを判断するため、vSphere Distributed Switch はトラフィックの方向や、ソースとターゲット、VLAN、次のレベルのプロトコル、インフラストラクチャのトラフィック タイプなどのプロパティを確認します。

- a [トラフィック方向] ドロップダウン メニューで、トラフィックに入力または出力、あるいはその両方を選択すると、ルールはそれに一致するトラフィックを認識します。

トラフィック方向はトラフィックの入力と出力をどのように認識するかについても影響します。

- b システム データ タイプ、レイヤー 2 のパケット属性、レイヤー 3 のパケット属性の修飾子を使用して、パケットをルールに一致させるために必要なプロパティを設定します。

修飾子はネットワーク レイヤーに関連する、一致する基準のセットを表します。システム データ タイプ、レイヤー 2 のトラフィック プロパティ、レイヤー 3 のトラフィック プロパティにトラフィックを一致させることができます。特定のネットワーク レイヤーに修飾子を使用するか、あるいは修飾子を組み合わせるにより正確にパケットを一致させることができます。

- システム トラフィック修飾子を使用して、そのグループのポートを通過する仮想インフラストラクチャデータのタイプにパケットを一致させます。例えば、ネットワーク ストレージへのデータ転送に NFS を選択することができます。

- MAC トラフィック修飾子を使用して、MAC アドレス、VLAN ID、次のレベルのプロトコルでパケットを一致させます。

分散ポート グループの VLAN ID でのトラフィックの検索は、仮想ゲスト タギング (VGT) と連携して動作します。仮想スイッチ タギング (VST) がアクティブの時にトラフィックを VLAN ID と一致させるには、アップリンク ポート グループまたはアップリンク ポートのルールを使用します。

- IP トラフィック修飾子を使用して、IP バージョン、IP アドレス、次のレベルのプロトコルとポートでパケットを一致させます。

8 [ルール] ダイアログ ボックスで、[OK]をクリックしてルールを保存します。

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のネットワーク トラフィック ルールの操作

仮想マシンまたは物理アダプタに関連するトラフィックの処理ポリシーを導入するには、分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループにトラフィック ルールを定義します。特定トラフィックのフィルタリングおよび QoS 要求の記述が可能です。

注： トラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーに関するルールは、ポート レベルでオーバーライドできます。分散ポートまたはアップリンク ポート上のネットワーク トラフィック ルールの操作 を参照してください。

■ 分散ポート グループまたはアップリンク グループ上のトラフィック ルールの表示

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループのトラフィック フィルタリングおよびマーキングポリシーを形成するトラフィック ルールを表示します。

■ 分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィック ルールの編集

トラフィック ルールを作成または編集し、そのパラメータを使用して、分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックをフィルタリングまたはマーキングするためのポリシーを構成します。

■ 分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のルールの優先順位の変更

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループの、トラフィックのフィルタリングとマーキング ポリシーを形成するルールの順序を変更して、トラフィックを処理するアクションのシーケンスを変更します。

■ 分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィック ルールの削除

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループのトラフィック ルールを削除して、個別の経路で仮想マシンまたは物理アダプタに流れ込むパケットの処理を停止します。

分散ポート グループまたはアップリンク グループ上のトラフィック ルールの表示

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループのトラフィック フィルタリングおよびマーキング ポリシーを形成するトラフィック ルールを表示します。

手順

- 1 vSphere Web Client 内で分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループを見つけます。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックして分散ポート グループのリストを表示するか、[アップリンク ポート グループ] をクリックしてアップリンク ポート グループのリストを表示します。
- 2 ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。
- 3 [トラフィックのフィルタリングとマーキング]を選択します。
- 4 トラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[ステータス] ドロップダウン メニューから有効にしてください。
- 5 [アクション]を実行し、ルールでトラフィックがフィルターされているか（許可または拒否）、あるいはトラフィックに特別な QoS 要求でマーキングされているか（タグ）を確認します。
- 6 上部のリストで、トラフィックの検索基準を表示するルールを選択します。
 ルールのトラフィック修飾子パラメータが [トラフィック修飾子] リストに表示されます。

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィック ルールの編集

トラフィック ルールを作成または編集し、そのパラメータを使用して、分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックをフィルタリングまたはマーキングするためのポリシーを構成します。

手順

- 1 vSphere Web Client 内で分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループを見つけます。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックして分散ポート グループのリストを表示するか、[アップリンク ポート グループ] をクリックしてアップリンク ポート グループのリストを表示します。
- 2 ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。

- 3 [トラフィックのフィルタリングとマーキング]を選択します。
- 4 トラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[ステータス] ドロップダウン メニューから有効にしてください。
- 5 [新規] をクリックして新規ルールを作成するか、ルールを選択して [編集] をクリックして、ルールを編集します。

次のステップ

ネットワーク トラフィック ルールに名前を付け、対象のトラフィックを拒否、許可、あるいはタグ付けします。

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のルールの優先順位の変更

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループの、トラフィックのフィルタリングとマーキング ポリシーを形成するルールの順序を変更して、トラフィックを処理するアクションのシーケンスを変更します。

vSphere Distributed Switch はネットワーク トラフィック ルールを厳密に適用します。パケットがすでにルールに適合している場合、そのパケットはポリシー内の次のルールには渡されません。

手順

- 1 vSphere Web Client 内で分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループを見つけます。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックして分散ポート グループのリストを表示するか、[アップリンク ポート グループ] をクリックしてアップリンク ポート グループのリストを表示します。
- 2 ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。
- 3 [トラフィックのフィルタリングとマーキング]を選択します。
- 4 トラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[ステータス] ドロップダウン メニューから有効にしてください。
- 5 ルールを選択し、矢印ボタンを使用してその優先順位を変更します。
- 6 [OK]をクリックして変更内容を保存します。

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィック ルールの削除

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループのトラフィック ルールを削除して、個別の経路で仮想マシンまたは物理アダプタに流れ込むパケットの処理を停止します。

手順

- 1 vSphere Web Client 内で分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループを見つけます。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックして分散ポート グループのリストを表示するか、[アップリンク ポート グループ] をクリックしてアップリンク ポート グループのリストを表示します。
- 2 ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。
- 3 [トラフィックのフィルタリングとマーキング]を選択します。

- 4 トラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[ステータス] ドロップダウン メニューから有効にしてください。
- 5 ルールを選択し、[削除] をクリックします。
- 6 [OK] をクリックします。

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループ上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングの有効化

トラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを無効にすることで、セキュリティまたは QoS に関連する制御を追加せずに、仮想マシンまたは物理アダプタにトラフィックが流れるようにします。

注： 特定のポートでトラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを設定して有効にすることができます。分散ポートまたはアップリンク ポートでのトラフィックのフィルタリングおよびマーキングの有効化を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client 内で分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループを見つけます。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックして分散ポート グループのリストを表示するか、[アップリンク ポート グループ] をクリックしてアップリンク ポート グループのリストを表示します。
- 2 ポート グループを右クリックし、[設定の編集] を選択します。
- 3 [トラフィックのフィルタリングとマーキング]を選択します。
- 4 [ステータス] ドロップダウン メニューから、[無効] を選択します。
- 5 [OK] をクリックします。

分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキング

分散ポートまたはアップリンク ポートにトラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを構成すれば、個々の仮想マシン、VMkernel アダプタ、物理アダプタのトラフィックをフィルタリングしたり、QoS 要求を記述したりすることができます。

■ 分散ポートまたはアップリンク ポートでのトラフィックのフィルタリングおよびマーキングの有効化

ポート上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを有効にして、仮想マシンのネットワーク アダプタ、VMkernel アダプタ、アップリンク アダプタのトラフィックのセキュリティとマーキングを構成します。

■ 分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのマーキング

VoIP やストリーミング ビデオなど、特別な扱いが必要なトラフィックにルールの優先順位タグを割り当てます。ネットワーク プロトコル スタックのレイヤー 2 の CoS タグ、またはレイヤー 3 の DSCP タグで、仮想マシン、VMkernel アダプタ、物理アダプタのトラフィックにマーキングできます。

■ 分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのフィルタリング

ルールによってトラフィックを許可または停止して、仮想マシン、VMkernel アダプタ、物理アダプタを経由するデータ フローをセキュリティ保護します。

■ 分散ポートまたはアップリンク ポート上のネットワーク トラフィック ルールの操作

仮想マシンまたは物理アダプタに関連するトラフィックを処理するためのポリシーを設定するには、分散ポートまたはアップリンク ポート グループにトラフィック ルールを定義します。特定トラフィックのフィルタリングおよび QoS 要求の記述が可能です。

■ 分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングの無効化

ポート上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを無効にして、セキュリティ確保のためのフィルタリングや QoS のマーキングを行うことなく、トラフィックが仮想マシンまたは物理アダプタに流れるようにします。

分散ポートまたはアップリンク ポートでのトラフィックのフィルタリングおよびマーキングの有効化

ポート上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを有効にして、仮想マシンのネットワーク アダプタ、VMkernel アダプタ、アップリンク アダプタのトラフィックのセキュリティとマーキングを構成します。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 分散ポートまたはアップリンク ポートに移動します。
 - スイッチの分散ポートに移動するには、[管理] - [ポート] の順にクリックします。
 - アップリンク ポート グループのアップリンク ポートに移動するには、[関連オブジェクト] - [アップリンク ポート グループ] の順にクリックし、リストのアップリンク ポート グループをダブルクリックして、[管理] タブの [ポート] を選択します。
- 2 リストからポートを選択します。
- 3 [分散ポート設定を編集します] をクリックします。
- 4 [トラフィックのフィルタリングとマーキング]を選択します。
- 5 [オーバーライド] チェック ボックスを選択し、[ステータス] ドロップダウン メニューから [有効] を選択します。
- 6 [OK] をクリックします。

次のステップ

分散ポートまたはアップリンク ポートを経由するデータ フローにトラフィックのフィルタリングまたはマーキングを設定します。 [分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのマーキング](#) および [分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのフィルタリング](#) を参照してください。

分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのマーキング

VoIP やストリーミング ビデオなど、特別な扱いが必要なトラフィックにルールの優先順位タグを割り当てます。ネットワーク プロトコル スタックのレイヤー 2 の CoS タグ、またはレイヤー 3 の DSCP タグで、仮想マシン、VMkernel アダプタ、物理アダプタのトラフィックにマーキングできます。

優先順位のタグ付けは、QoS の要求が高いトラフィックにマーキングするメカニズムです。この方法では、ネットワークがトラフィックのさまざまなクラスを認識できます。ネットワーク デバイスはトラフィックの優先順位と要件に従い、各クラスのトラフィックを処理します。

フローの重要度を上げたり下げたりするために、トラフィックに再度タグ付けすることもできます。低 QoS タグを使用すると、ゲストのオペレーティング システムのタグ付けされたデータを制限することができます。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 分散ポートまたはアップリンク ポートに移動します。
 - スイッチの分散ポートに移動するには、[管理] - [ポート] の順にクリックします。
 - アップリンク ポート グループのアップリンク ポートに移動するには、[関連オブジェクト] - [アップリンク ポート グループ] の順にクリックし、リストのアップリンク ポート グループをダブルクリックして、[管理] タブの [ポート] を選択します。
 - リストからポートを選択します。
 - [分散ポート設定を編集します] をクリックします。
 - ポート レベルでトラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[オーバーライド] をクリックし、[ステータス] ドロップダウン メニューから [有効] を選択します。
 - [新規] をクリックして新規ルールを作成するか、ルールを選択して [編集] をクリックして、ルールを編集します。
- 分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループから継承したルールを変更できます。この方法では、ルールはポートの範囲内で固有になります。
- [ネットワーク トラフィック ルール] ダイアログ ボックスで、[アクション] ドロップダウン メニューから [タグ] オプションを選択します。
 - ルールの範囲内で優先順位タグをトラフィックに設定します。

オプション	説明
CoS 値	ルールに一致するトラフィックに、ネットワーク レイヤー 2 の CoS 優先順位タグでマーキングします。[CoS タグの更新] を選択し、0 から 7 の値を入力します。
DSCP 値	ルールに関連するトラフィックに、ネットワーク レイヤー 3 の DSCP タグでマーキングします。[DSCP 値の更新] を選択し、0 から 63 の値を入力します。

8 ルールを適用するトラフィックの種類を指定します。

データ フローがマーキングまたはフィルタリングされるルールの範囲内にあるかどうかを判断するため、vSphere Distributed Switch はトラフィックの方向や、ソースとターゲット、VLAN、次のレベルのプロトコル、インフラストラクチャのトラフィック タイプなどのプロパティを確認します。

- a [トラフィック方向] ドロップダウン メニューで、トラフィックに入力または出力、あるいはその両方を選択すると、ルールはそれに一致するトラフィックを認識します。

トラフィック方向はトラフィックの入力と出力をどのように認識するかについても影響します。

- b システム データ タイプ、レイヤー 2 のパケット属性、レイヤー 3 のパケット属性の修飾子を使用して、パケットをルールに一致させるために必要なプロパティを設定します。

修飾子はネットワーク レイヤーに関連する、一致する基準のセットを表します。システム データ タイプ、レイヤー 2 のトラフィック プロパティ、レイヤー 3 のトラフィック プロパティにトラフィックを一致させることができます。特定のネットワーク レイヤーに修飾子を使用するか、あるいは修飾子を組み合わせるにより正確にパケットを一致させることができます。

- システム トラフィック修飾子を使用して、そのグループのポートを通過する仮想インフラストラクチャデータのタイプにパケットを一致させます。例えば、ネットワーク ストレージへのデータ転送に NFS を選択することができます。

- MAC トラフィック修飾子を使用して、MAC アドレス、VLAN ID、次のレベルのプロトコルでパケットを一致させます。

分散ポート グループの VLAN ID でのトラフィックの検索は、仮想ゲスト タギング (VGT) と連携して動作します。仮想スイッチ タギング (VST) がアクティブの時にトラフィックを VLAN ID と一致させるには、アップリンク ポート グループまたはアップリンク ポートのルールを使用します。

- IP トラフィック修飾子を使用して、IP バージョン、IP アドレス、次のレベルのプロトコルとポートでパケットを一致させます。

9 [ルール] ダイアログ ボックスで、[OK]をクリックしてルールを保存します。

分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのフィルタリング

ルールによってトラフィックを許可または停止して、仮想マシン、VMkernel アダプタ、物理アダプタを経由するデータ フローをセキュリティ保護します。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

1 分散ポートまたはアップリンク ポートに移動します。

- スイッチの分散ポートに移動するには、[管理] - [ポート] の順にクリックします。
- アップリンク ポート グループのアップリンク ポートに移動するには、[関連オブジェクト] - [アップリンク ポート グループ] の順にクリックし、リストのアップリンク ポート グループをダブルクリックして、[管理] タブの [ポート] を選択します。

- 2 リストからポートを選択します。
- 3 [分散ポート設定を編集します] をクリックします。
- 4 ポート レベルでトラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[オーバーライド]をクリックし、[ステータス]ドロップダウン メニューから [有効]を選択します。
- 5 [新規]をクリックして新規ルールを作成するか、ルールを選択して [編集]をクリックして、ルールを編集します。
分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループから継承したルールを変更できます。この方法では、ルールはポートの範囲内で固有になります。
- 6 [ネットワーク トラフィック ルール] ダイアログ ボックスで、トラフィックが分散ポートまたはアップリンク ポートを通るのを許可する場合は [許可] アクションを選択し、制限する場合は [ドロップ] アクションを選択します。
- 7 ルールを適用するトラフィックの種類を指定します。

データ フローがマーキングまたはフィルタリングされるルールの範囲内にあるかどうかを判断するため、vSphere Distributed Switch はトラフィックの方向や、ソースとターゲット、VLAN、次のレベルのプロトコル、インフラストラクチャのトラフィック タイプなどのプロパティを確認します。

- a [トラフィック方向] ドロップダウン メニューで、トラフィックに入力または出力、あるいはその両方を選択すると、ルールはそれに一致するトラフィックを認識します。

トラフィック方向はトラフィックの入力と出力をどのように認識するかについても影響します。

- b システム データ タイプ、レイヤー 2 のパケット属性、レイヤー 3 のパケット属性の修飾子を使用して、パケットをルールに一致させるために必要なプロパティを設定します。

修飾子はネットワーク レイヤーに関連する、一致する基準のセットを表します。システム データ タイプ、レイヤー 2 のトラフィック プロパティ、レイヤー 3 のトラフィック プロパティにトラフィックを一致させることができます。特定のネットワーク レイヤーに修飾子を使用するか、あるいは修飾子を組み合わせてより正確にパケットを一致させることができます。

- システム トラフィック修飾子を使用して、そのグループのポートを通る仮想インフラストラクチャデータのタイプにパケットを一致させます。例えば、ネットワーク ストレージへのデータ転送に NFS を選択することができます。

- MAC トラフィック修飾子を使用して、MAC アドレス、VLAN ID、次のレベルのプロトコルでパケットを一致させます。

分散ポート グループの VLAN ID でのトラフィックの検索は、仮想ゲスト タギング (VGT) と連携して動作します。仮想スイッチ タギング (VST) がアクティブの時にトラフィックを VLAN ID と一致させるには、アップリンク ポート グループまたはアップリンク ポートのルールを使用します。

- IP トラフィック修飾子を使用して、IP バージョン、IP アドレス、次のレベルのプロトコルとポートでパケットを一致させます。

- 8 [ルール] ダイアログ ボックスで、[OK]をクリックしてルールを保存します。

分散ポートまたはアップリンク ポート上のネットワーク トラフィック ルールの操作

仮想マシンまたは物理アダプタに関連するトラフィックを処理するためのポリシーを設定するには、分散ポートまたはアップリンク ポート グループにトラフィック ルールを定義します。特定トラフィックのフィルタリングおよび QoS 要求の記述が可能です。

■ 分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィック ルールの表示

分散ポートまたはアップリンク ポートのトラフィックのフィルタリングとマーキング ポリシーを形成するトラフィック ルールを確認します。

■ 分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィック ルールの編集

トラフィック ルールを作成または編集し、そのパラメータを使用して、分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックをフィルタリングまたはマーキングするためのポリシーを構成します。

■ 分散ポートまたはアップリンク ポート上のルールの優先順位の変更

分散ポートまたはアップリンク ポートのトラフィック フィルタリング ポリシーとマーキング ポリシーを形成するルールの順番を並べ替えて、セキュリティと QoS に関してトラフィックを解析するための操作の順番を変更します。

■ 分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィック ルールの削除

分散ポートまたはアップリンク ポートのトラフィック ルールを削除して、仮想マシンまたは物理アダプタに流れ込む特定のタイプのパケットへのフィルタリングまたはマーキングを停止します。

分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィック ルールの表示

分散ポートまたはアップリンク ポートのトラフィックのフィルタリングとマーキング ポリシーを形成するトラフィック ルールを確認します。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 分散ポートまたはアップリンク ポートに移動します。
 - スイッチの分散ポートに移動するには、[管理] - [ポート] の順にクリックします。
 - アップリンク ポート グループのアップリンク ポートに移動するには、[関連オブジェクト] - [アップリンク ポート グループ] の順にクリックし、リストのアップリンク ポート グループをダブルクリックして、[管理] タブの [ポート] を選択します。
- 2 リストからポートを選択します。
- 3 [分散ポート設定を編集します] をクリックします。
- 4 [トラフィックのフィルタリングとマーキング] を選択します。
- 5 ポート レベルでトラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[オーバーライド] をクリックし、[ステータス] ドロップダウン メニューから [有効] を選択します。

- 6 [アクション]を実行し、ルールでトラフィックがフィルターされているか（許可または拒否）、あるいはトラフィックに特別な QoS 要求でマーキングされているか（タグ）を確認します。

- 7 上部のリストで、トラフィックの検索基準を表示するルールを選択します。

ルールのトラフィック修飾子パラメータが [トラフィック修飾子] リストに表示されます。

分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィック ルールの編集

トラフィック ルールを作成または編集し、そのパラメータを使用して、分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックをフィルタリングまたはマーキングするためのポリシーを構成します。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 分散ポートまたはアップリンク ポートに移動します。
 - スイッチの分散ポートに移動するには、[管理] - [ポート] の順にクリックします。
 - アップリンク ポート グループのアップリンク ポートに移動するには、[関連オブジェクト] - [アップリンク ポート グループ] の順にクリックし、リストのアップリンク ポート グループをダブルクリックして、[管理] タブの [ポート] を選択します。
- 2 リストからポートを選択します。
- 3 [分散ポート設定を編集します] をクリックします。
- 4 [トラフィックのフィルタリングとマーキング]を選択します。
- 5 ポート レベルでトラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[オーバーライド]をクリックし、[ステータス]ドロップダウン メニューから [有効]を選択します。
- 6 [新規]をクリックして新規ルールを作成するか、ルールを選択して [編集]をクリックして、ルールを編集します。

分散ポート グループまたはアップリンク ポート グループから継承したルールを変更できます。この方法では、ルールはポートの範囲内で固有になります。

次のステップ

ネットワーク トラフィック ルールに名前を付け、対象のトラフィックを拒否、許可、あるいはタグ付けします。

分散ポートまたはアップリンク ポート上のルールの優先順位の変更

分散ポートまたはアップリンク ポートのトラフィック フィルタリング ポリシーとマーキング ポリシーを形成するルールの順番を並べ替えて、セキュリティと QoS に関してトラフィックを解析するための操作の順番を変更します。

vSphere Distributed Switch はネットワーク トラフィック ルールを厳密に適用します。パケットがすでにルールに適合している場合、そのパケットはポリシー内の次のルールには渡されません。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 分散ポートまたはアップリンク ポートに移動します。
 - スイッチの分散ポートに移動するには、[管理] - [ポート] の順にクリックします。
 - アップリンク ポート グループのアップリンク ポートに移動するには、[関連オブジェクト] - [アップリンク ポート グループ] の順にクリックし、リストのアップリンク ポート グループをダブルクリックして、[管理] タブの [ポート] を選択します。
- 2 リストからポートを選択します。
- 3 [分散ポート設定を編集します] をクリックします。
- 4 [トラフィックのフィルタリングとマーキング]を選択します。
- 5 ポート レベルでトラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[オーバーライド]をクリックし、[ステータス]ドロップダウン メニューから [有効]を選択します。
- 6 ルールを選択し、矢印ボタンを使用してその優先順位を変更します。
- 7 [OK]をクリックして変更内容を保存します。

分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィック ルールの削除

分散ポートまたはアップリンク ポートのトラフィック ルールを削除して、仮想マシンまたは物理アダプタに流れ込む特定のタイプのバケットへのフィルタリングまたはマーキングを停止します。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 分散ポートまたはアップリンク ポートに移動します。
 - スイッチの分散ポートに移動するには、[管理] - [ポート] の順にクリックします。
 - アップリンク ポート グループのアップリンク ポートに移動するには、[関連オブジェクト] - [アップリンク ポート グループ] の順にクリックし、リストのアップリンク ポート グループをダブルクリックして、[管理] タブの [ポート] を選択します。
- 2 リストからポートを選択します。
- 3 [分散ポート設定を編集します] をクリックします。
- 4 [トラフィックのフィルタリングとマーキング]を選択します。
- 5 ポート レベルでトラフィックのフィルタリングとマーキングが無効の場合、[オーバーライド]をクリックし、[ステータス]ドロップダウン メニューから [有効]を選択します。

6 ルールを選択し、[削除] をクリックします。

7 [OK] をクリックします。

分散ポートまたはアップリンク ポート上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングの無効化

ポート上のトラフィックのフィルタリングおよびマーキングのポリシーを無効にして、セキュリティ確保のためのフィルタリングや QoS のマーキングを行うことなく、トラフィックが仮想マシンまたは物理アダプタに流れるようにします。

前提条件

分散ポート レベルでポリシーをオーバーライドするには、このポリシーのポートレベルのオーバーライド オプションを有効にします。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#) を参照してください。

手順

- 1 分散ポートまたはアップリンク ポートに移動します。
 - スイッチの分散ポートに移動するには、[管理] - [ポート] の順にクリックします。
 - アップリンク ポート グループのアップリンク ポートに移動するには、[関連オブジェクト] - [アップリンク ポート グループ] の順にクリックし、リストのアップリンク ポート グループをダブルクリックして、[管理] タブの [ポート] を選択します。
- 2 リストからポートを選択します。
- 3 [分散ポート設定を編集します] をクリックします。
- 4 [トラフィックのフィルタリングとマーキング] を選択します。
- 5 [オーバーライド] をクリックし、[ステータス] ドロップダウン メニューから [無効] を選択します。
- 6 [OK] をクリックします。

フィルタリングとマーキングのためのトラフィックの修飾

フィルタリングするか、または QoS タグでマーキングするトラフィックは、ストレージ用や vCenter Server 管理用のデータなどの伝送されるインフラストラクチャ データのタイプ、およびレイヤー 2 やレイヤー 3 のプロパティに一致させることができます。

トラフィックを規則の範囲内でより正確に一致させるには、システム データ タイプ、レイヤー 2 のヘッダー、およびレイヤー 3 のヘッダーの基準を組み合わせます。

システム トラフィック修飾子

システム トラフィック修飾子をポート グループまたはポートのルールで使用することで、特定のシステム データ トラフィックに QoS タグ付け、許可、またはドロップを指定できます。

システム トラフィック タイプ

グループのポートを介して、システム データを運ぶトラフィックのタイプ、すなわち、vCenter Server、ストレージ、VMware vSphere® vMotion®、および vSphere Fault Tolerance から管理するためのトラフィックを選択できます。特定のトラフィック タイプ、つまりインフラストラクチャ機能以外のすべてのシステム データ トラフィックのみマーキングまたはフィルタリングが可能です。たとえば、vCenter Server、ストレージ、および vMotion からの管理トラフィックに QoS 値のマーキングまたはフィルタリングを行い、Fault Tolerance データを運んでいるトラフィックには行わないことが可能です。

MAC トラフィック修飾子

MAC トラフィック修飾子をルール内で使用することで、MAC アドレス、VLAN ID、フレームのペイロードを使用する次のレベルのプロトコルなど、パケットのレイヤー 2（データ リンク レイヤー）プロパティに対する一致条件を定義できます。

プロトコル タイプ

MAC トラフィック修飾子の[プロトコル タイプ]属性は、イーサネット フレームの EtherType フィールドに対応しています。EtherType は、フレームのペイロードを使用する次のレベルのプロトコルのタイプを表します。

プロトコルをドロップダウン メニューから選択するか、プロトコルの 16 進数を入力することができます。たとえば、Link Layer Discovery Protocol (LLDP) のトラフィックを取得するには、**88cc** と入力します。

VLAN ID

MAC トラフィック修飾子の VLAN ID 属性を使用すると、特定の VLAN 内のトラフィックをマーキングまたはフィルタリングできます。

注： 分散ポート グループの VLAN ID 修飾子は、仮想ゲスト タギング (VGT) と連携して動作します。

あるフローに仮想スイッチ タギング (VST) で VLAN ID タグが付けられている場合、分散ポート グループまたは分散ポートのルールにこの ID を使用して検索することはできません。これは、Distributed Switch では、トラフィックのタグを解除した後に、VLAN ID などのルール条件を確認するためです。この場合、VLAN ID でトラフィックを正しく一致させるには、アップリンク ポート グループまたはアップリンク ポートのルールを使用する必要があります。

ソース アドレス

属性のソース アドレス グループを使用すると、パケットをソース MAC アドレスまたはネットワークで一致させることができます。

比較演算子を使用すると、指定のソース アドレスまたはネットワークを持つパケットや持たないパケットのマーキングやフィルタリングが可能です。

トラフィックのソースを一致させる方法は、いくつかあります。

表 8-6. トラフィックを MAC ソース アドレスでフィルタリングまたはマーキングするパターン

トラフィックのソース アドレスに一致するパラメータ	比較演算子	ネットワーク引数の形式
MAC アドレス	[一致] または [が次でない]	一致させる MAC アドレスを入力します。コロンを使用し、含まれているオクテットを分離します。
MAC ネットワーク	[一致する] または [一致しない]	ネットワーク内の最下位アドレスとマスクを入力します。ネットワーク ビットの位置には 1 を、ホスト部分には 0 を設定します。

たとえば、プレフィックスが 05:50:56 でビット長が 23 の MAC ネットワークの場合、アドレスを **00:50:56:00:00:00**、マスクを **ff:ff:fe:00:00:00** と設定します。

ターゲット アドレス

属性のターゲット アドレス グループを使用すると、パケットをターゲット アドレスで一致させることができます。MAC ターゲット アドレスのオプションの形式は、ソース アドレスと同じです。

比較演算子

肯定的な比較または否定を使用して、MAC 修飾子でより詳細な条件でトラフィックを一致させることができます。演算子を、特定の属性を持つパケット以外の全パケットがルールの範囲内に入るように指定することが可能です。

IP トラフィック修飾子

IP トラフィック修飾子をルール内で使用することで、IP バージョン、IP アドレス、次のレベルのプロトコル、ポートなど、レイヤー 3（ネットワーク レイヤー）プロパティに対するトラフィックの一致条件を定義できます。

プロトコル

IP トラフィック修飾子の [プロトコル] 属性は、パケットのペイロードを消費する次のレベルのプロトコルを表します。プロトコルをドロップダウン メニューから選択するか、プロトコルの 10 進数を RFC 1700 に従って入力することができます。

TCP および UDP プロトコルの場合は、トラフィックをソース ポートとターゲット ポートで一致させることもできます。

ソース ポート

ソース ポート属性を使用すると、TCP または UDP パケットをソース ポートで一致させることができます。トラフィックをソース ポートと一致させる場合は、トラフィックの方向に注意してください。

ターゲット ポート

ターゲット ポート属性を使用すると、TCP または UDP パケットをターゲット ポートで一致させることができます。トラフィックをターゲット ポートと一致させる場合は、トラフィックの方向に注意してください。

ソース アドレス

ソース アドレス属性を使用すると、パケットをソース アドレスまたはサブネットで一致させることができます。トラフィックをソース アドレスまたはネットワークと一致させる場合は、トラフィックの方向に注意してください。

トラフィックのソースを一致させる方法は、いくつかあります。

表 8-7. トラフィックを IP ソース アドレスでフィルタリングまたはマーキングするパターン

トラフィックのソース アドレスに一致するパラメータ	比較演算子	ネットワーク引数の形式
IP バージョン	[任意]	ドロップダウン メニューから IP バージョンを選択します。
IP アドレス	[が次である] または [が次でない]	一致させる IP アドレスを入力します。
IP サブネット	[一致する] または [一致しない]	サブネット内の最下位アドレスとサブネット プリフィックスのビット長を入力します。

ターゲット アドレス

パケットを IP アドレス、サブネット、または IP バージョンで一致させるには、ターゲット アドレスを使用します。ターゲット アドレスの形式は、ソース アドレスと同じです。

比較演算子

肯定的な比較または否定を使用すると、IP 修飾子でより綿密な条件でトラフィックを一致させることができます。特定の属性を持つパケット以外の全パケットがルールの範囲内に入るように定義することが可能です。

vSphere Distributed Switch 上にある複数のポート グループのポリシーの管理

vSphere Distributed Switch 上にある複数のポート グループのネットワーク ポリシーを変更できます。

前提条件

1 つ以上のポート グループを持つ vSphere Distributed Switch を作成します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 オブジェクト ナビゲータで Distributed Switch を右クリックし、[分散ポート グループ] - [分散ポート グループの管理] を選択します。
- 3 [ポート グループ ポリシーの選択] ページに移動し、変更するポリシー カテゴリの横にあるチェック ボックスをオンにして、[次へ]をクリックします。

オプション	説明
セキュリティ	選択したポート グループに対し、MAC アドレス変更、偽装転送、および無差別モードを設定します。
トラフィック シェーピング	選択したポート グループの入力側と出力側トラフィックの平均バンド幅、ピーク バンド幅、バースト サイズを設定します。
VLAN	選択したポート グループが物理 VLAN に接続する方法を構成します。
チーミングおよびフェイルオーバー	選択したポート グループについて、ロード バランシング、フェイルオーバー検出、スイッチ通知、およびフェイルオーバーの順番を設定します。

オプション	説明
リソース割り当て	選択したポート グループについて、ネットワーク リソース プールの関連付けを設定します。このオプションは、vSphere Distributed Switch バージョン 5.0.0 以降で使用できます。
監視	選択したポート グループで NetFlow を有効化または無効化します。このオプションは、vSphere Distributed Switch バージョン 5.0.0 以降で使用できます。
トラフィックのフィルタリングとマーキング	選択したポート グループのポートを通る特定のタイプのトラフィックをフィルタリング（許可またはドロップ）とマーキングするようにポリシーを構成します。このオプションは、vSphere Distributed Switch バージョン 5.5 以降で使用できます。
その他	選択したポート グループで、ポートのブロックを有効化または無効化します。

- 4 [ポート グループの選択] ページに移動して、編集する分散ポート グループを選択し、[次へ]をクリックします。
- 5 （オプション）[セキュリティ] ページに移動し、ドロップダウン メニューを使用して、セキュリティ例外を編集して、[次へ]をクリックします。

オプション	説明
無差別モード	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。ゲスト アダプタを無差別モードに設定しても、アダプタが受信するフレームには影響しません。 ■ [承諾]。ゲスト アダプタを無差別モードに設定すると、アダプタの接続先であるポート グループの VLAN ポリシーで許可され、vSphere Distributed Switch を通過したすべてのフレームが検出されます。
MAC アドレス変更	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。[拒否]に設定し、ゲスト OS でアダプタの MAC アドレスが .vmx 構成ファイル内に設定された MAC アドレス以外のアドレスに変更されると、すべての受信フレームがドロップされます。 ■ [承諾]。[承諾]に設定し、ゲスト OS でアダプタの MAC アドレスが .vmx 構成ファイル内の MAC アドレスに一致するよう、MAC アドレスがゲスト OS によって再度変更されると、受信フレームの伝送が再開されます。 ■ [承諾]。MAC アドレスを意図的な効果を持つゲスト OS から変更します。変更後の MAC アドレス宛のフレームが受信されます。
偽装転送	<ul style="list-style-type: none"> ■ [拒否]。送信元の MAC アドレスが、アダプタにその時点で設定されている MAC アドレスと異なる場合、すべての送信フレームが破棄されます。 ■ [承諾]。フィルタリングは実行されず、送信フレームはすべて伝送されます。

- 6 （オプション）[トラフィック シェーピング] ページに移動し、ドロップダウン メニューを使用して、入力側または出力側のトラフィック シェーピングを有効または無効に設定し、[次へ]をクリックします。

オプション	説明
ステータス	[入力側トラフィック シェーピング] または [出力側トラフィック シェーピング] を有効にした場合、このポート グループに関連付けられている各 VMkernel アダプタまたは仮想ネットワーク アダプタに割り当てるネットワーク バンド幅の大きさを制限することになります。ポリシーを無効にすると、デフォルトで、物理ネットワークへの制限および障害のない接続が可能になります。
平均バンド幅	長期間にわたって平均化された、ポート全体で許容される毎秒ビット数、つまり、許容される平均的な負荷を設定します。

オプション	説明
ピーク バンド幅	負荷の高いトラフィックの送受信時にポート全体で許容される最大の毎秒ビット数です。バースト時用の余剰分を使用しているときは常に、ポートが使用するバンド幅の上限になります。
バースト サイズ	バースト時に許容する最大バイト数です。このパラメータが設定されていると、ポートは割り当てられているすべてのバンド幅を使用しない場合に、バースト ボーナスを取得できます。 [平均バンド幅]で指定した以上のバンド幅がポートに必要な場合、バースト ボーナスが利用可能ならば、高速なデータ転送が許容されます。高速転送を行うバーストで追加可能な累積バイト数の上限をこのパラメータで設定します。

- 7 (オプション) [VLAN] ページに移動し、ドロップダウン メニューを使用して、VLAN ポリシーを編集して、[次へ]をクリックします。

オプション	説明
なし	VLAN を使用しません。
VLAN	[VLAN ID] フィールドに 1 ~ 4094 までの数字を入力します。
VLAN トランク	[VLAN トランク範囲] を入力します。
プライベート VLAN	使用可能なプライベート VLAN を選択します。

- 8 (オプション) [チーミングおよびフェイルオーバー] ページに移動し、ドロップダウン メニューを使用して設定を編集して、[次へ]をクリックします。

オプション	説明
ロード バランシング	<p>IP ベースのチーミングでは、イーサ ネットワークで物理スイッチを構成する必要があります。他のオプションに関しては、イーサ ネットワークを無効にします。アップリンクの選択方法を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [発信元の仮想ポートに基づいたルート]。トラフィックが分散スイッチに入る仮想ポートに基づいてアップリンクを選択します。 ■ [IP ハッシュに基づいたルート]。各パケットの発信元と宛先の IP アドレスのハッシュに基づいてアップリンクを選択します。IP 以外のパケットの場合は、すべてそれらのオフセットを使用してハッシュを計算します。 ■ [発信元 MAC ハッシュに基づいたルート]。送信元のイーサネットのハッシュに基づいて、アップリンクを選択します。 ■ [物理 NIC 負荷に基づいたルート]。物理 NIC の現在の負荷に基づいてアップリンクを選択します。 ■ [明示的なフェイルオーバー順序を使用]。アクティブ アダプタのリストから、フェイルオーバーの検知基準を満たした最上位のアップリンクを常に使用します。
ネットワークのフェイルオーバー検出	<p>フェイルオーバーの検出に使用する方法を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [リンク状態のみ]。ネットワーク アダプタが提供するリンク ステータスのみに依存します。このオプションでは、ケーブルの抜けや物理スイッチの電源障害などの障害は検出されますが、スパンニング ツリーによる物理スイッチ ポートのブロック、物理スイッチ ポートの誤った VLAN への構成、物理スイッチの反対側のケーブルの抜けなどの構成エラーは検出されません。 ■ [ビーコンの検知]。チーム内のすべての NIC に対してビーコンの検知の送信および待機を行い、この情報とリンク ステータスを使用してリンク故障を確認します。IP ハッシュに基づくロード バランシングを使用する場合は、ビーコンの検知を使用しないでください。

オプション	説明
スイッチへの通知	<p>[はい] または [いいえ] を選択して、フェイルオーバー時にスイッチへの通知を行います。ポート グループを使用する仮想マシンが、Microsoft NLB (Network Load Balancing) をユニキャスト モードで使用している場合は、このオプションを使用しないでください。</p> <p>[はい]を選択すると、フェイルオーバー イベントによって、仮想 NIC が分散スイッチに接続される場合、または、その仮想 NIC のトラフィックがチーム内の別の物理 NIC を経由する場合には、ネットワークを介して通知が送信され、物理スイッチの検索テーブルを更新します。このプロセスは、フェイルオーバー発生と vMotion による移行の待ち時間を最小限に抑制するために使用します。</p>
フェイルバック	<p>[はい] または [いいえ] を選択して、フェイルバックを有効または無効にします。</p> <p>このオプションは、障害から復旧したあとで、物理アダプタをどのようにアクティブ モードに戻すかを決定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [はい] (デフォルト) アダプタは障害が回復すると即座にアクティブ モードに戻り、スタンバイ アダプタがある場合は、スロットを引き継いだスタンバイ アダプタに代わります。 ■ [いいえ]故障したアダプタは、アクティブな別のアダプタが故障して、交換が必要になるまで、復旧後も非アクティブのままになります。
フェイルオーバーの順序	<p>アップリンクのワークロードの分散方法を選択します。一部のアップリンクを使用しつつ、使用中のアップリンクに障害が発生した際に他のアップリンクを確保するには、アップリンクを異なるグループに移動して、この条件を設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [有効なアップリンク].ネットワーク アダプタ接続が稼動中で有効な場合に、アップリンクを継続的に使用します。 ■ [スタンバイの dvUplink].有効なアダプタのいずれかの接続が利用できない場合に、このアップリンクを使用します。IP ハッシュに基づくロード バランシングを使用する場合は、スタンバイ アップリンクを構成しないでください。 ■ [未使用の dvUplink].このアップリンクは使用しません。

- 9 (オプション) [リソース割当て] ページに移動して、ネットワーク リソース プールのドロップダウン メニューを使用して、リソース割当てを追加するか削除して、[次へ]をクリックします。
- 10 (オプション) [監視] ページに移動し、ドロップダウン メニューを使用して、NetFlow を有効または無効に設定して、[次へ]をクリックします。

オプション	説明
無効	NetFlow は分散ポート グループで無効になります。
有効化	NetFlow は分散ポート グループで有効になります。NetFlow 設定を vSphere Distributed Switch レベルで構成できます。

- 11 (オプション) [トラフィックのフィルタリングとマーキング] ページで、[ステータス] ドロップダウン メニューでトラフィックのフィルタリングとマーキングを有効または無効にし、特定のデータ フローをフィルタリングまたはマーキングするトラフィック ルールを構成して [次へ] をクリックします。

ルールに次の属性を設定して対象のトラフィックとそれに対する操作を定義できます。

オプション	説明
名前	ルールの名前
操作	<ul style="list-style-type: none"> ■ [許可] : 特定のタイプのトラフィックにアクセス権を付与します。 ■ [ドロップ] : 特定のタイプのトラフィックへのアクセスを拒否します。 ■ [タグ:] : トラフィックに CoS および DSCP タグを挿入またはそれらで再タグ付けして、QoS に基づいてトラフィックを分類します。
トラフィック方向	<p>ルールのトラフィック方向 (受信、発信、または受発信) を設定します。</p> <p>トラフィック方向はトラフィックの入力と出力をどのように認識するかについても影響します。</p>
システム トラフィック修飾子	<p>システム トラフィックがルールの範囲に含まれることを示し、ルールを適用するインフラストラクチャ プロトコルのタイプを設定します。たとえば、vCenter Server からの管理トラフィックに優先順位タグをマーキングします。</p>

オプション	説明
MAC 修飾子	<p>ルールのトラフィックをレイヤー 2 のヘッダーで修飾します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [プロトコル タイプ]: バイロードを使用する次のレベルのプロトコル (IPv4、IPv6 など) を設定します。 <p>この属性はイーサネット フレームの EtherType フィールドに対応します。</p> <p>プロトコルをドロップダウン メニューから選択するか、プロトコルの 16 進数を入力することができます。</p> <p>たとえば、Link Layer Discovery Protocol (LLDP) のトラフィックを特定するには、「88cc」と入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [VLAN ID]: VLAN でトラフィックを特定します。 <p>分散ポート グループの VLAN ID 修飾子は、仮想ゲスト タギング (VGT) と連携して動作します。</p> <p>あるフローに仮想スイッチ タギング (VST) で VLAN ID のタグが付けられている場合、分散ポート グループのルールでこの ID を使用してフローを特定することはできません。これは、Distributed Switch では、トラフィックのタグを解除した後に、VLAN ID などのルール条件を確認するためです。トラフィックと VLAN ID を正常に一致させるには、アップリンク ポート グループまたはアップリンク ポートのルールを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [ソース フィルタ]: 単一の MAC アドレスまたは MAC ネットワークを設定してソース アドレスでパケットを一致させます。 <p>MAC ネットワークには、ネットワーク内の最下位アドレスとワイルドカード マスクを入力します。マスクのネットワーク ビットの位置には 0 が、ホスト部分には 1 が含まれます。</p> <p>たとえば、プリフィックスが 05:50:56 でビット長が 23 の MAC ネットワークの場合、アドレスを「00:50:56:00:00:00」、マスクを「00:00:01:ff:ff:ff」と設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [ターゲット フィルタ]: 単一の MAC アドレスまたは MAC ネットワークを設定してターゲット アドレスでパケットを一致させます。MAC ターゲット アドレスは、ソース アドレスと同じ形式をサポートしています。
IP 修飾子	<p>ルールのトラフィックをレイヤー 3 のヘッダーで修飾します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [プロトコル]: バイロードを使用する次のレベルのプロトコル (TCP、UDP など) を設定します。 <p>プロトコルをドロップダウン メニューから選択するか、プロトコルの 10 進数を「RFC 1700, Assigned Numbers」の説明に従って入力することができます。</p> <p>TCP および UDP プロトコルの場合は、ソース ポートとターゲット ポートを設定することもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ [ソース ポート]: TCP または UDP パケットをソース ポートに一致させます。パケットと一致するソース ポートを決めるとき、ルールの範囲内にあるトラフィックの方向も考慮に入れます。 ■ [ターゲット ポート]: ソース ポートによって TCP または UDP パケットを一致させます。パケットと一致するターゲット ポートを決めるとき、ルールの範囲内にあるトラフィックの方向も考慮に入れます。 ■ [ソース フィルタ]: IP バージョン、単一の IP アドレスまたはサブネットを設定してソース アドレスでパケットを一致させます。 <p>サブネットの場合は、最下位アドレスとプリフィックスのビット長を入力します。</p>

オプション	説明
	<ul style="list-style-type: none"> ■ [ターゲット フィルタ]: IP バージョン、単一の IP アドレスまたはサブネットを設定してソース アドレスでパケットを一致させます。IP ターゲット アドレスは、ソース アドレスと同じ形式をサポートしています。

12 (オプション) [その他] ページに移動し、ドロップダウン メニューの[はい]または[いいえ]を選択し、[次へ]をクリックします。

[はい]を選択して、ポート グループの全ポートをシャットダウンします。これによって、そのポートを使用しているホストまたは仮想マシンの通常のネットワーク操作が中断される可能性があります。

13 [終了準備の完了] ページで設定を確認し、[終了]をクリックします。

設定を変更するには、[戻る] ボタンを使用します。

ポート ブロック ポリシー

ポート ブロック ポリシーを使用することで、ポートのデータ送受信を選択的にブロックできます。

分散ポート グループのポート ブロック ポリシーの編集

分散ポート グループのすべてのポートをブロックできます。

分散ポート グループのポートをブロックすると、そのポートを使用しているホストまたは仮想マシンの通常のネットワーク操作が中断される可能性があります。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 オブジェクト ナビゲータで Distributed Switch を右クリックし、[分散ポート グループ] - [分散ポート グループの管理] を選択します。
- 3 [その他] チェック ボックスを選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 構成する分散ポート グループを1つ以上選択し、[次へ] をクリックします。
- 5 [すべてのポートをブロック] ドロップダウン メニューから、ポート ブロックを有効または無効にして、[次へ] をクリックします。
- 6 設定を確認して、[終了] をクリックします。

分散ポートまたはアップリンク ポートのブロック ポリシーの編集

個々の分散ポートまたはアップリンク ポートをブロックできます。

ポート経由の送信をブロックすると、そのポートを使用しているホストまたは仮想マシンの通常のネットワーク操作が中断される可能性があります。

前提条件

ホスト レベルのオーバーライドを有効にします。を参照してください。 [ポート レベルでのネットワーク ポリシーのオーバーライドの構成](#)

手順

- 1 分散ポートまたはアップリンク ポートに移動します。
 - スイッチの分散ポートに移動するには、[管理] - [ポート] の順にクリックします。
 - アップリンク ポート グループのアップリンク ポートに移動するには、[関連オブジェクト] - [アップリンク ポート グループ] の順にクリックし、リストのアップリンク ポート グループをダブルクリックして、[管理] タブの [ポート] を選択します。
- 2 リストからポートを選択します。
- 3 [分散ポート設定を編集します] をクリックします。
- 4 [その他] セクションで [オーバーライド] チェック ボックスを選択して、ドロップダウン メニューでポートのブロックを有効化または無効化します。
- 5 [OK] をクリックします。

VLAN を使用したネットワーク トラフィックの分離

9

VLAN を使用すると、ネットワーク プロトコル スタックのレイヤー 2 レベルでネットワークを複数の論理ブロードキャスト ドメインに分割できます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- VLAN 構成
- プライベート VLAN

VLAN 構成

仮想 LAN (VLAN) は、単一の物理 LAN セグメントをさらに分離して、ポート グループが物理的に別々のセグメントにあるかのように、互いに分離できます。

vSphere で VLAN を使用するメリット

vSphere 環境での VLAN 構成には、特定のメリットがあります。

- ESXi ホストを既存の VLAN トポロジに統合します。
- ネットワーク トラフィックを分離して保護します。
- ネットワーク トラフィックの輻輳が軽減します。

vSphere 環境に VLAN を導入するメリットと主要原則に関するビデオをご覧ください。



vSphere 環境での VLAN の使用

(https://vmwaretv.vmware.com/media/t/1_hff29dl8)

VLAN タギング モード

vSphere は、ESXi で 3 つの VLAN タギング モード (外部スイッチ タギング (EST)、仮想スイッチ タギング (VST)、仮想ゲスト タギング (VGT)) をサポートします。

タギング モード	スイッチ ポート グループでの VLAN ID	説明
EST	0	物理スイッチで VLAN タギングが実行されます。ホストのネットワーク アダプタは、物理スイッチのアクセス ポートに接続します。
VST	1 ～ 4094 の範囲内	パケットがホストから送信される前に、仮想スイッチで VLAN タギングが実行されます。ホストのネットワーク アダプタは、物理スイッチのトランク ポートに接続されている必要があります。
VGT	<ul style="list-style-type: none"> ■ 標準スイッチの場合は 4095 ■ Distributed Switch の場合は VLAN の範囲および個々の VLAN 	<p>仮想マシンで VLAN タギングが実行されます。仮想スイッチは、仮想マシンのネットワーク スタックと外部スイッチの間でパケットを転送するときに、VLAN タグを保持します。ホストのネットワーク アダプタは、物理スイッチのトランク ポートに接続されている必要があります。</p> <p>vSphere Distributed Switch では、VGT の変更がサポートされています。セキュリティ上の理由から、Distributed Switch は、特定の VLAN に所属するパケットを渡すようにしか構成できません。</p> <p>注： VGT を使用する場合は、802.1Q VLAN トランク ドライバが仮想マシンのゲスト OS にインストールされている必要があります。</p>

仮想スイッチでの VLAN タギングのモードについて説明するビデオをご覧ください。



vSphere での VLAN タギングのモード

(https://vmwaretv.vmware.com/media/t/1_3bluh3s4)

プライベート VLAN

プライベート VLAN は、論理ブロードキャスト ドメインの追加セグメントをより小さい複数のブロードキャスト サブドメインに追加することによって VLAN ID の制限を解決するために使用します。

プライベート VLAN は、プライマリ VLAN ID によって識別されます。プライマリ VLAN ID は、関連付けられた複数のセカンダリ VLAN ID を持つことができます。プライマリ VLAN は [無差別] なので、プライベート VLAN 上のポートは、プライマリ VLAN として設定されたポートと通信できます。セカンダリ VLAN 上のポートは、無差別ポートとのみ通信する [隔離] か、無差別ポートおよび同じセカンダリ VLAN 上のほかのポートの両方と通信する [コミュニティ] のいずれかです。

ホストと物理ネットワークのほかの部分との間でプライベート VLAN を使用するには、ホストに接続された物理スイッチが、プライベート VLAN 対応でなければならない、ESXi でプライベート VLAN 機能に使用されている VLAN ID を使用して構成されている必要があります。動的な MAC+VLAN ID ベースのラーニングを使用している物理スイッチでは、対応するすべてのプライベート VLAN ID を、スイッチの VLAN データベースに事前に入れておく必要があります。

プライベート VLAN の作成

vSphere Distributed Switch で必要なプライベート VLAN を作成して、分散ポートを割り当ててプライベート VLAN に参加できるようにします。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。

- 3 [プライベート VLAN] を選択し、[編集] をクリックします。
- 4 プライマリ VLAN を追加するには、[プライマリ VLAN ID] で [追加] をクリックし、プライマリ VLAN の ID を入力します。
- 5 プライマリ VLAN ID の前にある [+]（プラス記号）をクリックします。
プライマリ プライベート VLAN は [セカンダリ プライベート VLAN ID] の下にも表示されます。
- 6 セカンダリ VLAN を追加するには、右側のペインで [追加] をクリックし、VLAN の ID を入力します。
- 7 セカンダリ VLAN ID の前にある [+]（プラス記号）をクリックします。
- 8 [セカンダリ VLAN タイプ] 列のドロップダウン メニューで、[隔離] または [コミュニティ] を選択します。
- 9 [OK] をクリックします。

次のステップ

分散ポート グループまたはポートを構成してトラフィックをプライベート VLAN に関連付けます。[分散ポート グループまたは分散ポートでの VLAN タギングの構成](#) を参照してください。

プライマリ プライベート VLAN の削除

vSphere Distributed Switch の構成から未使用のプライマリ VLAN を削除します。

プライマリ プライベート VLAN を削除すると、関連付けられたセカンダリ プライベート VLAN も削除されます。

前提条件

プライマリ VLAN およびその関連付けられたセカンダリ VLAN を使用するように設定されているポート グループがないことを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [プライベート VLAN] を選択し、[編集] をクリックします。
- 4 削除するプライマリ プライベート VLAN を選択します。
- 5 プライマリ VLAN ID リストの下で [削除] をクリックします。
- 6 [OK] をクリックして、プライマリ VLAN を削除することを確認します。
- 7 [OK] をクリックします。

セカンダリ プライベート VLAN の削除

vSphere Distributed Switch の構成から未使用のセカンダリ プライベート VLAN を削除します。

前提条件

セカンダリ VLAN を使用するように構成されているポート グループがないことを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [プライベート VLAN] を選択し、[編集] をクリックします。
- 4 プライマリ プライベート VLAN を選択します。
関連付けられているセカンダリ プライベート VLAN が右側に表示されます。
- 5 削除するセカンダリ プライベート VLAN を選択します。
- 6 セカンダリ VLAN ID リストの下で、[削除] をクリックし、[OK] をクリックします。

ネットワーク リソースの管理

10

vSphere では、ネットワーク リソースの管理に使用できるいくつかの異なる方法が提供されます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [DirectPath I/O](#)
- [Single Root I/O Virtualization \(SR-IOV\)](#)
- [ジャンボ フレーム](#)
- [TCP セグメンテーション オフロード](#)
- [Large Receive Offload](#)
- [NetQueue とネットワーク パフォーマンス](#)

DirectPath I/O

DirectPath I/O によって、I/O メモリ管理ユニットがあるプラットフォームの物理 PCI 機能への仮想マシンのアクセスが可能になります。

DirectPath で構成されている仮想マシンでは、次の機能は使用できません。

- 仮想デバイスのホット アドおよび削除
- サスペンドおよびレジューム
- 記録および再生
- フォールト トレランス
- 高可用性
- DRS (可用性の制限。仮想マシンはクラスタの一部にすることは可能ですが、ホスト間では移行できません)
- スナップショット

次の機能は、Cisco Virtual Machine Fabric Extender (VM-FEX) 分散スイッチを使用して Cisco Unified Computing Systems (UCS) 上の DirectPath I/O で構成された仮想マシンについてのみ使用できます。

- vMotion
- 仮想デバイスのホット アドおよび削除
- サスペンドおよびレジューム

- 高可用性
- DRS
- スナップショット

サポート対象のスイッチとスイッチの設定情報の詳細は、Cisco VM-FEX のドキュメントを参照してください。

■ ホストでのネットワーク デバイスのパススルーの有効化

パススルー デバイスは、リソースを効率よく使用するための手段を提供し、環境のパフォーマンスを高めます。ホストに対してネットワーク デバイスの DirectPath I/O パススルーを有効化できます。

■ 仮想マシンでの PCI デバイスの構成

パススルー デバイスは、リソースをより効率よく使用するための手段を提供し、環境のパフォーマンスを高めます。vSphere Web Client で仮想マシンのパススルー PCI デバイスを構成できます。

■ 仮想マシンでの vMotion を使用した DirectPath I/O の有効化

サポート対象の Cisco UCS Virtual Machine Fabric Extender (VM-FEX) Distributed Switch を 1 つ以上持つ Cisco UCS システムにあるデータセンターの仮想マシンに対して、vMotion を使用した DirectPath I/O を有効にできます。

ホストでのネットワーク デバイスのパススルーの有効化

パススルー デバイスは、リソースを効率よく使用するための手段を提供し、環境のパフォーマンスを高めます。ホストに対してネットワーク デバイスの DirectPath I/O パススルーを有効化できます。

注意： ESXi ホストが USB デバイスまたは USB チャンネルに接続した SD カードから起動するように構成されている場合は、USB コントローラの DirectPath I/O パススルーを有効化していないことを確認します。USB デバイスまたは SD カードから起動する ESXi ホストに対して USB コントローラをパススルーすると、ホストが構成を維持できない状態になることがあります。

手順

- 1 vSphere Web Client ナビゲータでホストに移動して参照します。
- 2 [管理] タブをクリックして、[設定] をクリックします。
- 3 [ハードウェア] セクションの [PCI デバイス] をクリックします。
- 4 ホストに対して PCI ネットワーク デバイスの DirectPath I/O パススルーを有効化するには、[編集] をクリックします。

使用可能なパススルー デバイスのリストが表示されます。

アイコン	説明
緑色のアイコン	デバイスはアクティブで、有効にできます。
オレンジ色のアイコン	デバイスの状態が変更されました。デバイスを使用する前にホストを再起動する必要があります。

- 5 パススルーで使用するネットワーク デバイスを選択し、[OK] をクリックします。

選択した PCI デバイスがテーブルに表示されます。デバイス情報が画面の下部に表示されます。

6 PCI ネットワーク デバイスを使用できるようにするには、ホストを再起動します。

仮想マシンでの PCI デバイスの構成

パススルー デバイスは、リソースをより効率よく使用するための手段を提供し、環境のパフォーマンスを高めます。vSphere Web Client で仮想マシンのパススルー PCI デバイスを構成できます。

バージョン 2.6.20 以前の Linux カーネルでパススルー デバイスを使用している場合は、MSI および MSI-X モードを使用しないでください。これらのモードにすると、パフォーマンスに重大な影響を及ぼします。

前提条件

パススルー ネットワーク デバイスが、仮想マシンのホスト上に構成されていることを確認します。[ホストでのネットワーク デバイスのパススルーの有効化](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で仮想マシンを探します。
 - a データセンター、フォルダ、クラスタ、リソース プール、またはホストを選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [仮想マシン] をクリックしてリストから仮想マシンを選択します。
- 2 仮想マシンをパワーオフします。
- 3 仮想マシンの [管理] タブで、[設定] - [仮想マシンのハードウェア] を選択します。
- 4 [編集] をクリックし、[仮想ハードウェア] タブをクリックします。
- 5 [メモリ] セクションを展開し、[制限] を [制限なし] に設定します。
- 6 [新しいデバイス] ドロップダウン メニューから、[PCI デバイス] を選択し、[追加] をクリックします。
- 7 [新しい PCI デバイス] ドロップダウン メニューから、使用するパススルー デバイスを選択し、[OK] をクリックします。
- 8 仮想マシンをパワーオンします。

結果

仮想マシンに DirectPath I/O デバイスを追加すると、仮想マシンのメモリ サイズにメモリ予約の値が設定されます。

仮想マシンでの vMotion を使用した DirectPath I/O の有効化

サポート対象の Cisco UCS Virtual Machine Fabric Extender (VM-FEX) Distributed Switch を 1 つ以上持つ Cisco UCS システムにあるデータセンターの仮想マシンに対して、vMotion を使用した DirectPath I/O を有効にできます。

前提条件

サポート対象の Cisco VM-FEX Distributed Switch の少なくとも 1 つの Cisco UCS ポート プロファイルで、高パフォーマンス ネットワーク I/O を有効にします。サポート対象のスイッチおよびスイッチ構成については、

Cisco 社の Web サイト (<http://www.cisco.com/go/unifiedcomputing/b-series-doc>) でドキュメントを参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で仮想マシンを探します。
 - a データセンター、フォルダ、クラスタ、リソース プール、またはホストを選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [仮想マシン] をクリックしてリストから仮想マシンを選択します。
- 2 仮想マシンをパワーオフします。
- 3 仮想マシンの [管理] タブで、[設定] - [仮想マシンのハードウェア] を選択します。
- 4 [編集] をクリックし、[仮想ハードウェア] タブをクリックします。
- 5 [メモリ] セクションを展開し、[制限] を [制限なし] に設定します。
- 6 [ネットワーク アダプタ] セクションを展開してパススルー デバイスを構成します。
- 7 DirectPath I/O の横にある [有効化] をクリックします。
- 8 ネットワーク ドロップダウン メニューから、高パフォーマンスが有効化されているポート プロファイルを選択し、[OK] をクリックします。
- 9 仮想マシンをパワーオンします。

Single Root I/O Virtualization (SR-IOV)

vSphere 5.1 以降のリリースでは、SR-IOV (Single Root I/O Virtualization) がサポートされます。遅延の影響を受けたり CPU リソースをさらに必要とする仮想マシンのネットワーク用に SR-IOV を使用できます。

SR-IOV の概要

SR-IOV は、単一のルート ポートにある単一の PCIe (Peripheral Component Interconnect Express) 物理デバイスを、ハイパーバイザーやゲスト OS に対して、複数の別個の物理デバイスとして認識されるようにする仕様です。

SR-IOV は、物理機能 (PF) と仮想機能 (VF) を使用して、SR-IOV デバイスのグローバル機能を管理します。PF は、SR-IOV 機能を構成および管理できる完全な PCIe 機能です。PF を使用して PCIe デバイスを構成または制御することが可能であり、PF では、デバイスへの、およびデバイスからのデータの移動を行うことができます。VF は、データ フローをサポートしていても構成リソースのセットが制限されている軽量の PCIe 機能です。

ハイパーバイザーまたはゲスト OS に提供される仮想機能の数は、デバイスによって異なります。SR-IOV 対応の PCIe デバイスには、適切な BIOS とハードウェアのサポート、およびゲスト OS ドライバ またはハイパーバイザーのインスタンスでの SR-IOV サポートが必要です。[SR-IOV サポート](#) を参照してください。

vSphere での SR-IOV の使用

vSphere では、仮想マシンで SR-IOV 仮想機能をネットワーク用に使用できます。仮想マシンと物理アダプタは、VMkernel を中継せずにデータを直接交換します。ネットワーク用に VMkernel をバイパスすることで、遅延が削減され CPU の効率が向上します。

vSphere 5.5 以降では、スイッチに接続されている SR-IOV 対応の仮想マシンのネットワーク トラフィックは仮想スイッチ（標準スイッチまたは Distributed Switch）では処理されませんが、ポート グループまたはポート レベルでのスイッチ構成ポリシーを使用して、割り当てられた仮想機能を制御できます。

SR-IOV サポート

vSphere 5.1 以降では、特定の構成の環境のみで SR-IOV がサポートされます。SR-IOV を有効にすると、vSphere の一部の機能が使用できません。

サポートされる構成

vSphere 6.0 で SR-IOV を使用するには、使用している環境がいくつかの構成要件を満たす必要があります。

表 10-1. SR-IOV の使用でサポートされる構成

コンポーネント	要件
vSphere	<ul style="list-style-type: none"> ■ Intel プロセッサ搭載のホストには ESXi 5.1 以降が必須です。 ■ AMD プロセッサ搭載のホストは、ESXi 5.5 以降の SR-IOV でサポートされます。
物理ホスト	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESXi リリースとの互換性が必要です。 ■ ESXi 5.1 を実行している場合は Intel プロセッサ、ESXi 5.5 以降を実行している場合は Intel または AMD プロセッサを搭載している必要があります。 ■ IOMMU（入出力メモリ管理ユニット）をサポートし、IOMMU が BIOS で有効化されている必要があります。 ■ SR-IOV をサポートし、SR-IOV が BIOS で有効化されている必要があります。サーバのベンダーに連絡し、ホストが SR-IOV をサポートしているかどうかを確認します。
物理 NIC	<ul style="list-style-type: none"> ■ ESXi リリースとの互換性が必要です。 ■ サーバ ベンダーの技術ドキュメントに記載されているようにホストと SR-IOV での使用がサポートされている必要があります。 ■ SR-IOV がファームウェアで有効化されている必要があります。 ■ MSI-X 割り込みを使用する必要があります。
物理 NIC 用の ESXi の PF ドライバ	<ul style="list-style-type: none"> ■ VMware により認定されている必要があります。 ■ ESXi ホストにインストールされている必要があります。ESXi リリースには特定の NIC のデフォルト ドライバが装備されていますが、それ以外のドライバは手動でダウンロードし、インストールする必要があります。

表 10-1. SR-IOV の使用でサポートされる構成（続き）

コンポーネント	要件
ゲスト OS	NIC ベンダーの技術ドキュメントに従い、インストールされている ESXi リリースの NIC によってサポートされている必要があります。
ゲスト OS の VF ドライバ	<ul style="list-style-type: none"> ■ NIC との互換性が必要です。 ■ NIC ベンダーの技術ドキュメントに記載されているようにゲスト OS リリースでサポートされている必要があります。 ■ Windows 仮想マシン用に Microsoft WVK または WHCK により認定されている必要があります。 ■ オペレーティング システムにインストールされている必要があります。オペレーティング システム リリースには特定の NIC のデフォルト ドライバが装備されていますが、それ以外では NIC またはホストのベンダーが指定した場所からドライバをダウンロードし、インストールする必要があります。

物理ホストおよび NIC が ESXi リリースと互換性があることを確認するには、『VMware 互換性ガイド』を参照してください。

機能の可用性

SR-IOV で構成されている仮想マシンでは、次の機能は使用できません。

- vSphere vMotion
- Storage vMotion
- vShield
- NetFlow
- VXLAN 仮想ワイヤ
- vSphere High Availability
- vSphere Fault Tolerance
- vSphere DRS
- vSphere DPM
- 仮想マシンのサスペンドおよびレジューム
- 仮想マシンのスナップショット
- パススルー仮想機能の MAC ベースの VLAN
- 仮想デバイス、メモリ、および vCPU のホット アドおよび削除
- クラスタ環境への参加
- SR-IOV パススルーを使用した仮想マシン NIC のネットワーク統計情報

注： vSphere Web Client で SR-IOV がサポートしていない機能を有効化または構成しようとすると、環境で予期せぬ動作が発生します。

サポートされる NIC

すべての NIC には、SR-IOV をサポートするドライバとファームウェアがある必要があります。一部の NIC では、ファームウェアで SR-IOV を有効にする必要があります。SR-IOV で構成された仮想マシンでサポートされる NIC については、[VMware 互換性ガイド](#)を参照してください。

vSphere 5.0 以前からのアップグレード

vSphere のバージョンを 5.0 以前から 5.5 以降にアップグレードすると、SR-IOV のサポートは、vSphere リリースの NIC ドライバの更新後に使用可能になります。SR-IOV 機能が動作するために、SR-IOV をサポートするファームウェアとドライバが NIC で有効化されている必要があります。

vSphere 5.1 からのアップグレード

SR-IOV は要件を満たしている ESXi 5.1 ホストでサポートされますが、vSphere Web Client を使用してそれらのホストで SR-IOV を構成することはできません。それらのホストで SR-IOV を有効化するには、NIC ドライバモジュールの `max_vfs` パラメータを使用します。[ホスト プロファイルまたは ESXCLI コマンドの使用による SR-IOV の有効化](#)を参照してください。

また、そのようなホスト上の仮想マシンに SR-IOV パススルー アダプタを割り当てることはできません。アダプタは、ESXi 5.5 以降と互換性のある仮想マシンで使用できます。vCenter Server 5.5 リリースは、ESXi 5.1 ホストを管理している可能性があります、その構成はリリース 5.1 と同じです。PCI デバイスを仮想マシン ハードウェアに追加し、デバイス用の VF を手動で選択する必要があります。

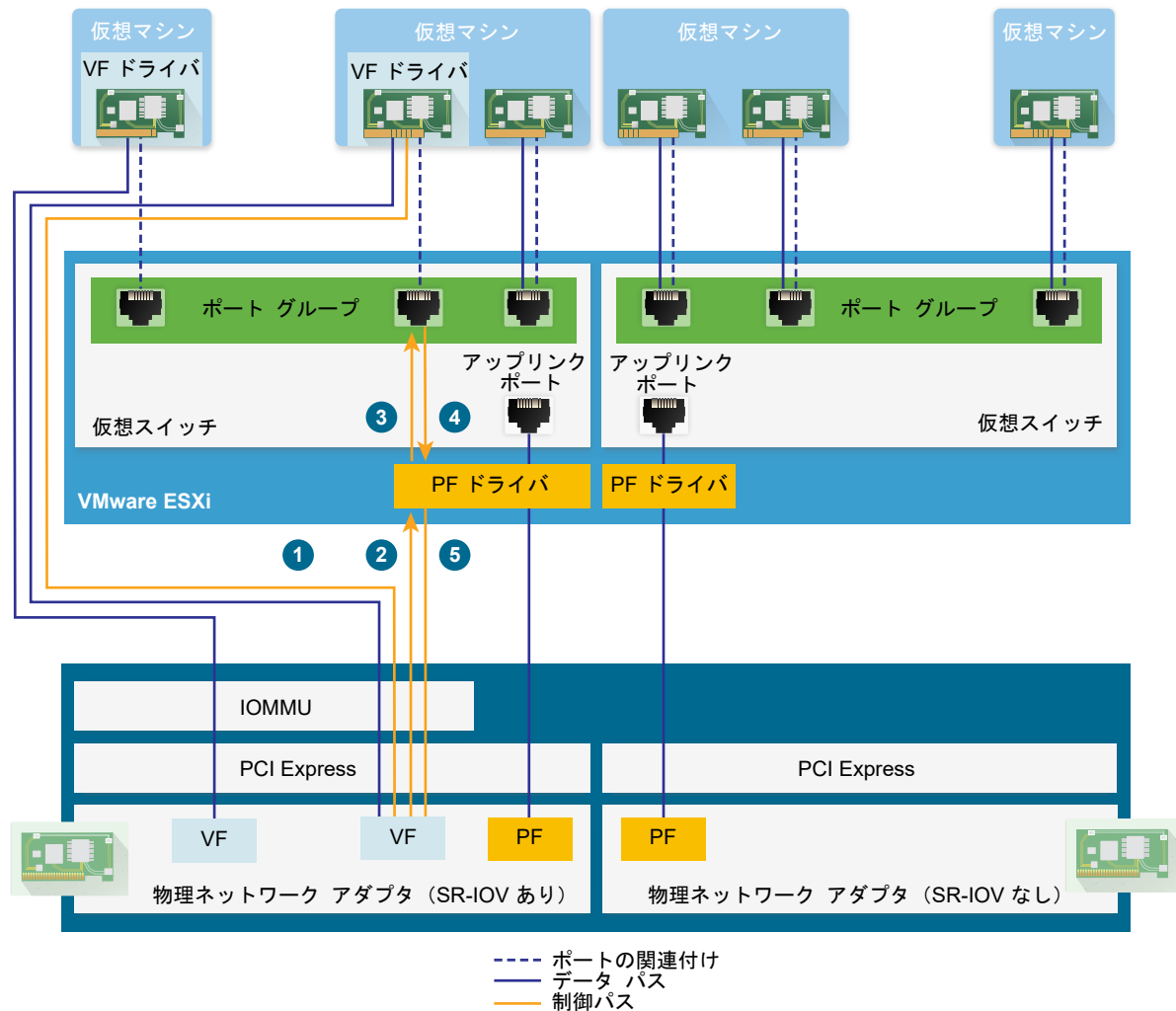
SR-IOV コンポーネントのアーキテクチャと相互作用

vSphere SR-IOV のサポートは、パフォーマンスを向上させるための NIC ポートの仮想機能（VF）と物理機能（PF）の間の相互作用、およびトラフィックを制御するための PF のドライバとホスト スイッチの間の相互作用によって異なります。

SR-IOV 物理アダプタ上で仮想マシン トラフィックを実行するホストでは、仮想マシン アダプタは仮想機能と直接コンタクトしてデータを伝達します。ただし、ネットワークを構成する機能は、仮想マシンを保持しているポートの有効なポリシーに基づきます。

SR-IOV を使用しない ESXi ホストでは、仮想スイッチはホスト上でそのポートを使用して、関連するポート グループの物理アダプタから、またはその物理アダプタに外部ネットワーク トラフィックを送信します。仮想スイッチは、管理対象パケットのネットワーク ポリシーも適用します。

図 10-1. vSphere の SR-IOV サポートでのデータおよび構成パス



SR-IOV のデータ パス

仮想マシン ネットワーク アダプタが仮想機能に割り当てられると、ゲスト OS の VF ドライバは I/O メモリ管理ユニット（IOMMU）テクノロジーを使用して、ネットワークを介してデータを送受信する必要がある仮想機能にアクセスします。VMkernel、つまり仮想スイッチは特にデータ フローを処理しないため、SR-IOV が有効なワークロードの全体的な待ち時間が削減されます。

SR-IOV の構成パス

ゲスト OS が VF にマップされている仮想マシン アダプタの構成を変更しようとする場合、その仮想マシン アダプタに関連付けられたポートのポリシーによって許可されれば、その変更が実行されます。

構成ワークフローは、次の操作で構成されています。

- 1 ゲスト OS によって VF の構成変更が要求されます。
- 2 VF は、メールボックス メカニズムを使用して PF に要求を転送します。

- 3 PF ドライバは、仮想スイッチ（Distributed Switch の標準スイッチ、またはホスト プロキシ スイッチ）で構成要求をチェックします。
- 4 仮想スイッチは、VF が有効な仮想マシン アダプタが関連付けられているポートのポリシーに基づいて、構成の要求を確認します。
- 5 新しい設定が仮想マシン アダプタのポート ポリシーに準拠している場合、PF ドライバは VF を構成します。

たとえば、VF ドライバが MAC アドレスを変更しようとする場合に、ポート グループまたはポートのセキュリティ ポリシーで MAC アドレスの変更が許可されていない場合、アドレスはそのまま変わりません。ゲスト OS には変更が成功したことが示されても、ログ メッセージには操作が失敗したことが示される場合があります。この結果、ゲスト OS と仮想デバイスには異なる MAC アドレスが保存されます。ゲスト OS のネットワーク インターフェイスが、IP アドレスの取得と通信を行えない可能性があります。この場合、ゲスト OS でインターフェイスをリセットし、仮想デバイスから最新の MAC アドレスを取得して、IP アドレスを取得する必要があります。

vSphere と仮想機能の相互作用

仮想機能（VF）は、データの交換に必要なすべてのリソースを含む、軽量の PCIe 機能ですが、最小限に抑えられた構成リソースが含まれています。vSphere と VF の間の相互作用は制限されます。

- 物理 NIC では、MSI-X 割り込みを使用する必要があります。
- VF では、vSphere にレート制御は実装されません。すべての VF は物理リンクの全バンド幅を使用する可能性があります。
- VF デバイスを仮想マシン上でパススルー デバイスとして設定すると、仮想マシンのスタンバイと休止機能はサポートされません。
- 作成できる VF の最大数と、パススルーに使用できる VF の最大数は異なります。インスタンス化できる VF の最大数は、ホストの NIC 機能およびハードウェア構成によって異なります。ただし、パススルー デバイスに使用できる割り込みベクトルの数は制限されているため、インスタンス化されたすべての VF のうち、ESXi ホストで使用できる数は制限されています。

各 ESXi ホストの割り込みベクトルの合計数は、32 CPU の場合、最大で 4096 です。ホストが起動するときに、ホスト上のデバイス（ストレージ コントローラ、物理ネットワーク アダプタ、USB コントローラなど）が、4096 個のベクトルの一部を消費します。これらのデバイスによって 1024 個を超えるベクトルが必要になると、潜在的にサポートされる VF の最大数が減らされます。

- Intel NIC でサポートされる VF の数は、Emulex NIC でサポートされる数と異なる場合があります。NIC ベンダーの技術ドキュメントを参照してください。
- Intel NIC と Emulex NIC で SR-IOV が有効に設定されている場合、Intel NIC で使用可能な VF の数は、Emulex NIC 用に構成されている VF の数によって決まり、この逆も当てはまります。3072 個のすべての割り込みベクトルがパススルーに利用できる場合、以下の公式を使用して、使用可能な VF の最大数を予測できます。

$$3X + 2Y < 3072$$

ここで、 X は Intel VF の数であり、 Y は Emulex VF の数です。

ホスト上の他の種類のデバイスが、ホスト上の合計 4096 個のベクトルのうち、1024 個以上の割り込みベクトルを使用する場合、この数字は小さくなることがあります。

- vSphere SR-IOV は、サポートされている Intel NIC と Emulex NIC で最大 1024 個の VF をサポートします。
- vSphere SR-IOV は、サポートされている Intel NIC または Emulex NIC で最大 64 個の VF をサポートします。
- サポートされる Intel NIC が接続を失うと、物理 NIC からのすべての VF は、VF 間の通信を含めて、通信を完全に停止します。
- サポートされている Emulex NIC が接続を失うと、すべての VF は外部環境との通信を停止しますが、VF 間の通信は引き続き機能します。
- VF ドライバは、IPv6 のサポート、TSO、LRO チェックサムなど、多数の機能を提供します。詳細については、NIC ベンダーの技術ドキュメントを参照してください。

DirectPath I/O 対 SR-IOV

SR-IOV は、DirectPath I/O の場合と同様に、パフォーマンス上の利点とトレードオフを提供します。DirectPath I/O と SR-IOV の機能は類似していますが、それらの機能を使用して異なるタスクを実行します。

SR-IOV は非常に高速なパケット レートのワークロードと遅延要件を満たす際に有用です。SR-IOV は、DirectPath I/O と同様に、vMotion など、特定のコア仮想機能と互換性がありません。しかし、SR-IOV では、単一の物理デバイスを複数のゲストで共有できます。

DirectPath I/O では、1 つの仮想マシンにマッピングできる物理機能は 1 つのみです。SR-IOV では、1 つの物理デバイスを共有できるため、複数の仮想マシンを物理機能に直接接続できます。

SR-IOV を使用するための仮想マシンの構成

SR-IOV の機能を使用するには、ホスト上で SR-IOV 仮想機能を有効化し、仮想マシンをその機能に接続する必要があります。

前提条件

お使いの環境の構成が SR-IOV をサポートしていることを確認します。[SR-IOV サポート](#) を参照してください。

手順

1 ホスト物理アダプタでの SR-IOV の有効化

仮想マシンを仮想機能に接続するには、vSphere Web Client を使用して、SR-IOV を有効にし、ホストの仮想機能の数を設定します。


2 仮想機能の SR-IOV パススルー アダプタとしての仮想マシンへの割り当て

仮想マシンと物理 NIC が確実にデータを交換できるようにするには、仮想マシンを 1 つ以上の仮想機能に SR-IOV パススルー ネットワーク アダプタとして関連付ける必要があります。

結果

トラフィックは、SR-IOV パススルー アダプタから、標準スイッチまたは Distributed Switch の関連ポートに関するアクティブ ポリシーに準拠している物理アダプタに渡されます。

SSR-IOV パススルー ネットワーク アダプタに割り当てられている仮想機能を確認するには、仮想マシンの [サマリ] タブで [仮想マシンのハードウェア] パネルを展開し、アダプタのプロパティを確認します。

スイッチのトポロジ ダイアグラムには、仮想機能を使用する仮想マシン アダプタが  アイコンで示されます。

次のステップ

スイッチ、ポート グループ、およびポートでネットワーク ポリシーを使用して、仮想マシンに接続された仮想機能を通してトラフィックを設定します。 [SR-IOV 対応仮想マシンに関連するトラフィックのためのネットワーク オプション](#) を参照してください。

ホスト物理アダプタでの SR-IOV の有効化

仮想マシンを仮想機能に接続するには、vSphere Web Client を使用して、SR-IOV を有効にし、ホストの仮想機能の数を設定します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[ネットワーク] をクリックし、[物理アダプタ] を選択します。
SR-IOV プロパティを確認すれば、物理アダプタで SR-IOV がサポートされているかどうかわかります。
- 3 物理アダプタを選択し、[アダプタ設定の編集] をクリックします。
- 4 [SR-IOV] で、[ステータス] ドロップダウン メニューから [有効] を選択します。
- 5 [仮想機能数] テキスト ボックスに、アダプタに構成する仮想機能数を入力します。
- 6 [OK] をクリックします。
- 7 ホストを再起動します。

結果

物理アダプタ エントリで表される NIC ポートで仮想機能がアクティブになります。これらは、ホストの [設定] タブの [PCI デバイス] リストに表示されます。

`esxcli network sriovnic vCLI` コマンドを使用して、ホストの仮想機能の構成を調べることができます。

次のステップ

SR-IOV パススルー ネットワーク アダプタを使用して、仮想マシンを仮想機能に関連付けます。

仮想機能の SR-IOV パススルー アダプタとしての仮想マシンへの割り当て

仮想マシンと物理 NIC が確実にデータを交換できるようにするには、仮想マシンを 1 つ以上の仮想機能に SR-IOV パススルー ネットワーク アダプタとして関連付ける必要があります。

前提条件

- ホスト上に仮想機能が存在することを確認します。
- 仮想機能のパススルー ネットワーク デバイスが、ホストの [設定] タブにある [PCI デバイス] リストでアクティブであることを確認します。
- 仮想マシンに ESXi 5.5 以降との互換性があることを確認します。
- 仮想マシンが作成されたときに、Red Hat Enterprise Linux 6 以降または Windows がゲスト OS として選択されていたことを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で仮想マシンを探します。
 - a データセンター、フォルダ、クラスタ、リソース プール、またはホストを選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [仮想マシン] をクリックしてリストから仮想マシンを選択します。
- 2 仮想マシンをパワーオフします。
- 3 仮想マシンの [管理] タブで、[設定] - [仮想マシンのハードウェア] を選択します。
- 4 [編集] をクリックし、[仮想ハードウェア] タブをクリックします。
- 5 [新しいデバイス] ドロップダウン メニューから、[ネットワーク] を選択し、[追加] をクリックします。
- 6 [新規ネットワーク] セクションを展開して、仮想マシンをポート グループに接続します。
仮想 NIC はデータ トラフィックにこのポート グループを使用しません。ポート グループは、VLAN タギングなど、データ トラフィックに適用するためにネットワーク プロパティの抽出に使用されます。
- 7 [アダプタ タイプ] ドロップダウン メニューから、[SR-IOV パススルー] を選択します。
- 8 [物理機能] ドロップダウン メニューから、パススルー仮想マシン アダプタを戻す物理アダプタを選択します。
- 9 ゲスト OS からのパケットの MTU を変更できるようにするには、[ゲスト OS MTU の変更] ドロップダウン メニューを使用します。
- 10 [メモリ] セクションを展開し、[すべてのゲスト メモリを予約 (すべてロック)] を選択して [OK] をクリックします。
I/O メモリ管理ユニット (IOMMU) はすべての仮想マシン メモリに到達し、パススルー デバイスが DMA (Direct Memory Access) を使用してメモリにアクセスできるようにする必要があります。
- 11 仮想マシンをパワーオンします。

結果

仮想マシンをパワーオンすると、ESXi ホストによって仮想アダプタから空いている仮想機能が選択され、SR-IOV パススルー アダプタにそれがマップされます。ホストは、仮想マシン アダプタと基盤になる仮想機能のすべてのプロパティを、その仮想マシンが属するポート グループの設定と比較して検証します。

SR-IOV 対応仮想マシンに関連するトラフィックのためのネットワーク オプション

vSphere 5.5 以降では、仮想マシン（VF）に関連付けられた仮想マシン アダプタで特定のネットワーク機能を構成できます。トラフィックを処理する仮想スイッチのタイプ（標準または分散）に応じて、スイッチ、ポート グループ、またはポートの設定を使用します。

表 10-2. VF を使用する仮想マシン アダプタのネットワーク オプション

ネットワーク オプション	説明
MTU サイズ	MTU のサイズを変更します（ジャンボ フレームを有効にするためなど）。
VF トラフィックのセキュリティ ポリシー	<ul style="list-style-type: none"> ■ VF を使用する仮想マシン ネットワーク アダプタの最初に設定した MAC アドレスをゲスト OS が変更すると、[MAC アドレス変更] オプションを設定して、新しいアドレスの受信フレームを許可またはドロップします。 ■ 仮想マシン ネットワーク アダプタ（VF を使用するアダプタなど）のグローバル無差別モードを有効にします。
VLAN タギング モード	標準または Distributed Switch の VLAN タギングを構成するか（VLAN スイッチ タギング（VST）モードの有効化）、VF に関連付けられた仮想マシンにタグ付きトラフィックが到達できるようにします（仮想ゲスト タギング（VGT）の有効化）。

仮想マシン トラフィックを処理する SR-IOV 物理アダプタの使用


vSphere 5.5 以降では、SR-IOV 対応の物理アダプタの物理機能（PF）と仮想機能（VF）の両方を構成して仮想マシン トラフィックを処理できます。

SR-IOV 物理アダプタの PF は仮想マシンが使用する VF を制御し、これらの SR-IOV が有効にされた仮想マシンのネットワークを処理する標準スイッチまたは Distributed Switch を通過するトラフィックを伝送できます。

SR-IOV 物理アダプタは、スイッチのトラフィックをバッキングするかどうかによって異なるモードで動作します。


混合モード

物理アダプタはスイッチに接続した仮想マシンに仮想機能を提供し、スイッチ上の非 SR-IOV 仮想マシンからのトラフィックを直接処理します。

スイッチのトポロジ ダイアグラムで SR-IOV 物理アダプタが混合モードであるかどうかを確認できます。混合モードの SR-IOV 物理アダプタには、標準スイッチの物理アダプタのリスト、または Distributed Switch のアップリンク グループ アダプタのリストで  というアイコンが表示されます。

SR-IOV 専用モード

物理アダプタは仮想スイッチに接続した仮想マシンに仮想機能を提供しますが、スイッチ上の非 SR-IOV 仮想マシンからのトラフィックをバッキングしません。

物理アダプタが SR-IOV 専用モードであるかどうかを確認するには、スイッチのトポロジ ダイアグラムを調べます。このモードでは、物理アダプタは「外部 SR-IOV アダプタ」という別のリストにあり、 というアイコンが表示されます。

非 SR-IOV モード

物理アダプタは VF 対応の仮想マシンに関連したトラフィックに使用しません。非 SR-IOV 仮想マシンからのトラフィックだけを処理します。

ホスト プロファイルまたは ESXCLI コマンドの使用による SR-IOV の有効化

ESXCLI コマンドを使用するか、ホスト プロファイルを使用して複数のホストを同時に設定したり、ステートレスなホストを設定したりして ESXi ホストでの仮想機能を構成できます。

ホスト プロファイルでの SR-IOV の有効化

複数のホストまたはステートレス ホストの場合、ホスト プロファイルを使用して物理 NIC の仮想機能を構成し、Auto Deploy を使用してホストにプロファイルを適用できます。

Auto Deploy とホスト プロファイルを使用した ESXi の実行の詳細については、『vSphere のインストールとセットアップ』ドキュメントを参照してください。

ドライバのドキュメントにしたがい、仮想機能の NIC ドライバ パラメータの `esxcli system module parameters set vCLI` コマンドを使用して、ホスト上の SR-IOV 仮想機能を有効化することもできます。vCLI コマンドの詳細については、『vSphere コマンドライン インターフェイス』のドキュメントを参照してください。

前提条件

- お使いの環境の構成が SR-IOV をサポートしていることを確認します。[SR-IOV サポート](#) を参照してください。
- SR-IOV 対応のホストに基づいてホスト プロファイルを作成します。『vSphere ホスト プロファイル』ドキュメントを参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client のホーム ページで、[ルールおよびプロファイル] - [ホスト プロファイル] をクリックします。
- 2 リストからホスト プロファイルを選択し、[管理] タブをクリックします。
- 3 [ホスト プロファイルの編集] をクリックして、[一般システム設定] ノードを展開します。
- 4 [カーネル モジュールのパラメータ] を展開し、作成する仮想機能の物理機能ドライバのパラメータを選択します。

たとえば、Intel の物理 NIC の物理機能ドライバのパラメータは `max_vfs` です。

- 5 [値] テキスト ボックスに、有効な仮想マシン番号をコンマで区切ったリスト形式で入力します。

それぞれのリスト エントリは、個々の物理機能に構成する仮想機能数を示します。値が 0 の場合、物理機能で SR-IOV が有効になりません。

たとえば、デュアル ポートがあり、その値を *x*、*y* に設定します。ここで、*x* または *y* は、1 つのポートに対して有効化する仮想機能数です。

単一ホスト上の仮想機能の目標数が 30 ならば、デュアル ポート カード 2 枚が 0,10,10,10 に設定されている可能性があります。

注： サポート対象であり、構成に使用できる仮想機能の数は、システム構成に依存します。

6 [終了] をクリックします。

7 必要に応じて、ホストに適用したホスト プロファイルを修正します。

結果

仮想機能は、ホストの [設定] タブの [PCI デバイス] リストに表示されます。

次のステップ

SR-IOV パススルー ネットワーク アダプタ タイプを使用して、仮想機能を仮想マシン アダプタに関連付けます。

[仮想機能の SR-IOV パススルー アダプタとしての仮想マシンへの割り当て](#) を参照してください。

ESXCLI コマンドを使用したホストの物理アダプタにおける SR-IOV の有効化

特定のトラブルシューティング状況や、ホストを直接構成する場合に、ESXi でコンソール コマンドを実行して、物理アダプタに SR-IOV 仮想機能を作成できます。

ドライバのドキュメントに従って、仮想機能の NIC ドライバ パラメータを操作することで、ホストに SR-IOV 仮想機能を作成できます。

前提条件

vCLI パッケージをインストールするか、vSphere Management Assistant (vMA) 仮想マシンをデプロイするか、ESXi Shell を使用します。vSphere Command-Line Interface スタート ガイドを参照してください。

手順

- 1 NIC ドライバの仮想機能用にパラメータを設定することで仮想機能を作成するには、コマンド プロンプトで `esxcli system module parameters set` コマンドを実行します。

```
esxcli system module parameters set -m driver -p vf_param=w,x,y,z
```

`driver` は NIC ドライバの名前であり、`vf_param` は仮想機能を作成するためのドライバ固有のパラメータです。

コンマ区切りのリストを使用して、`vf_param` パラメータの値を設定できます。この場合、各エントリはポートの仮想機能の数を示しています。値が 0 の場合、物理機能で SR-IOV が有効になりません。

2 つのデュアル ポート NIC がある場合、値を `w`、`x`、`y`、`z` に設定できます。`w`、`x`、`y`、および `z` は、1 つのポートに対して有効にする仮想機能の数です。たとえば、`ixgbe` ドライバを使用して 2 つのデュアル ポート Intel カードに分散される 30 個の仮想機能を作成するには、`ixgbe` ドライバと `max_vfs` パラメータに対して次のコマンドを実行します。

```
esxcli system module parameters set -m ixgbe -p max_vfs=0,10,10,10
```

- 2 ホストを再起動して、仮想機能を作成します。

次のステップ

SR-IOV パススルー ネットワーク アダプタ タイプを使用して、仮想機能を仮想マシン アダプタに関連付けます。
[仮想機能の SR-IOV パススルー アダプタとしての仮想マシンへの割り当て](#) を参照してください。

ホストの割り込みベクトル不足により、SR-IOV 仮想機能を使用している仮想マシンがパワーオンに失敗する

ESXi ホストで、ネットワーキングのために SR-IOV 仮想機能 (VF) を使用する 1 つ以上の仮想マシンがパワーオフする。

問題

ESXi ホストでは、割り当てられている仮想機能 (VF) の総数が vSphere Configuration Maximums のガイドに示されている VF の最大数に近くなると、ネットワーキングのために SR-IOV VF を使用する 1 つ以上の仮想マシンがパワーオンに失敗します。

仮想マシン ログ ファイル `vmware.log` には、VF に関する次のメッセージが記録されます。

```
PCIPassthruChangeIntrSettings: vf_name failed to register interrupt (error code 195887110)
```

VMkernel ログ ファイル `vmkernel.log` には、仮想マシンに割り当てられている VF に関する次のメッセージが記録されます。

```
VMKPCIPassthru: 2565: BDF = vf_name intrType = 4 numVectors: 3  
WARNING: IntrVector: 233: Out of interrupt vectors
```

原因

割り当て可能な割り込みベクトルの数は、ESXi ホスト上の物理 CPU の数に応じて増加します。32 個の CPU がある ESXi ホストは、合計 4096 の割り込みベクトルを提供できます。ホストが起動するときに、ホスト上のデバイス (ストレージ コントローラ、物理ネットワーク アダプタ、USB コントローラなど) は、4096 個のベクトルの一部を消費します。これらのデバイスによって 1024 個を超えるベクトルが必要になると、潜在的にサポートされる VF の最大数が減らされます。

仮想マシンがパワーオンし、ゲスト OS VF ドライバが起動するときには、割り込みベクトルが消費されます。必要な数の割り込みベクトルが使用できない場合、ゲスト OS はエラー メッセージを表示することなく突然停止します。

ホストで消費される割り込みベクトルまたは使用できる割り込みベクトルの数を特定するルールは、現在ありません。この数は、ホストのハードウェア構成によって異なります。

解決方法

- ◆ 仮想マシンをパワーオンできるようにするには、ホストで仮想マシンに割り当てられている VF の総数を減らします。

たとえば、仮想マシンの SR-IOV ネットワーク アダプタを vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch に接続されるアダプタに変更します。

ジャンボ フレーム

ジャンボ フレームを使用すると、ESXi ホストでより大きいフレームを物理ネットワークに送信できます。そのためには、ネットワークがジャンボ フレームのエンド ツー エンド（物理ネットワーク アダプタ、物理スイッチ、およびストレージ デバイスを含む）をサポートしている必要があります。

ジャンボ フレームを有効にする前に、物理ネットワーク アダプタがジャンボ フレームをサポートしていることをハードウェア ベンダーに確認してください。

最大転送ユニット（MTU）を 1500 バイトよりも大きい値に変更することによって、vSphere Distributed Switch または vSphere 標準スイッチのジャンボ フレームを有効にできます。構成できるフレーム サイズの最大値は 9000 バイトになります。

vSphere Distributed Switch でジャンボ フレームを有効にする

vSphere Distributed Switch を通過するすべてのトラフィックに対してジャンボ フレームを有効にします。

重要： vSphere Distributed Switch の MTU サイズを変更すると、アップリンクとして割り当てられている物理 NIC がダウンした後再起動されます。これにより、アップリンクを使用している仮想マシンまたはサービスに対して 5 ～ 10 ミリ秒の短いネットワーク障害が発生します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックし、[プロパティ] を選択します。
- 3 [編集] をクリックします。
- 4 [詳細] をクリックし、[MTU] プロパティを 1500 バイトよりも大きい値に設定します。
MTU サイズは 9000 バイトよりも大きい値には設定できません。
- 5 [OK] をクリックします。

vSphere 標準スイッチでのジャンボ フレームの有効化

ホストの vSphere 標準スイッチを通過するすべてのトラフィックでジャンボ フレームを有効化します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで [ネットワーク] をクリックし、[仮想スイッチ] を選択します。
- 3 仮想スイッチ テーブルから標準スイッチを選択して、[設定の編集] をクリックします。
- 4 [プロパティ] セクションで、[MTU] プロパティを 1500 バイトよりも大きい値に設定します。
MTU サイズは、最大 9000 バイトまで増加できます。
- 5 [OK] をクリックします。

VMkernel アダプタのジャンボ フレームの有効化

ジャンボ フレームは、データの転送によって引き起こされる CPU 負荷を低減します。VMkernel アダプタのジャンボ フレームは、アダプタの最大転送ユニット (MTU) を変更することで有効化します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] で [ネットワーク] を選択し、[VMkernel アダプタ] を選択します。
- 3 アダプタ テーブルから VMkernel アダプタを選択します。
アダプタのプロパティが表示されます。
- 4 VMkernel アダプタの名前をクリックします。
- 5 [編集] をクリックします。
- 6 [NIC 設定] を選択し、[MTU] プロパティを 1500 よりも大きい値に設定します。
MTU サイズは、最大 9000 バイトまで増加できます。
- 7 [OK] をクリックします。

仮想マシンでのジャンボ フレーム サポートの有効化

仮想マシンのジャンボ フレーム サポートを有効にするには、その仮想マシンの拡張 VMXNET アダプタが必要です。

手順

- 1 vSphere Web Client で仮想マシンを探します。
 - a データセンター、フォルダ、クラスタ、リソース プール、またはホストを選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [仮想マシン] をクリックしてリストから仮想マシンを選択します。
- 2 仮想マシンの [管理] タブで、[設定] - [仮想マシンのハードウェア] を選択します。
- 3 [編集] をクリックし、[仮想ハードウェア] タブをクリックします。
- 4 [仮想ハードウェア] セクションをクリックして、ネットワーク アダプタ セクションを展開します。ネットワーク アダプタが使用しているネットワーク設定および MAC アドレスを記録します。
- 5 [削除] をクリックして、仮想マシンからネットワーク アダプタを削除します。
- 6 [新しいデバイス] ドロップダウン メニューから、[ネットワーク] を選択し、[追加] をクリックします。
- 7 [アダプタ タイプ] ドロップダウン メニューから、[VMXNET 2 (拡張)] または [VMXNET 3] を選択します。
- 8 削除したネットワーク アダプタと同じネットワーク設定を使用します。
- 9 [MAC アドレス] を [手動] に設定し、削除したネットワーク アドレスで使用していた MAC アドレスを入力します。
- 10 [OK] をクリックします。

次のステップ

- ジャンボ フレーム対応の標準スイッチまたは Distributed Switch に拡張 VMXNET アダプタが接続されていることを確認します。
- ゲスト OS 内で、ジャンボ フレームを使用できるようにネットワーク アダプタを構成します。ゲスト OS のドキュメントを参照してください。
- ジャンボ フレームをサポートするように、この仮想マシンが接続するすべての物理スイッチおよび物理マシンまたは仮想マシンを構成します。

TCP セグメンテーション オフロード

VMkernel ネットワーク アダプタと仮想マシンで TCP セグメンテーション オフロード (TSO) を使用して、厳しい遅延要件を持つワークロードでネットワーク パフォーマンスを改善します。

物理ネットワーク アダプタ、VMkernel、および仮想マシン ネットワーク アダプタの転送経路にある TSO は、TCP/IP ネットワーク操作による CPU のオーバーヘッドを削減することで、ESXi ホストのパフォーマンスを改善します。TSO が有効化されている場合は、ネットワーク アダプタは大きいデータ チャンクを CPU ではなく TCP セグメントに分割します。VMkernel とゲスト OS は、より多くの CPU サイクルを使用してアプリケーションを実行できます。

TSO で実現するパフォーマンスの向上からメリットを得るには、物理ネットワーク アダプタ、VMkernel、およびゲスト OS を含む ESXi ホスト上のデータ パスで TSO を有効化します。TSO は、デフォルトでは、ESXi ホストの VMkernel、VMXNET 2 および VMXNET 3 仮想マシン アダプタで有効化されています。

データ パス内の TCP パケット セグメンテーションの場所の詳細については、当社のナレッジ ベースの記事「[VMware 環境における TCP セグメンテーション オフロード \(TSO\) と Large Receive Offload \(LRO\) について](#)」を参照してください。

VMkernel でのソフトウェア TSO の有効化または無効化

物理ネットワーク アダプタで TSO に関する問題が発生する場合は、問題をトラブルシューティングするまで、一時的に VMkernel で TSO のソフトウェア シミュレーションを有効にすることができます。

手順

- ◆ VMkernel で TSO のソフトウェア シミュレーションを有効または無効にするには、次の `esxcli network nic software set` コンソール コマンドを実行します。

- VMkernel で TSO のソフトウェア シミュレーションを有効にします。

```
esxcli network nic software set --ipv4tso=1 -n vmnicX
esxcli network nic software set --ipv6tso=1 -n vmnicX
```

- VMkernel で TSO のソフトウェア シミュレーションを無効にします。

```
esxcli network nic software set --ipv4tso=0 -n vmnicX
esxcli network nic software set --ipv6tso=0 -n vmnicX
```

ここで、`vmnicX` の `X` は、ホストの NIC ポート数を表します。

ホストの再起動後も、構成の変更は維持されます。

ESXi ホストの物理ネットワーク アダプタで TSO がサポートされているかどうかの確認

遅延の影響を受けるワークロードを実行するホストでネットワーク パフォーマンスを予測する場合は、物理ネットワーク アダプタが TCP/IP パケット セグメントをオフロードするかどうかを調べます。物理ネットワーク アダプタが TSO をサポートしている場合、TSO はデフォルトで有効になります。

手順

- ◆ ホストの物理ネットワーク アダプタで TSO が有効になっているかどうかを確認するには、次の `esxcli network nic software get` コンソール コマンドを実行します。

```
esxcli network nic tso get
```

ESXi ホストでの TSO の有効化または無効化

NIC が大きいデータ チャンクを TCP セグメントに分割するようにするには、転送経路にある TCP セグメンテーション オフロード (TSO) を有効化します。CPU が TCP セグメンテーションを実行するようにするには、TSO を無効化します。

物理アダプタがハードウェア TSO をサポートしている場合、ホストはデフォルトでハードウェア TSO を使用します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [システム] セクションを展開し、[システムの詳細設定] をクリックします。
- 4 IPv4 の場合は `Net.UseHwTSO` パラメータの値を編集し、IPv6 の場合は `Net.UseHwTSO6` の値を編集します。
 - TSO を有効化するには、`Net.UseHwTSO` および `Net.UseHwTSO6` を **1** に設定します。
 - TSO を無効化するには、`Net.UseHwTSO` および `Net.UseHwTSO6` を **0** に設定します。
- 5 [OK] をクリックして変更内容を保存します。

- 6 物理アダプタのドライバ モジュールを再ロードするには、ホストの ESXi Shell で `esxcli system module set` コンソール コマンドを実行します。

- a ドライバを無効にするには、`esxcli system module set` コマンドを `--enabled false` オプションを指定して実行します。

```
esxcli    system module set
--enabled false
--module
nic_driver_module
```

- b ドライバを有効にするには、`esxcli system module set` コマンドを `--enabled true` オプションを指定して実行します。

```
esxcli    system module set
--enabled true
--module
nic_driver_module
```

結果

物理アダプタがハードウェア TSO をサポートしていない場合は、VMkernel がゲスト OS からの大きな TCP パケットを分割して、それらをアダプタに送信します。

ESXi ホストで TSO が有効になっているかどうかの確認

遅延の影響に敏感なワークロードを実行するホストでのネットワーク パフォーマンスを見積もる場合は、VMkernel でハードウェア TSO が有効になっているかどうかを調べます。デフォルトでは、ESXi ホストでハードウェア TSO が有効になっています。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [システム] セクションを展開し、[システムの詳細設定] をクリックします。
- 4 `Net.UseHwTSO` パラメータと `Net.UseHwTSO6` パラメータの値を確認します。

`Net.UseHwTSO` は IPv4 の TSO 状態を、`Net.UseHwTSO6` は IPv6 の TSO 状態を示します。プロパティが 1 に設定されている場合、TSO は有効です。

Linux 仮想マシンでの TSO の有効化または無効化

Linux 仮想マシンのネットワーク アダプタで TSO サポートを有効化し、セグメンテーションが必要な TCP パケットがゲスト OS によって VMkernel にリダイレクトされるようにします。

前提条件

- ESXi 6.0 が Linux ゲスト OS をサポートすることを確認します。
『VMware 互換性ガイド』ドキュメントを参照してください。
- Linux 仮想マシンのネットワーク アダプタが VMXNET2 または VMXNET3 であることを確認します。

手順

- ◆ Linux ゲスト OS のターミナル ウィンドウで、TSO を有効または無効にするには、`-K` および `tso` オプションを指定して `ethtool` コマンドを実行します。

- TSO を有効にするには、次のコマンドを実行します。

```
ethtool -K ethYtsoon
```

- TSO を無効にするには、次のコマンドを実行します。

```
ethtool -K ethYtsooff
```

ethY の Y は、仮想マシンの NIC のシーケンス番号です。

Windows 仮想マシンでの TSO の有効化または無効化

デフォルトで、TSO は、VMXNET2 および VMXNET3 ネットワーク アダプタ上の Windows 仮想マシンで有効になっています。パフォーマンス上の理由から、TSO の無効化が必要になることがあります。

前提条件

- ESXi 6.0 が Windows ゲスト OS をサポートしていることを確認します。『VMware 互換性ガイド』ドキュメントを参照してください。
- Windows 仮想マシンのネットワーク アダプタが VMXNET2 または VMXNET3 であることを確認します。

手順

- 1 Windows コントロール パネルの [ネットワークと共有センター] で、ネットワーク アダプタの名前をクリックします。
- 2 その名前をクリックします。
ダイアログ ボックスに、アダプタのステータスが表示されます。
- 3 [プロパティ] をクリックし、ネットワーク アダプタのタイプで [構成] をクリックします。
- 4 [詳細] タブで、[Large Send Offload V2 (IPv4)] および [Large Send Offload V2 (IPv6)] のプロパティを [有効] または [無効] に設定します。
- 5 [OK] をクリックします。
- 6 仮想マシンを再起動します。

Large Receive Offload

Large Receive Offload (LRO) を使用して、ネットワークから高レートで到達するパケットを処理するための CPU オーバーヘッドを軽減します。

LRO は、受信ネットワーク パケットをより大きなバッファに再構築します。これにより、パケットのサイズは大きくなりますが、数は少なくなります。次に、それらのパケットをホストまたは仮想マシンのネットワーク スタックに転送します。LRO が無効になっている場合と比較して CPU のパケット処理数が少なくなり、特にバンド幅の高い接続の場合はネットワーク使用率が減少します。

LRO によるパフォーマンス向上のメリットを得るには、VMkernel とゲスト OS が含まれる、ESXi ホストのデータパスの LRO を有効にします。デフォルトでは、VMkernel および VMXNET3 仮想マシン アダプタで LRO が有効になっています。

データパスの TCP パケット集約の場所の詳細については、当社のナレッジ ベースの記事 [VMWare 環境における TCP セグメンテーション オフロード \(TSO\) と Large Receive Offload \(LRO\) について](#) を参照してください。

ESXi ホストでのすべての VMXNET3 アダプタのハードウェア LRO の有効化

ゲスト OS でアセンブリ用のリソースを消費する代わりに LRO 技術を使用することにより、ホストの物理アダプタのハードウェア機能を有効にして VMXNET3 VM アダプタの受信 TCP パケットを集約します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [システム] セクションを展開し、[システムの詳細設定] をクリックします。
- 4 `Net.Vmxnet3HwLRO` パラメータの値を編集します。
 - ハードウェア LRO を有効にするには、`Net.Vmxnet3HwLRO` を **1** に設定します。
 - ハードウェア LRO を無効にするには、`Net.Vmxnet3HwLRO` を **0** に設定します。
- 5 [OK] をクリックして変更内容を保存します。

ESXi ホストでのすべての VMXNET3 アダプタのソフトウェア LRO の有効化または無効化

ホストの物理アダプタでハードウェア LRO がサポートされていない場合、VMXNET3 アダプタの VMkernel バックエンドのソフトウェア LRO を使用して、仮想マシンのネットワーク パフォーマンスを向上させます。

vSphere 5.5 以降では、IPv4 パケットと IPv6 パケットの両方でソフトウェア LRO がサポートされています。

前提条件

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。

- 3 [システム] セクションを展開し、[システムの詳細設定] をクリックします。
- 4 VMXNET3 アダプタの `Net.Vmxnet3SwLRO` パラメータの値を編集します。
 - ソフトウェア LRO を有効にするには、`Net.Vmxnet3SwLRO` を 1 に設定します。
 - ソフトウェア LRO を無効にするには、`Net.Vmxnet3SwLRO` を 0 に設定します。
- 5 [OK] をクリックして変更内容を保存します。

ESXi ホストの VMXNET3 アダプタで LRO が有効になっているかどうかの確認

遅延の影響を受けるワークロードを実行しているホストでネットワーク パフォーマンスを予測するとき、ESXi における LRO のステータスを調査します。

前提条件

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [システム] セクションを展開し、[システムの詳細設定] をクリックします。
- 4 VMXNET2 および VMXNET3 の LRO パラメータの値を調査します。
 - ハードウェア LRO については、`Net.Vmxnet3HwLRO` パラメータを調べます。このパラメータが 1 の場合、ハードウェア LRO は有効です。
 - ソフトウェア LRO については、`Net.Vmxnet3SwLRO` パラメータを調べます。このパラメータが 1 の場合、ハードウェア LRO は有効です。

VMXNET 3 アダプタの LRO バッファのサイズの変更

VMXNET 3 ネットワーク アダプタを使用して、仮想マシン接続のパケット集約のバッファ サイズを変更できます。バッファ サイズを増やすと TCP ACK 数が減少し、ワークロードの効率が向上します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [システム] セクションを展開し、[システムの詳細設定] をクリックします。
- 4 `Net.VmxnetLROMaxLength` パラメータに 1 ～ 65535 の値を入力し、LRO バッファ サイズをバイト単位で設定します。

デフォルトでの LRO バッファのサイズは 32000 バイトと等しくなります。

ESXi ホスト上のすべての VMkernel アダプタの LRO の有効化または無効化

ESXi ホスト上の VMkernel ネットワーク アダプタで LRO を使用して、着信インフラストラクチャ トラフィックのネットワーク パフォーマンスを向上させます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [システム] セクションを展開し、[システムの詳細設定] をクリックします。
- 4 `Net.TcpipDefLROEnabled` パラメータの値を編集します。
 - ホスト上の VMkernel ネットワーク アダプタの LRO を有効にするには、`Net.TcpipDefLROEnabled` を **1** に設定します。
 - ホスト上の VMkernel ネットワーク アダプタのソフトウェア LRO を無効にするには、`Net.TcpipDefLROEnabled` を **0** に設定します。
- 5 [OK] をクリックして変更内容を保存します。

VMkernel アダプタの LRO バッファのサイズの変更

VMkernel 接続のパケット集約用のバッファ サイズは変更することができます。バッファ サイズを大きくして TCP 確認の数を減らし、VMkernel の効率を高めます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [システム] セクションを展開し、[システムの詳細設定] をクリックします。
- 4 `Net.TcpipDefLROMaxLength` パラメータに 1 ～ 65535 の間の値を入力し、LRO バッファ サイズをバイト単位で設定します。

デフォルトでの LRO バッファのサイズは 32768 バイトと等しくなります。

Linux 仮想マシンでの VMXNET3 アダプタの LRO の有効化または無効化

ホストの VMXNET3 アダプタで LRO を有効化する場合は、Linux 仮想マシンのネットワーク アダプタで LRO サポートをアクティブにして、より大きなバッファに着信パケットを集約するためにゲスト OS がリソースを消費しないようにします。

前提条件

Linux カーネルが 2.6.24 以降であることを確認します。

手順

- ◆ Linux ゲスト OS のターミナル ウィンドウで、`-K` および `lro` オプションを指定して `ethtool` コマンドを実行します。

- LRO を有効にするには、次のコマンドを実行します。

```
ethtool -K ethYlroon
```

`ethY` の `Y` は、仮想マシンの NIC のシーケンス番号です。

- LRO を無効にするには、次のコマンドを実行します。

```
ethtool -K ethYlrooff
```

`ethY` の `Y` は、仮想マシンの NIC のシーケンス番号です。

Windows 仮想マシンでの VMXNET3 アダプタの LRO の有効化または無効化

ホストの VMXNET3 アダプタで LRO を有効化する場合は、Windows 仮想マシンのネットワーク アダプタで LRO サポートをアクティブにして、より大きなバッファに着信パケットを集約するためにゲスト OS がリソースを消費しないようにします。

Windows での LRO テクノロジーは、Receive Side Coalescing (RSC) と呼ばれます。

前提条件

- 仮想マシンで Windows Server 2012 以降または Windows 8 以降が実行されていることを確認します。
- 仮想マシンに ESXi 6.0 以降との互換性があることを確認します。
- ゲスト OS にインストールされている VMXNET3 ドライバのバージョンが 1.6.6.0 以降であることを確認します。
- Windows Server 2012 以降または Windows 8 以降が実行されている仮想マシンで LRO がグローバルに有効になっていることを確認します。[Windows 仮想マシンでの LRO のグローバルな有効化](#) を参照してください。

手順

- 1 ゲスト OS のコントロール パネルの [ネットワークと共有センター] で、ネットワーク アダプタの名前をクリックします。

ダイアログ ボックスに、アダプタのステータスが表示されます。

- 2 [プロパティ] をクリックし、VMXNET3 ネットワーク アダプタのタイプで [構成] をクリックします。
- 3 [詳細] タブで、[Recv Segment Coalescing (IPv4)] および [Recv Segment Coalescing (IPv6)] を [有効] または [無効] に設定します。
- 4 [OK] をクリックします。

Windows 仮想マシンでの LRO のグローバルな有効化

Windows 8 以降または Windows Server 2012 以降が実行されている仮想マシン上の VMXNET3 アダプタの LRO を使用するには、ゲスト OS で LRO をグローバルに有効にする必要があります。Windows での LRO テクノロジーは、Receive Side Coalescing (RSC) と呼ばれます。

手順

- 1 Windows 8 以降または Windows Server 2012 のゲスト OS で LRO がグローバルに無効になっているかどうかを確認するには、コマンド プロンプトで `netsh int tcp show global` コマンドを実行します。

```
netsh int tcp show global
```

このコマンドにより、Windows 8.x OS で設定されているグローバル TCP パラメータのステータスが表示されます。

```
TCP Global Parameters
-----
Receive-Side Scaling State      : enabled
Chimney Offload State          : disabled
NetDMA State                    : disabled
Direct Cache Access (DCA)      : disabled
Receive Window Auto-Tuning Level : normal
Add-On Congestion Control Provider : none
ECN Capability                  : disabled
RFC 1323 Timestamps           : disabled
Initial RTO                     : 3000
Receive Segment Coalescing State : disabled
```

Windows 8 以降または Windows Server 2012 マシンで LRO がグローバルに無効になっている場合は、Receive Segment Coalescing State プロパティが disabled として表示されます。

- 2 Windows OS で LRO をグローバルに有効にするには、コマンド プロンプトで次の `netsh int tcp set global` コマンドを実行します。

```
netsh int tcp set global rsc=enabled
```

次のステップ

Windows 8 以降または Windows Server 2012 仮想マシンで VMXNET3 アダプタの LRO を有効にします。[Windows 仮想マシンでの VMXNET3 アダプタの LRO の有効化または無効化](#) を参照してください。

NetQueue とネットワーク パフォーマンス

NetQueue は、一部のネットワーク アダプタの機能を利用して、個別に処理可能な複数の受信キューのシステムにネットワーク トラフィックを配信します。これによって、処理をマルチ CPU に拡張し、受信側のネットワーク パフォーマンスを向上させることができます。

ホストでの NetQueue の有効化

NetQueue は、デフォルトで有効になっています。一度無効にした NetQueue を使用するには、再度有効にする必要があります。

前提条件

手順

- 1 ホストの ESXi Shell で、次のコマンドを使用します。

```
esxcli system settings kernel set --setting="netNetqueueEnabled" --value="TRUE"
```

- 2 `esxcli module parameters set` コマンドを使用して、NetQueue を使用するように NIC ドライバを構成します。

たとえば、デュアル ポートの Emulex NIC でこの ESXCLI コマンドを実行して、8 つの受信キューを持つドライバを構成します。

```
esxcli system module parameters set -m tg3 -p force_netq=8,8
```

- 3 ホストを再起動します。

ホストでの NetQueue の無効化

NetQueue は、デフォルトで有効になっています。

前提条件

NIC ドライバの構成については、『Getting Started with vSphere Command-Line Interfaces』を参照すると理解が深まります。

手順

- 1 VMware vSphere CLI では、ホストのバージョンに応じて次のコマンドを使用します。

```
esxcli system settings kernel set --setting="netNetqueueEnabled" --value="FALSE"
```

- 2 NIC ドライバの NetQueue を無効にするには、`esxcli module parameters set` コマンドを使用します。

たとえば、デュアルポート Emulex NIC で、この ESXCLI コマンドを実行して、1 つの受信キューを備えるドライバを構成します。

```
esxcli system module parameters set -m tg3 -p force_netq=1,1
```

- 3 ホストを再起動します。

vSphere Network I/O Control

11

vSphere Network I/O Control を使用して、ビジネス上不可欠なアプリケーションにネットワーク バンド幅を割り当てたり、いくつかの種類のトラフィックが共通のリソースで競合する問題を解決したりします。

- **vSphere Network I/O Control バージョン 3 について**

vSphere Network I/O Control バージョン 3 は、ホスト上の物理アダプタのキャパシティに基づいて、システムトラフィックのバンド幅を予約するメカニズムを導入しています。これにより、CPU およびメモリ リソースの割り当てに使用するモデルと同様に、仮想マシン ネットワーク アダプタ レベルでリソースを詳細に制御できます。

- **vSphere Distributed Switch での Network I/O Control バージョン 3 へのアップグレード**

Network I/O Control をバージョン 3 に変換せずに vSphere Distributed Switch をバージョン 6.0.0 にアップグレードしている場合、Network I/O Control をアップグレードすれば、システムトラフィックおよび個々の仮想マシンへのバンド幅割り当ての拡張モデルを使用できます。

- **vSphere Distributed Switch での Network I/O Control の有効化**

vSphere Distributed Switch でネットワーク リソース管理を有効にして、vSphere 機能用のシステムトラフィックおよび仮想マシントラフィックに対して最小限のバンド幅を確保します。

- **システムトラフィックのバンド幅割り当て**

シェア、予約、および制限に基づいて、vSphere Fault Tolerance、iSCSI ストレージ、vSphere vMotion などによって生成されるトラフィックに一定量のバンド幅を割り当てるように Network I/O Control を構成できます。

- **仮想マシントラフィックのバンド幅割り当て**

Network I/O Control のバージョン 3 では、個々の仮想マシンのバンド幅要件を構成できます。また、仮想マシントラフィックの集約された予約からバンド幅を割り当てることができるネットワーク リソース プールを使用して、プールのバンド幅を個々の仮想マシンに割り当てることもできます。

- **Network I/O Control の範囲外への物理アダプタの移動**

特定の状況では、Network I/O Control バージョン 3 のバンド幅割り当てモデルから容量の少ない物理アダプタを除外する必要があります。

- **Network I/O Control バージョン 2 の操作**

vSphere Distributed Switch 5.x、および 6.0 にアップグレードされた vSphere Distributed Switch (Network I/O Control はバージョン 3 にアップグレードされていない) で、Network I/O Control バージョン 2 のリソース プール モデルを使用して、操作に必要なバンド幅をシステムトラフィックと仮想マシンが受信できるようにすることができます。

vSphere Network I/O Control バージョン 3 について

vSphere Network I/O Control バージョン 3 は、ホスト上の物理アダプタのキャパシティに基づいて、システムトラフィックのバンド幅を予約するメカニズムを導入しています。これにより、CPU およびメモリ リソースの割り当てに使用するモデルと同様に、仮想マシン ネットワーク アダプタ レベルでリソースを詳細に制御できます。

Network I/O Control の バージョン 3 の機能では、ネットワーク リソース予約とスイッチ全体への割り当てが向上しています。

バンド幅リソース予約のモデル

Network I/O Control バージョン 3 では、vSphere Fault Tolerance などのインフラストラクチャ サービスに関連するシステム トラフィックのリソース管理および仮想マシンのリソース管理のために、異なるモデルがサポートされています。

2 つのトラフィック カテゴリには、異なる特徴があります。システム トラフィックは、ESXi ホストに完全に関連付けられています。環境間で仮想マシンを移行すると、ネットワーク トラフィックのルートが変更されます。仮想マシンに、そのホストに関わらずネットワーク リソースを提供するため、Network I/O Control では、仮想マシンに対して、Distributed Switch 全体で有効なリソース割り当てを構成できます。

仮想マシンに対するバンド幅の確保

Network I/O Control バージョン 3 では、シェア、予約、および制限の構造を使用して、仮想マシンのネットワーク アダプタにバンド幅をプロビジョニングします。これらの構造に基づいて、十分なバンド幅を確保するため、仮想ワークロードが vSphere Distributed Switch、vSphere DRS、および vSphere HA のアドミッションコントロールの影響を受ける場合があります。[仮想マシン バンド幅のアドミッション コントロール](#) を参照してください。

vSphere 6.0 での Network I/O Control バージョン 2 およびバージョン 3

vSphere 6.0 では、Network I/O Control のバージョン 2 とバージョン 3 が共存しています。2 つのバージョンでは、仮想マシンとシステム トラフィックへのバンド幅の割り当てに、異なるモデルを実装しています。Network I/O Control バージョン 2 では、物理アダプタ レベルで、仮想マシンへのバンド幅割り当てを構成します。他方、バージョン 3 では、Distributed Switch 全体のレベルで仮想マシンへのバンド幅割り当てを設定できます。

Distributed Switch をアップグレードすると、Network I/O Control もバージョン 3 にアップグレードされます。ただし、CoS のタグ付け、ユーザー定義のネットワーク リソース プールなど、Network I/O Control バージョン 3 で利用できない機能を使用している場合は、この限りではありません。この場合、バージョン 2 とバージョン 3 のリソース割り当てモデルの違いにより、無停止でのアップグレードはできません。引き続きバージョン 2 を使用して、仮想マシンのバンド幅割り当て設定を維持するか、バージョン 3 に切り替えて、スイッチ ホスト間でバンド幅ポリシーを調整することができます。

表 11-1. vSphere Distributed Switch および ESXi のバージョンに応じた Network I/O Control バージョン

vSphere Network I/O Control	vSphere Distributed Switch のバージョン	ESXi のバージョン
2.0	5.1.0	■ 5.1
		■ 5.5
		■ 6.0
	5.5.0	■ 5.5 ■ 6.0
3.0	6.0.0	6.0

機能の可用性

SR-IOV は、Network I/O Control バージョン 3 を使用するように構成された仮想マシンでは利用できません。

vSphere Distributed Switch での Network I/O Control バージョン 3 へのアップグレード

Network I/O Control をバージョン 3 に変換せずに vSphere Distributed Switch をバージョン 6.0.0 にアップグレードしている場合、Network I/O Control をアップグレードすれば、システム トラフィックおよび個々の仮想マシンへのバンド幅割り当ての拡張モデルを使用できます。

Network I/O Control バージョン 2 をバージョン 3 にアップグレードすると、バージョン 2 で定義されている既存のすべてのシステム ネットワーク リソース プールの設定が、システム トラフィックのシェア、予約、および制限の構造に変換されます。デフォルトでは、変換されたすべてのシステム トラフィック タイプの予約は設定されません。

バージョン 3 への Distributed Switch のアップグレードは、無停止で行うことはできません。Network I/O Control バージョン 2 でのみ使用できる特定の機能は、バージョン 3 へのアップグレード時に削除されます。

表 11-2. Network I/O Control バージョン 3 へのアップグレード時に削除される機能

アップグレード時に削除される機能	説明
ユーザー定義ネットワーク リソース プール（それらの間のすべての関連付けを含む）および既存の分散ポート グループ	ユーザー定義ネットワーク リソース プールのシェアを個々のネットワーク アダプタのシェアに転送することで、特定のリソース割り当て設定を保持できます。そのため、Network I/O Control バージョン 3 にアップグレードする前に、アップグレードが Network I/O Control バージョン 2 の仮想マシン用に構成されたバンド幅割り当てに大きな影響を与えないことを確認してください。
ポートとユーザー定義ネットワーク リソース プール間の既存の関連付け	Network I/O Control バージョン 3 では、親ポート グループに割り当てられたプールとは異なるネットワーク リソース プールに個々の分散ポートを関連付けることはできません。Network I/O Control バージョン 3 は、バージョン 2 とは異なり、ポート レベルでリソース割り当てポリシーをオーバーライドすることはできません。
ネットワーク リソース プールに関連付けられているトラフィックの CoS のタグ付け	Network I/O Control バージョン 3 では、QoS 要求の高いトラフィックを CoS タグでマークできません。アップグレード後に、ユーザー定義ネットワーク リソース プールに関連付けられているトラフィックの CoS のタグ付けをリストアするには、トラフィックのフィルタリングとマーキングのネットワーク ポリシーを使用します。 分散ポート グループ または アップリンク ポート グループ 上のトラフィックのマーキングおよび 分散ポート または アップリンク ポート 上のトラフィックのマーキングを参照してください。

前提条件

- vSphere Distributed Switch のバージョンが 6.0.0 であることを確認します。
- Distributed Switch の Network I/O Control 機能がバージョン 2 であることを確認します。
- スイッチの分散ポート グループに対する dvPort グループ変更権限があることを確認します。
- スイッチのすべてのホストが vCenter Server に接続されていることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[アップグレード] - [Network I/O Control をアップグレードします] を選択します。
[Network I/O Control をアップグレードします] ウィザードが表示されます。
- 3 (オプション) [概要] ページで、スイッチ構成のバックアップを作成します。
アップグレードに失敗した場合、バックアップを使用して、スイッチ構成をリストアできます。
- 4 アップグレードによる変更を確認し、[次へ] をクリックします。

- 5 Distributed Switch がアップグレードの検証の前提条件を満たしていることを確認し、[次へ] をクリックします。

前提条件	説明
ポート グループのアクセシビリティ	スイッチのアップリンク ポート グループおよび分散ポート グループにアクセスし、変更を行う権限がある。
ホストの状態	スイッチのすべてのホストが vCenter Server に接続されている。
システム トラフィックの CoS 優先順位タグ	Distributed Switch に、CoS タグが割り当てられているネットワーク リソース プールがない。
ユーザー定義のネットワーク リソース プール	Distributed Switch に、仮想マシンのバンド幅を制御するユーザー定義ネットワーク リソース プールがない。
リソース割り当てポリシーのオーバーライド	スイッチの分散ポート グループで、個々のポートの Network I/O Control ポリシーのオーバーライドが許可されていない。

- 6 Distributed Switch にユーザー定義リソース プールが含まれている場合、バージョン 2 のユーザー定義リソース プールのシェアをバージョン 3 の個々の仮想マシン ネットワーク アダプタのシェアに転送し、[次へ] をクリックします。

シェアを転送すると、仮想マシンの特定のバンド幅割り当て設定を保持できます。

注： ユーザー定義ネットワーク リソース プールの制限は変換時に保持されません。

- 7 アップグレード設定を確認して、[終了] をクリックします。

次のステップ

- ネットワーク リソース プールを作成し、仮想マシンが接続されている分散ポート グループに関連付けて、スイッチに接続されている仮想マシンのグループにバンド幅の予約割り当てを適用します。[ネットワーク リソース プールの作成](#) および[ネットワーク リソース プールへの分散ポート グループの追加](#) を参照してください。

バージョン 2 の元のシェアを転送した場合、ネットワーク リソース プールをスイッチのポート グループに関連付けたときに、そのシェアが適用されます。

- シェア、予約、および制限を使用して、割り当てのバンド幅を個々の仮想マシンに割り当てます。[仮想マシンのバンド幅割り当ての構成](#) を参照してください。

vSphere Distributed Switch での Network I/O Control の有効化

vSphere Distributed Switch でネットワーク リソース管理を有効にして、vSphere 機能用のシステム トラフィックおよび仮想マシン トラフィックに対して最小限のバンド幅を確保します。

前提条件

vSphere Distributed Switch のバージョンが 5.1.0 以降であることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。

- 2 [アクション] メニューから [設定の編集] を選択します。
- 3 [Network I/O Control] ドロップダウン メニューから、[有効化] を選択します。
- 4 [OK] をクリックします。

結果

有効化されると、システム トラフィックおよび仮想マシン トラフィックのバンド幅割り当てを処理するために Network I/O Control が使用するモデルは、Distributed Switch で機能している Network I/O Control のバージョンに基づきます。[vSphere Network I/O Control バージョン 3 について](#) を参照してください。

システム トラフィックのバンド幅割り当て

シェア、予約、および制限に基づいて、vSphere Fault Tolerance、iSCSI ストレージ、vSphere vMotion などによって生成されるトラフィックに一定量のバンド幅を割り当てるように Network I/O Control を構成できます。

Distributed Switch の Network I/O Control を使用して、vSphere の主要なシステム機能に関連するトラフィックのバンド幅割り当てを構成できます。

- 管理
- Fault Tolerance
- iSCSI
- NFS
- Virtual SAN
- vMotion
- vSphere Replication
- vSphere Data Protection バックアップ
- 仮想マシン

vCenter Server は、Distributed Switch の割り当てを、スイッチに接続されているホストの各物理アダプタに伝達します。

■ システム トラフィックのバンド幅割り当てパラメータ

Network I/O Control では、いくつかの構成パラメータを使用して、vSphere システムの基本機能からのトラフィックにバンド幅を割り当てます。

■ システム トラフィックのバンド幅予約の例

物理アダプタのキャパシティによって、確保されるバンド幅が決まります。このキャパシティに基づいて、システム機能が最適に動作するための最小バンド幅を確保できます。

■ システム トラフィックのバンド幅割り当ての構成

vSphere Distributed Switch に接続されている物理アダプタのホスト管理、仮想マシン、iSCSI ストレージ、NFS ストレージ、vSphere vMotion、vSphere Fault Tolerance、Virtual SAN、および vSphere Replication にバンド幅を割り当てます。

システム トラフィックのバンド幅割り当てパラメータ

Network I/O Control では、いくつかの構成パラメータを使用して、vSphere システムの基本機能からのトラフィックにバンド幅を割り当てます。

表 11-3. システム トラフィックの割り当てパラメータ

バンド幅割り当てのパラメータ	説明
シェア	<p>シェアは、同じ物理アダプタ上で有効な他のシステム トラフィック タイプを基に、システム トラフィック タイプの相対的な優先度を 1 から 100 で示します。</p> <p>システム トラフィック タイプで利用できるバンド幅の大きさは、その相対的なシェアと、他のシステム機能が送信しているデータ量によって決まります。</p> <p>たとえば、FT トラフィックと iSCSI トラフィックにシェア値 100 を割り当て、一方、他のネットワーク リソース プールにそれぞれシェア値 50 を割り当てます。物理アダプタは、vSphere Fault Tolerance、iSCSI、および管理のトラフィックを送信するように構成されています。ある特定の時点では、vSphere Fault Tolerance と iSCSI が物理アダプタ上のアクティブなトラフィック タイプであり、すべての容量を使用します。各トラフィックは、使用可能な帯域幅の 50% を使用します。別の時点では、3 つのすべてのトラフィック タイプによってアダプタが飽和します。この場合は、vSphere FT トラフィックと iSCSI トラフィックそれぞれがアダプタ容量の 40% を使用し、vMotion が 20% を使用します。</p>
予約	<p>単一の物理アダプタ上で確保する必要のある最小バンド幅 (Mbps)。すべてのシステム トラフィック タイプで予約される合計バンド幅は、最低キャパシティを備えた物理ネットワーク アダプタが提供できるバンド幅の 75 パーセントを超過することはできません。</p> <p>未使用の予約バンド幅は、システム トラフィックの他のタイプで利用できるようになります。ただし、Network I/O Control では、システム トラフィックが使用しないキャパシティを仮想マシンの配置に再配分しません。たとえば、iSCSI に 2 Gbps の予約を構成するとします。iSCSI は単一バスを使用するため、Distributed Switch が物理アダプタにこの予約を割り当てない可能性があります。未使用のバンド幅が仮想マシン システム トラフィックに割り当てられないため、Network I/O Control は、システム トラフィックのバンド幅の潜在的な要求 (たとえば、バンド幅を新しい VMkernel アダプタに提供しなければならない新しい iSCSI バスが存在する場合など) に問題なく対応することができます。</p>
制限	<p>単一物理アダプタでシステム トラフィック タイプが使用できる最大バンド幅 (Mbps)。</p>

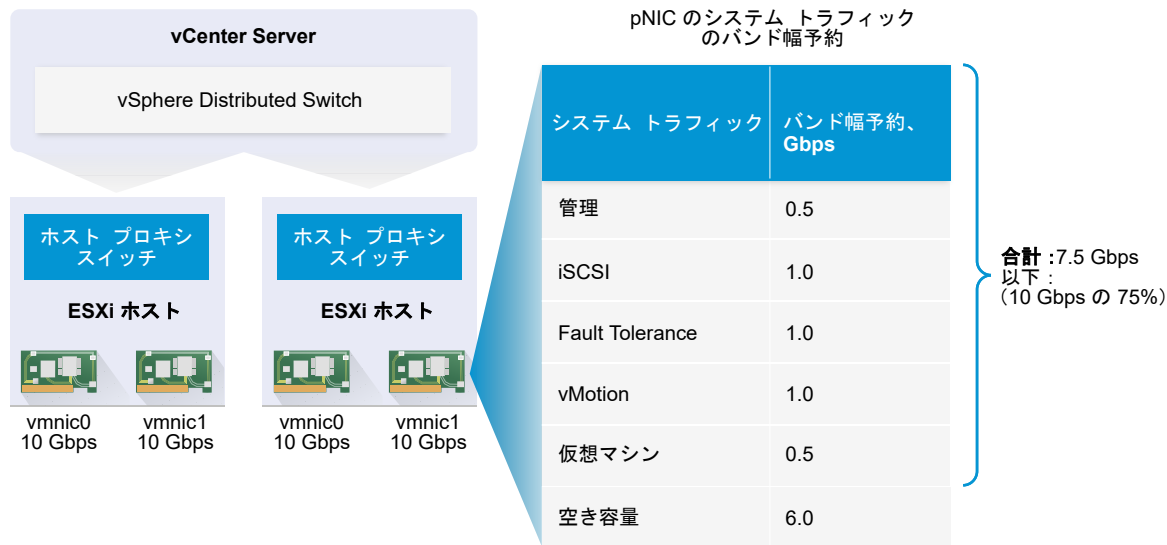
システム トラフィックのバンド幅予約の例

物理アダプタのキャパシティによって、確保されるバンド幅が決まります。このキャパシティに基づいて、システム機能が最適に動作するための最小バンド幅を確保できます。

たとえば、10 GbE ネットワーク アダプタを備えた ESXi ホストに接続されている Distributed Switch では、vCenter Server を使用した管理に 1 Gbps、iSCSI ストレージに 1 Gbps、vSphere Fault Tolerance に 1 Gbps、vSphere vMotion トラフィックに 1 Gbps、仮想マシン トラフィックに 0.5 Gbps を確保するように予約を構成できます。Network I/O Control は、物理ネットワーク アダプタごとに、要求されたバンド幅を割り当てます。物理ネットワーク アダプタのバンド幅の 75 % 以下、つまり 7.5 Gbps 以下を予約できます。

シェア、制限、および使用状況に応じてホストが動的にバンド幅を割り当てることができるように、またシステム機能の操作に十分なバンド幅だけを予約するために、より多くのキャパシティを予約せずに残しておくこともできます。

図 11-1. 10 GbE 物理ネットワーク アダプタ上のシステム トラフィックのバンド幅予約の例



システム トラフィックのバンド幅割り当ての構成

vSphere Distributed Switch に接続されている物理アダプタのホスト管理、仮想マシン、iSCSI ストレージ、NFS ストレージ、vSphere vMotion、vSphere Fault Tolerance、Virtual SAN、および vSphere Replication にバンド幅を割り当てます。

Network I/O Control を使用して仮想マシンのバンド幅割り当てを有効にするには、仮想マシン システム トラフィックを構成します。仮想マシン トラフィックのバンド幅予約は、アドミッション コントロールでも使用されます。仮想マシンをパワーオンすると、アドミッション コントロールにより、十分なバンド幅が確保されているかどうかを検証されます。

前提条件

- vSphere Distributed Switch のバージョンが 6.0.0 以降であることを確認します。
- スイッチの Network I/O Control がバージョン 3 であることを確認します。
- Network I/O Control が有効になっていることを確認します。vSphere Distributed Switch での [Network I/O Control の有効化](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。

2 [管理] タブで、[リソース割り当て] をクリックします。

3 [システム トラフィック] をクリックします。

システム トラフィックのタイプのバンド幅割り当てを確認します。

4 プロビジョニングする vSphere 機能に応じてトラフィック タイプを選択し、[編集] をクリックします。

選択したトラフィック タイプのネットワーク リソース設定が表示されます。

5 [シェア] ドロップダウン メニューから、物理アダプタを通過するフロー全体のトラフィックのシェアを編集します。

Network I/O Control は、物理アダプタが飽和した場合に、構成されているシェアを適用します。

事前定義値を設定するオプションを選択するか、[カスタム] を選択して 1 ～ 100 の数字を入力し、別のシェアを設定します。

6 [予約] テキスト ボックスに、そのトラフィック タイプに確保する必要がある最低バンド幅の値を入力します。

システム トラフィックの予約の合計は、Distributed Switch に接続されているすべてのアダプタで最も容量の少ない物理アダプタでサポートされているバンド幅の 75% 以下にする必要があります。

7 [制限] テキスト ボックスで、選択したタイプのシステム トラフィックで利用できる最大バンド幅を設定します。

8 [OK] をクリックして割り当て設定を適用します。

結果

vCenter Server は、Distributed Switch の割り当てを、スイッチに接続されているホストの物理アダプタに伝達します。

仮想マシン トラフィックのバンド幅割り当て

Network I/O Control のバージョン 3 では、個々の仮想マシンのバンド幅要件を構成できます。また、仮想マシン トラフィックの集約された予約からバンド幅を割り当てることができるネットワーク リソース プールを使用して、プールのバンド幅を個々の仮想マシンに割り当てすることもできます。

仮想マシンに対するバンド幅の割り当てについて

Network I/O Control は、2 つのモデルを使用して仮想マシンにバンド幅を割り当てます。1 つは、ネットワーク リソース プールに基づく vSphere Distributed Switch 全体への割り当てで、もう 1 つは、仮想マシンのトラフィックを転送する物理アダプタへの割り当てです。

ネットワーク リソース プール

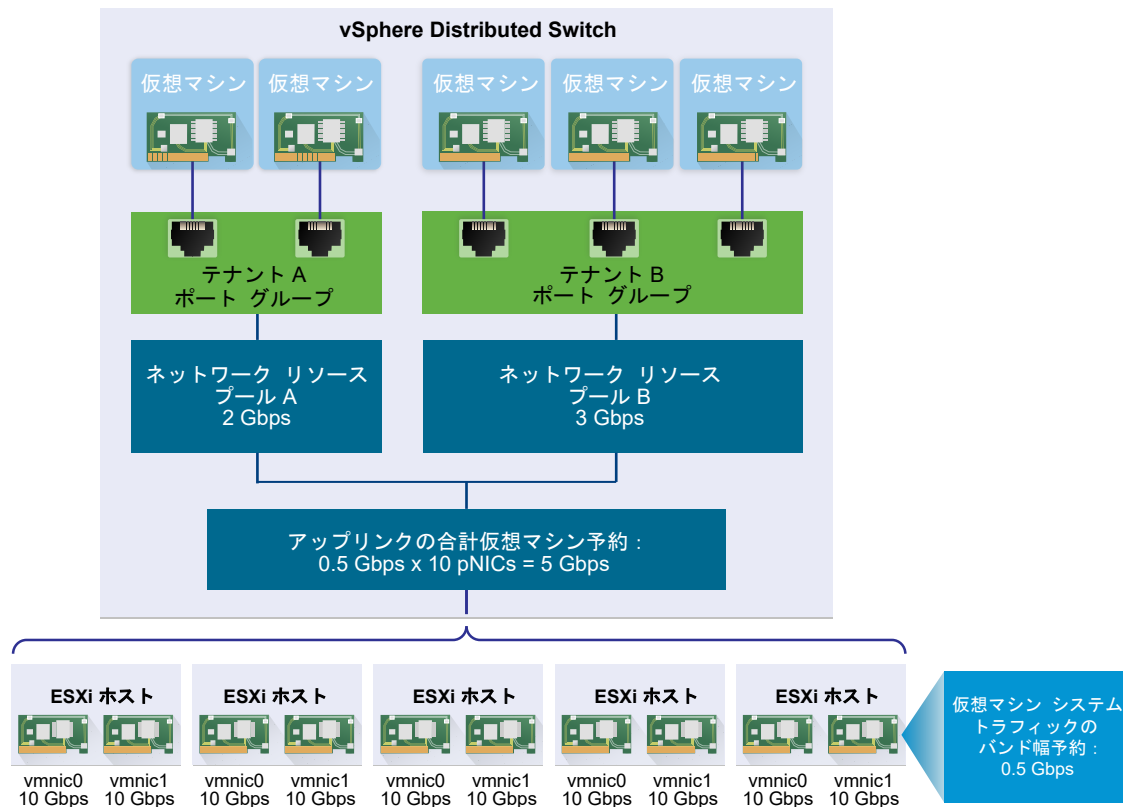
ネットワーク リソース プールは、Distributed Switch に接続されたすべての物理アダプタ上の仮想マシン システム トラフィック用に予約される集約バンド幅の一部です。

たとえば、10 個の 10 GbE アップリンクを持つ Distributed Switch 上で、アップリンクごとに 0.5 Gbps が仮想マシン システム トラフィック用に予約される場合は、このスイッチの仮想マシン予約で利用できる合計集約バンド幅は 5 Gbps になります。各ネットワーク リソース プールは、この 5 Gbps のキャパシティの割り当てを予約できます。

ネットワーク リソース プール専用のバンド幅割り当ては、そのプールに関連付けられている分散ポート グループ間で共有されます。仮想マシンには、その仮想マシンが接続されている分散ポート グループを介して、プールからバンド幅が割り当てられます。

デフォルトでは、スイッチ上の分散ポート グループは、割り当てが構成されていないデフォルトと呼ばれるネットワーク リソース プールに割り当てられています。

図 11-2. vSphere Distributed Switch のアップリンク全体でのネットワーク リソース プールに対するバンド幅集約



仮想マシンのバンド幅要件の定義

CPU やメモリ リソースの割り当てと同様に、バンド幅を個々の仮想マシンに割り当てます。Network I/O Control バージョン 3 は、仮想マシン ハードウェア設定のネットワーク アダプタに対して定義されているシェア、予約、および制限に応じて、バンド幅を仮想マシンにプロビジョニングします。予約により、仮想マシンからのトラフィックが、最低でも指定されたバンド幅を消費できることが保証されます。より多いキャパシティが物理アダプタにある場合、仮想マシンは指定されたシェアと制限に応じて追加のバンド幅を使用できます。

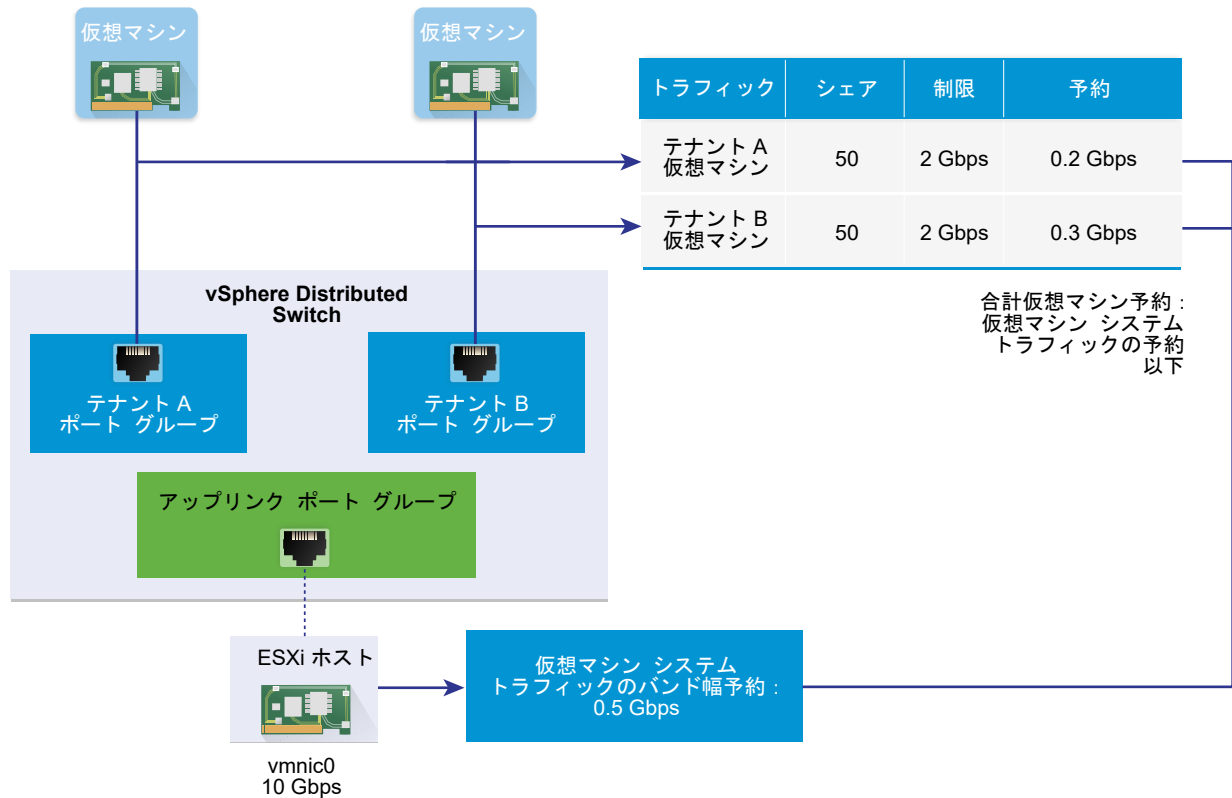
ホスト上の仮想マシンへのバンド幅のプロビジョニング

バンド幅を確保するため、Network I/O Control には、仮想マシンにバンド幅予約が構成されている場合にアクティブになる、トラフィック配置エンジンが実装されています。Distributed Switch は、仮想マシン ネットワーク アダプタからのトラフィックを、必要なバンド幅を提供し有効なチーミング ポリシーに適合している物理アダプタに配置しようとします。

ホスト上の仮想マシンのバンド幅予約の合計は、仮想マシン システム トラフィックに対して構成されている予約済みのバンド幅を超過することはできません。

実際の制限と予約は、アダプタが接続されている分散ポート グループのトラフィック シェーピング ポリシーにも依存します。たとえば、仮想マシン ネットワーク アダプタが最大 200 Mbps を要求し、トラフィック シェーピング ポリシーで構成された平均バンド幅が 100 Mbps である場合、実質的な制限は 100 Mbps になります。

図 11-3. 個々の仮想マシンのバンド幅割り当ての構成



仮想マシン トラフィックのバンド幅割り当てパラメータ

Network I/O Control バージョン 3 は、仮想マシン ハードウェアの設定でネットワーク アダプタに対して構成されているシェア、予約、および制限に基づいて、個々の仮想マシンにバンド幅を割り当てます。

表 11-4. 仮想マシン ネットワーク アダプタのバンド幅割り当てパラメータ

バンド幅割り当てのパラメータ	説明
シェア	仮想マシン トラフィックをネットワークに転送している物理アダプタのキャパシティに応じた、この仮想マシン ネットワーク アダプタを通過するトラフィックの相対的な優先順位 (1 から 100)。
予約	仮想ネットワーク アダプタが物理アダプタ上で使用できる必要がある最小バンド幅 (Mbps)。
制限	同一または別のホスト上の別の仮想マシンへのトラフィックに対応する、仮想マシン ネットワーク アダプタ上の最大バンド幅。

仮想マシン バンド幅のアドミSSION コントロール

仮想マシンが十分なバンド幅を確実に利用できるようにするため、vSphere では、バンド幅予約とチーミング ポリシーに基づいて、ホストおよびクラスターレベルでアドミSSION コントロールを実装します。

vSphere Distributed Switch のバンド幅のアドミSSION コントロール

仮想マシンをパワーオンすると、Distributed Switch の Network I/O Control 機能が、ホストで次の条件が満たされていることを確認します。

- ホスト上の物理アダプタが、チーミング ポリシーと予約に従って、仮想マシン ネットワーク アダプタに最小限のバンド幅を提供できる。
- 仮想マシン ネットワーク アダプタ用の予約が、ネットワーク リソース プール内の空き割り当てより小さい。

実行中の仮想マシンのネットワーク アダプタ用の予約を変更すると、Network I/O Control は、関連するネットワーク リソース プールが新しい予約に対応できるかどうかを再度確認します。プール内の空き割り当てが不足している場合は、変更は適用されません。

vSphere Distributed Switch でアドミSSION コントロールを使用するには、次のタスクを実行します。

- Distributed Switch 上の仮想マシン システム トラフィックに対して、バンド幅割り当てを構成します。
- 仮想マシン システム トラフィックに対して構成されたバンド幅の予約割り当てを、ネットワーク リソース プールに構成します。
- ネットワーク リソース プールを、仮想マシンをスイッチに接続する分散ポート グループに関連付けます。
- ポート グループに接続された仮想マシンのバンド幅要件を構成します。

vSphere DRS のバンド幅のアドミSSION コントロール

クラスター内の仮想マシンをパワーオンすると、vSphere DRS はアクティブなチーミング ポリシーに従って、その仮想マシン用に予約されたバンド幅が確保されるキャパシティを持つホストに、その仮想マシンを配置します。

次のような場合、vSphere DRS は、仮想マシンのバンド幅予約に対応するため、仮想マシンを別のホストに移行します。

- 予約は、元のホストが対応できなくなる値に変更される。
- 仮想マシンからのトラフィックを転送する物理アダプタがオフラインである。

vSphere DRS でアドミSSION コントロールを使用するには、次のタスクを実行します。

- Distributed Switch 上の仮想マシン システム トラフィックに対して、バンド幅割り当てを構成します。
- Distributed Switch に接続された仮想マシンのバンド幅要件を構成します。

仮想マシンのバンド幅要件に基づくリソース管理の詳細については、ドキュメント『vSphere リソース管理』を参照してください。

vSphere HA のバンド幅のアドミSSION コントロール

ホストでエラーが発生するかホストが隔離されると、vSphere HA は、バンド幅予約とチーミング ポリシーに基づいて、クラスター内の別のホスト上の仮想マシンをパワーオンします。

vSphere HA でアドミSSION コントロールを使用するには、次のタスクを実行します。

- 仮想マシン システム トラフィック用のバンド幅を割り当てます。
- Distributed Switch に接続された仮想マシンのバンド幅要件を構成します。

仮想マシンのバンド幅要件に基づく vSphere HA によるフェイルオーバー機能の提供については、ドキュメント『vSphere 可用性ガイド』を参照してください。

ネットワーク リソース プールの作成

vSphere Distributed Switch にネットワーク リソース プールを作成して、一連の仮想マシンのバンド幅を予約します。

ネットワーク リソース プールは、仮想マシンに予約割り当てを提供します。割り当ては、Distributed Switch に接続された物理アダプタ上の仮想マシン システム トラフィック用に予約されるバンド幅の一部です。プールに関連付けられている仮想マシン用の割り当てから、バンド幅を確保できます。プールに関連付けられパワーオンされている仮想マシンのネットワーク アダプタの予約は、プールの割り当てを超過することはできません。[仮想マシンに対するバンド幅の割り当てについて](#)を参照してください。

前提条件

- vSphere Distributed Switch のバージョンが 6.0.0 以降であることを確認します。
- スイッチの Network I/O Control がバージョン 3 であることを確認します。
- Network I/O Control が有効になっていることを確認します。[vSphere Distributed Switch での Network I/O Control の有効化](#)を参照してください。
- 仮想マシン システムのトラフィックに、構成された帯域幅予約があることを確認します。[システム トラフィックのバンド幅割り当ての構成](#)を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[リソース割り当て] をクリックします。
- 3 [ネットワーク リソース プール] をクリックします。
- 4 [追加] アイコンをクリックします。
- 5 (オプション) ネットワーク リソース プールの名前と説明を入力します。
- 6 仮想マシン システム トラフィック用に予約されている空きバンド幅の範囲内で、[予約割り当て] の値を Mbps 単位で入力します。

プールに割り当てることができる最大割り当ては、次の式で決まります。

```
max reservation quota = aggregated reservation for vm system traffic - quotas of the other resource pools
```

条件は: 「

- 仮想マシン システム トラフィックの集約された予約 = 各 pNIC 上の仮想マシン システム トラフィック用に構成されたバンド幅予約 * Distributed Switch に接続されている pNIC の数

- 他のプールの割り当て = 他のネットワーク リソース プールの予約割り当ての合計

7 [OK] をクリックします。

次のステップ

1 つ以上の分散ポート グループをネットワーク リソース プールに追加して、そのプールの割り当てから、個々の仮想マシンにバンド幅を割り当てることができます。[ネットワーク リソース プールへの分散ポート グループの追加](#)を参照してください。

ネットワーク リソース プールへの分散ポート グループの追加

分散ポート グループをネットワーク リソース プールに追加して、ポート グループに接続されている仮想マシンにバンド幅を割り当てることができるようにします。

ネットワーク リソース プールを複数の分散ポート グループに一度に割り当てするには、[分散ポート グループの管理] ウィザードで、リソース割り当てポリシーを使用できます。[vSphere Distributed Switch 上にある複数のポート グループのポリシーの管理](#)を参照してください。

Network I/O Control は、Distributed Switch で機能している Network I/O Control バージョンに実装されたモデルに応じて、分散ポート グループに関連付けられた仮想マシンにバンド幅を割り当てます。[vSphere Network I/O Control バージョン 3 について](#)を参照してください。

前提条件

- vSphere Distributed Switch のバージョンが 5.1 以降であることを確認します。
- Network I/O Control が有効になっていることを確認します。[vSphere Distributed Switch での Network I/O Control の有効化](#)を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で分散ポート グループを探します。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックします。
- 2 分散ポート グループを選択して、[分散ポート グループ設定を編集します] をクリックします。
- 3 [設定の編集] ダイアログ ボックスで、[全般] をクリックします。
- 4 [ネットワーク リソース プール] ドロップダウン メニューから、ネットワーク リソース プールを選択して、[OK] をクリックします。

Distributed Switch にネットワーク リソース プールが含まれていない場合は、ドロップダウン メニューに [(デフォルト)] オプションのみが表示されます。

仮想マシンのバンド幅割り当ての構成

分散ポート グループに接続されている各仮想マシンへのバンド幅割り当てを構成できます。バンド幅の設定には、共有設定、予約設定、制限設定があります。

前提条件

- vSphere Distributed Switch のバージョンが 6.0.0 以降であることを確認します。
- スイッチの Network I/O Control がバージョン 3 であることを確認します。
- Network I/O Control が有効になっていることを確認します。vSphere Distributed Switch での [Network I/O Control の有効化](#) を参照してください。
- 仮想マシン システムのトラフィックに、構成された帯域幅予約があることを確認します。システム [トラフィックのバンド幅割り当ての構成](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で仮想マシンを探します。
 - a データセンター、フォルダ、クラスタ、リソース プール、またはホストを選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [仮想マシン] をクリックしてリストから仮想マシンを選択します。
- 2 仮想マシンの [管理] タブで、[設定] - [仮想マシンのハードウェア] を選択します。
- 3 [編集] をクリックします。
- 4 仮想マシン ネットワーク アダプタのネットワーク アダプタ X のセクションを展開します。
- 5 新規の仮想マシン ネットワーク アダプタのバンド幅割り当てを構成するには、[新規デバイス] ドロップダウンメニューで [ネットワーク] を選択して、[追加] をクリックします。

[新規ネットワーク] セクションに、バンド幅割り当てのオプションとその他のネットワーク アダプタ設定が表示されます。
- 6 仮想マシン ネットワーク アダプタが分散ポート グループに接続されていない場合は、ネットワーク アダプタ X または [新規ネットワーク] ラベルの横にあるドロップダウンメニューからポート グループを選択します。

仮想マシン ネットワーク アダプタの [シェア]、[予約]、および[制限] の各設定が表示されます。
- 7 [シェア] ドロップダウン メニューで、この仮想マシンからのトラフィックの相対的な優先順位を、接続されている物理アダプタの容量のシェアとして設定します。

Network I/O Control は、物理アダプタが飽和した場合に、構成されているシェアを適用します。

事前定義値を設定するオプションを選択するか、[カスタム] を選択して 1 ～ 100 の数字を入力し、別のシェアを設定します。
- 8 [予約] テキスト ボックスで、仮想マシンのパワーオン時に VM ネットワーク アダプタでできるようにする必要がある最小帯域幅を予約します。

ネットワーク リソース プールを使用して帯域幅をプロビジョニングする場合、そのプールに関連付けられているパワーオンされた VM ネットワーク アダプタからの予約は、プールの割り当てを超過しないようにする必要があります。

vSphere DRS が有効な場合、仮想マシンをパワーオンするには、ホストのすべての VM ネットワーク アダプタからの予約が、ホストの物理アダプタの、仮想マシン システム トラフィックのために予約された帯域幅を超過していないことを確認する必要があります。

9 [制限] テキスト ボックスで、VM ネットワーク アダプタで消費可能な帯域幅の制限を設定します。

10 [OK] をクリックします。

結果

ネットワーク

I/O Control によって、ネットワーク リソース プールの予約割り当てから仮想マシンのネットワークアダプタ用に予約されたバンド幅が割り当てられます。

複数の仮想マシン上のバンド幅割り当ての構成

たとえば Network I/O Control をバージョン 3 にアップグレードした後などに、特定のネットワーク リソース プールに接続されている複数の仮想マシン上のバンド幅割り当てを、1 つの操作で構成します。

前提条件

- vSphere Distributed Switch のバージョンが 6.0.0 以降であることを確認します。
- スイッチの Network I/O Control がバージョン 3 であることを確認します。
- Network I/O Control が有効になっていることを確認します。[vSphere Distributed Switch での Network I/O Control の有効化](#) を参照してください。
- 仮想マシン システムのトラフィックに、構成された帯域幅予約があることを確認します。[システム トラフィックのバンド幅割り当ての構成](#) を参照してください。
- 接続された分散ポート グループ経由で仮想マシンが特定のネットワーク リソース プールに関連付けられていることを確認します。[ネットワーク リソース プールへの分散ポート グループの追加](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[リソース割り当て] をクリックします。
- 3 [ネットワーク リソース プール] をクリックします。
- 4 ネットワーク リソース プールを選択します。
- 5 [仮想マシン] をクリックします。

選択されたネットワーク リソース プールに接続されている仮想マシン ネットワーク アダプタのリストが表示されます。

- 6 設定を構成する仮想マシン ネットワーク アダプタを選択して、[編集] をクリックします。
- 7 [シェア] ドロップダウン メニューで、トラフィックを転送する物理アダプタの範囲で、これらの仮想マシンからのトラフィックの相対的な優先順位を設定します。

Network I/O Control は、物理アダプタが飽和した場合に、構成されているシェアを適用します。

- 8 [予約] テキスト ボックスで、仮想マシンがパワーオンされているときに、各仮想マシン ネットワーク アダプタで利用できる必要がある最小バンド幅を予約します。

ネットワーク リソース プールを使用して帯域幅をプロビジョニングする場合、そのプールに関連付けられているパワーオンされた VM ネットワーク アダプタからの予約は、プールの割り当てを超過しないようにする必要があります。

- 9 [制限] テキスト ボックスでは、各仮想マシン ネットワーク アダプタが使用できるバンド幅の上限を設定します。
- 10 [OK] をクリックします。

ネットワーク リソース プールの割り当ての変更

一連の分散ポート グループに接続されている仮想マシンのために予約できるバンド幅割り当てを変更します。

前提条件

- vSphere Distributed Switch のバージョンが 6.0.0 以降であることを確認します。
- スイッチの Network I/O Control がバージョン 3 であることを確認します。
- Network I/O Control が有効になっていることを確認します。vSphere Distributed Switch での [Network I/O Control の有効化](#) を参照してください。
- 仮想マシン システムのトラフィックに、構成された帯域幅予約があることを確認します。システム トラフィックの [バンド幅割り当ての構成](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[リソース割り当て] をクリックします。
- 3 [ネットワーク リソース プール] をクリックします。
- 4 リストからネットワーク リソース プールを選択し、[編集] をクリックします。
- 5 [予約割り当て] テキスト ボックスに、スイッチのすべての物理アダプタの仮想マシン システム トラフィックのために予約されている、集約された空きバンド幅からの仮想マシンのバンド幅割り当てを入力します。
- 6 [OK] をクリックします。

ネットワーク リソース プールからの分散ポート グループの削除

ネットワーク リソース プールの予約割り当てからの、仮想マシンへのバンド幅の割り当てを停止するには、仮想マシンが接続されているポート グループとプールとの間の関連付けを削除します。

手順

- 1 vSphere Web Client で分散ポート グループを探します。
 - a Distributed Switch を選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [分散ポート グループ] をクリックします。

- 2 分散ポート グループを選択して、[分散ポート グループ設定を編集します] をクリックします。
- 3 ポート グループの [設定の編集] ダイアログ ボックスで、[全般] をクリックします。
- 4 [ネットワーク リソース プール] ドロップダウン メニューから、[(デフォルト)] を選択して、[OK] をクリックします。

結果

分散ポート グループが、デフォルトの仮想マシン ネットワーク リソース プールに関連付けられます。

ネットワーク リソース プールの削除

使用しなくなったネットワーク リソース プールを削除します。

前提条件

関連するすべての分散ポート グループから、ネットワーク リソース プールを開放します。[ネットワーク リソース プールからの分散ポート グループの削除](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[リソース割り当て] をクリックします。
- 3 [ネットワーク リソース プール] をクリックします。
- 4 ネットワーク リソース プールを選択して、[削除] をクリックします。
- 5 [はい] をクリックしてリソース プールを削除します。

Network I/O Control の範囲外への物理アダプタの移動

特定の状況では、Network I/O Control バージョン 3 のバンド幅割り当てモデルから容量の少ない物理アダプタを除外する必要があります。

たとえば、vSphere Distributed Switch のバンド幅割り当てが 10 GbE NIC に基づいて調整されている場合、1GbE NIC は 10GbE NIC について構成されている高い割り当て要件を満たすことができないため、スイッチに追加できない可能性があります。

前提条件

- ホストで ESXi 6.0 以降が実行されていることを確認します。
- vSphere Distributed Switch のバージョンが 6.0.0 以降であることを確認します。
- スイッチの Network I/O Control がバージョン 3 であることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックします。
- 3 [システム] を展開して、[システムの詳細設定] をクリックします。

- 4 Network I/O Control の範囲外で動作する必要がある物理アダプタをコンマ区切りリストとして `Net.IOControlPnicOptOut` パラメータに設定します。

例: `vmnic0,vmnic3`

- 5 [OK]をクリックして変更内容を保存します。

Network I/O Control バージョン 2 の操作

vSphere Distributed Switch 5.x、および 6.0 にアップグレードされた vSphere Distributed Switch (Network I/O Control はバージョン 3 にアップグレードされていない) で、Network I/O Control バージョン 2 のリソース プール モデルを使用して、操作に必要なバンド幅をシステム トラフィックと仮想マシンが受信できるようにすることができます。

Network I/O Control バージョン 2 のネットワーク リソース プール

Network I/O Control バージョン 2 の Distributed Switch のトラフィックでは、次の 2 種類のネットワーク リソース プールがサポートされています。

- システム ネットワーク リソース プール。主なタイプのシステム トラフィックに提供されるネットワーク バンド幅を管理するための事前定義済みのプール。このシステム トラフィックには、Fault Tolerance トラフィック、iSCSI トラフィック、vMotion トラフィック、管理トラフィック、vSphere レプリケーション (VR) トラフィック、NFS トラフィック、仮想マシン トラフィックが含まれます。
- ユーザー定義のネットワーク リソース プール。仮想マシン トラフィックのカスタム プール。ユーザー定義のリソース プールを分散ポート グループに割り当てると、ユーザー定義のリソース プールの設定が仮想マシンに適用されます。

Network I/O Control バージョン 2 のネットワーク リソース プールのバンド幅割り当てパラメータ

バンド幅割り当てのパラメータ	説明
シェア	<p>物理アダプタが飽和状態になると、そのアダプタを使用する仮想マシンまたは VMkernel アダプタは、ネットワーク リソース プールに構成されたシェアに応じて、外部ネットワークへのバンド幅が割り当てられます。</p> <p>ネットワーク リソース プールに割り当てられた物理アダプタのシェアでは、使用可能バンド幅の合計から、そのネットワーク リソース プールに関連付けられたトラフィックに対して保証するシェアを指定します。ネットワーク リソース プールが使用できる送信トラフィックのバンド幅の実際のシェアは、ネットワーク リソース プールのシェアと、他のネットワーク リソース プールが何をアクティブに転送しているかによって決定されます。</p> <p>たとえば、FT トラフィックと iSCSI トラフィックにシェア値 100 を割り当て、一方、他のネットワーク リソース プールにそれぞれシェア値 50 を割り当てます。物理アダプタは、vSphere Fault Tolerance、iSCSI、および管理のトラフィックを送信するように構成されています。ある特定の時点では、vSphere Fault Tolerance と iSCSI が物理アダプタ上のアクティブなトラフィックタイプであり、すべての容量を使用します。各トラフィックは、使用可能な帯域幅の 50% を使用します。別の時点では、3 つのすべてのトラフィック タイプによってアダプタが飽和します。この場合は、vSphere FT トラフィックと iSCSI トラフィックそれぞれがアダプタ容量の 40% を使用し、vMotion が 20% を使用します。</p> <p>注： iSCSI トラフィック リソース プールのシェアは、依存型ハードウェア iSCSI アダプタ上の iSCSI トラフィックには適用されません。</p>
制限	<p>ネットワーク リソース プールのホストの制限は、ネットワーク リソース プールに関連付けられたトラフィックが物理アダプタで利用できるバンド幅の上限です。</p>
QoS タグ	<p>ネットワーク リソース プールに QoS 優先順位タグを割り当てると、そのネットワーク リソース プールに関連付けられたすべての発信パケットに 802.1p (CoS) タグが適用されます。この方法では、スイッチなどのネットワーク デバイスがトラフィックを高い優先順位で処理できるように、特定のトラフィックをマークできます。</p>

Network I/O Control バージョン 2 のネットワーク リソース プールの作成

物理ネットワーク アダプタを通過するトラフィックが集中したときにバンド幅の割り当てをカスタマイズできるように、ユーザー定義ネットワーク リソース プールを作成します。

前提条件

- vSphere Distributed Switch のバージョンが 5.1 以降であることを確認します。
- Distributed Switch の Network I/O Control がバージョン 2 であることを確認します。
- Distributed Switch での Network I/O Control の有効化 [vSphere Distributed Switch での Network I/O Control の有効化](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[リソース割り当て] をクリックします。
- 3 [新規] をクリックします。
- 4 ネットワーク リソース プールの名前と、必要に応じてその説明を入力します。

- 5 [制限] テキスト ボックスに、ホストに接続されている物理アダプタについて、ネットワーク リソース プールの帯域幅制限を Mbps 単位で入力します。

デフォルトでは、トラフィックの制限は適用されません。

- 6 [物理アダプタの共有] ドロップダウン メニューで、ネットワーク リソース プールに関連付けられている仮想マシンまたは VMkernel アダプタに割り当てられる物理アダプタ容量のシェアを入力します。

Network I/O Control は、接続された物理アダプタが飽和した場合に、構成されているシェアを適用します。

事前定義値を設定するオプションを選択するか、[カスタム] を選択して 1 ～ 100 の数字を入力し、別のシェアを設定します。

- 7 (オプション) [CoS 優先順位タグ] ドロップダウン メニューで、ネットワーク リソース プールに関連付けられたシステムまたは仮想マシン トラフィックをマークする QoS タグを選択して、[OK] をクリックします。

QoS 優先順位タグは、ネットワーク プロトコル スタックのレイヤー 2 のリソース プールに関連付けられている仮想マシンからのトラフィックの優先順位を定義する、IEEE 802.1p (CoS) タグを表します。

次のステップ

1 つ以上の分散ポート グループをネットワーク リソース プールに関連付けて、バンド幅制御の設定を仮想マシンに適用します。 [ネットワーク リソース プールへの分散ポート グループの追加](#) を参照してください。

Network I/O Control バージョン 2 のネットワーク リソース プールの設定の編集

システムまたはユーザー定義ネットワーク リソース プールの設定を編集して、Network I/O Control バージョン 2 のプールに関連付けられているトラフィックの優先順位を変更します。

前提条件

- vSphere Distributed Switch のバージョンが 5.1 以降であることを確認します。
- Distributed Switch の Network I/O Control がバージョン 2 であることを確認します。
- Distributed Switch での Network I/O Control の有効化 [vSphere Distributed Switch での Network I/O Control の有効化](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで、[リソース割り当て] をクリックします。
- 3 リストからネットワーク リソース プールを選択し、[編集] をクリックします。
- 4 [制限] テキスト ボックスで、VM ネットワーク アダプタで消費可能な帯域幅の制限を設定します。
- 5 [物理アダプタの共有] ドロップダウン メニューで、ネットワーク リソース プールに関連付けられている仮想マシンまたは VMkernel アダプタに割り当てられる物理アダプタ容量のシェアを入力します。

Network I/O Control は、接続された物理アダプタが飽和した場合に、構成されているシェアを適用します。

事前定義値を設定するオプションを選択するか、[カスタム] を選択して 1 ～ 100 の数字を入力し、別のシェアを設定します。

- 6 (オプション) [CoS 優先順位タグ] ドロップダウン メニューで、ネットワーク リソース プールに関連付けられたシステムまたは仮想マシン トラフィックをマークする QoS タグを選択して、[OK] をクリックします。

QoS 優先順位タグは、ネットワーク プロトコル スタックのレイヤー 2 のリソース プールに関連付けられている仮想マシンからのトラフィックの優先順位を定義する、IEEE 802.1p (CoS) タグを表します。

結果

Network I/O Control バージョン 2 により、ネットワーク リソース プールに関連付けられている分散ポート グループの VMkernel および仮想マシン アダプタに、新しいバンド幅制御の設定が適用されます。

MAC アドレスの管理

12

MAC アドレスはネットワーク プロトコル スタックのレイヤー 2（データ リンク レイヤー）で使用され、受信者にフレームを送信します。vSphere では、vCenter Server で仮想マシン アダプタと VMkernel アダプタの MAC アドレスを生成することも、手動でアドレスを割り当てることもできます。

各ネットワーク アダプタ メーカーには、OUI（Organizationally Unique Identifier）という 3 バイトの固有なプリフィックスが割り当てられています。このプリフィックスを使用して、固有な MAC アドレスを生成できます。

VMware では、複数のアドレス割り当てメカニズムをサポートしており、それぞれ別の OUI を使用します。

- 生成された MAC アドレス
 - vCenter Server による割り当て
 - ESXi ホストによる割り当て
- 手動で設定された MAC アドレス
- レガシー仮想マシンに生成（ESXi では使用されない）

パワーオフ状態の仮想マシンのネットワーク アダプタを再構成した場合（自動 MAC アドレス割り当てタイプを変更した場合や固定 MAC アドレスを設定した場合）、アダプタの再構成が反映される前に vCenter Server で MAC アドレスの衝突が解決されます。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [vCenter Server からの MAC アドレスの割り当て](#)
- [ESXi ホストでの MAC アドレスの生成](#)
- [仮想マシンに対する固定 MAC アドレスの設定](#)

vCenter Server からの MAC アドレスの割り当て

vSphere 5.1 以降では、vCenter Server での MAC アドレスの自動割り当てに複数の方法を使用できます。MAC アドレスの重複、ローカル管理または汎用管理アドレスでの OUI の要件など、要件に合わせた最適な方法を選択できます。

vCenter Server で使用可能な MAC アドレスの生成には次の方法があります。

- VMware OUI 割り当て - デフォルトの割り当て
- プリフィックス ベースの割り当て
- 範囲ベースの割り当て

MAC アドレスが生成されたあと、仮想マシンとほかの登録済み仮想マシンで MAC アドレスの衝突がない限り、MAC アドレスは変更されません。MAC アドレスは仮想マシンの構成ファイルに保存されます。

注： 無効なプリフィックス ベースの割り当て値または範囲ベースの割り当て値を使用すると、vpxd.log ファイルにエラーが記録されます。vCenter Server では仮想マシンのプロビジョニング時に MAC アドレスの割り当てが行われません。

MAC アドレスの競合の防止

パワーオフ状態の仮想マシンの MAC アドレスは、稼働中またはサスペンドされている仮想マシンの MAC アドレスと照合されません。

仮想マシンが再びパワーオンになると、異なる MAC アドレスを取得することがあります。この変更は、他の仮想マシンとのアドレスの競合によって発生することがあります。仮想マシンがパワーオフのときには、その MAC アドレスはパワーオンにされた別の仮想マシンに割り当てられます。

パワーオフ状態の仮想マシンのネットワーク アダプタを再構成した場合（自動 MAC アドレス割り当てタイプを変更した場合や固定 MAC アドレスを設定した場合）、アダプタの再構成が反映される前に vCenter Server で MAC アドレスの衝突が解決されます。

MAC アドレスの競合の解決については、vSphere トラブルシューティングドキュメントを参照してください。

VMware OUI 割り当て

VMware OUI（Organizationally Unique Identifier）割り当てでは、デフォルトの VMware OUI 00:50:56 と vCenter Server ID に基づいて MAC アドレスを割り当てます。

VMware OUI 割り当ては、仮想マシンのデフォルトの MAC アドレス割り当てモデルです。この割り当ては 64 までの vCenter Server インスタンスと連動し、各 vCenter Server は 64000 までの一意の MAC アドレスを割り当てることができます。VMware OUI 割り当て方法は小規模のデプロイに適しています。

MAC アドレスの形式

VMware OUI 割り当て方法に従って、MAC アドレスのフォーマットは 00:50:56:XX:YY:ZZ となります。ここでは 00:50:56 は VMware OUI を表わし、XX は (80 + vCenter Server ID) で計算された値で、YY と ZZ はランダムな 2 桁の 16 進数です。

VMware OUI 割り当てで作成されたアドレスは、00:50:56:80:YY:ZZ から 00:50:56:BF:YY:ZZ までの範囲にあります。

プリフィックス ベースの MAC アドレス割り当て

ESXi 5.1 以降のホストでは、プリフィックス ベースの割り当てを使用して、デフォルト 00:50:56 以外の VMware OUI を指定したり、Locally Administered Address（LAA）を導入してアドレス領域を拡大したりできます。

プリフィックス ベースの MAC アドレス割り当てにより、デフォルトの VMware 割り当ての制限が克服され、大規模なデプロイで一意のアドレスが提供されます。LAA プリフィックスを導入すると、16,000,000 個の MAC アドレスしか提供されない一意のアドレス OUI ではなく、非常に大規模な MAC アドレス領域（2 の 46 乗）になります。

同一ネットワークの異なる vCenter Server インスタンスに指定するプリフィックスが、一意であることを確認してください。vCenter Server はプリフィックスで MAC アドレスの重複による問題の発生を回避します。
『vSphere トラブルシューティング』ドキュメントを参照してください。

範囲ベースの MAC アドレス割り当て

ESXi 5.1 以降のホストでは、範囲ベースの割り当てを使用して、Locally Administered Address (LAA) の範囲を含めたり除外したりできます。

開始 MAC アドレスと終了 MAC アドレスを使用して、1 つ以上の範囲を指定します (02:50:68:00:00:02、02:50:68:00:00:FF など)。指定された範囲内からのみ、MAC アドレスが生成されます。

LAA の複数の範囲を指定でき、使用するアドレス数が vCenter Server で範囲ごとに追跡されます。vCenter Server では、利用できるアドレスが残っている最初の範囲から MAC アドレスが割り当てられます。また、vCenter Server では範囲内の MAC アドレスの競合も確認されます。

範囲ベースの割り当てを使用するときは、それぞれの vCenter Server インスタンスに重複しない範囲を設定する必要があります。vCenter Server では、他の vCenter Server インスタンスと競合する可能性のある範囲は検出されません。重複する MAC アドレスの問題の解決については、『vSphere トラブルシューティング』ドキュメントを参照してください。

MAC アドレスの割り当て

プリフィックス ベースまたは範囲ベースの MAC アドレスの割り当てを有効にし、割り当てパラメータを調整するには、vSphere Web Client を使用します。

VMware OUI 割り当てから範囲ベースの割り当てに変更するなど、割り当てタイプを変更する場合は、vSphere Web Client を使用します。ただし、割り当て方法がプリフィックス ベースまたは範囲ベースで、別の割り当て方法に変更する場合は、vpxd.cfd ファイルを手動で編集して、vCenter Server を再起動する必要があります。

範囲ベースまたは接頭辞ベースの割り当ての変更または調整

vSphere Web Client を使用してデフォルトの VMware OUI から範囲ベースまたは接頭辞ベースの MAC アドレス割り当てに切り替えると、vSphere のデプロイ環境での MAC アドレスの重複の競合を回避または解決できます。

割り当て方法をデフォルトの VMware OUI から範囲ベースまたは接頭辞ベースの割り当てに変更するには、vSphere Web Client の vCenter Server インスタンスに利用できる [詳細設定] を使用します。

範囲ベースまたは接頭辞ベースの割り当てを VMware OUI 割り当てに戻したり、範囲ベースと接頭辞ベースの割り当てを切り替えるには、`vpxd.cfg` ファイルを手動で編集します。 [割り当てタイプの設定と変更](#) を参照してください。

注： vCenter Server 5.1 および ESXi 5.1 以降のホストでは、プリフィックス ベースの MAC アドレス割り当てを使用する必要があります。

vCenter Server 5.1 インスタンスが管理するホストで ESXi 5.1 より前のバージョンの ESXi を実行している場合は、VMware OUI プリフィックス ベースの MAC アドレス割り当てを使用します。VMware OUI プリフィックス付き MAC アドレス以外を割り当てられた仮想マシンは、5.1 より前のホストではパワーオンに失敗します。これらのホストでは、割り当てられた MAC アドレスが VMware OUI 00:50:56 プリフィックスを使用しているかどうか明示的に確認されます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、vCenter Server インスタンスに移動します。
- 2 [管理] タブをクリックし、[設定] - [詳細設定] を選択します。
- 3 [編集] をクリックします。
- 4 ターゲットの割り当てタイプのパラメータを追加または編集します。

割り当てタイプを 1 つだけ使用します。

- プリフィックス ベースの割り当てに変更します。

キー	値の例
<code>config.vpxd.macAllocScheme.prefixScheme.prefix</code>	005026
<code>config.vpxd.macAllocScheme.prefixScheme.prefixLength</code>	23

`prefix` および `prefixLength` で、新しく追加された vNIC の MAC アドレス プリフィックスの範囲が決まります。`prefix` は vCenter Server インスタンスに関連する MAC アドレスの開始 OUI です。`prefixLength` で、プリフィックスの長さ（ビット数）が決まります。

たとえば、テーブルの設定は 00:50:26 または 00:50:27 で始まる VM NIC MAC アドレスになります。

- 範囲ベースの割り当てに変更します。

キー	値の例
<code>config.vpxd.macAllocScheme.rangeScheme.range[X].begin</code>	005067000000
<code>config.vpxd.macAllocScheme.rangeScheme.range[X].end</code>	005067fffff

`range[X]` の `X` は範囲のシーケンス番号を表します。たとえば、`range[0]` の `0` は MAC アドレス割り当ての最初の範囲の割り当て設定を示します。

- 5 [OK] をクリックします。

割り当てタイプの設定と変更

範囲ベースの割り当てまたはプリフィックス ベースの割り当てから VMware OUI 割り当てに変更する場合は、割り当てタイプを `vpxd.cfd` ファイルに設定し、vCenter Server を再起動する必要があります。

前提条件

vpzd.cfg ファイルに変更を加える前に割り当てタイプを決定します。割り当てタイプの詳細については、[vCenter Server からの MAC アドレスの割り当て](#)を参照してください。

手順

- 1 vCenter Server のホスト マシンで、構成ファイルを格納するディレクトリに移動します。
 - Windows Server オペレーティング システムの場合、ディレクトリの場所は C:\ProgramData\VMware\CIS\cfg\vmware-vpx です。
 - vCenter Server Appliance では、ディレクトリの場所は /etc/vmware-vpx です。
- 2 vpzd.cfg ファイルを開きます。
- 3 使用する割り当てタイプを決定し、対応する XML コードをファイルに入力して割り当てタイプを構成します。
使用する XML コードの例は次のとおりです。

注： 割り当てタイプを 1 つだけ使用します。

◆ VMware OUI 割り当て

```
<vpzd>
  <macAllocScheme>
    <VMwareOUI>true</VMwareOUI>
  </macAllocScheme>
</vpzd>
```

◆ プリフィックス ベースの割り当て

```
<vpzd>
  <macAllocScheme>
    <prefixScheme>
      <prefix>005026</prefix>
      <prefixLength>23</prefixLength>
    </prefixScheme>
  </macAllocScheme>
</vpzd>
```

◆ 範囲ベースの割り当て

```
<vpzd>
  <macAllocScheme>
    <rangeScheme>
      <range id="0">
        <begin>005067000001</begin>
        <end>005067000001</end>
      </range>
    </rangeScheme>
  </macAllocScheme>
</vpzd>
```

- 4 vpzd.cfg を保存します。

5 vCenter Server ホストを再起動します。

ESXi ホストでの MAC アドレスの生成

ESXi ホストが vCenter Server に接続されていない場合、そのホストによって仮想マシン アダプタの MAC アドレスが生成されます。そのようなアドレスには、競合を避けるために別個の VMware OUI があります。

ESXi ホストは、次のいずれかの場合に仮想マシン アダプタ用の MAC アドレスを生成します。

- ホストが vCenter Server に接続されていない。
- 仮想マシンの構成ファイルに、MAC アドレスと、MAC アドレス割り当てタイプに関する情報が含まれていない。

MAC アドレスの形式

ホストは、VMware OUI 00:0C:29 と、仮想マシン UUID の 16 進数形式の最後の 3 つのオクテットで構成される MAC アドレスを生成します。仮想マシンの UUID は、ESXi 物理マシンの UUID と、仮想マシンの構成ファイルへのパス（.vmx）を使用して計算されるハッシュに基づいています。

MAC アドレスの競合の防止

所定の物理マシンで稼働中の仮想マシンおよびサスペンドされている仮想マシンのネットワーク アダプタに割り当てられた MAC アドレスは、競合が生じないようにすべて追跡されます。

ホストで生成された MAC アドレスを使用して、ある vCenter Server から別の vCenter Server に仮想マシンをインポートする場合、仮想マシンをパワーオンするときに [コピーしました] オプションを選択してアドレスを再生成し、インポート先の vCenter Server または vCenter Server システム間での競合を回避します。

仮想マシンに対する固定 MAC アドレスの設定

ほとんどのネットワーク導入環境では、生成される MAC アドレスで問題ありません。ただし、一意の値を持つ固定 MAC アドレスを仮想マシン アダプタに設定する必要があることがあります。

次の場合には、固定 MAC アドレスの設定が必要です。

- 異なる物理ホストの仮想マシン アダプタで同一のサブネットを共有し、それらのアダプタに同じ MAC アドレスが割り当てられている場合。この場合には、競合が発生します。
- 仮想マシン アダプタに常に同じ MAC アドレスが割り当てられるようにする場合。

デフォルトでは、VMware が手動生成アドレスに使用している OUI（Organizationally Unique Identifier）は 00:50:56 ですが、手動で生成されたすべての一意のアドレスがサポートされます。

注： VMware 以外のデバイスには、VMware コンポーネントに割り当てたアドレスを使用しないでください。たとえば、同一のサブネット上の物理サーバに固定 MAC アドレス 11:11:11:11:11:11、22:22:22:22:22:22 を割り当てたとします。物理サーバは、vCenter Server インベントリに属していないため、vCenter Server は、アドレス競合をチェックできません。

固定 MAC アドレスでの VMware OUI

デフォルトで、固定 MAC アドレスには接頭辞として VMware OUI（Organizationally Unique Identifier）が付けられています。ただし、VMware OUI によって提供される空きアドレスの範囲は制限されています。

VMware OUI を使用するように指定すると、vCenter Server、ホストの物理 NIC、および仮想 NIC で使用したり、後で使用したりするために、その範囲の一部が予約されます。

次の形式に従って、VMware OUI プリフィックスを含む固定 MAC アドレスを設定できます。

```
00:50:56:XX:YY:ZZ
```

XX は 00 から 3F までの有効な 16 進数であり、YY および ZZ は 00 から FF までの有効な 16 進数です。

vCenter Server によって生成される MAC アドレス、またはインフラストラクチャ トラフィック用の VMkernel アダプタに割り当てられる MAC アドレスとの競合を避けるためには、XX の値を 3F より大きくすることはできません。

手動で生成された MAC アドレスの最大値は、次のとおりです。

```
00:50:56:3F:FF:FF
```

生成された MAC アドレスと手動で割り当てられる MAC アドレスの間に競合が生じないようにするために、ハードコードされたアドレスから XX:YY:ZZ の一意の値を選択します。

vSphere Web Client を使用した固定 MAC アドレスの割り当て

vSphere Web Client を使用して、パワーオフ状態の仮想マシンの仮想 NIC に、固定 MAC アドレスを割り当てることができます。

手順

- 1 vSphere Web Client で仮想マシンを探します。
 - a データセンター、フォルダ、クラスタ、リソース プール、またはホストを選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [仮想マシン] をクリックしてリストから仮想マシンを選択します。
- 2 仮想マシンをパワーオフします。
- 3 仮想マシンの [管理] タブで、[設定] - [仮想マシンのハードウェア] を選択します。
- 4 [編集] をクリックし、[仮想ハードウェア] タブをクリックします。
- 5 [仮想ハードウェア] タブで、ネットワーク アダプタ セクションを展開します。
- 6 [MAC アドレス] の下のドロップダウン メニューから [手動] を選択します。
- 7 固定 MAC アドレスを入力し、[OK] をクリックします。
- 8 仮想マシンをパワーオンします。

仮想マシンの構成ファイルでの固定 MAC アドレスの割り当て

仮想マシンに固定 MAC アドレスを設定するために、vSphere Web Client を使用して仮想マシンの構成ファイルを編集できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で仮想マシンを探します。
 - a データセンター、フォルダ、クラスタ、リソース プール、またはホストを選択し、[関連オブジェクト] タブをクリックします。
 - b [仮想マシン] をクリックしてリストから仮想マシンを選択します。
- 2 仮想マシンをパワーオフします。
- 3 仮想マシンの [管理] タブで、[設定] を選択します。
- 4 [仮想マシン オプション] タブで、[詳細] を展開します。
- 5 [構成パラメータの編集] をクリックします。
- 6 固定 MAC アドレスを割り当てるには、必要に応じてパラメータを追加または編集します。

パラメータ	値
ethernet <i>X</i> .addressType	固定
ethernet <i>X</i> .address	<i>MAC_address_of_the_virtual_NIC</i>

ethernet の横にある *X* は、仮想マシンの仮想 NIC のシーケンス番号を表します。

たとえば、ethernet0 の 0 は、仮想マシンに最初に追加された仮想 NIC デバイスの設定を表しています。

- 7 [OK] をクリックします。
- 8 仮想マシンをパワーオンします。

IPv6 を使用するための vSphere の構成

13

ESXi ホストおよび vCenter Server をピュア IPv6 環境で動作するように構成して、アドレス スペースの拡大とアドレス割り当ての向上を実現できます。

IPv6 は、IPv4 の後継として Internet Engineering Task Force (IETF) によって設計されたプロトコルで、次のメリットがあります。

- アドレスの長さの増加。アドレス スペースの拡大により、アドレス枯渇問題を解決できるので、ネットワーク アドレス変換の必要がなくなります。IPv6 は、IPv4 で使用している 32 ビットのアドレスではなく、128 ビットのアドレスを使用しています。
- ノードのアドレス自動構成の向上。

この章には、次のトピックが含まれています。

- [vSphere の IPv6 接続](#)
- [IPv6 での vSphere のデプロイ](#)
- [ホストでの IPv6 サポートの有効化または無効化](#)
- [ESXi ホストでの IPv6 の設定](#)
- [vCenter Server での IPv6 の設定](#)

vSphere の IPv6 接続

vSphere 6.0 以降に基づく環境では、ノードや機能は、固定および自動のアドレス構成を透過的にサポートする IPv6 上で通信できます。

vSphere ノード間の通信での IPv6

vSphere デプロイのノードは、IPv6 を使用して通信し、ネットワーク構成に応じて、割り当てられたアドレスを受け入れることができます。

表 13-1. vSphere 環境内のノードの IPv6 サポート

接続タイプ	IPv6 サポート	vSphere ノードのアドレス構成
ESXi から ESXi へ	はい	<ul style="list-style-type: none">■ 固定■ 自動 : DHCPv6
vCenter Server マシンから ESXi へ	はい	<ul style="list-style-type: none">■ 固定■ 自動 : DHCPv6

表 13-1. vSphere 環境内のノードの IPv6 サポート (続き)

接続タイプ	IPv6 サポート	vSphere ノードのアドレス構成
vCenter Server マシンから vSphere Web Client マシンへ	はい	<ul style="list-style-type: none"> ■ 固定 ■ 自動: DHCPv6
ESXi から vSphere Client マシンへ	はい	<ul style="list-style-type: none"> ■ 固定 ■ 自動: DHCPv6
仮想マシンから仮想マシンへ	はい	<ul style="list-style-type: none"> ■ 固定 ■ 自動: DHCPv6
ESXi から iSCSI ストレージへ	はい	<ul style="list-style-type: none"> ■ 固定 ■ 自動: DHCPv6
ESXi から NFS ストレージへ	はい	<ul style="list-style-type: none"> ■ 固定 ■ 自動: DHCPv6
ESXi から Active Directory へ	なし vCenter Server から LDAP を使用して、ESXi を Active Directory データベースに接続します	-
vCenter Server Appliance から Active Directory へ	なし LDAP を使用して、vCenter Server Appliance を Active Directory データベースに接続します	-

vSphere 機能の IPv6 接続

以下の vSphere 機能は IPv6 をサポートしていません。

- Auto Deploy

Auto Deploy では、IPv6 を部分的にのみサポートしています。PXE ブートは IPv4 経由でのみ可能です。ただし、Auto Deploy サーバと ESXi ホストまたは vCenter Server 間の通信は、ピュア IPv6 環境で行われる場合があります。

- Intelligent Platform Management Interface (IPMI) および Hewlett-Packard Integrated Lights-Out (iLO) 上の vSphere DPM。vSphere 6.0 は、ホストのスタンバイ モードを終了させるために Wake-On-LAN (WOL) のみサポートしています。

- Virtual Volumes

- Virtual SAN

- Authentication Proxy

- Kerberos と併用した NFS 4.1 ストレージ

NFS 4.1 と AUTH_SYS を使用してください。

- Active Directory に接続された vSphere Management Assistant および vSphere Command-Line Interface。

LDAP を使用して、vSphere Management Assistant または vSphere Command-Line Interface を Active Directory データベースに接続してください。

仮想マシンの IPv6 接続

仮想マシンは IPv6 を使用したネットワークでデータを交換できます。vSphere では、仮想マシンに対する IPv6 アドレスの固定割り当てと自動割り当ての両方をサポートしています。

仮想マシンのゲスト OS をカスタマイズする場合、1 つ以上の IPv6 アドレスを構成することもできます。

FQDN と IPv6 アドレス

vSphere では、DNS サーバ上の IPv6 アドレスにマップされている完全修飾ドメイン名 (FQDN) を使用する必要があります。IPv6 アドレスは、逆引き用に DNS サーバ上に有効な FQDN がある場合に使用できます。

vCenter Server をピュア IPv6 環境にデプロイする場合は、FQDN のみを使用する必要があります。

IPv6 での vSphere のデプロイ

ピュア IPv6 環境で vSphere を実行すると、拡大されたアドレス スペースと柔軟なアドレス割り当てを使用できます。

vCenter Server および ESXi ホストを IPv6 ネットワークでデプロイする場合は、追加の手順を実行する必要があります。

■ vSphere のインストールでの IPv6 の有効化

IPv6 ネットワークで vSphere 6.0 のグリーンフィールド デプロイを行っている場合は、デプロイ ノードに IPv6 を構成してそれらを接続することで、ESXi および vCenter Server をピュア IPv6 の管理接続用に構成します。

■ アップグレードされた vSphere 環境での IPv6 の有効化

インストールまたはアップグレードされた vCenter Server およびアップグレードされた ESXi から成る vSphere 6.5 の IPv4 環境では、展開したノードで IPv6 を有効にし、それらを再接続することで、ESXi および vCenter Server をピュア IPv6 の管理接続用に構成します。

vSphere のインストールでの IPv6 の有効化

IPv6 ネットワークで vSphere 6.0 のグリーンフィールド デプロイを行っている場合は、デプロイ ノードに IPv6 を構成してそれらを接続することで、ESXi および vCenter Server をピュア IPv6 の管理接続用に構成します。

前提条件

- vCenter Server、ESXi ホスト、および外部データベース（使用している場合）の IPv6 アドレスが DNS サーバ上の完全修飾ドメイン名 (FQDN) にマップされていることを確認します。
- ESXi ホスト、vCenter Server、および外部データベース（使用している場合）の IPv6 接続がネットワーク インフラストラクチャで提供されていることを確認します。
- IPv6 アドレスにマップされている FQDN を使用して vCenter Server のバージョン 6.0 がインストールされていることを確認します。『vSphere のインストールとセットアップ』ドキュメントを参照してください。

- ESXi 6.0 がホストにインストールされていることを確認します。『vSphere のインストールとセットアップ』ドキュメントを参照してください。

手順

- 1 ダイレクト コンソール ユーザー インターフェイス (DCUI) で、各 ESXi ホストをピュア IPv6 ノードとして構成します。
 - a DCUI で、F2 キーを押し、ホストにログインします。
 - b [管理ネットワークの構成] メニューから、[IPv6 構成] を選択し、Enter キーを押します。
 - c IPv6 アドレスをホストに割り当てます。

アドレス割り当てのオプション	説明
DHCPv6 を使用した自動アドレス割り当て	<ol style="list-style-type: none"> 1 [動的 IPv6 アドレスおよびネットワーク構成を使用] オプションを選択し、[DHCPv6 を使用] を選択します。 2 Enter キーを押して変更を保存します。
固定アドレス割り当て	<ol style="list-style-type: none"> 1 [固定 IPv6 アドレスおよびネットワーク構成を設定] オプションを選択し、ホストの IPv6 アドレスおよびデフォルト ゲートウェイを入力します。 2 Enter キーを押して変更を保存します。

- d [管理ネットワークの構成] メニューから、[IPv4 構成] を選択し、Enter キーを押します。
 - e [管理ネットワークの IPv4 構成を無効化] を選択し、Enter キーを押します。
- 2 vSphere Web Client で、ホストをインベントリに追加します。

アップグレードされた vSphere 環境での IPv6 の有効化

インストールまたはアップグレードされた vCenter Server およびアップグレードされた ESXi から成る vSphere 6.5 の IPv4 環境では、展開したノードで IPv6 を有効にし、それらを再接続することで、ESXi および vCenter Server をピュア IPv6 の管理接続用に構成します。

前提条件

- ESXi ホスト、vCenter Server、および外部データベース（使用している場合）の IPv6 接続がネットワーク インフラストラクチャで提供されていることを確認します。
- vCenter Server、ESXi ホスト、および外部データベース（使用している場合）の IPv6 アドレスが DNS サーバ上の完全修飾ドメイン名 (FQDN) にマッピングされていることを確認します。
- バージョン 6.x の vCenter Server がインストールまたはアップグレードされていることを確認します。『vSphere のインストールとセットアップ』 および 『vSphere のアップグレード』を参照してください。
- すべての ESXi ホストがバージョン 6.x にアップグレードされていることを確認します。『vSphere のアップグレード』を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、vCenter Server からホストを切断します。

2 各 ESXi ホストをピュア IPv6 ノードとして構成します。

- a SSH 接続を開き、ESXi ホストにログインします。
- b 次のコマンドを実行します。

```
esxcli network ip interface ipv6 set -i vmk0 -e true
```

- c IPv6 アドレスを管理ネットワークに割り当てます。

アドレスの割り当てオプション	説明
固定アドレスの割り当て	<ol style="list-style-type: none"> SSH 接続を開き、ESXi ホストにログインします。 次のコマンドを実行して、管理ネットワーク vmk0 の固定 IPv6 アドレスを設定します。 <pre>esxcli network ip interface ipv6 address add -I IPv6_address -i vmk0</pre> 次のコマンドを実行して、管理ネットワーク vmk0 のデフォルト ゲートウェイを設定します。 <pre>esxcli network ip interface ipv6 set -i vmk0 -g default_gateway_IPv6_address</pre> 次のコマンドを実行して、DNS サーバを追加します。 <pre>esxcli network ip dns server add -s DNS_server_IPv6_address</pre>
DHCPv6 を使用した自動アドレス割り当て	<ol style="list-style-type: none"> SSH 接続を開き、ESXi ホストにログインします。 次のコマンドを実行して、管理ネットワーク vmk0 の DHCPv6 を有効にします。 <pre>esxcli network ip interface ipv6 -i vmk0 -enable-dhcpv6 = true</pre> 次のコマンドを実行して、管理ネットワーク vmk0 にアダプタイズされる IPv6 ルーターを有効にします。 <pre>esxcli network ip interface ipv6 set -i vmk0 -enable-router-adv =true</pre> 次のいずれかのコマンドを実行して、DNS サーバを追加するか、DHCPv6 によって公開されている DNS 設定を使用します。 <pre>esxcli network ip dns server add -s DNS_server_IPv6_address</pre> <pre>esxcli network ip interface ipv6 set -i vmk0 --peer-dns=true</pre>

- 3 管理ネットワークの IPv4 設定を無効にします。
 - a SSH 接続を開き、ESXi ホストにログインします。
 - b 次のコマンドを実行します。

```
esxcli network ip interface ipv4 set -i vmk0 --type=none
```

- 4 vCenter Server で外部データベースを使用している場合は、そのデータベースを IPv6 ノードとして構成します。
- 5 vCenter Server をピュア IPv6 ノードとして構成し、再起動します。
- 6 データベース サーバで IPv4 を無効にします。
- 7 vSphere Web Client で、ホストをインベントリに追加します。
- 8 ネットワーク インフラストラクチャで IPv4 を無効にします。

ホストでの IPv6 サポートの有効化または無効化

vSphere の IPv6 サポートを使用して、大きいアドレス スペース、拡張マルチキャスト、簡略化された経路設定などを持つ IPv6 ネットワークでホストを機能させることができます。

ESXi 5.1 以降のリリースでは、IPv6 はデフォルトで有効になっています。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[ネットワーク] をクリックし、[詳細] を選択します。
- 3 [編集] をクリックします。
- 4 [IPv6 サポート] ドロップダウン メニューから、IPv6 のサポートを有効または無効にします。
- 5 [OK] をクリックします。
- 6 ホストを再起動して、IPv6 サポートへの変更内容を適用します。

次のステップ

管理ネットワークなど、ホストの VMkernel アダプタの IPv6 設定を構成します。 [ESXi ホストでの IPv6 の設定](#) を参照してください。

ESXi ホストでの IPv6 の設定

IPv6 で ESXi ホストを管理ネットワーク、vSphere vMotion、共有ストレージ、vSphere Fault Tolerance などに接続するには、ホスト上の VMkernel アダプタの IPv6 設定を編集します。

前提条件

ESXi ホストで IPv6 が有効になっていることを確認します。 [ホストでの IPv6 サポートの有効化または無効化](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] で [ネットワーク] を選択し、[VMkernel アダプタ] を選択します。
- 3 対象の Distributed Switch または標準スイッチ上の VMkernel アダプタを選択し、[編集] をクリックします。
- 4 [設定の編集] ダイアログ ボックスで、[IPv6 設定] をクリックします。
- 5 VMkernel アダプタのアドレス割り当てを構成します。

IPv6 アドレスのオプション	説明
[DHCP を使用して IPv6 アドレスを自動的に取得]	DHCPv6 サーバから VMkernel アダプタの IPv6 アドレスを受信します。
[ルータのアドバタイズを使用して IPv6 アドレスを自動的に取得]	ルータのアドバタイズを使用してルータから VMkernel アダプタの IPv6 アドレスを受信します。
[固定 IPv6 アドレス]	1 つ以上のアドレスを設定します。アドレス エントリごとに、アダプタの IPv6 アドレス、サブネット プリフィックスの長さ、およびデフォルト ゲートウェイの IPv6 アドレスを入力します。

ネットワークの構成に応じて、複数の割り当てオプションを選択できます。

- 6 (オプション) IPv6 設定ページの [詳細設定] セクションから、ルータのアドバタイズを使用して割り当てられている特定の IPv6 アドレスを削除します。

必要に応じて、ルータのアドバタイズを使用してホストで取得された特定の IPv6 アドレスを削除し、そのアドレスでの通信を停止することができます。また、自動的に割り当てられたアドレスをすべて削除し、構成した固定アドレスを VMkernel に適用することもできます。

- 7 [OK] をクリックして、VMkernel アダプタに対する変更を適用します。

vCenter Server での IPv6 の設定

IPv6 ネットワーク内で ESXi ホストおよび vSphere Web Client と通信するために、vCenter Server を構成します。

vCenter Server Appliance での IPv6 の設定

IPv6 ネットワーク内で ESXi ホストと通信するために、vSphere Web Client を使用して vCenter Server Appliance を構成します。

手順

- 1 vSphere Web Client のホーム ページで、[システム構成] をクリックします。
- 2 [システム構成] で、[ノード] をクリックします。
- 3 [ノード] で、ノードを選択し、[管理] タブをクリックします。
- 4 [共通] で、[ネットワーク] を選択して、[編集] をクリックします。
- 5 ネットワーク インターフェイス名を展開して、IP アドレス設定を編集します。

6 IPv6 設定を編集します。

オプション	説明
[DHCP を使用して IPv6 設定を自動的に取得]	DHCP を使用することにより、ネットワークから自動的にアプライアンスに IPv6 アドレスを割り当てます。
[ルータのアドバタイズを使用して IPv6 設定を自動的に取得]	ルータのアドバタイズを使用することにより、ネットワークから自動的にアプライアンスに IPv6 アドレスを割り当てます。
[固定 IPv6 アドレス]	<p>手動で設定した固定 IPv6 アドレスを使用します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 [追加]アイコンをクリックします。 2 IPv6 アドレスとサブネット プリフィックスの長さを入力します。 3 [OK] をクリックします。 4 (オプション) デフォルト ゲートウェイを編集します。

アプライアンスは、DHCP およびルータのアドバタイズの両方を使用して IPv6 設定を自動的に取得するように構成できます。同時に、固定 IPv6 アドレスを割り当てることができます。

- 7 (オプション) ルータのアドバタイズを使用して自動的に割り当てられている IPv6 アドレスを削除するには、[アドレスを削除] をクリックし、アドレスを削除します。

必要に応じて、ルータのアドバタイズを使用して vCenter Server Appliance によって取得された特定の IPv6 アドレスを削除し、そのアドレスでの通信を停止したり、構成した固定アドレスを適用したりすることができます。

次のステップ

FQDN を使用して IPv6 で ESXi ホストを vCenter Server に接続します。

IPv6 を使用した Windows 上の vCenter Server の設定

ESXi ホストまたは vSphere Web Client を Windows ホスト マシンで稼働する vCenter Server に IPv6 経由で接続するには、Windows で IPv6 アドレス設定を構成します。

手順

- ◆ Windows コントロール パネルの [ネットワークと共有センター] フォルダで、ローカル エリア接続のために、ホストの IPv6 アドレス設定を構成します。

次のステップ

FQDN を使用して IPv6 で ESXi ホストを vCenter Server に接続します。

ネットワーク接続とトラフィックの監視

14

ネットワーク接続、および vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch のポートを通過するネットワーク パケットを監視して、仮想マシンとホストの間のトラフィックを分析します。

この章には、次のトピックが含まれています。

- `pktcap-uw` ユーティリティを使用したネットワーク パケットのキャプチャとトレース
- vSphere Distributed Switch のネットフロー設定の構成
- ポート ミラーリングの操作
- vSphere Distributed Switch 健全性チェック
- スイッチ検出プロトコル

pktcap-uw ユーティリティを使用したネットワーク パケットのキャプチャとトレース

物理ネットワーク アダプタ、VMkernel アダプタ、および仮想マシン アダプタを通過するトラフィックを監視し、Wireshark などのネットワーク分析ツールのグラフィカル ユーザー インターフェイスを使用してパケット情報を分析します。

vSphere 5.5 以降では、`pktcap-uw` コンソール ユーティリティを使用して、ホストでパケットを監視できます。ESXi ホストに他にインストールしなくても、このユーティリティを使用できます。`pktcap-uw` を使用すると、ホスト ネットワーク スタックの多くのポイントでトラフィックを監視できます。

キャプチャしたパケットを詳しく分析するために、`pktcap-uw` ユーティリティでキャプチャしたパケットの内容を PCAP または PCAPNG 形式のファイルに保存して Wireshark で開くことができます。ドロップされたパケットのトラブルシューティングやネットワーク スタックのパケットパスの追跡も可能です。

注： `pktcap-uw` ユーティリティは、vSphere リリース全体で下位互換性を完全にはサポートしません。ユーティリティのオプションは今後変更される可能性があります。

パケットのキャプチャ用 `pktcap-uw` コマンドの構文

`pktcap-uw` ユーティリティを使用して、ESXi ホストのネットワーク スタックをトラバースしているパケットの内容を検査します。

パケット キャプチャ用 pktcap-uw 構文

pktcap-uw コマンドには、ネットワーク スタックの特定の場所でパケットをキャプチャするために次の構文があります。

```
pktcap-uw
switch_port_arguments
capture_point_options
filter_options
output_control_options
```

注： pktcap-uw ユーティリティの特定のオプションは、VMware の内部使用のためにのみ設計されており、VMware テクニカル サポートの監視下でのみ使用すべきものです。これらのオプションは、『vSphere ネットワーク』ガイドでは説明されていません。

表 14-1. パケット キャプチャ用 pktcap-uw 引数

引数グループ	引数	説明
switch_port_arguments	--uplink vmnicX	物理アダプタに関連するパケットをキャプチャします。 --uplink オプションと --capture オプションを組み合わせ、物理アダプタと仮想スイッチの間のバス上の特定の場所でパケットを監視できます。 物理アダプタに達するパケットのキャプチャ を参照してください。
	--vmk vmkX	VMkernel アダプタに関連するパケットをキャプチャします。 vmk オプションと --capture オプションを組み合わせ、VMkernel アダプタと仮想スイッチの間のバス上の特定の場所でパケットを監視できます。 VMkernel アダプタのパケットのキャプチャ を参照してください。
	--switchport {vmxnet3_port_ID vmkernel_adapter_port_ID}	特定の仮想スイッチ ポートに接続した VMXNET3 仮想マシンアダプタまたは VMkernel アダプタに関連するパケットをキャプチャします。esxtop ユーティリティのネットワーク パネルにあるポートの ID を表示できます。 switchport オプションと capture オプションを組み合わせ、VMXNET3 アダプタまたは VMkernel アダプタと仮想スイッチの間のバス上の特定の場所でパケットを監視できます。 VMXNET3 仮想マシン アダプタのパケットのキャプチャ を参照してください。

表 14-1. パケット キャプチャ用 pktcap-uw 引数 (続き)

引数グループ	引数	説明
	<code>--lifID lif_ID</code>	分散ルータの論理インターフェイスに関連するパケットをキャプチャします。『VMware NSX』ドキュメントを参照してください。
<i>capture_point_options</i>	<code>--capture capture_point</code>	ネットワーク スタックの特定の場所でパケットをキャプチャします。たとえば、物理アダプタから到達した直後のパケットを監視することができます。
	<code>--dir {0 1}</code>	仮想スイッチについて、フローの方向に基づいてパケットをキャプチャします。0 は受信トラフィック、1 は送信トラフィックを表します。 デフォルトでは、pktcap-uw ユーティリティは入力側トラフィックをキャプチャします。 <code>--dir</code> オプションは、 <code>--uplink</code> オプション、 <code>--vmk</code> オプション、または <code>--switchport</code> オプションと一緒に使用します。
	<code>--stage {0 1}</code>	パケットをソースの近くまたはターゲットの近くでキャプチャします。このオプションは、スタック内のポイントをトラバースするうちにパッケージがどのように変化するかを調べるために使用します。 0 はソースに近いトラフィック、1 はターゲットに近いトラフィックを表します。 <code>--stage</code> オプションは、 <code>--uplink</code> オプション、 <code>--vmk</code> オプション、 <code>--switchport</code> オプション、または <code>--dvfilter</code> オプションと一緒に使用します。
	<code>--dvfilter filter_name --capture PreDVFilter PostDVFilter</code>	vSphere Network Appliance (DVFilter) に遮断される前または後のパケットをキャプチャします。 DVFilter レベルでのパケットのキャプチャ を参照してください。
	<code>-A --availpoints</code>	pktcap-uw ユーティリティがサポートするすべてのキャプチャ ポイントを表示します。
pktcap-uw ユーティリティのキャプチャ ポイントの詳細については、 pktcap-uw ユーティリティのポイントのキャプチャ を参照してください。		

表 14-1. パケット キャプチャ用 pktcap-uw 引数（続き）

引数グループ	引数	説明
<i>filter_options</i>		ソース アドレス、ターゲット アドレス、VLAN ID、VXLAN ID、Layer 3 プロトコル、TCP ポートを基にキャプチャしたパケットをフィルタリングします。 パケット フィルタ用 pktcap-uw オプション を参照してください。
<i>output_control_options</i>		パケットの内容のファイル保存、数パケットのみのキャプチャ、パケットの最初の数バイトのみのキャプチャなど。 出力制御用 pktcap-uw オプション を参照してください。

縦線 (|) は、代替値を表します。また、縦線を囲む中括弧 ({}) は、引数またはオプションの選択肢のリストを指定しています。

パケットのトレース用 pktcap-uw コマンドの構文

pktcap-uw ユーティリティを使用して ESXi ホストのネットワーク スタックのパケット バスを表示し、待ち時間を分析します。

パケットのトレース用 pktcap-uw 構文

pktcap-uw ユーティリティのコマンドには、ネットワーク スタックのパケットをトレースするための次の構文が用意されています。

```
pktcap-uw --trace filter_optionsoutput_control_options
```

パケットのトレース用 pktcap-uw 構文のオプション

pktcap-uw ユーティリティでは、このユーティリティを使ってパケットをトレースするときに次のオプションを使用できます。

表 14-2. パケットのトレース用 pktcap-uw オプション

引数	説明
<i>filter_options</i>	ソースやターゲットのアドレス、VLAN ID、VXLAN ID、Layer 3 プロトコル、および TCP ポートに応じて、トレースしたパケットをフィルタリングします。 パケット フィルタ用 pktcap-uw オプション を参照してください。
<i>output_control_options</i>	パケットの内容を 1 つのファイルに保存し、一部のパケットのみをトレースします。 出力制御用 pktcap-uw オプション を参照してください。

出力制御用 pktcap-uw オプション

pktcap-uw ユーティリティの出力制御用オプションを使用し、パケットの内容をファイルに保存し、各パケットから一定の最大バイト数までをキャプチャし、キャプチャするパケット数を制限します。

出力制御用 pktcap-uw オプション

pktcap-uw ユーティリティの出力制御用オプションは、パケットのキャプチャ、追跡時に有効です。pktcap-uw ユーティリティのコマンド構文については、[パケットのキャプチャ用 pktcap-uw コマンドの構文](#)および[パケットのトレース用 pktcap-uw コマンドの構文](#)を参照してください。

表 14-3. pktcap-uw ユーティリティでサポートされる出力制御用 pktcap-uw オプション

オプション	説明
<code>{-o --outfile} pcap_file</code>	キャプチャまたは追跡したパケットをパケット キャプチャ (PCAP) 形式のファイルに保存します。Wireshark などの視覚的アナライザ ツールでパケットを調査するには、このオプションを使用します。
<code>-P --ng</code>	パケットの内容を PCAPNG ファイル形式で保存します。このオプションは、 <code>-o</code> オプションまたは <code>--outfile</code> オプションと一緒に使用します。
<code>--console</code>	パケットの詳細および内容をコンソール出力に表示します。デフォルトでは、pktcap-uw ユーティリティはコンソール出力にパケット情報を表示します。
<code>{-c --count} number_of_packets</code>	最初の <i>number_of_packets</i> 個のパケットをキャプチャします。
<code>{-s --snaplen} snapshot_length</code>	各パケットから、最初の <i>snapshot_length</i> バイトのみをキャプチャします。ホストのトラフィック量が多い場合、このオプションを使用して CPU およびストレージの負荷を低減します。 キャプチャする内容のサイズを制限するには、24 よりも大きい値を設定します。 パケット全体をキャプチャするには、このオプションを 0 に設定します。
<code>-h</code>	pktcap-uw ユーティリティについては、ヘルプを参照してください。

縦線 (|) は、代替値を表します。また、縦線を囲む中括弧 ({}) は、引数またはオプションの選択肢のリストを指定しています。

パケット フィルタ用 pktcap-uw オプション

pktcap-uw ユーティリティを使用してパケットの監視対象範囲を狭め、ソース アドレスおよびターゲット アドレス、VLAN、VXLAN、およびパケットのペイロードを使用する次のレベルのプロトコルにフィルタリング オプションを適用します。

フィルタ オプション

pktcap-uw のフィルタ オプションは、パケットをキャプチャし、追跡する場合に有効です。pktcap-uw ユーティリティのコマンド構文については、[パケットのキャプチャ用 pktcap-uw コマンドの構文](#)および[パケットのトレース用 pktcap-uw コマンドの構文](#)を参照してください。

表 14-4. pktcap-uw ユーティリティのフィルタ オプション

オプション	説明
<code>--srcmac mac_address</code>	特定のソース MAC アドレスを持つパケットをキャプチャまたは追跡します。コロンを使用し、含まれているオクテットを分離します。
<code>--dstmac mac_address</code>	特定のターゲット MAC アドレスを持つパケットをキャプチャまたは追跡します。コロンを使用し、含まれているオクテットを分離します。
<code>--mac mac_address</code>	特定のソース MAC アドレスまたはターゲット MAC アドレスを持つパケットをキャプチャまたは追跡します。コロンを使用し、含まれているオクテットを分離します。

表 14-4. pktcap-uw ユーティリティのフィルタ オプション（続き）

オプション	説明
<code>--ethtype 0xEtherType</code>	<p>パケット ペイロードを使用する次のレベルのプロトコルに基づき、レイヤー 2 のパケットをキャプチャまたは追跡します。</p> <p><i>EtherType</i> は、イーサネット フレームの <i>EtherType</i> フィールドに対応します。フレームのペイロードを使用する次のレベルのプロトコルのタイプを表します。</p> <p>たとえば、Link Layer Discovery Protocol (LLDP) のトラフィックを監視するには、<code>--ethtype 0x88CC</code> と入力します。</p>
<code>--vlan VLAN_ID</code>	VLAN に属するパケットをキャプチャまたは追跡します。
<code>--srcip IP_address IP_address/subnet_range</code>	特定のソース IPv4 アドレスまたはサブネットを持つパケットをキャプチャまたは追跡します。
<code>--dstip IP_address IP_address/subnet_range</code>	特定のターゲット IPv4 アドレスまたはサブネットを持つパケットをキャプチャまたは追跡します。
<code>--ip IP_address</code>	特定のソース IPv4 アドレスまたはターゲット IPv4 アドレスを持つパケットをキャプチャまたは追跡します。
<code>--proto 0xIP_protocol_number</code>	<p>ペイロードを使用する次のレベルのプロトコルに基づき、レイヤー 3 のパケットをキャプチャまたは追跡します。</p> <p>たとえば、UDP プロトコルのトラフィックを監視するには、<code>--proto 0x11</code> と入力します。</p>
<code>--srcport source_port</code>	ソース TCP ポートに基づき、パケットをキャプチャまたは追跡します。
<code>--dstport destination_port</code>	ターゲット TCP ポートに基づき、パケットをキャプチャまたは追跡します。
<code>--tcpport TCP_port</code>	ソース TCP ポートまたはターゲット TCP ポートに基づき、パケットをキャプチャまたは追跡します。
<code>--vxlan VXLAN_ID</code>	VXLAN に属するパケットをキャプチャまたは追跡します。

縦線 (|) は、代替値を表します。

pktcap-uw ユーティリティを使用したパケットのキャプチャ

仮想スイッチと物理アダプタ、VMkernel アダプタ、仮想マシン アダプタの間のパスで pktcap-uw ユーティリティを使用してパケットをキャプチャし、ESXi ホストのネットワーク スタック内のデータ転送のトラブルシューティングを行います。

物理アダプタに達するパケットのキャプチャ

vSphere Standard Switch または vSphere Distributed Switch と物理アダプタの間のパスの特定のポイントでパケットをキャプチャすることにより、外部ネットワークに関連するホスト トラフィックを監視します。

仮想スイッチと物理アダプタの間のデータ パスにある特定のキャプチャ ポイントを指定するか、スイッチに関連するトラフィック方向およびパケットのソースまたはターゲットへの近接性によってキャプチャ ポイントが決定されます。サポートされているキャプチャ ポイントについては、「[pktcap-uw ユーティリティのポイントのキャプチャ](#)」を参照してください。

手順

- 1 (オプション) ホスト アダプタ リストで監視しようとする物理アダプタの名前を探します。

- ホストの[管理]タブ上の vSphere Web Client で、[ネットワーク]をクリックし、[物理アダプタ]を選択します。
- ホストへの ESXi Shell で物理アダプタのリストを表示し、その状態を調査するには、次の ESXCLI コマンドを実行します。

```
esxcli network nic list
```

各物理アダプタは、`vmnicX` として表示されます。`X`は、その ESXi が物理アダプタ ポートに割り当てられた数です。

- 2 ホストへの ESXi Shell で、`--uplink vmnicX` を引数とし、特定のポイントのパケットを監視し、キャプチャしたパケットをフィルタリングし、結果をファイルに保存するオプションが有効な `pktcap-uw` コマンドを実行します。

```
pktcap-uw
  --uplink vmnicX [--capturecapture_point|--dir 0|1] [filter_options]
  [--outfilepcap_file_path [--ng]] [--countnumber_of_packets]
```

角括弧 ([]) には、`pktcap-uw--uplink vmnicX` コマンドのオプションが含まれており、縦線 (|) は代替値を表します。

`pktcap-uw --uplink vmnicX` コマンドをオプションなしで実行する場合、パケットの切り替えポイントとなるコンソール出力の標準スイッチまたは Distributed Switch で受信するパケットの内容を取得します。

- a 別のキャプチャ ポイントのパケットを確認するには `--capture` オプション、別のトラフィック方向では `--dir` オプションを使用します。

pktcap-uw コマンド オプション	目的
<code>--capture UplinkSnd</code>	物理アダプタ デバイスに入る直前のパケットを監視します。
<code>--capture UplinkRcv</code>	物理アダプタからのネットワーク スタックで受信された直後のパケットを監視します。
<code>--dir 1</code>	仮想スイッチから出ていくパケットを監視します。
<code>--dir 0</code>	仮想スイッチに入るパケットを監視します。

- b `filter_options` を使用して、ソースやターゲット アドレス、VLAN ID、VXLAN ID、レイヤー 3 プロトコル、および TCP ポートに応じてパケットをフィルタリングします。

たとえば、IP アドレスが 192.168.25.113 のソース システムからパケットを監視するには、`--srcip 192.168.25.113` フィルタ オプションを使用します。

- c オプションを使用すると、.pcap または .pcapng ファイルに各パケットの内容、または一定数のパケットの内容を保存できます。

- .pcap ファイルにパケットを保存するには、--outfile オプションを使用します。
- .pcapng ファイルにパケットを保存するには、--ng および --outfile オプションを使用します。

Wireshark などのネットワーク アナライザ ツールでファイルを開くことができます。

デフォルトでは、pktcap-uw ユーティリティを使用して、ESXi ファイル システムのルート フォルダにパケット ファイルを保存できます。

- d --count オプションを使用すると、パケット数のみを監視できます。

- 3 --count オプションを使用してもパケット数を制限しない場合、Ctrl+C を押してパケットのキャプチャまたはトレースを停止します。

例： IP アドレス 192.168.25.113 からの vmnic0 で受信されるパケットをキャプチャ

IP アドレス 192.168.25.113 を割り当てられたソース システムからの最初の 60 パケットを vmnic0 でキャプチャし、vmnic0_rcv_srcip.pcap というファイルに保存し、以下の pktcap-uw コマンドを実行します。

```
pktcap-uw --uplink vmnic0 --capture UplinkRcv --srcip 192.168.25.113 --outfile
vmnic0_rcv_srcip.pcap --count 60
```

次のステップ

パケットの内容がファイルに保存される場合、Wireshark などグラフィカルなアナライザ ツールを実行するシステムに ESXi ホストのファイルをコピーしてツールで開き、パケットの詳細を調査します。

VMXNET3 仮想マシン アダプタのパケットのキャプチャ

pktcap-uw ユーティリティを使用して、仮想スイッチと VMXNET3 仮想マシン アダプタ間のトラフィックを監視します。

仮想スイッチと仮想マシン アダプタ間のデータパス上の特定のキャプチャ ポイントを指定できます。また、スイッチに対するトラフィックの方向およびパケットのソースまたはターゲットへの近接性によってキャプチャ ポイントを決定することができます。サポートされているキャプチャ ポイントについては、[pktcap-uw ユーティリティのポイントのキャプチャ](#) を参照してください。

前提条件

仮想マシン アダプタが VMXNET3 タイプであることを確認します。

手順

- 1 ホスト上で esxtop ユーティリティを使用して、仮想マシン アダプタのポート ID を確認します。
 - a ホストへの ESXi Shell でユーティリティを開始するには、esxtop を実行します。
 - b 「N」 を押すと、ユーティリティのネットワーク パネルに切り替わります。

- c [USED-BY] 列で、仮想マシン アダプタを探し、その PORT-ID 値をメモします。

[USED-BY] フィールドには、仮想マシン名と仮想マシン アダプタが接続しているポートが記載されています。

- d 「Q」を押して、esxtop を終了します。

- 2 ホストへの ESXi Shell で、pktcap-uw --switchport *port_ID* を実行します。

port_ID は、esxtop ユーティリティが [PORT-ID] 列に表示する仮想マシン アダプタの ID です。

- 3 ホストへの ESXi Shell で、pktcap-uw--switchport *port_ID* 引数および特定のポイントでパケットを監視し、キャプチャしたパケットをフィルタリングし、結果をファイルに保存するオプションを設定して コマンドを実行します。

```
pktcap-uw --switchport port_ID [--capture capture_point|--dir 0|1 --stage 0|1]
[filter_options] [--outfile pcap_file_path [--ng]] [--count number_of_packets]
```

pktcap-uw --switchport *port_ID* コマンドのオプションは角括弧 ([]) で囲まれており、縦線 (|) は代替値を表します。

pktcap-uw --switchport *port_ID* コマンドをオプションなしで実行する場合、パケットの切り替えポイントとなるコンソール出力の標準スイッチまたは Distributed Switch で受信するパケットの内容を取得します。

- a 別のキャプチャ ポイントのパケットまたはゲスト OS と仮想スイッチの間のパスの方向を確認するには、--capture オプションを使用するか、--dir オプションおよび --stage オプション値を組み合わせます。

pktcap-uw コマンド オプション	目的
--capture VnicTx	仮想マシンからスイッチに向かうパケットを監視します。
--capture VnicRx	仮想マシンに到達した時点のパケットを監視します。
--dir 1 --stage 0	仮想スイッチを出た直後のパケットを監視します。
--dir 1	仮想マシンに入る直前のパケットを監視します。
--dir 0 --stage 1	仮想スイッチに入った直後のパケットを監視します。

- b *filter_options* を使用して、ソースやターゲット アドレス、VLAN ID、VXLAN ID、レイヤー 3 プロトコル、および TCP ポートに応じてパケットをフィルタリングします。

たとえば、IP アドレスが 192.168.25.113 のソース システムからパケットを監視するには、--srcip 192.168.25.113 フィルタ オプションを使用します。

- c オプションを使用すると、.pcap または .pcapng ファイルに各パケットの内容、または一定数のパケットの内容を保存できます。

- .pcap ファイルにパケットを保存するには、--outfile オプションを使用します。
- .pcapng ファイルにパケットを保存するには、--ng および --outfile オプションを使用します。

Wireshark などのネットワーク アナライザ ツールでファイルを開くことができます。

デフォルトでは、pktcap-uw ユーティリティを使用して、ESXi ファイル システムのルート フォルダにパケット ファイルを保存できます。

- d --count オプションを使用すると、パケット数のみを監視できます。

- 4 --count オプションを使用してもパケット数を制限しない場合、Ctrl+C を押してパケットのキャプチャまたはトレースを停止します。

例： IP アドレス 192.168.25.113 から仮想マシンで受信するパケットのキャプチャ

IP アドレス 192.168.25.113 を割り当てられたソースからポート ID 33554481 の仮想マシン アダプタに到着したときの最初の 60 パケットをキャプチャし、vmxnet3_rcv_srcip.pcap という名前のファイルに保存するには、次の pktcap-uw コマンドを実行します。

```
pktcap-uw --switchport 33554481 --capture VnicRx --srcip 192.168.25.113 --outfile
vmxnet3_rcv_srcip.pcap --count 60
```

次のステップ

パケットの内容がファイルに保存される場合、Wireshark などグラフィカルなアナライザ ツールを実行するシステムに ESXi ホストのファイルをコピーしてツールで開き、パケットの詳細を調査します。

VMkernel アダプタのパケットのキャプチャ

pktcap-uw ユーティリティを使用して、VMkernel アダプタと仮想スイッチの間で交換されるパケットを監視します。

仮想スイッチと VMkernel アダプタの間のフローの特定のキャプチャ ポイントでパケットをキャプチャできます。また、スイッチに対するトラフィックの方向およびパケットのソースまたはターゲットへの近接性によってキャプチャ ポイントを決定することができます。サポートされているキャプチャ ポイントについては、「[pktcap-uw ユーティリティのポイントのキャプチャ](#)」を参照してください。

手順

- 1 (オプション) VMkernel アダプタ リストで監視しようとする VMkernel アダプタの名前を探します。
 - vSphere Web Client で、ホストの[管理]タブ上の [ネットワーク] リストから [VMkernel アダプタ]を選択します。
 - ホストへの ESXi Shell で物理アダプタのリストを表示するには、次のコンソール コマンドを実行します。

```
esxcli network ip interface list
```

各 VMkernel アダプタは、vmkX と表わされます。Xは、ESXi がアダプタに割り当てたシーケンス番号です。

- 2 ホストへの ESXi Shell で、`--vmk vmkX` を引数とし、特定のポイントのパケットを監視し、キャプチャしたパケットをフィルタリングし、結果をファイルに保存するオプションが有効な `pktcap-uw` コマンドを実行します。

```
pktcap-uw
--vmk vmkX [--capturecapture_point|--dir 0|1 --stage 0|1] [filter_options]
[--outfilepcap_file_path [--ng]] [--countnumber_of_packets]
```

角括弧 ([]) には、`pktcap-uw--vmk vmkX` コマンドのオプションが含まれており、縦線 (|) は代替値を表します。

`--vmk vmkX` オプションを `--switchportvmkernel_adapter_port_ID` で置き換えることができます。
`vmkernel_adapter_port_ID` は、`esxtop` ユーティリティのネットワーク パネルがアダプタについて表示する PORT-ID の値です。

`pktcap-uw --vmk vmkX` コマンドをオプションなしで実行する場合、VMkernel アダプタから出て行くパケットの内容を取得します。

- a 送信または受信されたパケットを特定の場所および方向で確認するには、`--capture` オプションを使用するか、`--dir` オプションおよび `--stage` オプションの値を組み合わせます。

pktcap-uw コマンド オプション	目的
<code>--dir 1 --stage 0</code>	仮想スイッチを出た直後のパケットを監視します。
<code>--dir 1</code>	VMkernel アダプタに入る直前のパケットを監視します。
<code>--dir 0 --stage 1</code>	仮想スイッチに入る直前のパケットを監視します。

- b `filter_options` を使用して、ソースやターゲット アドレス、VLAN ID、VXLAN ID、レイヤー 3 プロトコル、および TCP ポートに応じてパケットをフィルタリングします。

たとえば、IP アドレスが 192.168.25.113 のソース システムからパケットを監視するには、`--srcip 192.168.25.113` フィルタ オプションを使用します。

- c オプションを使用すると、`.pcap` または `.pcapng` ファイルに各パケットの内容、または一定数のパケットの内容を保存できます。

- `.pcap` ファイルにパケットを保存するには、`--outfile` オプションを使用します。
- `.pcapng` ファイルにパケットを保存するには、`--ng` および `--outfile` オプションを使用します。

Wireshark などのネットワーク アナライザ ツールでファイルを開くことができます。

デフォルトでは、`pktcap-uw` ユーティリティを使用して、ESXi ファイル システムのルート フォルダにパケット ファイルを保存できます。

- d `--count` オプションを使用すると、パケット数のみを監視できます。

- 3 `--count` オプションを使用してもパケット数を制限しない場合、`Ctrl+C` を押してパケットのキャプチャまたはトレースを停止します。

次のステップ

パケットの内容がファイルに保存される場合、Wireshark などグラフィカルなアナライザ ツールを実行するシステムに ESXi ホストのファイルをコピーしてツールで開き、パケットの詳細を調査します。

ドロップされたパケットのキャプチャ

`pktcap-uw` ユーティリティを使用してドロップされたパケットをキャプチャし、失われた接続のトラブルシューティングを行います。

たとえば、ファイアウォールのルール、IOChain および DVfilter でのフィルタリング、VLAN のミスマッチ、物理アダプタの不具合、チェックサム エラーなどさまざまな理由により、ネットワーク ストリームのどこかのポイントでパケットがドロップされる可能性があります。`pktcap-uw` ユーティリティを使用し、パケットがドロップされた場所およびドロップの理由を調べることができます。

手順

- 1 ホストへの ESXi Shell で、特定のポイントのパケットを監視し、キャプチャしたパケットをフィルタリングし、結果をファイルに保存するオプションが有効な `pktcap-uw --capture Drop` コマンドを実行します。

```
pktcap-uw --capture Drop [filter_options] [--outfile pcap_file_path [--ng]] [--count
number_of_packets]
```

角括弧 ([]) には、`pktcap-uw--capture Drop` コマンドのオプションが含まれており、縦線 (|) は代替値を表します。

- a *filter_options* を使用して、ソースやターゲット アドレス、VLAN ID、VXLAN ID、レイヤー 3 プロトコル、および TCP ポートに応じてパケットをフィルタリングします。

たとえば、IP アドレスが 192.168.25.113 のソース システムからパケットを監視するには、`--srcip 192.168.25.113` フィルタ オプションを使用します。

- b オプションを使用すると、`.pcap` または `.pcapng` ファイルに各パケットの内容、または一定数のパケットの内容を保存できます。

- `.pcap` ファイルにパケットを保存するには、`--outfile` オプションを使用します。
- `.pcapng` ファイルにパケットを保存するには、`--ng` および `--outfile` オプションを使用します。

Wireshark などのネットワーク アナライザ ツールでファイルを開くことができます。

デフォルトでは、`pktcap-uw` ユーティリティを使用して、ESXi ファイル システムのルート フォルダにパケット ファイルを保存できます。

注： コンソール出力へのパケットをキャプチャする場合にのみパケットがドロップされた場所と理由を表示することができます。`pktcap-uw` ユーティリティは、パケットの内容のみを `.pcap` ファイルまたは `.pcapng` ファイルに保存します。

- c `--count` オプションを使用すると、パケット数のみを監視できます。
- 2 `--count` オプションを使用してもパケット数を制限しない場合、Ctrl+C を押してパケットのキャプチャまたはトレースを停止します。

結果

ドロップされたパケットの内容のほかに、`pktcap-uw` ユーティリティの出力は、ドロップの理由およびパケットを最後に処理したネットワークスタックの機能を表示します。

次のステップ

パケットの内容がファイルに保存される場合、Wireshark などグラフィカルなアナライザ ツールを実行するシステムに ESXi ホストのファイルをコピーしてツールで開き、パケットの詳細を調査します。

DVFilter レベルでのパケットのキャプチャ

パケットが vSphere Network Appliance (DVFilter) をパススルーするときどのように変化するかを調べます。

DVFilter は、仮想マシン アダプタと仮想スイッチ間のストリームに常駐するエージェントです。セキュリティ攻撃や不要なトラフィックから仮想マシンを保護するためにパケットを遮断します。

手順

- 1 (オプション) 監視する DVFilter の名前を確認するには、ESXi Shell で `summarize-dvfilter` コマンドを実行します。

コマンドの出力には、ホストにデプロイされた DVFilter の `fast-path` および `slow-path` のエージェントが含まれます。

- 2 `--dvfilter dvfilter_name` 引数と、特定のポイントでのパケットの監視、キャプチャしたパケットのフィルタリング、およびファイルへの結果の保存を行うオプションを使用して `pktcap-uw` ユーティリティを実行します。.

```
pktcap-uw
--dvFilter
dvfilter_name
--capture PreDVFilter|PostDVFilter [filter_options] [--outfilepcap_file_path
[--ng]] [--countnumber_of_packets]
```

角括弧 [] で、`pktcap-uw--dvFilter vmnicX` コマンドのオプション項目を囲みます。縦線 (|) は、代替値を表します。

- a `--capture` オプションを使用すると、DVFilter がパケットを遮断する前後のパケットが監視されます。

pktcap-uw コマンド オプション	目的
<code>--capture PreDVFilter</code>	DVFilter を通過する前のパケットをキャプチャします。
<code>--capture PostDVFilter</code>	DVFilter を通過した後のパケットをキャプチャします。

- b `filter_options` を使用して、ソースやターゲット アドレス、VLAN ID、VXLAN ID、レイヤー 3 プロトコル、および TCP ポートに応じてパケットをフィルタリングします。

たとえば、IP アドレスが 192.168.25.113 のソース システムからパケットを監視するには、`--srcip 192.168.25.113` フィルタ オプションを使用します。

- c オプションを使用すると、.pcap または .pcapng ファイルに各パケットの内容、または一定数のパケットの内容を保存できます。

- .pcap ファイルにパケットを保存するには、--outfile オプションを使用します。
- .pcapng ファイルにパケットを保存するには、--ng および --outfile オプションを使用します。

Wireshark などのネットワーク アナライザ ツールでファイルを開くことができます。

デフォルトでは、pktcap-uw ユーティリティを使用して、ESXi ファイル システムのルート フォルダにパケット ファイルを保存できます。

- d --count オプションを使用すると、パケット数のみを監視できます。

- 3 --count オプションを使用してもパケット数を制限しない場合、Ctrl+C を押してパケットのキャプチャまたはトレースを停止します。

次のステップ

パケットの内容がファイルに保存される場合、Wireshark などグラフィカルなアナライザ ツールを実行するシステムに ESXi ホストのファイルをコピーしてツールで開き、パケットの詳細を調査します。

pktcap-uw ユーティリティのキャプチャ ポイントの使用

pktcap-uw ユーティリティのキャプチャ ポイントを使用して、ホスト上のネットワーク スタックの特定の場所で機能がパケットを処理するときにパケットを監視します。

キャプチャ ポイントの概要

pktcap-uw ユーティリティのキャプチャ ポイントは、仮想スイッチを一端、物理アダプタ、VMkernel アダプタ、仮想マシン アダプタをもう一端とするバス上の場所を表します。

特定のキャプチャ ポイントをアダプタ オプションとの組み合わせで使用することができます。たとえば、アップリンク トラフィックをキャプチャするときには、UplinkRcv ポイントを使用します。他のポイントをスタンドアローンでアドレスすることができます。たとえば、ドロップされたパケットを調べるには、ドロップ ポイントを使用します。

注： pktcap-uw ユーティリティの特定のキャプチャ ポイントは、VMware の内部使用のためにのみ設計されており、VMware テクニカル サポートの監視下でのみ使用すべきものです。これらのキャプチャ ポイントは、『vSphere ネットワーク』ガイドでは説明されていません。

pktcap-uw ユーティリティのキャプチャ ポイントの使用オプション

キャプチャ ポイントでのパケットの状態または内容を調査するには、--capture *capture_point* オプションを pktcap-uw ユーティリティに追加します。

キャプチャ ポイントの自動選択

物理アダプタ、VMkernel アダプタ、または VMXNET3 アダプタに関連するトラフィックについては、--dir オプションおよび --stage オプションを組み合わせることで、ポイントの前後でどのようにパケットが変化するかを調査するためのキャプチャ ポイントを自動選択し、ポイントを切り替えることができます。

pktcap-uw ユーティリティのポイントのキャプチャ

pktcap-uw ユーティリティは、アップリンク、VMkernel、または仮想マシンのトラフィックを監視するときのみ使用できるキャプチャ ポイントや、アダプタ タイプとは関係のないスタックの特別な場所にあるキャプチャ ポイントをサポートします。

物理アダプタのトラフィックに関連するキャプチャ ポイント

pktcap-uw --uplink vmnicX コマンドでは、物理アダプタと仮想スイッチ間のパスの特定の場所と方向でトラフィックを処理する関数に、キャプチャ ポイントを使用できます。

キャプチャ ポイント	説明
UplinkRcv	物理アダプタからパケットを受信する関数。
UplinkSnd	物理アダプタにパケットを送信する関数。
PortInput	UplinkRcv で受信したパケットのリストを仮想スイッチのポートに渡す関数。
PortOutput	仮想スイッチのポートからパケットのリストを UplinkSnd ポイントに渡す関数。

仮想マシンのトラフィックに関連するキャプチャ ポイント

pktcap-uw --switchport vmxnet3_port_ID コマンドでは、VMXNET3 アダプタと仮想スイッチ間のパスの特定の場所と方向でトラフィック パケットを処理する関数に、キャプチャ ポイントを使用できます。

キャプチャ ポイント	説明
VnicRx	仮想マシンの NIC バックエンドで仮想スイッチからパケットを受信する関数。
VnicTx	仮想マシンの NIC バックエンドで仮想マシンから仮想スイッチにパケットを送信する関数。
PortOutput	仮想スイッチのポートから Vmxnet3Rx にパケットのリストを渡す関数。
PortInput	Vmxnet3Tx から仮想スイッチのポートにパケットのリストを渡す関数。VMXNET3 アダプタに関連するトラフィックのデフォルト キャプチャ ポイント。

VMkernel アダプタのトラフィックに関連するキャプチャ ポイント

pktcap-uw --vmk vmkX および pktcap-uw --switchport vmkernel_adapter_port_ID コマンドでは、VMkernel アダプタと仮想スイッチ間のパスの特定の場所と方向で関数を使用するキャプチャ ポイントをサポートします。

キャプチャ ポイント	説明
PortOutput	仮想スイッチのポートから VMkernel アダプタにパケットのリストを渡す関数。
PortInput	VMkernel アダプタから仮想スイッチのポートにパケットのリストを渡す関数。VMkernel アダプタに関連するトラフィックのデフォルト キャプチャ ポイント。

分散仮想フィルタに関連するキャプチャ ポイント

pktcap-uw --dvfilter divfilter_name コマンドでは、パケットが DVFilter を出入りするときにパケットをキャプチャするかどうかを示すキャプチャ ポイントを指定する必要があります。

キャプチャ ポイント	説明
PreDVFilter	DVFilter でパケットを遮断する前のポイント。
PostDVFilter	DVFilter でパケットを遮断した後のポイント。

スタンドアロン キャプチャ ポイント

特定のキャプチャ ポイントが、物理的な VMkernel アダプタや VMXNET3 アダプタではなくネットワーク スタックに直接マップされます。

キャプチャ ポイント	説明
Drop	ドロップしたパケットをキャプチャし、ドロップした場所を示します。
TcpipDispatch	仮想スイッチから VMkernel の TCP/IP スタックにトラフィックをディスパッチする関数およびその逆の関数でパケットをキャプチャします。
PktFree	リリースされる直前にパケットをキャプチャします。
VdrRxLeaf	VMware NSX の動的ルーターの受信リーフ I/O チェーンでパケットをキャプチャします。--lifID オプションと一緒にこのキャプチャ ポイントを使用します。
VdrRxTerminal	VMware NSX の動的ルーターの受信ターミナル I/O チェーンでパケットをキャプチャします。--lifID オプションと一緒にこのキャプチャ ポイントを使用します。
VdrTxLeaf	VMware NSX の動的ルーターの転送リーフ I/O チェーンでパケットをキャプチャします。--lifID オプションと一緒にこのキャプチャ ポイントを使用します。
VdrTxTerminal	VMware NSX の動的ルーターの転送ターミナル I/O チェーンでパケットをキャプチャします。--lifID オプションと一緒にこのキャプチャ ポイントを使用します。

動的ルーターの詳細については、VMware NSX のドキュメントを参照してください。

pktcap-uw ユーティリティのキャプチャ ポイントのリスト表示

pktcap-uw ユーティリティのすべてのキャプチャ ポイントを表示し、ESXi ホスト上のネットワーク スタックの特定の場所でトラフィックを監視するキャプチャ ポイントの名前を探します。

pktcap-uw ユーティリティのキャプチャ ポイントについては、[pktcap-uw ユーティリティのポイントのキャプチャ](#)を参照してください。

手順

- ◆ ホストへの ESXi Shell で、`pktcap-uw -A` コマンドを実行し、pktcap-uw ユーティリティがサポートするすべてのキャプチャ ポイントを表示します。

pktcap-uw ユーティリティを使用したパケットのトレース

pktcap-uw ユーティリティを使用すると、待ち時間分析のためおよびパケットが破損またはドロップされたポイント特定するためにパケットがネットワーク スタック内をトラバースしたパスを追跡できます。

pktcap-uw ユーティリティは、パケットが ESXi 上のネットワーク機能で処理された時間を記したタイムスタンプと、パケットのパスと一緒に表示します。ユーティリティは、スタックからリリースされる直前のパケットのパスを報告します。

パケットについてのフル パス情報を表示するには、pktcap-uw ユーティリティの結果をコンソール出力に表示するか、PCAPNG ファイルに保存する必要があります。

手順

- 1 ホストへの ESXi Shell で、追跡したパケットをフィルタリングし、結果をファイルに保存し、追跡パケットの数を制限するオプションが有効な `pktcap-uw--trace` コマンドを実行します。

```
pktcap-uw
--trace [filter_options] [--outfilepcap_file_path [--ng]]
[--countnumber_of_packets]
```

角括弧 ([]) には、`pktcap-uw --trace` コマンドのオプション項目が含まれており、縦線 (|) は代替値を表します。

- a *filter_options* を使用して、ソースやターゲット アドレス、VLAN ID、VXLAN ID、レイヤー 3 プロトコル、および TCP ポートに応じてパケットをフィルタリングします。

たとえば、IP アドレスが 192.168.25.113 のソース システムからパケットを監視するには、`--srcip 192.168.25.113` フィルタ オプションを使用します。

- b オプションを使用すると、`.pcap` または `.pcapng` ファイルに各パケットの内容、または一定数のパケットの内容を保存できます。

- `.pcap` ファイルにパケットを保存するには、`--outfile` オプションを使用します。
- `.pcapng` ファイルにパケットを保存するには、`--ng` および `--outfile` オプションを使用します。

Wireshark などのネットワーク アナライザ ツールでファイルを開くことができます。

デフォルトでは、`pktcap-uw` ユーティリティを使用して、ESXi ファイル システムのルート フォルダにパケット ファイルを保存できます。

注： `.pcap` ファイルは、追跡したパケットの内容のみが含まれます。パケットの内容に加えてパケットのパスを収集するには、出力を `.pcapng` ファイルに保存します。

- c `--count` オプションを使用すると、パケット数のみを監視できます。

- 2 `--count` オプションを使用してもパケット数を制限しない場合、Ctrl+C を押してパケットのキャプチャまたはトレースを停止します。

次のステップ

パケットの内容がファイルに保存される場合、Wireshark などグラフィカルなアナライザ ツールを実行するシステムに ESXi ホストのファイルをコピーしてツールで開き、パケットの詳細を調査します。

vSphere Distributed Switch のネットフロー設定の構成

レポートをネットフロー コレクタに送信して、vSphere Distributed Switch を通過する仮想マシン IP トラフィックを分析します。

バージョン 5.1 以降の vSphere Distributed Switch は、IPFIX (ネットフロー バージョン 10) をサポートしています。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[設定] - [ネットフローの編集] を選択します。
- 3 [コレクタの IP アドレス] と、ネットフロー コレクタの [コレクタのポート] を入力します。
IPv4 または IPv6 アドレスでネットフロー コレクタに接続できます。
- 4 スイッチに関連する情報を識別する [観測ドメイン ID] を設定します。
- 5 ネットフロー コレクタで、Distributed Switch の情報をスイッチ上の各ホストの個別のデバイスではなく、1 つのネットワーク デバイスに表示するには、[スイッチ IP アドレス] テキスト ボックスに IPv4 アドレスを入力します。
- 6 (オプション) [アクティブなフロー エクスポートのタイムアウト] および [アイドル状態のフロー エクスポートのタイムアウト] テキスト ボックスで、フローが開始されてから情報が送信されるまでの待機時間を秒単位で設定します。
- 7 (オプション) スイッチで収集するデータの量を変更するには、[サンプリング率] を構成します。

サンプリング率は、パケットの各収集後に NetFlow がドロップするパケットの数を表します。サンプリング率が x であることは、 $1:x$ の収集するパケット: ドロップするパケットの比で NetFlow がパケットをドロップすることを意味します。この比が 0 の場合、NetFlow はすべてのパケットをサンプリングします。つまり、1 つのパケットを収集した後にパケットをドロップすることはありません。この比が 1 の場合、NetFlow は 1 つのパケットをサンプリングしたら次のパケットをドロップし、それを繰り返します。

- 8 (オプション) 同じホスト上の仮想マシン間のネットワーク アクティビティのデータを収集するには、[内部フローのみを処理します] を有効にします。

物理ネットワーク デバイスでネットフローが有効になっている場合、Distributed Switch および物理ネットワーク デバイスから重複するデータが送信されないように内部フローのみを収集します。

- 9 [OK] をクリックします。

次のステップ

分散ポート グループまたは分散ポートに接続されている仮想マシンのトラフィックに関するネットフロー レポートを有効にします。分散ポート グループまたは分散ポートでの NetFlow 監視の有効化または無効化を参照してください。

ポート ミラーリングの操作

ポート ミラーリングにより、分散ポートのトラフィックを他の分散ポートまたは特定の物理スイッチ ポートにミラーリングすることが可能です。

ポート ミラーリングは、単一のスイッチ ポート (または VLAN 全体) を流れるパケットのコピーを別のスイッチ ポート上の監視用の接続に送信するために、スイッチ上で使用します。ポート ミラーリングはデータを解析してデバッグし、ネットワーク上のエラーを診断する際に使用されます。

ポート ミラーリングのバージョンの互換性

vSphere 5.1 以降のポート ミラーリングの特定の機能は、使用中の vCenter Server、vSphere Distributed Switch、ホストのバージョン、および vSphere のこれらの製品を組み合わせる方法に依存します。

表 14-5. ポート ミラーリングの互換性

vCenter Server のバージョン	vSphere 分散スイッチのバージョン	ホストのバージョン	vSphere 5.1 ポート ミラーリングの機能
vSphere 5.1 以降	vSphere 5.1 以降	vSphere 5.1 以降	vSphere 5.1 ポート ミラーリングは使用できます。vSphere 5.0 以前のポート ミラーリング機能は使用できません。
vSphere 5.1 以降	vSphere 5.1 以降	vSphere 5.0 以前	vSphere 5.0 以前のホストは、vSphere 5.1 の vCenter Server に追加できますが、Distributed Switch バージョン 5.1 以降には追加できません。
vSphere 5.1 以降	vSphere 5.0	vSphere 5.0	vSphere vCenter Server バージョン 5.1 以降では、vSphere 5.0 Distributed Switch にポート ミラーリングを構成できません。
vSphere 5.1 以降	vSphere 5.0	vSphere 5.1 以降	vSphere 5.1 を実行するホストは vSphere 5.0 Distributed Switch に追加することができ、vSphere 5.0 ポート ミラーリングをサポートします。
vSphere 5.1 以降	vSphere 5.0 以前	vSphere 5.5 以前	ポート ミラーリングに対応していません。
vSphere 5.0 以前	vSphere 5.0 以前	vSphere 5.1	vSphere 5.1 ホストは vCenter Server 5.0 以前のバージョンには追加できません。

ポート ミラーリングを設定したホスト プロファイルを使用する場合、ホスト プロファイルは、vSphere 5.1 以降のポート ミラーリングの新しいバージョンに対応していなければなりません。

ポート ミラーリングの相互運用性

vSphere ポート ミラーリングを vSphere の他の機能と併用する場合、相互運用性に関して考慮すべき問題があります。

vMotion

vMotion 機能は vSphere ポート ミラーリングで選択したセッション タイプに依存します。vMotion の実行中、ミラーリング パスが一時的に無効になることがありますが、vMotion が完了すると元に戻ります。

表 14-6. vMotion とポート ミラーリングの相互運用性

ポート ミラーリングのセッションタイプ	ソースとターゲット	vMotion と相互運用可能	機能
分散ポートのミラーリング	非アップリンク分散ポートのソースとターゲット	可	分散ポート間のポート ミラーリングは、ローカルだけで使用できます。vMotion によりソースとターゲットのホストが異なる場合、ポート ミラーリングは機能しません。ただし、ソースとターゲットを同一のホストに移動すれば、ポート ミラーリングは機能します。
リモート ミラーリング ソース	非アップリンク分散ポートのソース	可	ソースの分散ポートをホスト A からホスト B に移動すると、ソース ポートからホスト A のアップリンクへの元のミラーリングパスは A に移動し、ソース ポートから B のアップリンクへの新しいミラーリングパスが B に作成されます。どのアップリンクを使用するかは、セッションに指定されたアップリンク名で決まります。
	アップリンク ポートのターゲット	なし	vMotion ではアップリンクを移動できません。
リモート ミラーリング ターゲット	VLAN ソース	なし	
	非アップリンク分散ポートのターゲット	可	ターゲットの分散ポートをホスト A からホスト B に移動すると、ソース VLAN からターゲット ポートへの元のミラーリングパスは、A から B に移動します。
カプセル化されたりリモート ミラーリング (L3) ソース	非アップリンク分散ポートのソース	可	ソースの分散ポートをホスト A からホスト B に移動すると、ソース ポートから宛先 IP への元のミラーリングパスは、すべて A から B に移動します。
	宛先 IP	なし	
分散ポート ミラーリング (レガシー)	送信元 IP	なし	
	非アップリンク分散ポートのターゲット	なし	宛先の分散ポートをホスト A からホスト B に移動した場合、ポート ミラーリング セッションのソースが依然として A のターゲットであるため、送信元 IP からターゲット ポートへの元のミラーリングパスはすべて無効になります。

TSO と LRO

TCP セグメンテーション オフロード (TSO) と LRO (Large Receive Offload) は、ミラー化されたパケット数と同数でないミラーリング パケットを生成することがあります。

vNIC で TSO を有効にすると、vNIC は大きなパケットを分散スイッチに送ります。vNIC で LRO を有効にすると、送出された小さなサイズのパケットは、大きなパケットにマージされます。

ソース	ターゲット	説明
TSO	LRO	ソース vNIC が大きなパケットを送出した場合、パケット サイズがターゲットの vNIC LRO の制限を超えると、パケットが分割されます。
TSO	任意のターゲット	ソース vNIC が送出したパケットが大きな場合、パケットはターゲット vNIC で標準パケットに分割されます。
任意のソース	LRO	ソース vNIC が送出したパケットが標準パケットならば、パケットはターゲット vNIC でより大きなパケットにマージされます。

ポート ミラーリング セッションの作成

vSphere Web Client でポート ミラーリング セッションを作成して、vSphere Distributed Switch のトラフィックをポート、アップリンク、およびリモート IP アドレスにミラーリングできます。

前提条件

vSphere Distributed Switch のバージョンが 5.0.0 以降であることを確認します。

手順

1 ポート ミラーリングのセッション タイプの選択

ポート ミラーリング セッションを開始するには、ポート ミラーリング セッションのタイプを指定する必要があります。

2 ポート ミラーリング名およびセッションの詳細の指定

続けてポート ミラーリング セッションを作成するには、新しいポート ミラーリング セッションの名前と説明、セッションの詳細を指定します。

3 ポート ミラーリングのソースの選択

続けてポート ミラーリング セッションを作成するには、新しいポート ミラーリング セッションのソースとトラフィック方向を選択します。

4 ポート ミラーリングのターゲットの選択と設定の確認

ポート ミラーリング セッションを作成するには、ポート ミラーリング セッションのターゲットとするポートまたはアップリンクを選択します。

ポート ミラーリングのセッション タイプの選択

ポート ミラーリング セッションを開始するには、ポート ミラーリング セッションのタイプを指定する必要があります。

手順

- 1 vSphere Web Client ナビゲータで Distributed Switch に移動して参照します。
- 2 [管理] タブをクリックし、[設定] - [ポート ミラーリング] を選択します。
- 3 [新規] をクリックします。
- 4 ポート ミラーリング セッションのタイプを選択します。

オプション	説明
分散ポートのミラーリング	複数の分散ポートからのパケットを、同じホストのほかの分散ポートにミラーリングします。ソースとターゲットが異なるホスト上にある場合、このセッション タイプは機能しません。
リモート ミラーリング ソース	複数の分散ポートからのパケットを、対応するホストの特定のアップリンク ポートにミラーリングします。
リモート ミラーリング ターゲット	複数の VLAN からのパケットを分散ポートにミラーリングします。
カプセル化されたリモート ミラーリング (L3) ソース	複数の分散ポートからのパケットを、リモート エージェントの IP アドレスにミラーリングします。仮想マシンのトラフィックは、IP トンネルを介してリモートの物理ターゲットにミラーリングされます。
分散ポート ミラーリング (レガシー)	複数の分散ポートからのパケットを、対応するホストの複数の分散ポートまたはアップリンク ポートにミラーリングします。

- 5 [次へ] をクリックします。

ポート ミラーリング名およびセッションの詳細の指定

続けてポート ミラーリング セッションを作成するには、新しいポート ミラーリング セッションの名前と説明、セッションの詳細を指定します。

手順

- 1 セッション プロパティを設定します。選択したセッションのタイプによって、構成で利用できるオプションは異なります。

オプション	説明
名前	ポート ミラーリング セッションには、一意の名前を入力するか自動的に生成されたセッション名を選択できます。
ステータス	ドロップダウン メニューを使ってセッションを有効化または無効化します。
セッションのタイプ	選択したセッションのタイプを示します。
ターゲット ポートの通常の入出力	ドロップダウン メニューを使用して、ターゲット ポートの通常の入出力を許可または禁止にします。このプロパティは、アップリンクと分散ポートの接続先のみ使用できます。 このオプションで許可を選択しない場合、ターゲット ポート経由の出力ミラー トラフィックは許可されますが、入力トラフィックは許可されません。
ミラーリングされたパケットの長さ (バイト)	ミラーリングされたパケットの長さ (バイト) を有効にするには、このチェック ボックスを選択します。これによって、ミラー フレームのサイズが制限されます。このオプションを選択した場合、すべてのミラー フレームは指定した長さに切り詰められます。

オプション	説明
サンプリング率	パケットのサンプリング率を選択します。デフォルトでは、レガシー セッションを除くすべてのポート ミラーリング セッションで有効です。
説明	ポート ミラーリング セッションの構成の説明を入力できます。

2 [次へ] をクリックします。

ポート ミラーリングのソースの選択

続けてポート ミラーリング セッションを作成するには、新しいポート ミラーリング セッションのソースとトラフィック方向を選択します。

ソースとターゲットを設定しないでポート ミラーリング セッションを作成できます。ソースとターゲットが設定されていない場合、ミラーリング パスなしでポート ミラーリング セッションが作成されます。これによって、正しいプロパティでポート ミラーリング セッションを作成することができます。プロパティが設定されたら、ポートのミラーリング セッションを編集してソースとターゲット情報を追加できます。

手順

1 ミラーリングするトラフィック ソースとトラフィック方向を選択します。

選択したポート ミラーリング セッションのタイプによって、構成で利用できるオプションは異なります。

オプション	説明
リストから既存のポートを追加	[分散ポートの選択] をクリックします。既存ポートのリストがダイアログ ボックスに表示されます。分散ポートの横にあるチェック ボックスをオンにして、[OK] をクリックします。分散ポートは複数選択できます。
ポート番号で既存のポートを追加	[分散ポートの追加] をクリックし、ポート番号を入力して [OK] をクリックします。
トラフィックの方向を設定	ポートを追加したら、リストでポートを選択し、入力側、出力側、または入力側/出力側 ボタンをクリックします。[トラフィック方向] 列に選択した内容が表示されます。
ソース VLAN を指定	セッション タイプとしてリモート ミラーリング ターゲットを選択した場合、ソース VLAN を指定する必要があります。[追加] をクリックして VLAN ID を追加します。上矢印キーと下矢印キーを使って ID を編集するか、フィールドをクリックして手動で VLAN ID を入力します。

2 [次へ] をクリックします。

ポート ミラーリングのターゲットの選択と設定の確認

ポート ミラーリング セッションを作成するには、ポート ミラーリング セッションのターゲットとするポートまたはアップリンクを選択します。

ソースとターゲットを設定しないでポート ミラーリング セッションを作成できます。ソースとターゲットが設定されていない場合、ミラーリング パスなしでポート ミラーリング セッションが作成されます。これによって、正しいプロパティでポート ミラーリング セッションを作成することができます。プロパティが設定されたら、ポートのミラーリング セッションを編集してソースとターゲットの情報を追加できます。

ポート ミラーリングは、VLAN 転送ポリシーに対して確認されます。元のフレームの VLAN が、ターゲット ポートと等しくない、またはターゲット ポートによってトランクされている場合、このフレームはミラーリングされません。

手順

- 1 ポート ミラーリング セッションのターゲットを選択します。

選択するセッションのタイプによって、利用できるオプションは異なります。

オプション	説明
ターゲットの分散ポートを選択	[分散ポートの選択]をクリックしてリストからポートを選択するか、[分散ポートの追加]をクリックしてポート番号でポートを追加します。分散ポートは複数追加できます。
アップリンクの選択	利用可能なアップリンクをリストから選択し、[追加] をクリックして、ポート ミラーリング セッションにアップリンクを追加します。アップリンクは複数追加できます。
ポートまたはアップリンクの選択	[分散ポートの選択]をクリックしてリストからポートを選択するか、[分散ポートの追加]をクリックしてポート番号でポートを追加します。分散ポートは複数追加できます。 [アップリンクの追加]をクリックしてアップリンクをターゲットとして追加します。リストからアップリンクを選択し、[OK] をクリックします。
IP アドレスの指定	[追加] をクリックします。新しいリスト エントリが作成されます。エントリを選択し、[編集] をクリックして IP アドレスを入力するか、IP アドレス フィールドを直接クリックして IP アドレスを入力します。IP アドレスが無効な場合は警告が表示されます。

- 2 [次へ] をクリックします。
- 3 [終了準備の完了] ページで入力したポート ミラーリング セッションの情報を確認します。
- 4 (オプション) 情報を編集するには、[戻る] ボタンを使用します。
- 5 [終了] をクリックします。

結果

[設定] タブの [ポート ミラーリング] セクションに新しいポート ミラーリング セッションが表示されます。

ポート ミラーリング セッション詳細の表示

ステータス、ソース、ターゲットなどのポート ミラーリング セッションの詳細を表示します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブで [設定] - [ポート ミラーリング] をクリックします。
- 3 リストからポート ミラーリング セッションを選択すると、追加の詳細情報が画面の下部に表示されます。タブを使って構成の詳細を確認します。
- 4 (オプション) [新規] をクリックして、新しいポート ミラーリング セッションを追加します。
- 5 (オプション) [編集] をクリックして、選択したポート ミラーリング セッションの詳細を編集します。
- 6 (オプション) [削除] をクリックして、選択したポート ミラーリング セッションを削除します。

ポート ミラーリング セッションの詳細、ソース、およびターゲットの編集

名前、説明、ステータス、ソース、ターゲットなどのポート ミラーリング セッションの詳細を編集します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [管理] タブをクリックして、[設定] - [ポート ミラーリング] を選択します。
- 3 リストからポート ミラーリング セッションを選択し、[編集] をクリックします。
- 4 [プロパティ] ページで、セッションのプロパティを編集します。

編集中のポート ミラーリング セッションのタイプによって、構成で利用できるオプションは異なります。

オプション	説明
名前	ポート ミラーリング セッションには、一意の名前を入力するか自動的に生成されたセッション名を選択できます。
ステータス	ドロップダウン メニューを使用してセッションを有効または無効にします。
接続先ポートに対する通常の I/O	ドロップダウン メニューを使用して、コピー先のポートで通常の I/O を許可または非許可にします。このプロパティは、アップリンクと分散ポートの接続先にのみ使用できます。 このオプションを選択しない場合、ターゲット ポート経由の出力ミラー トラフィックは許可されますが、入出力トラフィックは許可されません。
カプセル化 VLAN ID	フィールドに有効な VLAN ID を入力します。この情報は、リモート ミラーリング ソースのポート ミラーリング セッションに必要です。 [元の VLAN の保存] の横にあるチェック ボックスを選択して、ターゲット ポートですべてのフレームをカプセル化する VLAN ID を作成します。元のフレームに VLAN があり、[元の VLAN の保存] が選択されていない場合、カプセル化 VLAN によって、元の VLAN が置き換えられます。
ミラーリングされたパケットの長さ (バイト)	ミラーリングされたパケットの長さ (バイト) を有効にするには、このチェック ボックスを選択します。これによって、ミラー フレームのサイズが制限されます。このオプションを選択した場合、すべてのミラー フレームは指定した長さに切り詰められます。
説明	ポート ミラーリング セッションの構成の説明を入力できます。

- 5 [ソース] ページで、ポート ミラーリング セッションのソースを編集します。

編集中のポート ミラーリング セッションのタイプによって、構成で利用できるオプションは異なります。

オプション	説明
リストから既存のポートを追加	[分散ポートの選択...] ボタンをクリックします。ダイアログが開き、既存のポートのリストが表示されます。分散ポートの横にあるチェック ボックスをオンにして、[OK] をクリックします。分散ポートは複数選択できます。
ポート番号で既存のポートを追加	[分散ポートの追加...] ボタンをクリックし、ポート番号を入力して、[OK] をクリックします。

オプション	説明
トラフィックの方向を設定	ポートを追加したら、リストでポートを選択し、入力側、出力側、または入力側/出力側ボタンをクリックします。[トラフィック方向] 列に選択内容が表示されます。
ソース VLAN を指定	セッション タイプとしてリモート ミラーリング ターゲットを選択した場合、ソース VLAN を選択する必要があります。[追加] ボタンをクリックして VLAN ID を追加します。ID を編集するには、上矢印と下矢印を使用するか、フィールドをクリックして手動で VLAN ID を入力します。

6 [ターゲット] セクションで、ポート ミラーリング セッションのターゲットを編集します。

編集中のポート ミラーリング セッションのタイプによって、構成で利用できるオプションは異なります。

オプション	説明
ターゲットの分散ポートを選択	[分散ポートの選択...] ボタンをクリックしてリストからポートを選択するか、[分散ポートの追加...] ボタンをクリックしてポート番号でポートを追加します。分散ポートは複数追加できます。
アップリンクの選択	リストから使用可能なアップリンクを選択し、[追加 >] をクリックしてそのアップリンクをポート ミラーリング セッションに追加します。アップリンクは複数追加できます。
ポートまたはアップリンクの選択	[分散ポートの選択...] ボタンをクリックしてリストからポートを選択するか、[分散ポートの追加...] ボタンをクリックしてポート番号でポートを追加します。分散ポートは複数追加できます。 [アップリンクの追加...] ボタンをクリックしてアップリンクをターゲットとして追加します。リストからアップリンクを選択し、[OK] をクリックします。
IP アドレスの指定	[追加] ボタンをクリックします。新しいリスト エントリが作成されます。エントリを選択し、[編集] ボタンをクリックして IP アドレスを入力するか、[IP アドレス] フィールド内を直接クリックして IP アドレスを入力します。IP アドレスが無効な場合は、警告ダイアログが表示されます。

7 [OK] をクリックします。

vSphere Distributed Switch 健全性チェック

vSphere Distributed Switch 5.1 以降における健全性チェックのサポートは、vSphere Distributed Switch で構成エラーを特定してトラブルシューティングするのに役立ちます。

vSphere Distributed Switch 健全性チェックでは、環境のネットワーク構成の一般的なエラーを特定するために、Distributed Switch および物理スイッチ上の特定の設定を調査します。健全性チェック間のデフォルト間隔は 1 分です。

重要： 健全性チェックは、使用してネットワークの問題をトラブルシューティングし、問題を特定して解決した後は無効にします。vSphere Distributed Switch 健全性チェックを無効にすると、ネットワーク ポリシーに従って、生成された MAC アドレスが物理ネットワーク環境からエージアウトします。詳細については、ナレッジベースの記事 [KB 2034795](#) を参照してください。

構成エラー	健全性チェック	Distributed Switch 上の必要な構成
Distributed Switch に構成された VLAN トランク範囲が物理スイッチのトランク範囲と一致しません。	Distributed Switch の VLAN 設定が、接続された物理スイッチ ポート上のトランク ポートの構成と一致しているかどうか確認します。	2 つ以上のアクティブな物理 NIC
物理ネットワーク アダプタ、Distributed Switch、物理スイッチ ポートの MTU 設定が一致しません。	VLAN ごとの物理アクセス スイッチ ポートにおける MTU のジャンボ フレーム設定が vSphere Distributed Switch の MTU 設定と一致しているかどうか確認します。	2 つ以上のアクティブな物理 NIC
ポート グループに構成されたチーミング ポリシーが、物理スイッチ ポートチャネルのポリシーと一致しません。	EtherChannel に参加する物理スイッチの接続されたアクセス ポートが、チーミング ポリシーが IP ハッシュである分散ポートとベアになっているかどうか確認します。	2 つ以上のアクティブな物理 NIC と 2 台のホスト

健全性チェックは、Distributed Switch のアップリンクが接続するアクセス スイッチ ポートに限られます。

vSphere Distributed Switch 健全性チェックの有効化または無効化

健全性チェックは vSphere Distributed Switch の設定変更を監視します。Distributed Switch の設定のチェックを実行するには、vSphere Distributed Switch の健全性チェックを有効にする必要があります。

vSphere Distributed Switch 健全性チェックによって、vSphere Distributed Switch (VDS) の構成問題、および VDS と環境の物理ネットワーク間の構成の不一致を特定し、トラブルシューティングできます。デフォルトでは、健全性チェックはオフになっています。健全性チェックを有効にすると、発生している可能性があるネットワークの問題を特定して解決できます。選択したオプションによっては、vSphere Distributed Switch 健全性チェックによって、チーミング ポリシー、MTU サイズ、VLAN 構成をテストするための MAC アドレスが多数生成される可能性があります。これらの MAC アドレスによってネットワーク トラフィックが過剰になり、ネットワークのパフォーマンスに影響する可能性があります。

重要： 健全性チェックは、使用してネットワークの問題をトラブルシューティングし、問題を特定して解決した後は無効にします。vSphere Distributed Switch 健全性チェックを無効にすると、ネットワーク ポリシーに従って、生成された MAC アドレスが物理ネットワーク環境からエージアウトします。詳細については、ナレッジベースの記事 [KB 2034795](#) を参照してください。

前提条件

vSphere Distributed Switch のバージョンが 5.1 以降であることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[設定] - [健全性チェックの編集] の順に選択します。
- 3 健全性チェックのオプションを有効または無効にするには、ドロップダウン メニューを使用します。

オプション	説明
VLAN および MTU	分散アップリンク ポートと VLAN 範囲のステータスを報告します。
チーミングおよびフェイルオーバー	ESXi ホストとチーミング ポリシーで使用する物理スイッチの設定が一致していることを確認します。

- 4 [OK] をクリックします。

次のステップ

vSphere Distributed Switch の設定を変更すると、変更内容が vSphere Web Client の [監視] タブに表示されます。 [vSphere Distributed Switch の健全性ステータスの表示](#) を参照してください。

vSphere Distributed Switch の健全性ステータスの表示

vSphere Distributed Switch の健全性チェックを有効にすると、vSphere Web Client で、接続されているホストのネットワーク健全性ステータスを表示できます。

前提条件

VLAN、MTU、およびチーミング ポリシーの健全性チェックが vSphere Distributed Switch で有効になっていることを確認します。 [vSphere Distributed Switch 健全性チェックの有効化または無効化](#) を参照してください。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [監視] タブで、[健全性] をクリックします。
- 3 [健全性ステータスの詳細] セクションで、スイッチに接続されているホストの VLAN、MTU、およびチーミングの全体的な健全性を調べます。

スイッチ検出プロトコル

スイッチ検出プロトコルは、vSphere 管理者が、物理スイッチのどの部分が vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch に接続されているのかを判別するのに役立ちます。

vSphere 5.0 以降は、シスコ検出プロトコル (CDP) およびリンク層検出プロトコル (LLDP) をサポートしています。CDP は、Cisco 物理スイッチに接続された、vSphere 標準スイッチおよび vSphere distributed switch に対して使用できます。LLDP は、バージョン 5.0.0 以降の vSphere distributed switch に対して使用できます。

特定の vSphere Distributed Switch または vSphere 標準スイッチに対して CDP または LLDP が有効になっている場合は、デバイス ID、ソフトウェア バージョン、タイムアウトなどのピア物理スイッチのプロパティを vSphere Web Client から表示できます。

vSphere Distributed Switch でのシスコ検出プロトコルの有効化

シスコ検出プロトコル (CDP) を使用すると、vSphere の管理者は、vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch に接続されている Cisco スイッチの物理ポートを確認できます。vSphere Distributed Switch の CDP が有効になっている場合は、Cisco スイッチのプロパティ (デバイス ID、ソフトウェア バージョン、タイムアウトなど) を表示できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[設定] - [設定の編集] を選択します。

- 3 [設定の編集] ダイアログ ボックスで、[詳細] をクリックします。
- 4 [検出プロトコル] セクションで、[タイプ] ドロップダウン メニューから [Cisco Discovery Protocol] を選択します。
- 5 [操作] ドロップダウン メニューから、スイッチに接続されている ESXi ホストの操作モードを選択します。

オプション	説明
待機	ESXi は、関連付けられた Cisco スイッチ ポートに関する情報を検出して表示しますが、Cisco スイッチ管理者は、vSphere Distributed Switch に関する情報を使用できません。
アダプタイズ	ESXi は vSphere Distributed Switch に関する情報を Cisco スイッチ管理者に公開しますが、Cisco スイッチに関する情報を検出および表示しません。
両方	ESXi は、関連付けられた Cisco スイッチに関する情報を検出して表示し、vSphere Distributed Switch に関する情報を Cisco スイッチ管理者に公開します。

- 6 [OK] をクリックします。

vSphere Distributed Switch でのリンク層検出プロトコルの有効化

リンク層検出プロトコル (LLDP) を使用すると、vSphere の管理者は、どの物理スイッチ ポートが特定の vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch に接続されているかを判断できます。特定の Distributed Switch に対して LLDP が有効になっている場合は、vSphere Web Client から物理スイッチのプロパティ（シャーシ ID、システム名と説明、およびデバイスの機能など）を表示できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[設定] - [設定の編集] を選択します。
- 3 [設定の編集] ダイアログ ボックスで、[詳細] をクリックします。
- 4 [検出プロトコル] セクションの [タイプ] ドロップダウン メニューから [リンク層探索プロトコル] を選択します。
- 5 [操作] ドロップダウン メニューから、スイッチに接続されている ESXi ホストの操作モードを選択します。

操作	説明
待機	ESXi は、関連付けられた物理スイッチ ポートに関する情報を検出して表示しますが、スイッチ管理者は、vSphere Distributed Switch に関する情報を使用できません。
アダプタイズ	ESXi は vSphere Distributed Switch に関する情報をスイッチ管理者に提供しますが、物理スイッチに関する情報を検出および表示しません。
両方	ESXi は、関連付けられた物理スイッチに関する情報を検出して表示し、スイッチ管理者は、vSphere Distributed Switch に関する情報を使用できます。

- 6 [OK] をクリックします。

スイッチ情報の表示

Distributed Switch で Cisco Discovery Protocol (CDP) または Link Layer Discovery Protocol (LLDP) が有効になっており、スイッチに接続されているホストが [待機] または [両方] の操作モードで動作している場合は、vSphere Web Client で物理スイッチ情報を表示できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブをクリックし、[ネットワーク] - [物理アダプタ] をクリックします。
- 3 詳細情報を表示するには、リストから物理アダプタを選択します。

結果

有効になっているスイッチ検出プロトコルに応じて、スイッチのプロパティが [CDP] タブまたは [LLDP] タブに表示されます。ネットワークから情報が得られる場合は、ピア デバイス機能の下でスイッチのシステム機能を確認できます。

仮想マシン ネットワークのプロトコル プロファイルの構成

15

ネットワーク プロトコル プロファイルには、vCenter Server が割り当てる IPv4 および IPv6 アドレスのプールが含まれています。これらのアドレスは、プロファイルに関連付けられたポート グループに接続される vApp または vApp 機能を搭載した仮想マシンに割り当てられます。

ネットワーク プロトコル プロファイルには、IP サブネット、DNS、および HTTP プロキシ サーバの設定も含まれています。

ネットワーク プロトコル プロファイルを使用して仮想マシンのネットワーク設定を構成するには、次の操作を行います。

- データセンターまたは vSphere Distributed Switch のレベルでネットワーク プロファイルを作成します。
- プロトコル プロファイルと vApp 仮想マシンのポート グループを関連付けます。
- vApp の設定または仮想マシンの vApp オプションから一時的または固定 IP 割り当てポリシーを有効にします。

注： プロトコル プロファイルからネットワーク設定を取得する vApp または仮想マシンを別のデータセンターに移動してパワーオンする場合は、ターゲット データセンターの接続先ポート グループにプロトコル プロファイルを割り当てる必要があります。

■ ネットワーク プロトコル プロファイルの追加

ネットワーク プロトコル プロファイルには、vCenter Server が割り当てる IPv4 および IPv6 アドレスのプールが含まれています。それらのリソースは、プロファイルに関連付けられたポート グループに接続される vApp または vApp 機能を搭載した仮想マシンに割り当てられます。

■ ポート グループとネットワーク プロトコル プロファイルの関連付け

vApp の一部の仮想マシンまたは vApp 機能が有効になっている仮想マシンにネットワーク プロトコル プロファイルの IP アドレスの範囲を適用するには、仮想マシンのネットワークを制御するポート グループをプロファイルに関連付けます。

■ ネットワーク プロトコル プロファイルを使用するための仮想マシンまたは vApp の構成

標準スイッチまたは Distributed Switch のポート グループにプロトコル プロファイルを関連付けた後、ポート グループに接続され、vApp に関連付けられているか vApp オプションが有効になっている仮想マシンでプロファイルを使用できるようにします。

ネットワーク プロトコル プロファイルの追加

ネットワーク プロトコル プロファイルには、vCenter Server が割り当てる IPv4 および IPv6 アドレスのプールが含まれています。それらのリソースは、プロファイルに関連付けられたポート グループに接続される vApp または vApp 機能を搭載した仮想マシンに割り当てられます。

ネットワーク プロトコル プロファイルには、IP サブネット、DNS、および HTTP プロキシ サーバの設定も含まれています。

注： プロトコル プロファイルからネットワーク設定を取得する vApp または仮想マシンを別のデータセンターに移動する場合、vApp または仮想マシンをパワーオンするためには、ターゲット データセンターで接続されたポート グループにプロトコル プロファイルを割り当てる必要があります。

手順

- 1 vApp に関連するデータセンターに移動し、[管理] タブをクリックします。
- 2 [ネットワーク プロトコル プロファイル] をクリックします。
既存のネットワーク プロトコル プロファイルが一覧表示されます。
- 3 [追加] アイコン (+) をクリックして、新しいネットワーク プロトコル プロファイルを追加します。

ネットワーク プロトコル プロファイル名とネットワークの選択

ネットワーク プロトコル プロファイルに名前を付け、それを使用するネットワークを選択します。

手順

- 1 ネットワーク プロトコル プロファイルの名前を入力します。
- 2 このネットワーク プロトコル プロファイルを使用するネットワークを選択します。
ネットワークを関連付けることができるネットワーク プロトコル プロファイルは一度に 1 つです。
- 3 [次へ] をクリックします。

ネットワーク プロトコル プロファイルの IPv4 構成の指定

ネットワーク プロトコル プロファイルには、vApp で使用される IPv4 および IPv6 アドレスのプールが含まれています。ネットワーク プロトコル プロファイルを作成する際には、IPv4 構成を設定します。

ネットワーク プロトコル プロファイルの範囲は、IPv4 または IPv6、あるいはその両方を使用して構成できます。vApp が一時的に割り当てられる IP を使用するように設定されている場合、vCenter Server はこれらの範囲を使用して、IP アドレスを仮想マシンに動的に割り当てます。

手順

- 1 [IP サブネット] および [ゲートウェイ] をそれぞれのフィールドに入力します。
- 2 [DHCP を使用] を選択すると、DHCP サーバがこのネットワークで使用できることが表示されます。
- 3 DNS サーバ情報を入力します。
IP アドレスをコンマ、セミコロン、またはスペースで区切って、サーバを指定します。

- 4 [IP プールを有効にする] チェック ボックスを選択して、IP プールの範囲を指定します。
- 5 IP プールを有効にする場合、[IP プールの範囲] フィールドに、ホスト アドレスの範囲をコンマで区切ってリスト形式で入力します。

範囲は、IP アドレス、ナンバー記号 (#)、および範囲の長さを示す数字で構成されます。

ゲートウェイと範囲はサブネット内である必要があります。[IP プール範囲] フィールドに入力する範囲に、ゲートウェイ アドレスを含めることはできません。

たとえば、**10.20.60.4#10**、**10.20.61.0#2** は、IPv4 アドレスが 10.20.60.4 から 10.20.60.13 ま
で、および 10.20.61.0 から 10.20.61.1 までの範囲になります。

- 6 [次へ] をクリックします。

ネットワーク プロトコル プロファイルの IPv6 構成の指定

ネットワーク プロトコル プロファイルには、vApp で使用される IPv4 および IPv6 アドレスのプールが含まれて
います。ネットワーク プロトコル プロファイルを作成するときに、その IPv6 構成を設定します。

構成できるネットワーク プロトコル プロファイルの範囲は、IPv4、IPv6、またはこの両方です。vApp が一時的に
割り当てられる IP を使用するように設定されている場合、vCenter Server はこれらの範囲を使用して、IP アドレ
スを仮想マシンに動的に割り当てます。

手順

- 1 [IP サブネット] および [ゲートウェイ] をそれぞれのフィールドに入力します。
- 2 [DHCP を使用] を選択すると、DHCP サーバがこのネットワークで使用できることが表示されます。
- 3 DNS サーバ情報を入力します。
IP アドレスをコンマ、セミコロン、またはスペースで区切って、サーバを指定します。
- 4 [IP プールを有効にする] チェック ボックスを選択して、IP プールの範囲を指定します。
- 5 IP プールを有効にする場合、[IP プールの範囲] フィールドに、ホスト アドレスの範囲をコンマで区切ってリス
ト形式で入力します。

範囲は、IP アドレス、ナンバー記号 (#)、および範囲の長さを示す数字で構成されます。たとえば、次の IP
プール範囲を指定するとします。

fe80:0:0:0:2bff:fe59:5a:2b#10,fe80:0:0:0:2bff:fe59:5f:b1#2

アドレスは、次の範囲内になります。

fe80:0:0:0:2bff:fe59:5a:2b - fe80:0:0:0:2bff:fe59:5a:34

および

fe80:0:0:0:2bff:fe59:5f:b1 - fe80:0:0:0:2bff:fe59:5f:b2

ゲートウェイと範囲はサブネット内である必要があります。[IP プール範囲] フィールドに入力する範囲に、ゲ
ートウェイ アドレスを含めることはできません。

- 6 [次へ] をクリックします。

ネットワーク プロトコル プロファイルの DNS およびその他の構成の指定

ネットワーク プロトコル プロファイルを作成する場合、DNS ドメイン、DNS 検索パス、ホストのプリフィックス、および HTTP プロキシを指定できます。

手順

- 1 DNS ドメインを入力します。

- 2 ホストのプリフィックスを入力します。

- 3 DNS 検索パスを入力します。

検索パスは、コンマ、セミコロン、スペースで区切った DNS ドメインのリストで指定します。

- 4 プロキシ サーバのサーバ名とポート番号を入力します。

サーバ名には、任意でコロンおよびポート番号を含めることができます。

たとえば、web-proxy:3912 は有効なプロキシ サーバです。

- 5 [次へ] をクリックします。

ネットワーク プロトコル プロファイルの作成の完了

手順

- ◆ 設定を確認し、[終了] をクリックしてネットワーク プロトコル プロファイルの追加を完了します。

ポート グループとネットワーク プロトコル プロファイルの関連付け

vApp の一部の仮想マシンまたは vApp 機能が有効になっている仮想マシンにネットワーク プロトコル プロファイルの IP アドレスの範囲を適用するには、仮想マシンのネットワークを制御するポート グループをプロファイルに関連付けます。

標準スイッチのポート グループまたは Distributed Switch の分散ポート グループをネットワーク プロトコル プロファイルと関連付けるには、グループの設定を使用します。

手順

- 1 vSphere Web Client の [ネットワーク] ビューで、vSphere Distributed Switch の分散ポート グループまたは vSphere 標準スイッチのポート グループに移動します。

標準スイッチのポート グループはデータセンター内にあります。vSphere Web Client では、分散ポート グループは親の Distributed Switch オブジェクト内に表示されます。

- 2 [管理] タブで、[ネットワーク プロトコル プロファイル] をクリックします。

- 3 [ネットワーク プロトコル プロファイルを選択したネットワークと関連付けます] をクリックします。

- 4 [ネットワーク プロトコル プロファイルの関連付け] ウィザードの [関連付けタイプの設定] ページで、[既存のネットワーク プロトコル プロファイルの使用] を選択し、[次へ] をクリックします。

既存のネットワーク プロトコル プロファイルにポート グループ内の vApp 仮想マシンに適した設定が存在しない場合、新しいプロファイルを作成する必要があります。

- 5 ネットワーク プロトコル プロファイルを選択し、[次へ] をクリックします。
- 6 ネットワーク プロトコル プロファイルの関連付けと設定を確認し、[終了] をクリックします。

ネットワーク プロトコル プロファイルを使用するための仮想マシンまたは vApp の構成

標準スイッチまたは Distributed Switch のポート グループにプロトコル プロファイルを関連付けた後、ポート グループに接続され、vApp に関連付けられているか vApp オプションが有効になっている仮想マシンでプロファイルを使用できるようにします。

前提条件

ネットワーク プロトコル プロファイルに関連付けられたポート グループに仮想マシンが接続されていることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、仮想マシンまたは vApp に移動します。
- 2 仮想マシンの vApp 設定または [vApp オプション] タブを開きます。
 - vApp を右クリックして、[設定の編集] を選択します。
 - 仮想マシンを右クリックし、[設定の編集] を選択して、[設定の編集] ダイアログ ボックスで [vApp オプション] タブをクリックします。
- 3 [vApp オプションの有効化] をクリックします。
- 4 [オーサリング] で、[IP の割り当て] を展開して [IP 割り当て方法] を [OVF 環境] に設定します。
- 5 [デプロイ] で [IP の割り当て] を展開し、[IP の割り当て] を [一時 - IP プール] または [静的 - IP プール] に設定します。

[静的 - IP プール] および [一時 - IP プール] の両方のオプションでは、ポート グループに関連するネットワーク プロトコル プロファイルの範囲で IP アドレスを割り当てます。[静的 - IP プール] を選択すると、最初に仮想マシンまたは vApp をパワーオンしたときに IP アドレスが割り当てられ、そのアドレスは再起動しても維持されます。[一時 - IP プール] を選択すると、仮想マシンまたは vApp をパワーオンするたびに IP アドレスが割り当てられます。

- 6 [OK] をクリックします。

結果

仮想マシンがパワーオンになると、ポート グループに接続されたアダプタはプロトコル プロファイルの範囲から IP アドレスを受け取ります。仮想マシンがパワーオフになると、IP アドレスは解放されます。

マルチキャスト フィルタリング

16

vSphere 6.0 以降では、vSphere Distributed Switch は、個々のマルチキャスト グループに関連するマルチキャスト パケットをフィルタリングするために基本モデルとスヌーピング モデルをサポートしています。スイッチ上の仮想マシンがサブスクライブするマルチキャスト グループの数に応じてモデルを選択してください。

■ マルチキャスト フィルタリング モード

マルチキャスト トラフィックをフィルタリングするためのデフォルトの基本モードに加えて、vSphere Distributed Switch 6.0.0 以降のリリースでは、仮想マシンからの Internet Group Management Protocol (IGMP) および Multicast Listener Discovery (MLD) メッセージに基づいてより正確な方法でマルチキャスト トラフィックを転送するマルチキャスト スヌーピングをサポートしています。

■ vSphere Distributed Switch でのマルチキャスト スヌーピングの有効化

vSphere Distributed Switch でマルチキャスト スヌーピングを使用すると、マルチキャスト トラフィックをサブスクライブするために仮想マシンが送信する Internet Group Management Protocol (IGMP) または Multicast Listener Discovery (MLD) のメンバーシップ情報に従って、正確な方法でトラフィックを転送できます。

■ マルチキャスト スヌーピングでのクエリの時間間隔の編集

vSphere Distributed Switch 6.0 で IGMP または MLD マルチキャスト スヌーピングが有効になっている場合に、スヌーピング クエリアが物理スイッチに構成されていないときは、仮想マシンのメンバーシップに関する一般クエリが Distributed Switch から送信されます。Distributed Switch に接続されている ESXi 6.0 ホストで、一般クエリをスイッチから送信する時間間隔を編集できます。

■ IGMP と MLD のソース IP アドレスの数の編集

vSphere Distributed Switch 6.0 で IGMP または MLD マルチキャスト スヌーピングを有効にすると、マルチキャスト グループのメンバーがパケットを受信する送信元 IP アドレスの最大数を編集できます。

マルチキャスト フィルタリング モード

マルチキャスト トラフィックをフィルタリングするためのデフォルトの基本モードに加えて、vSphere Distributed Switch 6.0.0 以降のリリースでは、仮想マシンからの Internet Group Management Protocol (IGMP) および Multicast Listener Discovery (MLD) メッセージに基づいてより正確な方法でマルチキャスト トラフィックを転送するマルチキャスト スヌーピングをサポートしています。

基本的なマルチキャスト フィルタリング

基本的なマルチキャスト フィルタリング モードでは、vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch は、マルチキャスト グループのターゲット MAC アドレスに従って仮想マシンのマルチキャスト トラフィックを転送します。マルチキャスト グループに参加すると、ゲスト OS は、スイッチを通じてグループのマルチキャスト MAC アドレスをネットワークにプッシュ ダウンします。スイッチは、ポートとターゲット マルチキャスト MAC アドレスの間のマッピングをローカル転送テーブルに保存します。

スイッチは、仮想マシンがグループに参加、またはグループから離脱するために送信する IGMP メッセージを解釈しません。それらのメッセージはスイッチからローカル マルチキャスト ルータに直接送信され、その後、ローカル マルチキャスト ルータがメッセージを解釈して、仮想マシンをグループに追加、またはグループから削除します。

基本モードには、次の制限があります。

- 最大 32 個の IP マルチキャスト グループにマップされる可能性があるマルチキャスト グループのターゲット MAC アドレスに従ってスイッチからパケットが転送されるため、仮想マシンは、サブスクリブしていないグループからパケットを受信することがあります。
- 32 個を超えるマルチキャスト MAC アドレスからのトラフィックをサブスクリブしている仮想マシンは、転送モデルの制限により、サブスクリブしていないパケットを受信します。
- IGMP バージョン 3 に定義されているソース アドレスに応じたパケットのフィルタリングは行われません。

マルチキャスト スヌーピング

マルチキャスト スヌーピング モードでは、vSphere Distributed Switch は、RFC 4541 に従って IGMP および MLD スヌーピングを提供します。スイッチは、IP アドレスを使用して、より正確にマルチキャスト トラフィックをディスパッチします。このモードは、IPv4 マルチキャスト グループ アドレスでは IGMPv1、IGMPv2、および IGMPv3 を、IPv6 マルチキャスト グループ アドレスでは MLDv1 および MLDv2 をサポートしています。

スイッチは、仮想マシンのメンバーシップを動的に検出します。IGMP または MLD メンバーシップ情報を含むパケットがスイッチ ポートを通じて仮想マシンから送信されると、スイッチは、グループのターゲット IP アドレスに関するレコードを作成し、IGMPv3 の場合にはトラフィックの受信元として仮想マシンが優先するソース IP アドレスに関するレコードを作成します。特定の期間内に仮想マシンでそのグループ メンバーシップが更新されない場合、スイッチは、ルックアップ レコードからグループのエントリを削除します。

Distributed Switch のマルチキャスト スヌーピング モードでは、仮想マシンは、1 つのスイッチ ポートから最大 256 個のグループおよび 10 個のソース上でマルチキャスト トラフィックを受信できます。

vSphere Distributed Switch でのマルチキャスト スヌーピングの有効化

vSphere Distributed Switch でマルチキャスト スヌーピングを使用すると、マルチキャスト トラフィックをサブスクリブするために仮想マシンが送信する Internet Group Management Protocol (IGMP) または Multicast Listener Discovery (MLD) のメンバーシップ情報に従って、正確な方法でトラフィックを転送できます。

スイッチ上の仮想化されたワークロードで 32 個を超えるマルチキャスト グループにサブスクライブする場合、または特定のソース ノードからトラフィックを受信する必要がある場合は、マルチキャスト スヌーピングを使用します。vSphere Distributed Switch のマルチキャスト フィルタリング モードについては、[マルチキャスト フィルタリング モード](#)を参照してください。

前提条件

vSphere Distributed Switch のバージョンが 6.0.0 以降であることを確認します。

手順

- 1 vSphere Web Client で、Distributed Switch に移動します。
- 2 [アクション] メニューから、[設定] - [設定の編集] を選択します。
- 3 スイッチの設定が表示されているダイアログ ボックスで、[詳細] をクリックします。
- 4 [マルチキャスト フィルタリング モード] ドロップダウン メニューから、[IGMP/MLD スヌーピング] を選択し、[OK] をクリックします。

結果

マルチキャスト スヌーピングは、ESXi 6.0 以降を実行しているホストでアクティブになります。

マルチキャスト スヌーピングでのクエリの時間間隔の編集

vSphere Distributed Switch 6.0 で IGMP または MLD マルチキャスト スヌーピングが有効になっている場合に、スヌーピング クエリアが物理スイッチに構成されていないときは、仮想マシンのメンバーシップに関する一般クエリが Distributed Switch から送信されます。Distributed Switch に接続されている ESXi 6.0 ホストで、一般クエリをスイッチから送信する時間間隔を編集できます。

スヌーピング クエリを送信するデフォルトの時間間隔は 125 秒です。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックし、[システムの詳細設定] を選択します。
- 3 `Net.IGMPQueryInterval` システム設定を見つけます。
- 4 [編集] をクリックし、この設定の新しい値（秒単位）を入力します。

IGMP と MLD のソース IP アドレスの数の編集

vSphere Distributed Switch 6.0 で IGMP または MLD マルチキャスト スヌーピングを有効にすると、マルチキャスト グループのメンバーがパケットを受信する送信元 IP アドレスの最大数を編集できます。

手順

- 1 vSphere Web Client で、ホストに移動します。
- 2 [管理] タブで、[設定] をクリックし、[システムの詳細設定] を選択します。

- 3 送信元 IP アドレス数を編集するには、`Net.IGMPV3MaxSrcIPNum` または `Net.MLDV2MaxSrcIPNum` システム設定を探します。
- 4 [編集] をクリックし、この設定の新しい値 (1 ~ 32) を入力します。
- 5 [OK] をクリックします。

ステートレス ネットワークの導入

17

ステートレスとは、構成または状態を保存したローカル ストレージのない ESXi ホストの実行モードを指します。構成はホスト プロファイルに抽象化され、テンプレートとして、マシンのクラスに適用されます。ステートレス モードでは、障害が発生したハードウェアを容易に置換、削除、追加して、ハードウェア導入の拡張性を改善できます。

ステートレス ESXi ブートは、初回ブートと同じです。ESXi ホストは、組み込みの標準スイッチを介して、vCenter Server とのネットワーク接続付きで起動します。ホスト プロファイルが分散スイッチ メンバーシップを指定した場合、vCenter Server は ESXi ホストを VMware 分散スイッチまたはサードパーティ製のスイッチ ソリューションに参加させます。

ステートレス ESXi ホストのネットワーク設定を計画する場合は、構成に汎用性を持たせ、ホスト固有の構成を避けます。現在の設計には、新しいホストを導入する際に物理スイッチを再構成する機能がありません。要件は慎重に精査する必要があります。

ステートレス導入を設定するには、1 台の ESXi ホストを標準的な方法で設置する必要があります。次に、ホスト プロファイルに保存する下記のネットワーク関連情報を探して記録します。

- vSphere 標準スイッチのインスタンスと設定（ポート グループ、アップリンク、MTU など）
- 分散スイッチのインスタンス（VMware およびサードパーティ）
- アップリンク、アップリンク ポート（またはアップリンク グループ）に関する規則の選択
- vNIC 情報：
 - アドレス情報（IPv4 または IPv6、静的または DHCP 使用、ゲートウェイ）
 - 物理ネットワークのアダプタに割り当てた（vmknics）ポート グループと分散ポート グループ
 - 分散スイッチが存在する場合は、VLAN、vmknics に接続する物理 NIC、Etherchannel の構成を記録します。

記録した情報は、ホスト プロファイルのテンプレートとして使用されます。ホスト プロファイルの仮想スイッチ情報は、抽出されてホスト プロファイルに記述した後は、任意の情報を変更できます。このセクションでは、標準スイッチと分散スイッチの vmnic 名またはデバイス番号に基づくアップリンクの選択ポリシー、VLAN ID に基づく自動検出を修正できます。変更した情報は、ステートレス ブート インフラストラクチャによって保存され、次の起動時にステートレス ESXi ホストに適用されます。ネットワークの初期化では、汎用的なネットワーク プラグインがホスト プロファイルに記録された設定を解釈して、次のアクションを実行します。

- 物理 NIC の適切なドライバをロードします。
- ポート グループと併せて、すべての標準スイッチのインスタンスを作成します。ポリシーを参照してアップリンクを選択します。ポリシーが VLAN ID ベースならば、関連情報を収集する検知プロセスが実行されます。

- VMkernel ネットワーク アダプタが標準スイッチに接続されている場合は、VMkernel ネットワーク アダプタを作成して、ポート グループに接続します。
- VMkernel ネットワーク アダプタが分散スイッチに接続されている場合は、必要に応じて、VMkernel ネットワーク アダプタに接続されたアップリンクに基づき、一時的な標準スイッチを作成します。記録された情報を参照して、VLAN とチーミング ポリシーに基づき、一時的なポート グループを作成します。さらに、分散スイッチで Etherchannel が使用されている場合は、IP ハッシュを使用します。
- すべての VMkernel ネットワーク アダプタ設定を構成します（アドレス、ゲートウェイ、MTU などの割当）。

基本的な接続が機能した場合、分散スイッチが存在しなければ、ネットワーク設定は完了します。

分散スイッチが存在する場合、分散スイッチの修正が完了するまで、システムはメンテナンス モードにとどまります。この時点では、仮想マシンは起動しません。分散スイッチには vCenter Server が必要なため、vCenter Server との接続が確立し、ホストが分散スイッチを構成することを vCenter Server が通知するまで、ブート プロセスは続きます。分散スイッチのホスト参加を発行し、分散スイッチのプロキシ標準スイッチをホストに作成し、適切なアップリンクを選択し、vmknic を標準スイッチから分散スイッチに移行します。この操作が完了すると、一時的な標準スイッチとポート グループは削除されます。

ESXi ホストは修正プロセスの最終段階でメンテナンス モードから移行します。この時点で HA または DRS は、ホスト上の仮想マシンを起動できます。

ホスト プロファイルが存在しない場合、一時的な標準スイッチは「デフォルト ネットワーク」 ロジックで作成されます。一時的な標準スイッチは、アップリンクが PXE ブーティング vNIC に対応する管理ネットワーク スイッチ（VLAN タグなし）を作成します。vmknic は MAC アドレスが PXE ブーティング vNIC と同じ管理ネットワークのポート グループに作成されます。このロジックはこれまで PXE ブーティングに使用されていました。ホスト プロファイルが存在するが、ネットワーク ホスト プロファイルが無効であるか、全く不完全な場合、vCenter Server はデフォルト ネットワークにフォールバックするため、ESXi ホストはリモートから管理できます。これはコンプライアンス障害を起こすため、vCenter Server は復旧アクションを開始します。

ネットワークのベスト プラクティス

18

ネットワークを構成するときは、次のベスト プラクティスを考慮してください。

- vCenter Server、ESXi、その他の製品およびサービス間での安定した接続を確保するには、製品間の接続に制限およびタイムアウトを設定しないようにしてください。制限およびタイムアウトを設定すると、パケット フローが影響を受け、サービスが中断される場合があります。
- ホスト管理、vSphere vMotion、vSphere FT などのネットワークをお互いに隔離し、セキュリティとパフォーマンスを向上させます。
- 個別の物理 NIC を仮想マシンの 1 つのグループ専用にするか、Network I/O Control とトラフィック シェーピングを使用して仮想マシンに対するバンド幅を確保します。この分離によって、ネットワーク ワークロードの一部を複数の CPU 間で分散させることもできます。こうして隔離された仮想マシンは、たとえば Web クライアントからのアプリケーション トラフィックをより多く処理できます。
- ネットワーク サービスを物理的に分離し、特定の NIC セットを特定のネットワーク サービス専用にするには、サービスごとに vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch を作成します。この方法が不可能な場合は、異なる VLAN ID を持つポート グループにそれらを接続することにより、1 つのスイッチにあるネットワーク サービスを分離します。いずれの方法でも、選択したネットワークまたは VLAN が環境内のほかの部分から分離されていること、およびそれらのネットワークまたは VLAN にルータが接続されていないことをネットワーク管理者に確認してください。
- vSphere vMotion 接続には、ネットワークを個別に用意してください。vMotion での移行が行われると、ゲスト OS のメモリの内容がこのネットワークを経由して転送されます。これは、VLAN を使用して 1 つの物理ネットワークをセグメント化するか、個別の物理ネットワークを使用することによって実行できます（後者の方法をお勧めします）。

IP サブネット間での移行を行うためには、またバッファやソケットの個別のプールを使用するためには、vMotion のトラフィックを vMotion TCP/IP スタックに配置し、パワーオフ状態の仮想マシンの移行およびクローン作成のトラフィックをプロビジョニング TCP/IP スタックに配置します。[VMkernel ネットワーク レイヤー](#)を参照してください。

- スwitchの内側で稼動する仮想マシンまたはネットワーク サービスに影響を与えずに、その標準スイッチまたは Distributed Switch からネットワーク アダプタを追加したり削除したりすることができます。実行中のハードウェアをすべて削除しても、仮想マシン同士は互いに通信できます。1 つのネットワーク アダプタをそのまま残しておくと、すべての仮想マシンが物理ネットワークに接続できます。
- 最も機密性の高い仮想マシンを保護するには、物理ネットワークへのアップリンクを使用する仮想ネットワークとアップリンクを使用しない純粋な仮想ネットワークとの間のルート設定を制御するファイアウォールを仮想マシンにデプロイします。

- 最適なパフォーマンスを得るためには、VMXNET 3 仮想マシン NIC を使用します。
- 同じ vSphere 標準スイッチまたは vSphere Distributed Switch に接続された物理ネットワーク アダプタが、同じ物理ネットワークに接続されている必要もあります。
- vSphere Distributed Switch のすべての VMkernel ネットワーク アダプタに対して同じ MTU を構成します。異なる MTU で構成された複数の VMkernel ネットワーク アダプタが vSphere Distributed Switch に接続されている場合、ネットワーク接続の問題が発生する可能性があります。